

類学研究所

ANTHROPOLOGICAL INSTITUTE

---

人類学研究所  
研究論集第9号

---

古代アメリカ  
諸文化における在地性  
渡部森哉(編)

---

南山大学人類学研究所 2020

---

## 人類学研究所 研究論集 第9号

「古代アメリカ諸文化における在地性」

渡部 森哉・編

Categories	Title	Author	Page
巻頭言	古代アメリカ諸文化における在地性	渡部 森哉	1
論文	黒煤と刺突儀礼—アステカ神官の衣装と属性—	シルヴィ・ペバストラート	3
	人と水の古代史—メキシコ、トルカ盆地の考古学—	杉浦 洋子	23
	周辺の独自性—トルカ盆地南東部とテオティワカンの黒曜石 交易システム—	嘉幡 茂	51
	噴火災害をどう乗り越えたか—古代マヤ人の火山とともに生 きる知恵・記憶—	市川 彰	72
	アンデス文明形成期研究に見る在地性の問題—チャビン問 題の学史的考察より—	松本 雄一	94
	首都と地方社会—古代アンデス諸国家における在地性に ついて—	渡部 森哉	114

# Research Papers of the Anthropological Institute Vol.9

*Locality in the Prehispanic American Cultures*

Edited by Shinya Watanabe

Categories	Title	Author	Page
Introduction	Locality in Prehispanic American Cultures	Shinya WATANABE	1
Articles	Black Soot and Ritual Piercings: Aztec Priests' Attire and Attributes	Sylvie PEPERSTRAETE	3
	Human Groups and Waterscapes in Ancient Society: Archaeology of the Valley of Toluca, Central Mexico	Yoko SUGIURA	23
	Particularity of the Periphery: Exchange Systems between the Southeast Toluca Valley and Teotihuacan	Shigeru KABATA	51
	How Ancient People Overcame Volcanic Eruptions: Knowledge and Memory Living in the Volcanic Area	Akira ICHIKAWA	72
	Issues of Locality in the Study of the Andean Civilization: Perspectives from a Study History of the Chavín Problem	Yuichi MATSUMOTO	94
	Capital and Provincial Societies: The Locality of Ancient Andean States	Shinya WATANABE	114

## 古代アメリカ諸文化における在地性

渡部 森哉\*

論集 9 号をお届けする。

本論集は 2018 年度に南山大学人類学研究所主催で実施した講演会、シンポジウムの内容に基づいている。2018 年 11 月 23 日には杉浦洋子氏の講演会、11 月 25 日にはシルヴィ・ペパストラート氏の講演会を実施した。また、2018 年 12 月 26 日には 2018 年度第 4 回公開シンポジウム「遺跡に見る在来知—モノメント、自然環境、インターアクション」が実施され、4 本の発表があった。

いずれも古代アメリカの先スペイン期を対象とした内容であり、関連があることから 1 つの論集にまとめることとした。6 本の論文に通底するテーマは在地性である。すなわち古代アメリカの諸文化の特定の地域に限定される特徴に着目した論考である。古代アメリカに共通する特徴と対比させることでより広がりが見られるであろう。

ペパストラート論文は、中米のアステカ王国の首都テノチティランを中心に存在した神官に関するものである。絵文書、植民地時代の記録文書、考古学データを組み合わせ、アステカの神官がどのように同定され、どのような役割を担っていたのかを鮮やかに描き出している。メキシコの他の地域にはどのような神官がいたのか、メソアメリカ全体に当てはまる汎用性のある解釈はどの部分かなど、今後の研究テーマをも示している。

杉浦論文は、メキシコ中央高原のトルカ盆地を対象とした長年にわたる調査の一部である。様々なデータを駆使し、当時そこに生活していた人々の息づかいをも感じさせてくれる。同時代のメキシコ中央高原のテオティワカン中心史観からは見えないメキシコの文化動態を再構成する。特定の地域の文化研究がどのように行われるべきか、その手本となるような論文である。

続く 4 本の論文はシンポジウムの報告であるが、嘉幡論文はシンポジウムの際のモノメントに関する報告とは内容を変え、トルカ盆地の黒曜石に着目し、ローカル性を論じる内容となっており、杉浦論文と接合している。黒曜石の原産地分析を行い、原産地ごとの割合が通時的にどのように変化するかに着目する。テオティワカンといった巨大のセンターとの中心と周辺という関係だけではなく、周辺と周辺の関係という視点を導入し解釈することの重要性を指摘する。

市川論文は火山の多いエルサルバドルを事例として、そこに住む人々が火山の噴火という出来事をどのように経験したのかを論じる。自然災害を意味づけるために、人々が神殿ピラミッドを建設し秩序を保っていたという解釈を通じ、社会の再編過程で多くの集団が組み込まれていったことを指摘する。知恵や記憶といった概念を用い、環境と人間の関係を双方向的に捉える重要な視点を提示する。火山のある場所というローカルな事例であるが、そこからより大きなテーマに接合する視点を提示する。

続く 2 つの論文はアンデス考古学でホライズンと呼ばれる 3 つの時期を対象としている。松本論文は前期ホライズンを対象とし、その研究において中心となるチャビン・デ・ワンタル神殿がどのように扱われてきたのかを論じる。チャビン問題と呼ばれるこのテーマは、チャビン・デ・ワンタルと他の地域の神殿との関係をどのように捉えるかという問題であり、在地性がどのように扱われてきたかに着目し、研究史を辿る。チャビンという特定のテーマに関する論考ではあるが、在地性をどのように研究者が扱ってきたかを考察する模範的な論文であり、他の時代他の地域を専門とする研究者にも多くの示唆を与えてくれる。

渡部論文は中期ホライズンと後期ホライズンという 2 つの

\* 南山大学

時代を扱う。まず先スペイン期最後に台頭したインカ帝国を事例として、中央と地方の関係を捉える視点をまとめ、インカをモデルとして中期ホライズンの代表的な社会であるワリ帝国を考察する。ローカルとされる特徴をいくつかに分類する必要性を指摘し、その一部はむしろ中央の政策によって決定されていたと述べる。

この論集9号を刊行するまで多くの方のお世話になった。関係者にお礼申し上げます。

# 黒煤と刺突儀礼

— アステカ神官の衣装と属性 —

シルヴィ・ペパストラート\*

(千葉裕太訳)

頭から足先まで煤を塗りたくり、長くもつれた髪のアステカの神官。そして彼らの自己供犠の血にまみれた神殿。それらを目撃した征服者や初期の宣教師は、想像力をかき立てられ、悪魔崇拝の証拠を見取った。アステカ神官の衣装や属性については、型にはまった言い回しが16世紀から植民地期初期の記録にある他、図像、植民地期の記述、時には考古学データに記録されている。そこから、これらの儀礼的職能者のアイデンティティ、役割、社会的地位について知ることができる。

本論では、アステカ神官のごく一般的な衣装と属性に関して、それらの素材や、それらが意味する複雑なシンボリズムなどを分析する。神官の衣服を細かく見ていくが、図像に描かれた身体彩色、髪型、各種の紙製飾りや、一般的な持ち物(コバル用袋、香炉、ヒョウタン製タバコ入れ、自己供犠用の道具)にも注目する。

神官像の衣服は図像によってめまぐるしく変わることが見て取れる。図像に着目し、ある属性の組み合わせが存在し、それらが植民地期の記録で言及されている神官のカテゴリー(トナマカケ tlenamacaque など)を示し、アステカの神官組織やそのヒエラルキーに関する情報となりうることを指摘する。さらに、「ベインテーナ veintena」の祭礼のように特定の儀礼コンテキストに表れる通常とは異なる神官を、アステカの神官制度の複雑さ、融通無碍さの例として取り上げる。

## 目次

- |  |   |
|--|---|
| <p>I 神の世界と闇一夜と地中</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 神々の理解不可能性</li> <li>2. 黒色</li> <li>3. 火、煙、霧、雲</li> <li>4. 長くもつれた髪</li> <li>5. ヒョウタン製タバコ入れ</li> </ol> | <p>II 血、生贄、儀礼</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 放血のための道具</li> <li>2. 紙製の衣服と装飾品</li> <li>3. 神官の衣装の組み合わせとバリエーション</li> </ol> |
|--|---|

## KeyWords

中央メキシコ  
アステカ  
神官  
衣装  
式服

16世紀以降、植民地期初期の記録者が、神官について型にはまった言い回しで記録しているが、図像などからはそれよりも多くの情報を読み取ることができる。先スペイン期の神官とその役割は、古代メキシコの宗教に関心を持つ者にとって重要な研究テーマであるが、ほとんど調査されていない。本論はこのテーマを扱い、アステカの神官の衣装と属性に着目する。

アステカの神官について、我々は何を知っているのだろうか？16世紀のヨーロッパ人記録者たちは、植民地化の正当性を示さんとし、先住民をキリスト教化するために尽力した。その記述の中ではたいてい、生贄や血なまぐさい儀式が強調され、それらは悪魔によりもたらされたものだと繰り返し書かれた。先住民の神官は植民地制度の中で不必要であり、役に立ったのは悪魔の使いとして非難の的にされた時のみであった。それゆえアステカ神官は全員、生贄儀礼の執行者としていつも扱われた。多くの神官はまったく生贄儀礼を行わなかったのだが。アステカの首都メキシコ=テノチティランのような大都市では、神官の役割、神々へ仕える方法、神官組織は非常に複雑であったが、植民地期の記録者はそれらに興味を持たなかった。そのため、初期の記録者は、全てのアステカ神官を十把一絡げにして型にはまった言い回しで記録した。そして血に飢えた生贄執行者というイメージは今日まで残っている。

記録に残された情報は限られているため、このトピックに深く取り組む現代の研究者はほとんどいないが、例外が2つある。1つはミゲル・アコスタ・セーニュ (Acosta Saignes 1946) の論文で、16世紀の主な記録におけるアステカ神官に関する記述を編纂したものである。もう1つはミゲル・パストラナ・フローレス (Pastrana Flores 2008) の著作で、カルプリ (*calpulli*) の神官についてである。カルプリとは、アステカの都市国家を構成する様々な区域のことである。

植民地期の征服者や宣教師は、先住民神官に興味をそそられ、その迫力のある外見についてたびたび記述している。彼らの体は頭から足先まで煤が塗られ、長くもつれた髪をしており、神殿は神官自身の自己供犠の血にまみれていた(図1)。しかし16世紀のキリスト教世界のヨーロッパでは、この格好は悪魔崇拝の証拠にしか見えなかった。このことから、1579年ころのドミニカ会の神父ディエゴ・ドゥランは先住民神官の身体彩色について「我慢できないほどの悪臭を放ち、人の命を奪う軟膏が出来上がる[中略] この食べ物に体を塗った者はまじない師とも悪魔ともなる。この者が悪魔

と出会い、話しかけることができないなどと、だれが思うであろうか。なぜなら、この軟膏は、魔法使いがつけた軟膏と同じく、悪魔と話すために作られたことに間違いないからである」(Durán 1995: v. II, 61; ドゥラン 1995: 69-70) と記しており、彼の記録の中の図では、小悪魔たちがアステカの神トラロックとウイツイロポチトリとともに描かれている(Durán 1995: v. I, pl. 30)。

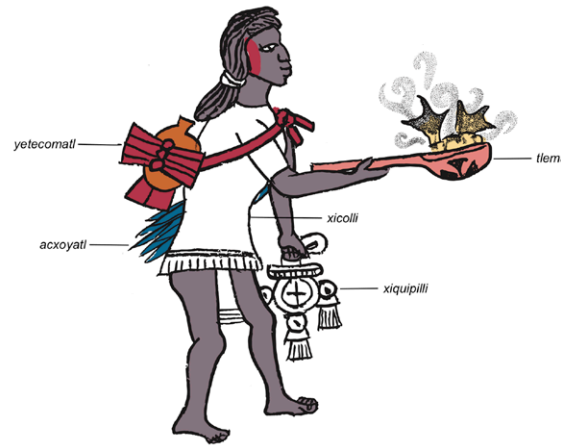


図1 アステカの神官の通常の格好(Codex Mendoza 1992: fol. 63r°の拡大図; Nicolas Latsanopoulos 作成)

さて、メソアメリカでは、衣装や装飾品から、身に着けた者の社会的カテゴリー、身分、役割が分かった。さらに、それらの素材や紋様は、顔面彩色や身体彩色など他の要素と組み合わせたり、洗練された象徴体系の一部となっていた。アステカのイメージはメソアメリカの他の諸文化と同様、芸術であるだけではなく、現実の視覚言語でもあった。例えば、ある役割を果たす途中でも、1人の人物の諸属性が構成し直されたり、組み合わせられたりした(Vauzelle 2018: 28-33)。この言語は、先住民の概念やカテゴリーに基づきエミク的な視点を伝えており、植民地期の記録者の理解の枠組みに起因する一連の先入観を避けることができる。アステカ神官の「ドレスコード」に注目することが、彼らを調査する特権的な方法である。そうすることで様々な儀礼における彼らの役割、彼らの社会を洞察することができ、さらに彼らの組織を理解する新たなアプローチを促すことにもなる。

ここでは、図像、植民地期の記述、時に考古学でも報告される、神官のより一般的な装身具に着目する。植民地期の記録者が観察した特徴に、アステカ神官の通常の格好の一部となっている一連の装飾や属性を加える必要がある。それはシコリ (*xicolli*「上着」)、イエテコマトル (*yetecomatl*「ヒョウタ

\*ブリュッセル自由大学

ン製タバコ入れ)、自己供犠の道具 (マゲイのとげ、アクションヤトル *acxoyatl* の枝、サカタパヨリ *zacatapayolli* の藁玉)、トレマイトル (*tlemaidl*「香炉」)、シキピリ (*xiquipilli*「コパル用袋」) などである。

本論文では2つの話の流れがあり、それに沿って議論が展開される。第1は、黒塗り、長いもつれた髪、ヒョウタン製タバコ入れが想起させる夜や地中は、神々の世界であり、この場所は目に見えず理解不可能であり、生と死のあらゆるプロセスが起こる場所とされていた、ということである。コパル奉納により生じる煙もまた、部分的にこの象徴性に関連する。話の流れの第2は犠牲について、より広く捉えれば奉納と儀礼についてである。神官のいる神殿の血や、自己供犠の道具、紙製飾りは、儀礼的場面では、死に密接に関連する。

そこで、図像によって異なる神官の衣服に着目し、しばしば一緒に表される属性の組み合わせがあり、それらが植民地期の文書に記録された神官のカテゴリー (トレナマカケ *tlenamacaque* など) を示し、アステカの神官組織やそのヒエラルキーに関する情報となりうることを指摘する。さらに、「ベインテーナ」の祭礼のような特定の儀礼コンテキストに現れる通常とは異なる神官を、アステカの神官制度の融通無碍さ、複雑さの例として取り上げる。

## I 神の世界と闇 一夜と地中

黒色で塗られた体と長くもつれた髪は、古代メキシコにおける神官の最も一般的な視覚的特徴である<sup>1</sup>。タバコ容器も、メソアメリカの儀礼職能者の属性として頻出するが、あまり体系的には現れない。ヒョウタン製タバコ入れは、黒色彩色や髪と同じアナロジーの枠組に属する。

まず黒色彩色を取り上げたい。記録において、ある人物が下帯しか身に着けていなくても、黒色であるために、神官と同定可能であることがしばしばある (Dupey García 2010: 448-449)。擬人化した神イシトラワンとして描かれるとき以外は、一般的に神官の顔や体は黒色である。

黒く塗られたのは神官の中の誰か? 彼らが現れる多くの

場面を見ると、神官の特定のカテゴリーや特別な役割を示しているのではないようだ。文章と図像から判断すると、黒く塗られていることは、ごく一般的に、儀礼活動に従事していることを示しているようである。

象徴レベルで考えなければならないもっと重要なことがさらにある。基本的には、黒色と神の世界との間にはアナロジー関係があり、黒色は神々の理解不可能という性質を示している。人間には神々もその世界も見ることができない。結果として、神々の世界は、闇に包まれ、煙と霧に満ちた場所として記述される。いずれも視界を妨げる要素だからである。人間が知覚する世界においては必然的に、昼ではなく黒く暗い夜が「神々の時間」であり、地中は神々に最も関連の深い場所の1つであった。

### 1. 神々の理解不可能性

いくつもの古代メキシコの神話では、人間と神々が視覚的に分けて表現されており、その結果、人間は直接的に神々を知覚することができないとされる<sup>2</sup>。『ポポル・ヴフ』 (*Popol Vuh* 1996: 147-148; ポポル・ヴフ 1977: 127-128) はその良例で、その中には次のように書かれている。キチュ・マヤの人々の祖先は当初「この世のすべてを知りつくし [中略] 天穹と円い地表の四隅、四点をも検べて見た」が、彼らの創造主は喜ばなかった。「彼らの言っていることは、よくないことだ。われらはどんな遠いところのことでもみなわかってしまい、すべてを知りつくすことができるのだが、彼らが、創造主であるこのわれらと同じでよいというはずはない」。そこで、神々はキチュの眼が「近くにあるものだけしか見えないように、彼らが地表のほんの少ししか見ないようにしてしまおう」と決めた。そして神々は人々の目に霞を吹きかけ、視界を曇らせ制限した。

より一般的には、メソアメリカ諸文化の世界観は全体として、宇宙やその働きを完全に知ることが不可能であることを前提としている (Chamoux 2016)。命に限りのある人間は、世界の限られた部分を理解できるのみであり、そのため神々は人間の目には見えず、間接的にその姿を現すだけである。では、見えないものをどうすれば記述したり表現したりできるのだろうか? 古代メキシコ思想体系では、一般にアナロジーやメタファーが用いられ、物事を理解し経験する

1 このような神官像はかなり古くからある。アステカより数世紀前の古典期末期 (後 800-900 年頃) の、ラス・イゲラス (メキシコ湾岸) の壁画に描かれた神官の例を参照 (Ladrón de Guevara 2006: 50-51)。

2 これらの神話の詳細な分析は Olivier 2015b を参照。



ため何か別のものに置き換える。この全体的認知プロセスは、音声言語に限定されるわけではなく、例えば、図像で表現することも可能である<sup>3</sup>。日常生活における数々の自然現象、物体、技術が動員され、先スペイン期の神々が記述された。例えば、テスカトリポカは「闇のように見えない」と記された(Sahagún 1950-1982: v. III, 11)。実際は、理解不可能という神々の世界の性質は、しばしば言語的あるいは視覚的アナロジーとメタファーにより表現された。闇や不透明性という概念が用いられ、不透明性は、透明性の欠如として、あるいは正しく見ることを阻むものとして、表された(Chamoux 2016: 37-38)。

## 2. 黒色

アナロジーを用いるなら、少なくとも人間にとっては、神の世界は暗いか不透明である。なぜなら人間にははっきりと見ることができないからである。さて、ナワトル語では、神々の世界と黒色との間に緊密な関係があり、神の世界は人間にとって理解不能で、暗く、不透明であるとされ、黒色は光が完全に欠如していることを意味する(Dupey García 2003: 80)。アルフレド・ロペス・アウスティン(López Austin 1992: 203)の意見によれば、テオトル(*teotl*)「神」という言葉は黒い物体や黒い動物を指す単語の構成要素ともなる。テオテトル(*teotetl*「黒い石」)、「暗色の羽を持つ鳥」の種類であるテオツィニツカン(*teotzinitzcan*)、テオケ Chol(*teoquechol*)、テオツァナトル(*teotzanatl*)などである。つまり、黒色は神々の世界の色なのである。これはおそらく、体を黒色に塗ることが神官の役割と密接に関係した理由でもある。神官は体を黒く塗ることで、同じく黒く塗られた彼らの守護神ケツァルコアトルとトラロックにより近づいた。より一般的には、神々の世界との距離が縮まることで、神官が神々と接触することが容易になり、さらには彼ら自身を神々と同一視し、神々の夜の属性を自分のものとする事で異なる世界を行き来することができた(Olivier 2004: 329-330, 339-340; Martínez González 2011: 289)。アステカの思想では、黒色は「人間の」色ではなく、そのため、非人間界に到達しなければならない儀礼職能者はこの色を身に着けたのである(Contel & Mikulska 2011: 48)。

それゆえ、儀礼言語に闇を表すたくさんの要素があり、闇

が神々に近づく方法とされていることは、極めて理屈になっ  
ている。まず、洞窟などの暗所は神々との「接触地点」とされ、  
儀式の場として好まれた。そのため、黒色を示唆する地名は  
多くの場合、聖なる場所を示した。そうした場所は岩陰、洞  
窟、泉などであり、トリラン(*Tlillan*「闇の場所」)と書かれ、夜  
の空、地中、神界と概念的に結びつけられていた。儀礼職能  
者はそうした場を超自然界へ行くことができる境界空間と見  
なした(Jansen 2002: 306; Declercq 2016: 74, 96)。

実際に、特殊な知識と技能を持つ者は、神々、死者、まだ  
生を受けていない人がいる宇宙の闇の部分に入り込むことも  
できた。発音という点ではテオトル「神」が闇とのみ関係する  
言葉ではないことは明らかだが、まさに闇という宇宙の暗い  
部分を通ることで、神の世界へ神官が近づいたのである。な  
ぜなら闇は、人間界と神界をつなぐ「扉」、「橋」だったからで  
ある(Mikulska 2008: 375; Mikulska 2015b: 464)。これら  
の儀礼職能者は闇の中でも目が見えるという考えは、現在で  
も残っている。現代のナワ族の儀礼者であるドン・アンヘルは  
「我々は夜でも昼のように見ることができ、我々に闇は存在し  
ない」と述べている(Romero 2016: 126)。

実際、夜は闇という概念を表現する一般的なメタファー、つ  
まり、神々の理解不可能性という概念を表現するメタファー  
でもあった。ナワ語では、夜は、昼間と対立するのではなく、む  
しろ見えることと対立する。例えば日の出を表すネシ(*neci*)は  
「姿を現す」つまり「現れる」をも意味する。一方、「死者の  
場所」であり神々の場所でもあるミクトランにいる人は、「夜の中」  
にいると言われる<sup>4</sup>。結果として、闇により神に近づきやす  
くなるため、夜は儀礼行為のための特権的な時間となった。

植民地初期の文書では儀礼を行う際の夜の重要性が  
強調されるが、それは夜には人間界と神界の境界がぼやけ、  
互いに行き来できるようになるためである。コパルの奉納、巻  
貝の吹奏、自己供犠、沐浴<sup>5</sup>など、日々の儀式の多くは夜に行  
われた。図像は夜と儀礼行為との強い関連を示しており、そ  
れを自己供犠の道具<sup>6</sup>が象徴している。これはスペインによる  
征服後にも見られる。1537年に妖術の嫌で異端審問所  
において裁判にかけられたアンドレス・ミシュコアトルは、夜間  
に雨乞いの儀式をし、「悪魔が彼に話しかけ、『これをしろ、  
次はこれを』<sup>7</sup>と言った夢を見た」と述べた。最後に、今日で  
も、いくつかの共同体では、夜ははまだ儀礼行為と関係して

3 認知プロセスとしてのメタファーについては Lakoff & Johnson 1980 を参照。

4 Sahagún 1950-1982: v. VI, 154 の例; cf. Chamoux 2016: 38-39。

5 例: Sahagún 1950-1982: v. III, 63。他に、Codex Mendoza 1992: fol. 63<sup>o</sup>の夜に寝ないで起きている人物を参照。

6 例えば、自己供犠用のとげは、しばしば夜の紋様と関連する(Vauzalle 2018: 711)。

7 *Procesos de indios idólatras y hechiceros* 1912: 75; Mikulska 2015a: 57 に引用。

いる。例えばシエラ・ノルテ・デ・プエブラ（メキシコ）では、儀礼職能者にとって「夜は別の時間であり、夜は（地下界の）仕事の時間であり、夜はあちらに行く時間であり、夜はあちらの時間である」（Knab 1991: 50）。

さらに、メソアメリカの思想において昼と夜は絡み合い、典型的な夜の行為が日中に行われることもあった。そのときも、彼らは黒い身体彩色など、夜を想起させる特徴をしばしば伴っていた（Galinié & Monod Becquelin 2016: 7-8）。実際、『フイレンツェ文書』（Sahagún 1950-1982: v. II, 205）の第2巻には、神官は夜明けに体を塗り、夜まで黒いままであったと明記されている。つまり、日中にも夜の世界があったのである。

### 3. 火、煙、霧、雲

神官が体を黒く塗るための顔料もまた、非常に重要で大切である。植民地期の史料には、顔料は日常的に作られ、最も多いものは煤でできていたとある<sup>8</sup>（Durán 1995: v. II, 60; Sahagún 1950-1982: v. II, 219; Olivier 2004: 329）。メタファーとしては、煤は火、火の光であり、闇でもある（Dupey García 2010: 450-452）。また、煙、霧、雲でもあり、対象は拡張され、雨や豊穡のアナロジーともなっている（Vauzelle 2018: 623-627）。これらの要素はまた、神界と関係する一連のアナロジーを示し、さらに、最もよく行われた儀式の1つ「火の奉納」にも認められた。この儀礼は神官の属性を示す一般的な道具である、コパル用袋「シキピリ」と携帯用の香炉「トレマイル」、を用いて行われた（図1）。コパルとは様々な樹木の樹脂に由来する芳香物質の総称である（Montufar López 2015: 64-65）。

まず煙、霧、雲について述べたい。ナワトル語の辞書を見るとよく分かるが、ポクトリ（*poctli*「煙」）は、日暮れを表すポヤワ（*poyahua*）など、あるものを消えさせるという意味の動詞の要素の一部分となっている。「死者の場所」ミクトランを支配する闇について言えば、その闇はまさに煙で表現され、煙は煙突がないため出て行くことはない<sup>9</sup>。しかしながら、神界と霧・雲の間にもアナロジー関係がある。なぜなら、霧と雲は黒色でも暗色でもなく白色か灰色であり、理解不可能性という概念は「不透明な」あるいは「かすんだ」という意味を

内包するからである（Chamoux 2016: 38）。さて、雲や霧は不透明で視界を乱す（Dupey García 2003: 81）。このこともまた、神々の固有の空間に人間は近づくことができないことを意味している。「煙の中、霧の中」あるいは「雲の中、霧の中」（Sahagún 1950-1982: v. VI, 63, 244, etc.）という表現は、あの世を示すのにしばしば用いられる（Mikulska 2008: 347）。あの世は暗く霧深い場所、というこの認識は、現在もいくつかの共同体に見られる（Knab 1991: 32, 37）。

カタリナ・ミクルスカ（Mikulska 2015b: 468）が示したように、こうしたアナロジーは図像に表されており、概念的に近い要素同士は通常、見た目が似ている。図像では、煙、霧、雲が同等に扱われることが非常に多い。いくつかの絵文書の図版には「星のように輝いた目」<sup>10</sup>という同じ紋様が、香炉から立ち上る煙や、雨神トラロックに関連する雲や霧に付随し



図2 似たように描かれている雲と煙（Codex Borgia 1898: pl. 27 & 75の拡大図）

8 ディエゴ・ドゥラン（Durán 1995: v. II, 60-61）は、より特殊な場合には、特別な準備も行われていたと付記している。「神の食べ物」を意味するテオトラクアリ（*teotlacualli*）と呼ばれる瀝青は、煤だけでなく、タバコや、オロリウキ（*ololiuhqui*）と呼ばれる幻覚誘発性の植物、虫や蛇などの小動物の焼きかすからも作られた。ドゥランによれば、神官は自身を奮い立たせるために瀝青を用いた。しかし図像において、瀝青を通常の煤と区別することは当然できない。

9 “A place without a smoke opening, a place without a chimney”（Sahagún 1950-1982: v. VI, 21 note 2, 152）。cf. Mikulska 2008: 347; Dupey García 2010: 102。

10 「星のように輝いた目」は夜空を表す紋様であるだけでなく、一般に闇をも表す（cf. Vauzelle 2018: 727）。

て描かれている(図2)。さらに、煙と雲はともに、同じように曲がりくねった形で描かれており、煙と雲の動きと、これらの聖なる物質が様々な時空間の間を循環し、通じ合うことができることを視覚的に想起させる(Mikulska 2015a: 60-61)。こうして煙と雲の境界をぼかすように見た目を似せて描かれていることは、メタファー概念があることを示している。つまり、曲がりくねった要素、蒸気のような要素、煙のような要素、そして暗いあるいは不透明な要素は、神界と似たものとみなされる。

本論で分析する火もまた非常に興味深い。火から出る煙と同様に、火にはメソアメリカの儀礼生活において重要な役割があり、特に神々と通じる手段であった。古代メキシコの諸文化において、神々が社会性を獲得する過程は人間のそれを模倣したものであるが、神々の独特の性質のゆえ、儀礼職能者は、通常の人々に対して用いるものとは異なる手段や言語を用いなければならなかった(Martínez González 2013: 168-169)。いかにして2つの世界を隔てる境界を渡ることができたのだろうか? リミナルと考えられる場所と時間を選ぶ他、儀礼者は非物質的な要素の贈与に基づく交換、また奉納物を存在論的に変容させることになる火や生け贄のような手段を好んだ。神話に明確に示されているように、火は浄化し、刷新し、特に変容するものだから(Graulich 1999: 256-257)、イニシエーションと通過儀礼において重要なのである(Billard 2015: 144-147, 169)。

以上はコパル用袋シキピリが、図像において神官の最も一般的な属性の1つとされる理由である。コパルとは様々な場面で燃やされた芳香性のある樹脂であり、それがいっぱいに入った紙製、あるいは布製の小袋が描かれている。メソアメリカでは、アステカよりもかなり早い時期から、コパル用袋は神官の活動、奉納儀礼一般を象徴するものである<sup>11</sup>。シキピリはしばしば、大きなスプーンのような形をしたトレマイル「火の手」と呼ばれる携帯用土製香炉とともに用いられる(図1)。香炉には燃えた燃料が入っており、その上に神官はコパルの破片を置いた。これらの香炉は考古学コンテキストでいくつも発見されており、例えばテノチティランの大神殿の130号奉納で複数見つまっている(Billard 2015: 337)。

特に、最も一般的な儀式の1つ「火の奉納」では、神々の像の前でコパルが燃やされた。火の奉納は図像に頻りに描かれており、特定のコンテキストで実施された特定の儀式というよりも、奉納という概念一般、儀礼行為一般を表していることが多い(Smith 2002: 99; Mikulska 2015b: 376)。コパルは燃えると濃厚で香り高い煙を放つ。そして、この煙は

特別で「神性な物質」とみなされた。それは煙が神の世界そのものように不透明で、非物質的で、曲がりくねるからである。煙は、空に立ち上りそして姿を消す。この点を図像で確認したい。『ボルジア文書』では、香炉から立ち上る煙(図2)と、開封された「聖なる包み」からあふれている神の力(図3)の描き方が類似している。つまり、煙は神界と通じる手段と考えられ、神界に辿り着き、メッセージを伝えることができた(Herrera 2004: 108, 111, 113; Olivier 2004: 400; Dupey García 2010: 411; Mikulska 2015a: 57-58)。だからこそ、神へコパルを捧げる神官は香炉をできるだけ高く掲げ、神官の願いが煙のように神々へ届くようにと乞い願ったのである(Durán 1995: v. II, 51-52; Mikulska 2015a: 57)。さらに言葉についてもアナロジーが用いられ、言葉を表す体の熱により生じる人間の息と、火の熱がおこす煙が結びつけられた(Herrera 2004: 110)。記録文書ではこの煙と吐息の描き方が似ている。煙の渦と、人物が話していることを示す「言葉の渦巻き」を比べてほしい(Olivier 2004: 400)。

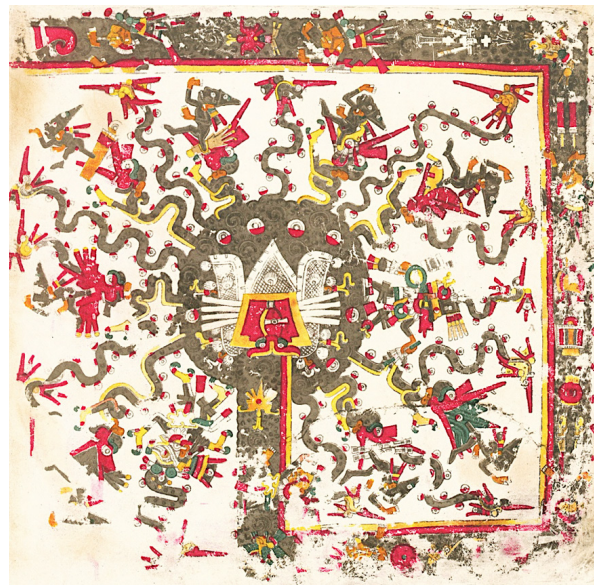


図3 開封された「聖なる包み」からあふれ出る神の力  
 (Codex Borgia 1898: pl. 36)

一方で、煙が発する香りのため、火の儀礼はごく一般的な奉納方法であった。ナワトル語では、ポポチュイア(*popochuia*)という動詞は「燻蒸する」とともに「香り付ける」を意味する(Herrera 2004: 107, 109-110)。また確かに、メソアメリカの神々は香りを嗜んだが、香りは神々自身と同様に目に見えず触れることのできないものであった。香りは神々に栄養を与えるもので、コパルは特に優れた聖なる食べ物<sup>12</sup>の1つであった(Billard 2015: 411)。香炉ではゴムやヤウー

11 アステカより約千年前の古典期テオティワカンの壁画には多くの例が残されている(cf. Berrin 1988: pl. 34)。

トリ (*yauhtli*「ミントマリーゴールド [学名 *Tagetes lucida*]」非常に香りの強い黄色い花) など他の物も香炉で燃やされることがあり (Victoria Lona 2004: 67-68)、色々な目的のための様々な色や香りの煙が焚かれた (Limón Olvera 2012: 328)。例えば、雨神トラロックに結びついた雨乞いの儀式では、煙によって雲を作り出すことがあった (Heyden 1997: v. II, 247-248; Limón Olvera 2012: 332; Vauzelle 2018: 629-630)。まるでトラロックが雲を作り出すように、神官は香を焚いて煙を出した。『フィレンツェ文書』の一節には (Sahagún 1950-1982: v. VI, 35)、トラロックはトラマカスキ (*tamacazqui*「提供者」)、トラロカテクトリ (*tlalocatecuhtli*「トラロカンの王」)、ヤウーオエ (*yiauhoe*「ヤウートリ *yauhtli* の王」)、コパルロエ (*copalloe*「コパルの王」) と呼ばれたとある。そのため、同じ報告の中で、サアグン神父の情報提供者が、トラロケ (*tlaloque*) は神官に似ている、と述べているのは不思議ではない (Sahagún 1950-1982: v. III, 45)。ホセ・コンテルとカタリナ・ミクルスカ (Contel & Mikulska 2011: 57) が正しく指摘しているように、トラロケと神官は、おそらく意図的に、混ぜ合わされたのである。

我々の提案を簡潔にまとめておきたい。図像では、特定の神の姿を表す場合でなければ、神官はたいてい体を黒く塗っていた。この色は通常、煤から作られており、火、煙、夜、闇、また雲や霧を想起させた。それは神官の役割に密接に関係し、また夜の性質を利用するため、日中にも黒く塗られていたことは疑いない。黒色は、神官が接触を試み続けた神界へと彼らを近づけ、おそらく互いの世界を行き来する能力を神官に与えた。黒はアステカの思想では「人間」の色ではなく、それゆえ、神界と通じ合わなければならない人間は体を黒く塗った。メソアメリカの儀礼生活において、火と煙もまた神界と通じ合うために鍵となる役目を担った。そのためコパル用袋シキピリと携帯用香炉など、火の奉納のための用具を携えた神官が図像に頻繁に見られるのである。

## 4. 長くもつれた髪

もつれた長髪もまた、神官の一般的な特徴の1つである (図1)。それもまた、彼らが目に見えない神々の世界に近づくための努力の表れである。見た目が印象的なため、ディエゴ・ドゥラン神父はアステカの神官について記述する際、最初に髪について次のように述べている (Durán 1995: v. II,

60)。神官としての役目を担った時から髪を伸ばし始め、その役目を終えるまで、決して髪を切らず、洗わなかった、と。数々の図像に見られるように、彼らの髪はしばしば白い結びで束ねられていた<sup>12</sup>。

植民地期に、神官を表すために記録者がたびたび用いた言葉の1つはまさにパパワケ (*papahuaque*)「長い髪を持つ者」<sup>13</sup>であった。それは記録者が直接見た神官の外見の特徴を表すのに適した言葉であった。しかし、以下で指摘するように、長い髪を持たない神官も存在した。先スペイン期にはパパワケという言葉はおそらく、神官として多くの経験を積んだ者、長期にわたり神々に仕えた者だけを表す言葉であり、神官一般を指す言葉ではなかった<sup>14</sup>。実際、図像では、最も重要な役目を担う神官のみが長髪で描かれている。『メンドーサ文書』 (*Codex Mendoza* 1992: fol. 61r°, 62r°, 63r°, 64r°) では、「異端者の長 (*alfaquí mayor*)」とされる神官のみが長髪である。『最初の覚え書』 (Sahagún 1997: fol. 250v°, 251r°, 252r°, etc.) の、ペインテーナの祭礼を描いた場面では、最も重要な神官、すなわち以下に見るようにヒョウタン製タバコ入れとコパル用袋を持った人物だけが長髪で描かれている。さらに、『フィレンツェ文書』では、パパワケという言葉は、同じく高位の神官のみを示すトレナムカケ (*tlenamacaque*) という別の言葉としばしば関係づけられている。例えば、サアグン神父 (Sahagún 1950-1982: v. VIII, 62-63) は「トレマカスケ (*tamacazque*) やパパワケと呼ばれる太守 (*sátrapas*)」が新しい君主選出に関わった、と記している。筆者の仮説によれば、長期にわたり髪を切っていないという事実が示すように、より長い期間その役目を担い、より多くの経験を有するため、長髪の神官は他の髪型の神官たちよりも重要であった。様々なタイプの高位の神官が長髪で図像に描かれているため、より多くの神官がいた。パパワケは、全般的に、重要な役目を担うすべての神官を示し、この言葉は神官の外見を想起させた。特定のカテゴリーの神官を指すのではなく、重要な役目を持つ神官すべてがパパワケであった。

当然だが、もつれた長髪のシンボリズムについて言うべきことがまだある。神官たちの髪は、顔や体と同じ様に黒い塗料や顔料を塗りたくられ、また彼らの自己供犠の血も染みこみ、髪を解くことは不可能だった。また、ドゥラン (Durán 1995: v. II, 60) によれば、黒の塗料で髪が濡れていたため、髪から小さな植物が育っていた。記録者ロバス・デ・ゴマラ (López

12 例として、図1及び Durán 1995: v. II, pl. 8, 12, 15, 22, 23などを参照。

13 アロンソ・デ・モリーナ神父 (Molina 1571) の辞書によればパパトリ (*papatli*) は「神官のもつれた髪」の意。

14 cf. Mikulska 2008: 363; Contel & Mikulska 2011: 37; Mikulska 2015a: 41-42, 44-45; Peperstraete 2015: 6.

de Gómara 2007: 422) は、神官の髪にシラミや他の虫類がいたと付け加えている。つまり、神官たちの髪は、大地の神の像の髪とともに似ており(図4)、髪は図像はおそらく、『メキシコの歴史』(Histoyre du Mechique 1905: 28-29; 及び Mikulska 2015a: 34)に記録された有名なアステカの神話を示している。その神話では、大地の女神の髪は植物に変わる。地下界に属するすべてのものと同様に、髪はからみつき、曲がりくねっている(Klein 1982: 7-10)。



図4 植物や虫とともに表された大地の女神の髪 (Diaz 2009: 19 より)

さて、黒色が暗く目に見えない神々の世界を想起させたように、大地、とくに大地の内側の闇を思い起こさせたのは、もつれた長髪であり、しばしば植物や虫が表面に出ていた。実際、夜空のように、大地の内側は完全に光の届かぬ場所を暗示した。アナロジーは閉じた箱や部屋にも及び、闇は何かの内側の特性と認識された。つまり、神界、夜空、大地の内側 (Seler 1963: v. I, 115; Graulich 1987: 69; Ragot 2016: 82)、さらには水が満ちた洞窟 (Mikulska 2015b: 464-465; Declercq 2016: 69)も、不透明な性質のためしばしば同等に捉えられた。例えばナワトル語では「水、洞窟」あるいは「水の中、洞窟の中、死者の地」(Sahagún 1950-1982: v. VI, 136, 195, etc.)は死後を、そして夜の星空を表す表現であった(Mikulska 2015b: 464)。これらのメタファーは視覚的でもある。記録文書では大地の内部、夜空、水中の間に多くの視覚的アナロジーが見られ(Mikulska 2008: 164; Ragot 2016: 82)、すべてが暗い表面で「星のように輝いた目」を伴っていた(図5)。それは完全に闇に包まれた中で、生と死のプロセスが展開していた場であった。そして神々自身が不可視であるのと同様に、人間にそのプロセスは見えなかった(Chamoux 2016: 65)。



図5 似たように描かれた夜空と大地の内側 (Codex Borgia 1898: pl. 27 & 63 の拡大図)

図像では、神官と大地の神々のもつれた髪は、夜空や、サカタパヨリと呼ばれる藁玉と類似している。藁玉には自己供犠用のとげが刺さっており、藁玉の表面は大地の表面、すなわち2つの世界の「境界」を象徴した (Contel & Mikulska 2011: 38; Mikulska 2015a: 34, 48-49)。このことから、パワケには双方の世界を行き来する能力があった、という考えが裏付けられる(図6)。

まとめると、大地の内部は、夜空と同じように、アナロジーとして神の世界を想起させる。神官の長くもつれた髪は、大地の神の髪に似ており、神官を神の世界により近づけた。そのため、サアゲン神父(Sahagún 1969: v. I, 297)によると、大地の神々、なかでもトラロックとトラロケは、「長い髪を持つ偶像崇拝者によく似て」いた。おそらく神官が大地の神々と結び



図6 神官の頭部を表した石彫(メキシコシティ、国立人類学博物館)。神官の髪は、サカタパヨリの藁玉の表面と同じように描かれている(Mikulska 2015a: 43, fig. 8c)

つくことを模索していたことを示しており、非常に示唆的である<sup>15</sup>。

## 5. ヒョウタン製タバコ入れ

アステカの神官のもう1つの重要な属性は、イエテコマトルと呼ばれるヒョウタン製タバコ入れであり、同じ象徴体系に属する(図1)。それは中空のヒョウタン(たいていは学名 *Lagenaria siceraria* という種)で、容器として使われ、現代の先住民共同体でも見られる。儀礼活動を行う際、王などの有名な人物と同様に、イエテコマトルを背中に背負って持ち運んだ神官がいた(例えば、新しい石の竣工のための生贄儀礼に臨席するアシャヤカトル王は、背中にヒョウタン製タバコ入れを背負って運んでいる; Durán 1995: v. I, pl. 17)。しばしばヒョウタンは突起を伴い、人の背に結びつける帯と共に表されている<sup>16</sup>(図7)。

サアグン(Sahagún 1950-1982: v. II, 77; v. VIII, 81)によれば、容器には粉状のタバコが詰められており、黒いインクと混ぜられていた。神官たちはこの混ぜ物を、夜間に自己供犠や他の苦行をする最中に噛んだ。タバコを噛んで摂取すると酩酊状態になるとされる(Sahagún 1950-1982: v. IX, 146; Durán 1995: v. II, 62)。おそらく神官は自らを傷つける苦行に耐えるためや、あの世と通じ合いやすくなるために噛んだ

のであろう。しかし、史料にはそのことについて何も書かれていない。



図7 イエテコマトルの詳細(Codex Magliabechiano 1983: fol. 71rの拡大図)

イエテコマトルに突起があるのは、特定の種のヒョウタンが目的に合わせて選ばれたためである。この見た目(図7)は地表の表現になぞらえることができ、動物のでこぼこしてトゲの多い肌のようなものである(図8)。象徴的に、神官の用いる容器とその中身は、おそらく大地とその内側のミニチュア復元だったのであろう。実際、タバコを詰め込まれ栓をされたこれらの容器は、「シワコマトルの肉体」(Mendieta 1997: v. I, 224)、つまり大地の女神の肉体と言われた。さらに、ナワトル語では、日常生活で使う容器(箱、部屋など)は闇を意味することもあ

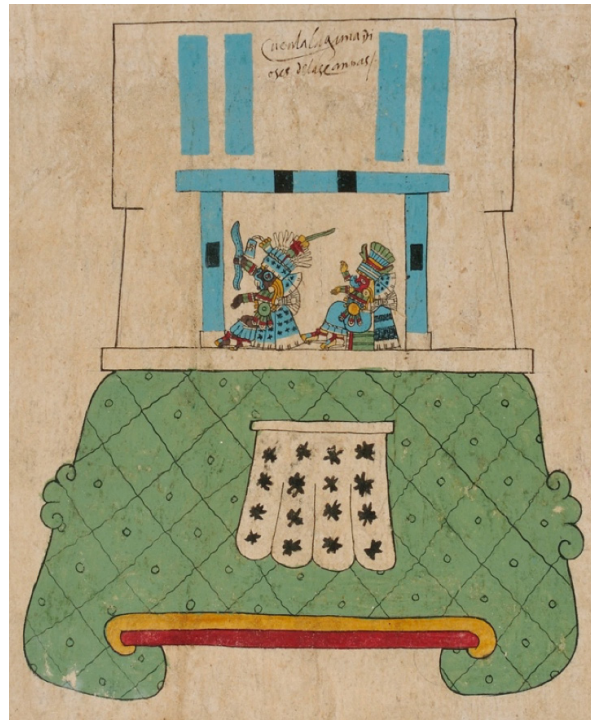


図8a 大地の表面の突起(Codex Borbonicus 1991: pl. 35の拡大図)

15 トラマスカキ(tlamacazqui「与える者」、「提供者」)という言葉の両義性も参照。この言葉は同様にトラロックや神官を意味する(Contel & Mikulska 2011: 57)。

16 メシコ=テノチティランの大神殿で見つかったこの特異な考古学資料を参照(López Luján 2010: 128 fig. 8)。

り、闇は物の内側の特性と考えられた。特に、蓋をされた容器というメタファーは、深い闇を表現し、ミクトランを記述するために用いられた。ミクトランには入口がなく、人間にとっては、その内側で何が起きているのか知ることも、神々が司る生や死のプロセスを見ることもできない(Chamoux 2016: 39-40)。



図 8b 大地の表面の突起 (Codex Borgia 1898: pl. 53 の拡大図)

『太陽の伝説』(Leyenda de los Soles 1992: 156-158)で語られる神話の中に、ヒョウタン製タバコ入れ、大地、生死のプロセスの結びつきを確認できる。移住先を探していたメシカ族が辿り着いたトゥーラは、飢餓に見舞われていた。そしてメシカの神官であり指導者であったトスクエクエクスは、繁栄を取り戻すために、自分の娘をトラロックに捧げることを受け入れた。トラロケは、犠牲者の心臓をヒョウタン製タバコ入れの中に入れ、これによって、雨が降り豊かさが戻った。

## Ⅱ 血、生贄、儀礼

「火の儀式」は頻繁に描かれており、奉納儀礼全般を象徴する場合もあった。しかし、図像にはそれだけでなく、血を流す儀式もまた多く現れる。したがって、神官の2つ目の属性群は、主に放血あるいは自己供犠に関わる道具を含む。それはマゲイのとげ、アクショヤトルの枝、サカタパヨリの藁玉である(図9)。紙製の衣装や装飾品もまたこの属性群に関

連する。

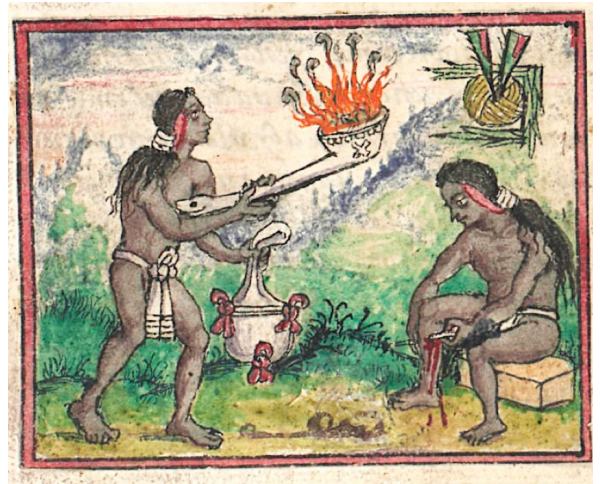


図9 マゲイのとげ、サカタパヨリの藁玉、アクショヤトルの枝などの道具で自己供犠を行う神官(図右側; Durán 1995: v. II, pl. 12)

### 1. 放血のための道具

神話は、神々に栄養を与え回復させるために人身供犠が必要なものであると強調する(Graulich & Olivier 2004: 129, 141)。儀礼的殺害はネシュトラワリストリ(nextlahualiztli「債務の支払い」)としばしば言われた。この「負債」は神に負うものであり、神は人間を作り、人間が望むあらゆる自然資源を与え続けた(Graulich 1987: 115)。この言葉は共同体の祭礼を記述する際によく用いられるが、致命傷にはならない流血や、もっと一般的に、血を流さない他の奉納儀礼を指すこともある(Graulich 2005: 313)。メソアメリカの神話から明らかなのは、動物とは異なり、人間は神を正しく崇めることができたという事実である。『ポ波尔・ヴフ』(Popol Vuh 1996: 66-68, 146-147; ポ波尔・ヴフ 1977: 12-14, 125-127)の中では、神々は人間よりも前に動物を作り、その代わりに動物に神々を崇めるよう求めた。しかし動物たちは話すことができないから、崇めることができなかった。神々は、そのときから動物が狩られ食糧になることを決めた。それから神々は人間を作ったが、人間は祈りを捧げ、香り、血などを奉納することで「負債を払う」ことができた。しかし、もし血の儀式が神界との交換の中核を占めたならば、この儀式を単なる返礼とまとめることはできない。その目的は状況や儀礼の主催者によって異なり、むしろ言語を超えるコミュニケーションの手段であった(Martínez González 2013: 156, 162-163, 168-169)。

死後、人身供犠の犠牲者は神々のもとへ行った(Olivier 2015b: 63)。しかし、犠牲者が命を落とさない他の血の儀

式もあり、日常的に行われることも時々あった。例えばそれには自己供犠などがあり、とがった骨、マゲイのとげ、針、他のとがった物で自らの血を抜いた。血は紙片の上にたられ、血の付いたとげは藁玉サカタパヨリに刺され、この玉自体はアクショヤトルの枝の上に飾られた。自己供犠は象徴的死であり、生贄に等しいと見なされた(Baudez 2012: 181-207)。それは神官が日常的に行う禁欲と苦行の実践の一部であった(他には不眠、断食、性交節制、沐浴などがある)。これらの苦行の実践はアメリカ先住民の諸文化で一般的であった(Graulich 2005: 307)。ナワトル語ではこれらの苦行をトラマセワ (*tlamacehua*) と言い、直訳すれば「何かに値すること」あるいは「何かを与えられること」を意味する。なぜなら自らを痛めつける苦しさにより、交換のサイクルが動き出し、何らかの返礼を得ることができたからである(Dehouve 1995: 94)。苦行は苦行を行う者の内なる力、トナリ (*tonalli*) を強くすると言われた。そこに神々が介入することは必ずしもなかった。実際、自己供犠は神々を束縛することにすらなった(Olivier 2004: 391; Graulich & Olivier 2004: 144; Graulich 2005: 304-307, 320)。このように神々は栄養を与えられ元気を取り戻したが、単なる奉納よりも要求の高いこうした実践によって恩恵を得ることもできた。自己供犠であっても生贄であっても、血を与えることよりも禁欲することの方が重要であった(Baudez 2012: 162, 243-245)。

苦行を通して獲得した力は、代わりに新たな義務を生み出した。宇宙が正しく動き続けるために人間は基本的な役割、すなわち神々を支えるという役割を果たさなければならなかった。メソアメリカの神々は強大であったが全能ではなく、人間は神々を助けるという重い責任を負った。儀礼を遂行することは重い任務であり、その責任を負うことは重荷として示されている。アステカの神官の通常の装いである、シコリという袖のない上着の一種は、受け入れた義務のメタファーであり、「シコリを着た」は「義務を受け入れた」を意味した。そして儀礼活動はしばしばテキトル (*tequitl*「任務」) と書かれた(Sahagún 1950-1982: v. VI, 241; Olivier 2015a: 610-611)。この任務は極めて重要で、これによって神々は宇宙を動かし続けることができた。

結果として、永続するものは何もなかったということになる。人間は、宇宙の秩序のなかで割り当てられた責任を有し、神界と通じる役割の者は、儀礼言語を適切に習得していなければならなかった。神話が示すように(Contel 2008: 342)、そうした人が下手であったり怠慢であったりした場合は、とても不運となった。有名な神話では、太陽と大地が通常通り正しく栄養を与えられなかった場合、太陽が空中で停止し、大

地にはもはやトウモロコシが育たなくなり、人々は死んでしまう(*Histoyre du Mechique* 1905: 30-31; *Leyenda de los Soles* 1992: 148)。さらに、他の創造物は過去にすでに滅びており(*Leyenda de los Soles* 1992: 142-144)、もし儀式が正しく遂行されなければ、この世界も滅びてしまう。これゆえに、宇宙の秩序が乱れることは常に恐れられ、ぞんざいな神官は厳しく罰せられた。彼らはその責務を果たせなかった場合、しばしば殺された(Ragot 2000: 43, 75)。それでいて一方では、共同体全体で時折行われた奉納、自己供犠の中で、最も壮観に行われたのは神官のものであり、日常的にしばしば行われた。なぜなら彼らは共同体の全ての人々に責任を負っていたからである(Graulich 2005: 324; Baudez 2012: 85)。もし自己供犠が人々の目に見えないところで行われたら、その後で血の付いたとげが人目のつくように示され、儀礼が適切に行われたことを皆知ることができた(Pastrana Flores 2008: 69; Baudez 2012: 104)。

図像において、火の儀礼と同様に、自己供犠は神官の活動を象徴するものであった。先に示した図(図9)では、コバルを燃やし、神々に香りを捧げている神官が描かれ、もう1人の神官はふくらはぎから血を抜き捧げている。これら2つの行為は神官の典型的な行動であり、メソアメリカの神々は基本的に血や香りから栄養を得ていたとされていたため、なおさらであった。

## 2. 紙製の衣服と装飾品

アステカの神官の最も一般的な衣服はシコリであり、それは丈が短く、袖がないかごく短い袖の上着で、裾には房飾りがついていた(Anawalt 1981: 39-45)。また普通の腰巻とともに着用された(図1)。

特別な資料が考古学コンテキストで発見された。メシコ=テノチティランの大神殿の、ピラミッドの階段の基部に位置する102号奉納で発見された布である(Barrera Rivera, Gallardo Parodi & Montúfar López 2001: 74)。メソアメリカでは古代の布の直接的な証拠は非常に稀有であることから、極めて重要である。ここに扱うのはシコリの図ではなく実物資料であり、この衣服がどのようなものであったかを明確に理解することができる。明らかに簡略化された植民地期の多くの図像とは反対に、この上着は装飾されており、彩紋が施され、『マリアベッキアーノ文書』(*Codex Magliabechiano* 1983: fol. 91r°) に描かれた女神シワコアトルのスカートと完全に同じパターンである。大神殿で見つかった上着は、おそらくこの女神か、あるいは大地を暗示する彼女の特性と特に



関係している。「チュルプスコの偶像」として知られる像 (cf. Pasztory 1983: 218) が着ているシコリには同様に装飾が施されているが、異なる紋様である。これらの紋様は神によって異なり、紋様がどの神かを想起させたのである。

最後に、記録文書にはシコリの図が多くあり、『マリアベッキアーノ文書』(Codex Magliabechiano 1983: 63r<sup>o</sup>) のように、細部と紋様を確認できるものもある。しかし、この記録文書の別のページ(Codex Magliabechiano 1983: 70r<sup>o</sup>)の多くの人物が描かれたシーンは、あまり正確に描かれておらず、シコリの表現は簡素化され、すべて白くて紋様はない。

誰がいつシコリを着たのだろうか？ 神官はもちろん、神々(例えば、いわゆる「聖なる戦いのテオカリ (teocalli)」: Pasztory 1983: 167)や王や首長も、儀礼的場面で着用している(図10)。実際は、シコリは任務を象徴していた。このことを明確に表しているのがナワトル語のナスタウー (naztauhtl 「私のサギの羽」)、ノメカシコル (nomicaxicol 「私の帯のシコリ」) という表現であり、引き受けた義務を示している (Sahagún 1950-1982: v. VI, 241)。儀礼活動に従事するすべての人がこれを着ることができた。衣装自体が特定のカテゴリーの神官を示すわけではなかった。しかし一方で、シコリの素材(綿、マゲイの繊維、樹皮など)、色、紋様によって、それを着た者の身分、すなわち職級、仕えた神など、を特定できた。また、ただ図像データだけに基づいてシコリの素材を特定することは不可能であるが、特定の場面の布について書かれた記述は時々あり、それを着た人物の身分を知るヒントになる。



図10 メキシコ=テノチティランの更新された大神殿の献納式において血とコバルを捧げるティソック王とアウイツォトル王。両者とも上着シコリを身に着けている(メキシコシティ、国立人類学博物館；筆者撮影)

加えて、神官は特定の装飾品を身に着けることがしばしばあり、それらは特定の領域や特定の神を想起させた。例えば紙製の扇状の首飾りアマクエシュパリ (amacuexpalli) は、雨と豊穡の神と関係する神官が身に着けた。『ボルボニクス文書』(Codex Borbonicus 1991: pl. 32)に見られるように、神自身だけでなく、その神と関係する神官も、職位や正確な役割を問わず身につけた。



図11 首飾りアマクエシュパリを身に着けたトラロックの神官(メキシコシティ、国立人類学博物館；筆者撮影)

特定の装飾品の別の例は、クエシュコチテチマリ (cuexcochtechimalli 「首盾」)、イシュクアテチマリ (ixcuattechimalli 「前頭盾」) と呼ばれる紙製の円花飾りであり、死や生贄に関連する。儀礼の場面で、円花飾りは特に、生贄を捧げる神官が身につけており、ナイフか生贄をつかんでいる(図12) (Sahagún 1997: fol. 250r<sup>o</sup>, 251r<sup>o</sup>, etc.; Rios 1979: fol. 54v; Durán 1995: v. II, 41)。「首盾」は葬礼においても描かれ<sup>17</sup>、『ボルボニクス文書』(Codex Borbonicus 1991: pl. 30)では、オチパニストリの儀式で捧げられた3枚の図のうちの1枚では、コウモリの格好をした人物がもつれた髪で、先述の紙の円花飾りを身につけている。

17 アルバラド・テソモク (Alvarado Tezozomoc 2001: 264)によれば、王族の葬礼における歌い手は後頭部にゴムで接着して円花飾りを身に着けていた。

コウモリは夜の動物であり、斬首による死と関連する。つまり明らかに、死を暗示する儀礼活動と関係した装いである。



図 12 紙製円花飾りクエシュコチテチマリとイシュクアテチマリを身に着けた生贄儀礼執行者 (Sahagún 1997: fol. 251rの拡大図)

円花飾りを身につけた神々もいる。アルフォンソ・カソ(Caso 1967: 130-131)は、円花飾りを死者の国の神ミクトランテクトリと関連付けた。また、死と関係する他の神々も身につけている。例えば『ボルボニクス文書』に描かれたトナルポワリ<sup>18</sup> (*tonalpoahualli*)におけるトレセーナ<sup>19</sup> (*trecena*)の図像の王の1人であり、ヨワルテクトリ「夜の王」と同定されている人物が円花飾りを身につけている(Anders, Jansen & Reyes García 1991: 129)。他には、『最初の覚え書』(Sahagún 1997: fol. 262v°, 265r°, 266v°)の中のチャチャルメカ、チャルメカシワトル、アトラワ、が身につけている。エドゥアルト・ゼラー (Seler 1992: v. II, 240, 266)によれば、『最初の覚え書』においては、チャチャルメカ、すなわちチャルメカトル (*chalmecatli*)の複数形は、死と関連する神々、つまり地下界の神、あるいは生贄に従事する神としてはっきりと表されており、チャルメカシワトルはその女性版である。アトラワに関しては、その賛歌の中でチャルメカトルとされている(Sahagún 1997: fol. 281r°)。ドゥラン(Durán 1995: v. II, 40)は、チャチャルメカという言葉は、人身供犠において、生贄の石の上に生贄体を押さえつける神官のことも指すと説明し

ている。生贄執行者は4～5人のチャチャルメカに補佐されたが、彼らの役目は、生贄の四肢や、時には頭を押さえつけることであった。彼らの名前は「細長い溝、裂け目、隙間」を意味するチャリ (*challi*)に由来し、地下世界を想起させる<sup>20</sup> (Seler 1992: v. II, 240)。

しかし、葬礼の包み<sup>21</sup> (*Codex Magliabechiano* 1983: fol. 72r°)と「年を束ねる」祭礼や「新しい火」の祭礼で埋められる「年の包み」<sup>22</sup> (*Codex Borbonicus* 1991: pl. 36)にも、紙製の円花飾りがついている。円花飾りは、それを身につける人物が神官や神であることを特定して示すものではなく、死を象徴している。記述や図像の中で神官が紙製の円花飾りを身につけている時にはいつも、彼らは死に関係する活動に関与しており、多くの場合、生贄の執行者であったり、チャチャルメカとして犠牲者を押さえつけたりしている。円花飾りは、特定の神に結びついているというより、神官の活動と直接的に関係しているのである。

より一般的には、円花飾りの素材である紙アマトル (*amatl*)と儀礼活動の関連も証明されている。アマトル紙は非常に特徴的な儀礼的意義<sup>23</sup>をもち、特に装飾品として身につけられるとき、死とより特別に関係付けられる。死の状況とは無関係に、死者、生贄に捧げられたものと関連付けられた。生贄には、擬人化された神や偶像も含まれた(Vauzelle 2018: 273)。この紙の生贄に関する意味合いは、テテウイトル (*tetehuitl*)と呼ばれる旗として用いられた時にも明らかである<sup>24</sup>。

最後に、紙を使った儀式ではしばしば火が焚かれることもつけ加えておくべきだろう。衣装を身につけた人物が生贄として捧げられた後、儀礼の衣装はしばしば祭礼の最後で灰に帰した(Vauzelle 2018: 273-275)。アマトル紙、儀礼行為、火の間の関係は、神官の場合にもあり、たいてい死を暗示した。まず、儀礼職能者を任命する方法がある。『フィレンツェ文書』(Sahagún 1950-1982: v. III, 40-41; v. IV, 87)では、アマトラマトケ (*amatlamatque*「紙の目きき」)やアマテッケ (*amatecque*「紙を切る者」)という言葉は、葬礼の参加者(紙の衣装を切り死者に着せ、火葬に備えた)や、火の儀礼に関係する人々(彼らは紙の飾りを作り、トレセーナにおける

18 13日×20週を区切りとする260日の宗教暦。日付は13の数字と20の図像の組み合わせで記す(訳注)。

19 13日を区切りとする1週間のこと(訳注)。

20 この語源と、「前頭盾」イシュクアテチマリの細長い溝はおそらく関係している(図6を参照)。

21 葬礼において死者をくるんだ包み(訳注)。

22 アステカでは365日の太陽暦と260日の宗教暦が使用されていた。それぞれの日付の組み合わせが再度巡り合うために52年かかる。アステカでは52年ごとに「新しい火」の祭礼を行い、52の年の束を示す「年の包み」を捧げていた(訳注)。

23 実際は、宣教師はアマトル紙と先住民の宗教実践をほぼ同一視していたため、その製作や使用は18世紀まで禁止されていた(*cf.* Arnold 2002: 228)。

24 この点についてアーノルド(Arnold 2002: 233)は、サアゲン(Sahagún 1950-1982: v. II, 42-43)の情報提供者がトラカテウイトル(*tlacatetehuitl*「人の旗」)に触れ、ペインテーナの祭礼の最初の祭りアトルカワロにおいて7つの様々な場で生贄にされる子どもを想起させている、と指摘している。

「1の犬」の日に催された火の神シウテクトリの祭礼のため、その偶像を飾った)を示している。同様の一連の繋がりが、紙の円花飾りを身に着けた神官の図像のいくつかに認められる。例えば、国立人類学博物館の石彫(図6)は、円花飾りイシュクアテチマリをつけ、マルタ十字で飾られた目を持つ神官の頭を表しており、火と関連付けられている。また『ボルボニクス文書』(図13)に描かれた新しい火の祭礼を司る神官は円花飾りクエシュコチテチマリを身に着け、同じくマルタ十字の目を持っている。青い紙製の冠と犬の形のネックレスも身につけ、それらは葬礼の包みにもついている。この祭礼は52年ごとに行われ、死の年の包みが埋められた後、生贄の切り裂かれた胸の中で新しい火が真夜中に灯された。その後夜明けまで生贄が捧げられ、都市の隅々に火が届けられた。

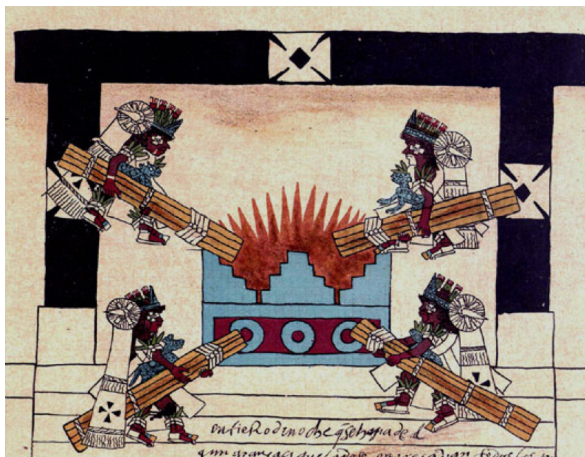


図13 新しい火の祭礼。神官たちは紙製の円花飾りクエシュコチテチマリを身に着けている(Codex Borbonicus 1991: pl. 34の拡大図)

ここまでの主張をまとめると、神官の衣装と属性が象徴しているのは以下のようになる。

- ・夜や大地の内側。暗く、神界と概念的に近い。儀礼職能者は神界と通じようとする(身体彩色、髪、ヒョウタン製タバコ入れ)。
- ・神官が担う神々に給仕するという職務(上着シコリ)。
- ・儀礼行為全般を象徴した最も一般的で日常的な儀式: 奉納(香炉、コバル用袋)と苦行(自己供犠の道具)。
- ・衣装の色または紋様、ある種の装飾品(紙製の円花飾りなど)は、特定の領域や特定の神との結びつきをより限定して示した。

### 3. 神官の衣装の組み合わせとバリエーション

ここでは、これらの衣装と属性が様々な方法で変化し、組み合わせるあり方を見てみたい。まず、神官の衣装は図像ごとにしばしば異なるということを確認することから始め、複数の属性がしばしば一緒に描かれるという事実を指摘する。またそうした属性の組み合わせが、文書で言及される神官の категория (トレナマカケなど)を指すことがあると提案する。さらに、サアゲンやドゥランが記録した「ベインテーナ」の祭礼のような特定の儀礼コンテキストに現れる他のバリエーションは、メシコ=テノチティトランにおけるアステカの神官組織の融通無碍で複雑な特徴を示している。

1つの良例は、トレナマカケ(直訳すれば「火を捧げる者」)である。彼らはパパワケ(長くもつれた髪を持つ)であり、ヒョウタン製タバコ入れとコバル用袋を携えているため、図像で同定できる。

「火の奉納」は、上で見たように、図像に非常によく見られ、トレナマカケが独占的に行うものではなかった(図10のメシコ=テノチティトランの大神殿の献納の儀式で火を捧げたティソック王とアウイツトル王を参照)。サアゲンの『最初の覚え書』(Sahagún 1997: fol. 250v°, 251r°, 252r°, etc.; 図12を参照)に見られるような、ベインテーナの祭礼などの複雑な儀礼を表した絵においても、神官は火をつけていない時でさえコバル用袋を持っている。これらの神官たちは香を焚いておらず、儀礼用のナイフや、ガラガラ棒チカワストリ(chichahuaztli)のような別の道具を手にしているように描かれている。神官は全員長髪で、ヒョウタン製タバコ入れを背負い、しばしば人身供犠の執行者といった重要な役目を担った。彼らは史料で言及されるトレナマカケであると考えられる。彼らはシキピリ(コバル用袋)を持っているように描かれ、「火を捧げる者」という肩書きを想起させる。ただし史料で明らかになっている通り、また本論でも述べたように、彼らの役割はこれに限られるわけではない。

図像は、様々な職位や役割を持つ神官間には複雑な組織が存在したということを示しているというより、証明している。例に挙げたトレナマカケは、位の高い神官であり、神官として長年の経験を有していることをその長い髪が示している(彼らはパパワケであった)。彼らは、儀礼行為を司る他の重要な人物と同様に、人間を生贄に捧げることができ、ヒョウタン製タバコ入れを背負っていた。

まとめとして、神官の属性の異例を1つ検討したい。この例はアステカの神官組織の複雑さと融通無碍さを示してい

る。ここで分析するのはオチパニストリのペインテーナの祭礼の事例である。実際に、植民地期の記録者は神官と神を厳密に結びつけているが、儀式と図からは、特定の儀礼の場面では、例えば象徴的に近いか遠いかという基準によるなど、ある種の融通無碍さが神官組織に影響することがあったことが分かる。

オチパニストリの儀式 (Sahagún 1950-1982: v. II, 110-117; Durán 1995: v. II, 142-147, 274-275; Graulich 1999: 89-143) は農業の周期に関連し、次の3神の女神が崇められた。大地の女神トシ、あるいはテテオ・インナン、水の女神アトランタン、トウモロコシの女神チコモコアトルである。

それぞれの女神は特有の衣装を着用し専属の神官がいた。しかし、3神とも農耕の豊穰に関連する女神であり、オチパニストリの祭礼の間は、それぞれの属性や神官が入れ替わった。チコモコアトル (トウモロコシの女神) の神官チチコモコア (*chichicomecoa*) は、トシ=テテオ・インナン (大地の女神) に捧げられた儀式に参加した。サアグンの情報提供者によれば擬人化したトシ=テテオ・インナンは、事実、チコモコアトルの神官に迎えられた (Sahagún 1950-1982: v. II, 111)。このことはオチパニストリに捧げられた『ボルボニクス文書』 (*Codex Borbonicus* 1991: pl. 30) の3枚の図の1枚で確認できる。その図ではチコモコアトルに扮した神官が擬人化したトシ=テテオ・インナンの前に表されている (図 14)。



図 14 オチパニストリの儀式 (*Codex Borbonicus* 1991: pl. 30 の拡大図)。図下ではチコモコアトルの神官が、擬人化したトシを迎えている。主基壇上では、トラロックの属性を身につけた神官とともに、擬人化したチコモコアトルが描かれている

擬人化したチコモコアトルについて言えば、この女神はウイシュトティン (*huixtotin*) 神官など、トラロックや他の水の神と結びついた神官が取り仕切る儀式に参加した。『ボルボニクス文書』 (*Codex Borbonicus* 1991: pl. 29) には、これらウイシュトティン神官を描いた図が2枚ある。彼らはワシの爪

とケツアル鳥の羽のついた典型的な頭飾りをかぶり、女神の前で巻貝を吹いている。一方、もう1人の神官は笏コアトピリ (*coatopilli*) を彼女のほうに延ばしている。笏は蛇の形の杖で、雷と雨の神に関係する (図 15)。

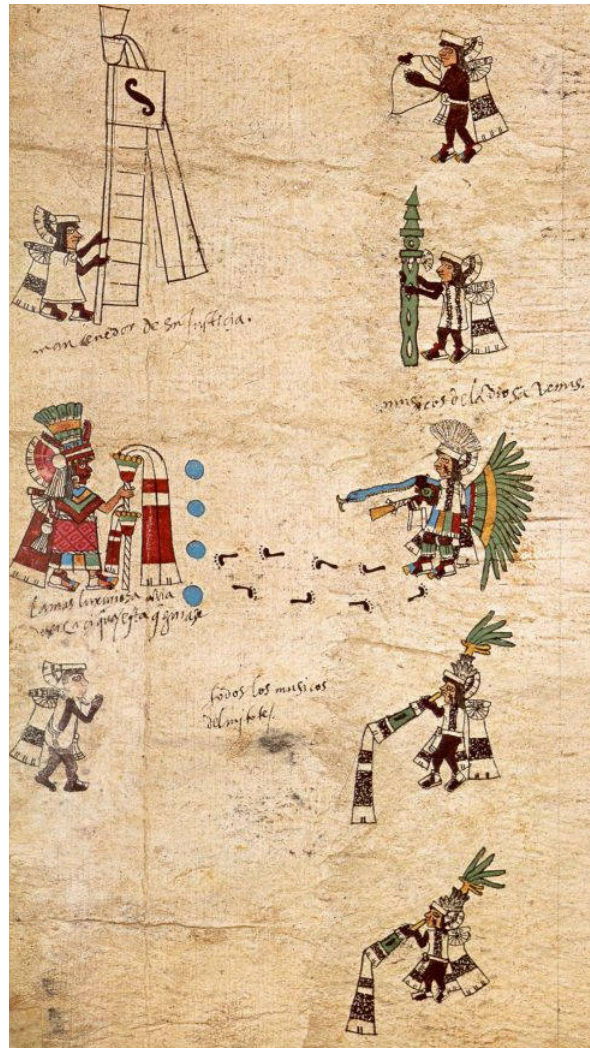


図 15 オチパニストリの儀式 (*Codex Borbonicus* 1991: pl. 29 の拡大図)。図右下では2人のウイシュトティン神官が擬人化したチコモコアトルの前でトランベツを吹いている

『ボルボニクス文書』の次の図 (*Codex Borbonicus* 1991: pl. 30) (図 14) では、水とトウモロコシの交わりが、一歩さらに進んでいる。ここに、擬人化したチコモコアトルがその神官チチコモコアとともに描かれている。しかし、神官の属性のいくつかは、雨の神の属性と入れ替わっている。彼らはトラロックのマスクを頭飾りに着け、トラロックの扇状の紙製装飾を首につけ、衣装はゴムで斑点がつけられ、水の神々の装飾の特徴を示している。

本論をまとめる。彼らが仕えた神々のように、アステカの神官は状況に応じて、様々な神々の装飾品と属性を取り替えることができた。このことは、アステカの神官組織の融通無碍さ

と複雑さを示している。また同様に、このトピックについて調査し新しい解釈を提示するのに、衣装、装飾品、身体装飾の分析が有効であることを示している。またもっと広く、こうした研究がメソアメリカの諸文化、世界観を理解する一助となることも期待している。アステカ神官の最も一般的な衣装、属性に注目した本論文は、古代メキシコの儀礼職能者というテーマを論じ尽くしてはいない。しかしながら、複数のアナロジーが一貫し、整合性のある形で繋がっていることは確認できた。闇(夜、大地の内側)、火(煤、コパル、焼けた紙)、血(生贄、自己供犠)といったアナロジーは、神々の宇宙、その宇宙へ近づく方法を想起させた。これらの概念はアステカ神官の儀礼実践に深く根ざしたものであり、彼らの衣服はこうした概念の様々な様相を示しているのである。

## 参考文献

- Acosta Saignes, Miguel  
1946 Los teopixque. Organización sacerdotal entre los mexica, *Revista Mexicana de Estudios Antropológicos* 8: 147-205.
- Alvarado Tezozomoc, Hernando de  
2001 *Crónica Mexicana*. G. Díaz Migoyo & G. Vázquez Chamorro (eds.). Dastin.
- Anawalt, Patricia R.  
1981 *Indian Clothing before Cortés: Mesoamerican Costumes from the Codices*. University of Oklahoma Press.
- Anders, Ferdinand, Maarten Jansen & Luis Reyes García  
1991 *Libro explicativo del llamado Códice Borbónico*. Fondo de Cultura Económica.
- Arnold, Philip P.  
2002 Paper Rituals and the Mexican Landscape. In E. Quiñones Keber (ed.), *Representing Aztec Ritual: Performance, Text, and Image in the Work of Sahagún*, pp. 227-250. University Press of Colorado.
- Barrera Rivera, José, Álvaro, María de Lourdes Gallardo Parodi & Aurora Montúfar López  
2001 La ofrenda 102 del Templo Mayor, *Arqueología Mexicana* 48: 70-77.
- Baudez, Claude-François  
2012 *La douleur rédemptrice: L'autosacrifice précolombien*. Riveneuve Éditions.
- Berrin, Kathleen (ed.)  
1988 *Feathered Serpents and Flowering Trees: Reconstructing the Murals of Teotihuacan*. The Fine Arts Museum.
- Billard, Claire  
2015 *Le Vieux Dieu. Vies et morts d'une divinité ignée sur les Hauts Plateaux mexicains. Étude diachronique de l'iconographie et de la symbolique d'une entité préhispanique par une approche comparée des sources archéologiques, ethnohistoriques et ethnographiques*. Ph.D. dissertation, Université Paris 1 Panthéon Sorbonne.
- Caso, Alfonso  
1967 *Los calendarios prehispánicos*. Universidad Nacional Autónoma de México.
- Chamoux, Marie-Noëlle  
2016 Los lugares de la oscuridad: epistemología náhuatl de los procesos vitales y modelos técnicos, *Revista de Antropología* 59: 33-72.
- Codex Borbonicus  
1991 *Códice Borbónico, el libro del ciuacoatl*. Ferdinand Anders, Maarten Jansen & Luis Reyes García (eds.). Fondo de Cultura Económica.
- Codex Borgia  
1898 *Códice Borgia. Il manoscritto messicano Borgiano del Museo etnografico della S. Congregazione di propaganda fide, riprodotto in fotocromografia a spese di s. e. il duca di Loubat a cura della Biblioteca Vaticana*. Danesi.
- Codex Magliabechiano  
1983 *The Codex Magliabechiano and the Lost Prototype of the Magliabechiano Group*. Elizabeth H. Boone (ed.). University of California Press.
- Codex Mendoza  
1992 *Codex Mendoza*. Frances F. Berdan &

Patricia R. Anawalt (eds.). University of California Press.

José Rubén Romero Galván (eds.). Consejo Nacional para la Cultura y las Artes.

Contel, José

- 2008 Tláloc y el poder: los poderes del dios de la tierra y de la lluvia. In G. Olivier (ed.), *Símbolos de poder en Mesoamérica*, pp. 337-357. Universidad Nacional Autónoma de México, Instituto de Investigaciones Históricas.

Contel, José & Mikulska Katarzyna

- 2011 'Mas nosotros que somos dioses nunca morimos'. Ensayo sobre tlamacazqui: ¿dios, sacerdote o qué otro demonio? In J. Contel & M. Katarzyna (eds.), *De dioses y hombres. Creencias y rituales mesoamericanos y sus supervivencias*, pp. 23-65. Museo de Historia del Movimiento Popular Polaco.

Declercq, Stan

- 2016 Tlillan o el 'Lugar de la negrura', un espacio sagrado del paisaje ritual mesoamericano, *Estudios de Cultura Náhuatl* 51: 67-110.

Dehouve, Danièle

- 1995 Le vocabulaire du don en nahuatl. In J. d. Durand-Forest & G. Baudot (eds.), *Mille ans de civilisation mésoaméricaine: Des Mayas aux Aztèques. Hommages à Jacques Soustelle*, pp. 91-104. II. L'Harmattan.

Díaz, Daniel

- 2009 Tlaltecuhli, *Arqueología Mexicana* 100: 18-19.

Dupey García, Élodie

- 2003 *Color y cosmovisión en la cultura náhuatl prehispánica*. Master thesis, Instituto de Investigaciones Históricas, Universidad Nacional Autónoma de México.
- 2010 *Les couleurs dans les pratiques et les représentations des Nahuas du Mexique central (XIVe-XVIe siècles)*. Ph.D. dissertation, École Pratique des Hautes Études, Paris.

Durán, Diego

- 1995 *Historia de las Indias de Nueva España e Islas de Tierra Firme*. Rosa Camelo &

ドゥラン, デイエゴ

- 1995 [1570/1579] 『神々との戦い II』(アンソロジー 新世界の挑戦 10)、青木康征(訳)、岩波書店。

Galinier, Jacques & Aurore Monod Becquelin

- 2016 Prólogo. In A. Monod Becquelin & J. Galinier (eds.), *Las cosas de la noche Una mirada diferente*, pp. 6-15. Centro de Estudios Mexicanos y Centroamericanos.

Graulich, Michel

- 1987 *Mythes et rituels du Mexique ancien préhispanique*. Académie Royale de Belgique.
- 1999 *Ritos aztecas: Las fiestas de las veintenas*. Instituto Nacional Indigenista.
- 2005 Autosacrifice in Ancient Mexico, *Estudios de Cultura Náhuatl* 36: 301-329.

Graulich, Michel & Guilhem Olivier

- 2004 ¿Deidades insaciables? La comida de los dioses en el México antiguo, *Estudios de Cultura Náhuatl* 35: 121-155.

Herrera, María del Carmen

- 2004 Valores metafóricos de po:c-tli 'humo' en los antropónimos nahuas. In M. Montes de Oca Vega (ed.), *La metáfora en Mesoamérica*, pp.95-122. Universidad Nacional Autónoma de México, Instituto de Investigaciones Filológicas.

Heyden, Doris

- 1997 La sangre del árbol: el copal y las resinas en el ritual mexicano. In S. Rueda Smithers, C. Vega Sosa & R. Martínez Baracs (eds.), *Códices y documentos sobre México, segundo simposio*, pp. 243-270. II. Instituto Nacional de Antropología e Historia.

Histoyre du Mechique

- 1905 Histoyre du Mechique, manuscrit français inédit du XVIIe siècle. Édouard de Jonghe (ed.), *Journal de la Société des Américanistes* 2: 1-41.

Jansen, Maarten

- 2002 Una mirada al interior del templo de

- Cihuacóatl: Aspectos de la función religiosa de la escritura pictórica. In C. Arellano Hoffmann, P. Schmidt & X. Noguez (eds.), *Libros y escritura de tradición indígena: Ensayos sobre los códices prehispánicos y coloniales de México*, pp. 279-326. El Colegio Mexiquense / Katholische Universität Eichstätt.
- Klein, Cecelia F.  
1982 Woven Heaven, Tangled Earth: A Weaver's Paradigm of the Mesoamerican Cosmos, *Annals of the New York Academy of Sciences* 385(1): 1-35.
- Knab, Tim J.  
1991 Geografía del inframundo, *Estudios de Cultura Náhuatl* 21: 31-57.
- Ladrón de Guevara, Sara  
2006 Las Higueras, *Arqueología Mexicana* especial 22: 50-51.
- Lakoff, George & Mark Johnson  
1980 *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press.
- Leyenda de los Soles  
1992 Leyenda de los Soles. In *History and Mythology of the Aztecs. The Codex Chimalpopoca*, pp. 139-162. The University of Arizona Press.
- Limón Olvera, Silvia  
2012 *El fuego sagrado: Simbolismo y ritualidad entre los nahuas*. Centro de Investigaciones sobre América Latina y el Caribe, Universidad Nacional Autónoma de México.
- López Austin, Alfredo  
1992 *Los mitos del tlacuache: Caminos de la mitología mesoamericana*. Alianza Editorial.
- López de Gómara, Francisco  
2007 *Historia de la conquista de México*. J. Gurría Lacroix (ed.). Fundación Biblioteca Ayacucho.
- López Luján, Leonardo  
2010 La 'ofrenda de fuego': sus protagonistas y sus escenarios. In L. López Luján (ed.), *Humo aromático para los dioses: una ofrenda de sahumerios al pie del Templo Mayor de Tenochtitlan*, pp. 123-134. Instituto Nacional de Antropología e Historia - Museo del Templo Mayor.
- Martínez González, Roberto  
2011 *El nahualismo*. Universidad Nacional Autónoma de México, Instituto de Investigaciones Históricas.  
2013 *Cuiripu: cuerpo y persona entre los antiguos p'urhépecha de Michoacan*. Universidad Nacional Autónoma de México, Instituto de Investigaciones Históricas.
- Mendieta, Gerónimo de  
1997 *Historia eclesiástica indiana*. J. García Icazbalceta (ed.). Consejo Nacional para la Cultura y las Artes.
- Mikulska, Katarzyna  
2008 *El lenguaje enmascarado. Un acercamiento a las representaciones graficas de deidades nahuas*. Universidad Nacional Autónoma de México, Instituto de Investigaciones Antropológicas / Universidad de Varsovia.  
2015a Las 'metáforas visuales' en el Códice Borbónico y otros manuscritos religiosos: signos de bolas de zacate y de la noche. In K. Szoblik (ed.), *Entre el arte y el ritual. Las manifestaciones artísticas en México pre-colonial y colonial, y sus supervivencias actuales*, pp. 31-67. Instituto Polaco de Investigación de Arte Mundial / Editorial Tako.  
2015b *Tejiendo destinos. Un acercamiento al sistema de comunicación grafica en los códices adivinatorios*. El Colegio Mexiquense / Universidad de Varsovia.
- Molina, Alonso de  
1571 *Vocabulario en lengua castellana y mexicana*. En casa de Antonio de Spinosa.
- Montufar López, Aurora  
2015 Copal, humo aromático de tradición ritual mesoamericana, *Arqueología Mexicana* 135: 64-65.

- Olivier, Guilhem
- 2004 *Tezcatlipoca. Burlas y metamorfosis de un dios azteca*. Fondo de Cultura Económica.
- 2015a *Cacería, sacrificio y poder en Mesoamérica. Tras las huellas de Mixcóatl, "Serpiente de Nube"*. Fondo de Cultura Económica.
- 2015b Occulter les dieux et révéler les rois: les paquets sacrés dans les rituels d'intronisation mexicas. In *Montrer / Occulter. Visibilité et contextes rituels*. (Cahiers d'Anthropologie Sociale 11), pp. 51-69. L'Herne.
- Pastrana Flores, Miguel
- 2008 *Entre los hombres y los dioses. Acercamiento al sacerdocio de calpulli entre los antiguos nahuas*. Universidad Nacional Autónoma de México, Instituto de Investigaciones Históricas.
- Paszatory, Esther
- 1983 *Aztec Art*. H. Abrams.
- Peperstraete, Sylvie
- 2015 La fonction sacerdotale au Mexique préhispanique (II), *Annuaire de l'École Pratique des Hautes Études, Section des Sciences Religieuses* 122: 1-10.
- Popol Vuh
- 1996 *Popol Vuh. The Definitive Edition of the Mayan Book of the Dawn of Life and the Glories of Gods and Kings*. Simon & Schuster.
- ポポル・ヴフ
- 1977[ca.1558] 『ポポル・ヴフ』林家永吉(訳)、中公文庫。
- Procesos de indios idólatras y hechiceros
- 1912 *Procesos de indios idólatras y hechiceros*. Luis González Obregón (ed.). Archivo General de la Nación.
- Ragot, Nathalie
- 2000 *Les au-delà aztèques*. Archaeopress
- 2016 Ritos nocturnos y nacimiento del sol entre los aztecas. In A. Monod Becquelin & J. Galinier (eds.), *Las cosas de la noche. Una mirada diferente*, pp. 74-86. Centro de
- Rios, Pedro de los
- 1979 *Codex Vaticanus 3738 ("Cod. Vat. A", "Cod. Ríos") d. Biblioteca apostolica Vaticana : Farbrepod. des Codex in verkleinertem Format*. Ferdinand Anders (ed.). Akadem. Druck- u. Verlagsanst.
- Romero, Laura
- 2016 Pueblo diurno, pueblo nocturno: las nociones nahuas sobre la noche y la oscuridad. In A. Monod Becquelin & J. Galinier (eds.), *Las cosas de la noche. Una mirada diferente*, pp. 123-128. Centro de Estudios Mexicanos y Centroamericanos.
- Sahagún, Bernardino de
- 1950-1982 *Florentine Codex. General History of the Things of New Spain*. University of Utah Press.
- 1969 *Historia general de las cosas de Nueva España*. Ángel M. Garibay K. (ed.). Porrúa.
- 1997 *Primeros Memoriales*. Thelma D. Sullivan (ed.). University of Oklahoma Press.
- Seler, Eduard
- 1963 *Comentarios al código Borgia*. Fondo de Cultura Económica.
- 1992 *Collected Works in Mesoamerican Linguistics and Archaeology*. Labyrinthos.
- Smith, Michael E.
- 2002 Domestic Ritual at Aztec Provincial Sites in Morelos. In P. Plunket (ed.), *Domestic Ritual in Ancient Mesoamerica*, pp. 93-114. The Cotsen Institute of Archaeology – University of California Los Angeles.
- Vauzelle, Loïc
- 2018 *Tlaloc et Huitzilopochtli : éléments naturels et attributs dans les parures de deux divinités aztèques aux XVe et XVIesiècles*. Ph.D. dissertation, École Pratique des Hautes Études, Paris.
- Victoria Lona, Naoli
- 2004 El copal en las ofrendas del Templo Mayor, *Arqueología Mexicana* 67: 66-71.



# Black Soot and Ritual Piercings: Aztec Priests' Attire and Attributes

Sylvie PEPPERSTRAETE\*

Smearred with soot from head to feet, Aztec priests, with their long-matted hair and their temples coated with the blood of their autosacrifice, struck the imagination of the conquistadores and the first missionaries, who saw in their outfit the proof of a demonic worship. But beyond the clichés conveyed since the 16th century and the first colonial chroniclers, Aztec priests' attire and attributes, documented by iconography, colonial descriptions and, sometimes, archaeological data, can offer insights into these ritual specialists' identity, role, and social status.

In this paper, we propose an analysis of the more common attire and attributes of the Aztec priests, from their material production to the complex symbolisms they conveyed. We will take a detailed look at the priests' clothing, but also at their body paint, their hairstyle, their diverse paper adornments, and the common items with which they are depicted in the iconography: the copal bag and the censer, the tobacco gourd, and the autosacrifice instruments.

Then, based on the observation that the garb of the priestly figures frequently varies from one image to another, we will point out that certain attributes are often represented together and can refer to categories of priests mentioned in the colonial texts (tlenamacaque, ...), thus providing information on the Aztec sacerdotal organization and its hierarchy. Moreover, other variants, expressed in specific ritual contexts such as the "veintenas" festivals, will be taken as an example of the flexibility and the complexity of the Aztec priestly system.

## **Keywords:**

Central Mexico, Aztecs, priesthood, dress, regalia

\* Université Libre de Bruxelles

# 人と水の古代史

— メキシコ、トルカ盆地の考古学 —

杉浦 洋子 \*

三千年を超える歴史を持つトルカ盆地の東部には三湖沼が位置し、それらはレルマ川によって繋がれている。この地域における1977年から現在に至る継続的調査は、湖沼の環境と人が、長い歴史を通して深い関わりを持って来たこと、トルカ盆地の住民のアイデンティティーの基盤となっていることを示している。同時にトルカの社会は隣接するメキシコ盆地から深い影響を受けて来た。特に古典期については、テオティワカンの影響を除外してトルカの歴史過程を理解することは不可能である。この一大国家が担う政治・経済マクロ組織の一部として、大国の庇護を受け、共生関係を築くことによって、トルカ地域の発展は可能になった。また、テオティワカンの崩壊後も、トルカ社会は栄え、続古典期にはコトラテルコ式土器の出現し新たな文化が開花した。

こうした背景を考慮に入れ、本稿はトルカ盆地の歴史的特殊性とも言える人と水の関係にアプローチする。事例研究として、三湖沼の最南端に位置するチグナワバン湖沼内に位置するサンタ・クルス・アティサパン遺跡を対象とする。そこで古典期後期より続古典期終末まで、数々の居住地を築き上げ浅湖という特殊な生態環境に適した生業形態を営んでいたボルドの住民（島民）の日常生活に焦点を当てる。

ボルドの住民は、古典期に地域センターに発展を遂げたサンタ・クルス・アティサパン遺跡の中核地へ、湖中の水産資源の供給をしていた。ボルドの人々は、経済的、社会的影響のみならず、文化、精神面でもテオティワカンの強い影響を受けていたが、その後、独自の過程を経て、古典期末にはトルカの一員としてのアイデンティティーを構築した。

本稿は、500年近い年月を沼沢地という環境で、独自の水の社会、そして文化を築き上げた人々による日々の生活を、ジェニニ的視点から解釈する。この沼沢地に築かれた社会は、あらゆる面で周囲の環境の変化に適応すべく、様々な対処策を考案・実行したが、気候の変化に対応することが出来ず、続古典期末には、湖沼内の社会は放棄された。

## 目次

はじめに

- |   |   |
|---|---|
| <p>I トルカ盆地の表面採集調査とセトルメント・パターンの変遷</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 先行研究の背景</li> <li>2. トルカ盆地の地域調査とセトルメント・パターンの時代的変遷</li> <li>3. 形成期における村落社会の傾向</li> <li>4. 古典期におけるテオティワカンとトルカ盆地の関係</li> <li>5. テオティワカン崩壊後のトルカ盆地—続古典期</li> <li>6. マトラツィンカ族の台頭とメシカの征服—</li> </ol> | <p>後古典期のトルカ盆地</p> <p>II チグナワバン湖での人と水の生活形態—ケーススタディとしてのサンタ・クルス・アティサパン</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ボルドの分布図</li> <li>2. ボルドの住民</li> <li>3. 建築様式と公共スペース</li> <li>4. 湖沼内の日常生活</li> <li>5. 食生活に見える日常生活</li> <li>6. 精神生活（死者の祭り、生業用具の儀礼的価値）</li> <li>7. 地域内外との物々交換、情報交換関係</li> </ol> <p>おわりに</p> |
|---|---|

## KeyWords

メキシコ中央高原  
トルカ盆地  
水の社会  
テオティワカン  
古典期  
続古典期

# はじめに

日本で出版された古代メソアメリカ文明に関する書物は、テオティワカンやテノチティトランをはじめ重要な遺跡が位置するメキシコ中央高原に記述が集中している。確かに、マヤやオルメカ文化そしてオアハカ地方に関する書籍も出版されてはいるが、メキシコ中央高原の研究書に比べると出版数は下回っている。メキシコ中央高原と一口に言っても地理的に広く、メキシコ盆地を中心に東はプエブラ州、トラスカラ州、南はモレロス州、北はイダルゴ州、そして西はメキシコ州を含む。

メソアメリカ地域最初の大都市国家として数世紀に渡ってメキシコ中央高原の大部分を管轄下に入れ、強い影響を及ぼしたテオティワカン、そしてスペインに征服されるまで巨大な力を振るったメシカ族による帝国(アステカ王国、三都市同盟 Triple Alianza)の首都テノチティトランがメキシコ盆地に栄えた大都市であったことを知らない人はいないであろう。現在メキシコの首都が置かれているこの盆地では、テオティワカンが大都市としてあらゆる面で強い影響力を持つ前か

ら、社会組織の複雑化過程が明確に認められる。トラパコヤなどの地方センター、あるいは都市化への途上にあったクイクルコ、初期のテオティワカンを好例として、形成期のメキシコ盆地は急速な社会発展の途上にあつたのである。このような状況の中で、長年、考古学調査がメキシコ盆地に集中してきたのも当然とすべきであろう。

本稿で扱うトルカ盆地はメキシコ盆地の西に隣接し、国内最大と言われるレルマ=チャパラ=サンティアゴ(Lerma-Chapala-Santiago)盆地の南端に位置する(図1)。メキシコ盆地の周辺地域と比較して、20世紀に入ってもこの地域での考古学調査は限られている。カリストラワカ(García Payón 1936, 1979; García Payón *et al.* 1974; Smith 2011, 2015, 2017) およびテオテナンゴ(Piña Chán 1975)という主に古典期後半から後古典期に繁栄した2大遺跡を除いてほとんど調査は行われてこなかった。筆者は、1974年にテオテナンゴの250mほど北に位置する古典期後期のオホ・デ・アグア遺跡より出土した土器の分析を行い、それらがメソアメリカ最大の都市国家テオティワカンの影響を強く受けていたことに驚嘆した。テオティワカンのトルカ地域への影響を解明せずには同地域の歴史を理解できないことを痛感し、筆者は

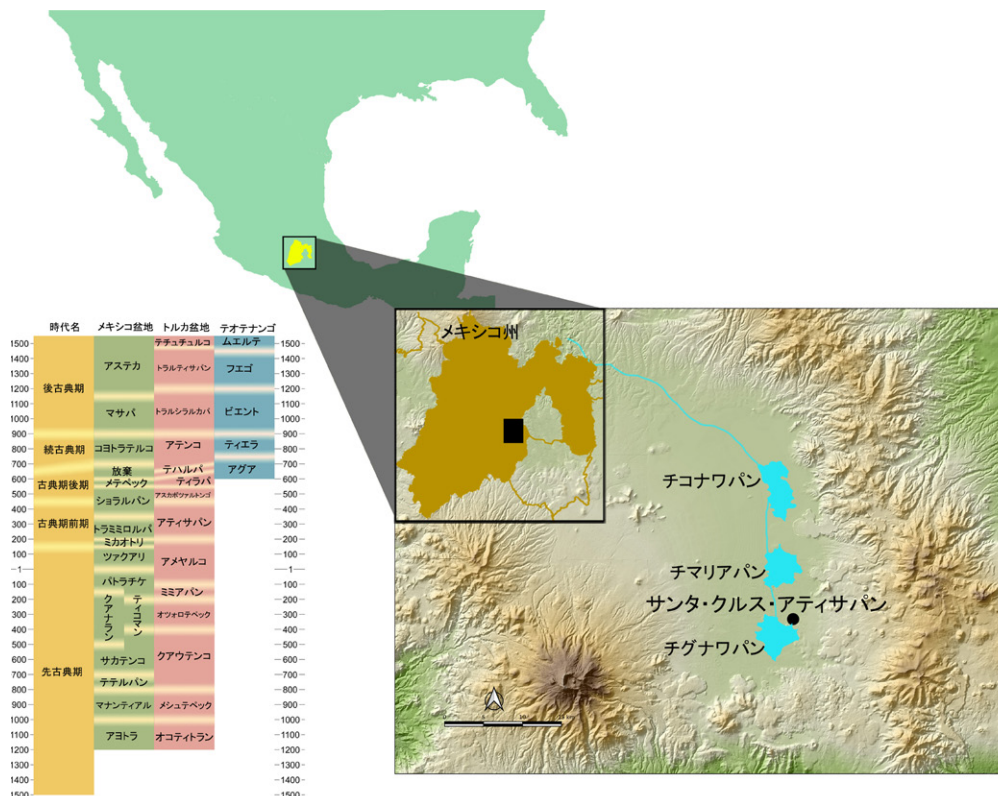


図1 メキシコ中央高原の古代史編年表(左)、トルカ盆地地図(右)

\* エル・コレヒオ・メヒケンセ

1977年にトルカ盆地考古学プロジェクトを始動した(Sugiura 1975, 1981)。

メキシコ中央高原の古典期の歴史は、テオティワカンを中心として考察されてきた。この大都市は政治・経済を基盤としたマクロシステムを確立し、古代メソアメリカ文明圏の大半に深い影響を与えた。その地政学的関係は、ウォーラーSTEIN (Wallerstein 1979) が提唱した世界システムモデルに類似すると言われてきた。最近、チェイス=ダンとホール (Chase-Dunn & Hall 1997, 2000) が、ウォーラーSTEIN のモデルを修正した資本主義以前の世界システムモデルを提案し、多くの考古学者の間に共感を生んでいる。現在でも多くの考古学者が、テオティワカン大都市国家の歴史をこうした視点から理解できると主張している。しかし、メソアメリカ最大の国家の形成過程は非常に複雑であるため、1つのモデルで理解するのは不可能であることも、多くの研究者の間の共通認識となっている。

世界システムモデルに基づいた研究は、テオティワカンの国家形成の理解において有効ではあるが、この大都市に研究が集中しているために、1つの弊害を生んでいる。それは、チェイス=ダンとホールが提唱する第一領域 (生活必需品共有圏) が中央を支える大役を果たしているにもかかわらず、この第一領域に相当するテオティワカンの後背地 (hinterland) の役割や社会の変化が、全くとっていいほどに解明されていない点である。社会の変化に単純明解なプロセスは存在しない。包括的視点からのアプローチが必要である。本論文で扱うトルカ盆地もその例外ではない。この地域がテオティワカンの発展と深い繋がりがあった事は、古典期の歴史を分析すれば明らかである。緊密でありまた特殊な関係を持っていたこの隣接する2地域の歴史を理解するには、世界システムのような構造的モデルより、今から60年ほど前にウイリアム・サンダース (Sanders 1956) によって提案された共生関係 (symbiotic relationship) という観点が必要で、より有効であると考えられる。確かに共生関係論に対する反論や疑問も認められる。しかし、テオティワカンとトルカ盆地の歴史の流れを両者の共生関係として捉え、オーガニックな非構造的進展や変遷をしつつもその関係は保たれたと考察することは意義あることだと考える。

トルカ盆地の歴史を理解するためには、まずセトルメント・パターンの変化的変化を分析することが必要である。70年代より現在に至るまで40数年に渡って継続的に、異なった角度からやってきたトルカ盆地の研究データは、この地域の人々が盆地の東に位置するアルト・レルマ湖と呼ばれる三湖沼と長い歴史を通じて深い関わりを保ってきたことを

示している。三湖沼は南から北へ向かって、チグナワパン、チマリアパン、チコナワパンと呼ばれ、レルマ川がこれらを繋いでいる。また、その過程でテオティワカンの影響が社会の全ての側面に現れることも考古学的物質文化が語っている。本稿ではケーススタディとして、チグナワパン湖周辺に栄えた社会に焦点を当てる。特にサンタ・クルス・アティサパン遺跡の出土品の分析結果を基に、この湖沼に居住していた人々の生活について考察する。古典期後期に起こった古気候の変化による水位の低下 (Caballero *et al.* 2002; Lozano *et al.* 2009; Lozano *et al.* 2005) のため、古典期後期 (後400/450~550/600年) から続古典期 (後550/600~900/1000年) にかけてチグナワパン湖の大部分は湿地・沼沢化した。サンタ・クルス・アティサパン遺跡はこの時期に栄えた。人々はおよそ100基以上の人工の居住地を構築し、浅い湖と盆地を囲む火山帯の自然景観と深い関わりを持ち、日常生活を送っていた。この湿地に居住した人々の日々がいかに複雑であったかを、ジアニニ (Giannini 2004) が提唱するルーティン (routine) とトランスグレション (transgression) という観点から考察する (Vergara 2011)。ジアニニは日常の実践生活 (vida cotidiana) を解釈的 (hermeneutics) 視点から説明する事を試みたチリの哲学者である。簡潔に言うともルーティンはその名が表すように、日々繰り返される動きである。この動きは行動である場合もあり、出来事である場合もある。常にある一定の「地点」から始まり、また同「地点」へ戻る動きである。同時に過去はルーティン存続の為に必須条件である。ある意味ではブルデューの「ハビトゥス (habitus)」と共通している面もある (Bourdieu 1977)。一方、ルーティンの行動は規則化されている事が常とされている。ルーティンを破る行動は、意識的であれ無意識的であれトランスグレションと同定される。トランスグレション的行動、出来事は常時認識される役割 (役目) から外される。日常見られる枠外の行動、つまりトランスグレションは、偶発的単発の枠外行動で終わってしまう事があるが、繰り返されるケースも多く、結果としてまたルーティンに変貌する事がある。

第I節では、トルカ盆地の歴史的特殊性と、筆者の40数年に及ぶ研究の過程について述べる。この長い研究過程を振り返るのは、本稿で考察する人と水の日常生活を論じる上で必要不可欠だからである。そして、第II節では、トルカ盆地の歴史的身份の基盤ともなった人と湖沼環境の関わり合い、特に日常生活について、サンタ・クルス・アティサパン遺跡をケーススタディとしてジアニニ的な視点からアプローチする。

# I トルカ盆地の表面 採集調査とセトル メント・パターン の変遷

メキシコ中央高原の他の地域と異なり、メキシコ国内で標高の一番高いトルカ盆地では質の悪い黒曜石以外特別な鉱物は産出しない。しかし、この地方の肥沃な堆積平野では豊富な農作物が産み出され、森林から木材が入手でき、季節に応じて様々な動植物が採集、狩猟される。特にトルケニヤと呼ばれる良質のトウモロコシの生産性は高かった。15世紀後半この地方がメシカ帝国（アステカ王国）に征服されると、トルカー帯は穀倉地帯として知られるようになり、テノチティランのトラテロルコ市場に送られる物資の3割はこの地方からの貢税であったと言われている。また、周囲を火山で囲まれた閉鎖流域（cuenca cerrada）であるメキシコ盆地とは異なり、この地域はレルマ川の水源であり、開放流域（cuenca abierta）を形成している。透明な水が流れる美しい川として昔から住民の間で知られるレルマ川は、トルカ盆地を南北に緩やかに縦断し、隣接するイストラワカ盆地へと流れている。レルマ川は古代から数少ない水路として大量の物資や人の移動に重要な役割を果たしてきた。車輪や大型の家畜が存在しなかった古代メキシコの社会において、その重要性は格別であったことは言うまでもない。また、レルマ川はメソアメリカ西部からの物資の流通にも大きな役割を果たした。

当地はメキシコにおける12番目の流域（núm. 12, cuenca hidrológica）に対応し、またアナワク湖・火山地帯（región de lagos y volcanes de Anahuac）の一部としても知られている。盆地は西南に聳えるネバド・デ・トルカ火山（Arce *et al.* 2003; García-Palomo *et al.* 2002; Garcia-Palomo *et al.* 2000; Macías *et al.* 1997）をはじめ、年代の異なる火山帯に周辺を囲まれている。東部には通称アルト・レルマ湖とよばれる三湖沼が位置する。ネバド・デ・トルカ火山と共にトルカ盆地を象徴する湖である。常に水位が低いこのアルト・レルマ湖は、長期的な気候の変化ばかりか、雨期と乾期による降雨量の変化にも敏感に反応し、時には湖となり、時には沼湿地になる。人々は常にこの湖と密接な関係を保って生活し

てきた。前述した様に、数千年に及ぶトルカ盆地の歴史を解明するにはこうした人と水の繋がりを理解せずには不可能である。この依存関係は、人の生業、精神、思考システムを特徴づけ、政治、社会環境、景観の変化に対応しつつトルカ地域に住んできた人々の間で、世代から世代へと受け継がれていった。そして、独特の水の世界を創り上げると同時に、社会的・文化的なアイデンティティーの基盤ともなったのである。

人と水の関係は複雑で高度な社会環境・組織を必要とした。この依存関係こそトルカの歴史過程を考察する上で看過できない要素である。それを理解するには、多角的な観点から社会コンテキストを考察すべきであり、以下では、40数年に渡り、異なる観点から筆者が行ってきた研究調査の成果を提示する。

## 1. 先行研究の背景

メソアメリカ考古学では1960年代から70年代にかけてリジョナル・サーベイとして知られる地域調査が盛んに行なわれた。メキシコ中央高原、特にメキシコ盆地ではサンダースを主軸にこうしたプロジェクトが複数行われていた。一方で、70年に入りテオテナンゴの調査が開始されるまで、トルカ盆地では地域の編年さえ明確に設定されておらず、メキシコ中央高原内の考古学研究として振り返られることもなかった。こうした状況の下、筆者は70年代後半から4年かけてリジョナル・サーベイを実施した（Sugiura 1977）。まずトルカの歴史の全体像を把握するため、盆地全域約1400km<sup>2</sup>を踏査し表面採集を行った。次に、地域調査で得られた考古学資料を基に、この地域の編年を確立していった。また、セトルメント・パターンの通時的变化、そして社会の複雑化過程を把握することを目的とした。当時の北米考古学会では新進化主義論の援用が最盛期であり、セトルメント・パターンからマクロな視点で地域の歴史を考察する研究が多かった。同時に、実証主義的方法論を提唱したニューアーケオロジーは多くの賛同者を得ていたため、この立場から、考古学を進めて行くとする学者も多かった。トルカ盆地の地域調査もこうした隣接国の強い影響を受けたのは当然である。また、考古学資料の形成過程に関する論議も盛んに行われていた（Hirth 1978; Schiffer 1972）。もちろん、住居址を分析するに当たり、表面採集で得られる考古学資料に内在する種々の問題点も充分考慮した。さらには、メキシコ盆地やトゥーラ・イダルゴ地域などの隣接地域で既に行われていた地域調査の結果との比較を容易にする目的で、筆者は表面採集調査において記録する項目リスト（cédula）を作成した。

## 2. トルカ盆地の地域調査とセトルメント・パターンの時代的変遷

トルカの地域調査ではっきりしたことは、第1に、この地方の歴史は隣接するメキシコ盆地にほぼ相応する古さを持っていることである。第2に、トルカ盆地の東境とも言えるラス・クルセス火山帯を挟んでメキシコ盆地と常に緊密な関係を保ってきたことである。この相互の関係は他の周辺地域との繋がりとはいくらも比較にならないほど強く、トルカの文化の形成と発展に深い影響を及ぼした。従って、メキシコ盆地の歴史を考慮せずには、トルカの社会変化を解明することは出来ないと言える。しかし、セトルメント・パターンのデータは、この地域の社会の複雑化過程の速度が、メキシコ盆地と比較して非常に遅かったことも明確に表している。そして、第3に、盆地の東部に位置する三湖沼とこれらを繋ぐレルマ川、そして盆地を囲む火山帯と複雑かつ深い関係を保ちつつ、トルカ地域の住民が3000年に及ぶ年月を過ごしてきたことである。

マンモス、マストドン、その他の大型哺乳動物(megafauna)がトルカ盆地の各地で発見されている事実から推測すると、非定住の狩猟採集民がこの地域に既に居住していた可能性はある。最古の住居址のデータは表面採集の資料によると紀元前1200年ほどであり、形成期前期(前1500~1200年)に遡る。初期の移住者は土器を使用し、定住生活を行っていた。血縁関係を基盤にしたと推測される家族単位の住居で構成される小規模な村落が点在していたと思われる。形成期中期(前1200~500年)に入ると徐々に集落数も増え、同時に規模も拡大していった。特に標高2700mの中腹傾斜地に住居址が比較的多いことが注目される。サンダースの意見に従うと、当時のメソアメリカの農耕技術と考えた場合、トルカの様な高原地域では水はけの良い傾斜地に住居を構えた方が適している。しかし、地域全体を見るとメキシコ盆地の様な集落の複雑化過程への進展は見られない。歴史の流れはゆっくりであった。確かに、社会組織の複雑化を象徴する考古学資料は検出されていないが、水を敬う習慣、水に関わるコスモロジーならびに儀礼を象徴する精神文化が、形成期のトルカ盆地の住民の間で既に確立されていたことに留意すべきである。

## 3. 形成期における村落社会の傾向

形成期後期(前500/400年~後100年)は、メキシコ盆地でテオティワカンが頭角を現し大都市へと変容していく時

代である。メキシコ中央高原内での人の動きは激しく、モレロス州など周辺地域からテオティワカン方面への移動現象が顕著に現れる。トルカ盆地でも、それまでの傾向と逆行する様に、住居址の数は激減する。この現象の主な要因として、テオティワカンへの人口の流出が考えられる。オトミ系民族がメキシコ中央高原において最古の集団であったと言われ、当然テオティワカンの国家建設において中心的民族であったと考えられる。一方、トルカはメシカ帝国に征服されるまで、オトミ系の言語民族集団の地域であったという歴史的事実を考慮すると、テオティワカンへの人口移動現象は当然とも考えられる。

前述した様に土器様式および器形における類似性は、既に形成期からこの盆地の社会とメキシコ盆地との間に深い繋がりがあったことを示唆している。広く捉えれば、トルカ盆地の土器文化はメキシコ中央高原の土器圏に属する。白、赤、黒の彩文土器、スリップに刻線、あるいは刻文で文様が描かれている土器が目立つ。器形もメキシコ盆地および周辺地域における形成期の特徴を共有している。土偶は、他の地域と同様、日常生活と関係の深い表現を持つものが多いが、集団の発展を目的とし、大地のさらなる肥沃や穀物の豊穡を祈願した土偶も出土している。土偶は形成期社会の代表的な遺物として重要な資料である。

## 4. 古典期におけるテオティワカンとトルカ盆地の関係

古典期(後100~600/650年)はテオティワカンがメソアメリカの一大国家として確固たる地位を確立した時期であり、また本稿の主要課題とも関係があるので、詳細に述べる。トルカの住居址の数は再び増加の傾向を見せる。大都市テオティワカンからトルカ盆地へと逆移住(return-migration)する人々がその一因であったと推測される。時代が進むに伴い、この逆移住の傾向は高まる(図2)。トルカの様な重要穀

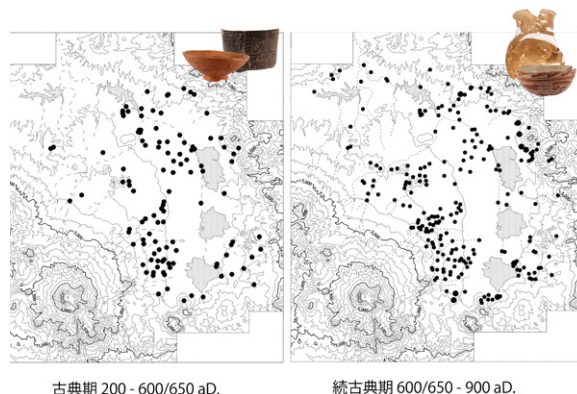


図2 トルカ盆地のセトルメント・パターン

倉地帯の確保は大都市にとって必要不可欠であり、トルカの人口の動態は、テオティワカンの統治者層による直接関与を示しているとも解釈できる。

一方、セトルメント・パターンにも変化がみられる。トルカ地域の住居址は古典期前期まで集落のレベルを超えなかった。しかし古典期中期(後200~400/450年)から古典期後期(後400/450~500/550年)にかけて、地方センター(regional center)とも定義づけられる遺跡が盆地の要所に現れ、脱平等社会へと進展していったことが考古学資料から実証されている。地方センターの規模は比較的小さいが、遺跡内にはピラミッド神殿の基壇、儀礼や祭祀行事が行われた広場など、一般の住居とは異なる公共的特徴を持つ建造物や空間が確認されている。古典期後期に入ると、既に設立されていたセンターは拡張され、また新たな地方センターが出現し、トルカ盆地のセトルメント・パターンは複雑化の一途を辿る。後述するサンタ・クルス・アティサパンもこの時期にトルカ盆地の東南に位置するセンターとして政治・経済力を拡張していった。このセンターの行政、経済、宗教の中核地はラ・カンパナ・テポソコと現在呼ばれ、そこで儀礼ならびに祭祀が行われ、チグナワパン湖の水産資源のみならず、ゲレロ州やモロス州原産物資の流通ルートがコントロールされ、物資はそこから再分配されていたと推測される。またここを中継地として、レルマ川の水路を利用してウカレオ／シナベクアロ原産の黒曜石を始め、ミチョアカン各地から交換物資がトルカ盆地内に供給されたようである。後期に入りテオティワカンの支配が一層強まり、オコヨアカク市のドランテス遺跡(Díaz 1998)などの重要な地方センターが、この大都市との最短距離に設けられ、その後テオティワカンの崩壊と共に姿を消した。また、肥沃な平野部の中央西に位置するサンタ・クルス・アスカポツァルトンゴ／エクス・アシエンダ・デ・ラ・モラ遺跡では、同時代の他の遺跡では確認されていない球技場で利用されたゴールが検出された。その他、テオティワカンでの出土品と酷似した遺物が出土した遺跡もある。遺跡の規模、立地条件、出土品の特徴などから、テオティワカンの直轄地あるいは衛星的役割を果たすセンターであったことが示唆されている。

後述する様に古典期、特に古典期後期にトルカの三湖沼周辺地帯および湖沼内、そしてレルマ川に沿って居住跡が増加した。こうした現象の最大の要因は気候の変化であった。結果、人と水の関係は以前に比べてより緊密になった。また、生計の糧となる豊かな水の資源、湖岸に湧き出る飲み水は、トルカ盆地の住民の日常生活にとって掛け替えのない役割を果たしていたようである。

またトルカ盆地と地方との交換網が、テオティワカンという一大国家が担う政治・経済マクロ組織の一部として急激に発展し、社会の複雑化を促進した。確かにテオティワカンが直接統治していた流通網の範囲とは比較にならないが、トルカもこの交換網システムを利用して、時にはテオティワカンを通し間接的に、時には直接的に、種々の物資を獲得した。肥沃なトルカ盆地は、テオティワカンの政治的・経済的マクロシステムの後背地として豊富な農産物、森林や水の資源を貢納し、テオティワカンという大都市を支える役割を担い、その重要度は時代を追ってますます高まった。一方、政治・経済面ばかりか、社会ならびに文化面でもテオティワカンの強い影響を受け、古典期中期になると社会のあらゆる側面でトルカ盆地はテオティワカン一色に染まることになる。その顕著な影響は、特に土器、石器、建築様式、埋葬などの物質文化に認められ、その物質性からテオティワカンの文化基準、伝統的スタイル、技術が推測される。またこれら物質文化を分析すると、いかにメソアメリカ最大のこの国家が周辺地域の精神文化に影響を与えていたかが明白瞭然である。テオティワカンの庇護を受け、共生関係を築くことによって、トルカ地域の進展は可能になったと言っても過言ではない。

古典期後期、テオティワカンに衰退の兆しが見え始める。その衰退過程は複雑であり、多くの考古学者が崩壊の原因について論じているが、都市の終末は検証できても、国家としてのテオティワカンの終局が解明されるのはまだ先のことであろう(Diehl & Berlo 1989; Manzanilla 2003)。テオティワカン・システムと呼ばれたマクロ組織は、数世紀に渡って、メソアメリカの大半の地域を何らかの形で支配する手段としての機能を果たしてきた。この政治・経済大組織に歪みが現れ、国家が弱体化した要因として、新たに台頭してきた地方国家がシステムの安定的な機能を妨げたこと、人口の膨張や大都市内に生じた種々の矛盾により問題が深刻化したこと、などがある。いずれにしても、テオティワカンは長い年月の末、徐々にその終末へと向かっていったのである。

大都市と共生することで繁栄してきたトルカ社会は、テオティワカン・システムが崩壊の兆しを見せ始めると、それまでの関係から脱却する傾向を強め、目を盆地内に向け、トルカ地域一帯の発展に注目する様になった。この過程を良く表しているのがアイデンティティーの高揚である(Jones 1996)。古典期後期のトルカ盆地の土器はこのプロセスをはっきりと表している(Sugiura *et al.* 2015)。特に器形、表面調整、焼成後の色合い、装飾の技術といった面で、テオティワカンの土器伝統を受け継ぎながらも、新たなアイデアが装飾のモチーフに加わり、さらには新旧の要素が併用され、一目でトルカ地

域の土器であると同定できる遺物が現れる。また、メシカ帝国（アステカ王国）により「神々の都」と呼ばれたテオティワカンの権力を象徴する薄手オレンジ色土器（Thin Orange）を模倣した、亜種型薄手オレンジ色土器（Pseudo Thin Orange）というトルカ独特の土器が多く出土している（図3）。この土器は、薄手オレンジ色土器と器形、表面の色調といった特徴を共有する。しかし、器形は浅鉢にはほぼ限られ、焼成後の表面の仕上げの粗さも独特である上に、中性子放射化分析（NAA）ならびに蛍光X線分析（XRF）によると盆地内で得られる粘土を使用しこの地域で作られていたことが確認されている（Sugiura & Jaimes 2019）。この様な土器群の微妙な変化は、テオティワカン崩壊期に急速な発展を遂げたアイデンティティー確立の重要なインストルメントであったが、古典期が終わると全て姿を消してしまう（Sugiura *et al.* 2015; Sugiura *et al.* 2013）。



図3 亜種型薄手オレンジ色土器の浅鉢

トルカ盆地で顕著に見られた前述の現象はこの地域に限られてはいなかった。大都市の衰退に比例するかのごとく、統治下にあった他の周辺地域も活発に動き始める。トルカ盆地では、住居址数（112 遺跡）が増加し、地方センターの規模も大きくなった。一方、物質文化面では、東はプエブラ州やオアハカ州のミステカ・バハ、南はモレロス州やゲレロ州、そして西はミチョアカン地域から、主に土器、メスカラ州およびプエブラ州原産の石彫、黒曜石などの交換物資が急激にトルカ盆地に搬入された。これらの物資は政治・経済面で当時の地方センターのエリート層だけではなく、社会一般の人々にとっても必要なモノである。また、祭典などの儀礼で用いられ、イデオロギーならびに宗教の象徴としての価値も持っていた。反面、テオティワカン国家の偉大さの表象といわれてきた薄手オレンジ色土器の出土量は、古典期を通じて非常に少ない。しかも、出土した土器は日常生活で使われる浅鉢がほとんどであり、テオティワカンで見られるような奢侈品ではな

い。古典期後期から末期（後 550~600 年）にかけての 200 年にも及ばない短期間に、周辺地域から入ってきた物資の量や種類は極めて多く、恐らくトルカの歴史上で前にも後にもこのような例はない。古典期を通して諸地域を結ぶ交流ネットワークは非常に複雑であった。メソアメリカのほとんどの地域を結んだマクロシステムを最上位に、中間距離地帯および近隣地域間との交換網など、スケール、機能の異なったネットワークが幾重にも折り重なって作用していたことがトルカの事例から解る。

確かに、古典期末期は激動の時代と言っても過言ではない。テオティワカンの成立がメソアメリカ全地域に影響を及ぼしたのと同様に、その終末もあらゆる面で当時の社会を動揺させた。続古典期（後 600~900/1000 年）に入っても、国家としては崩壊したテオティワカンは、アーバン・センターとしてメキシコ盆地で最大の都市人口を誇り続けた。続古典期の時代は短く、過渡期として、古典期的な要素と後の後古典期を象徴する要素が混在した不安定な時代とも言える。セトルメント・パターンから考察すると、メトロポリスおよびメキシコ盆地内のテオティワカン直轄地においては、古典期から続古典期への連続性は見られず、短期間にはっきりした変化が現れる。続古典期の主要遺跡は、それ以前の住居址とは異なり、不安定な政治情勢を反映して高台、丘の頂上など防御に適した場所に位置する 경우가圧倒的に多い。これに反して、後背地としての役割を果たしてきたトルカ盆地は、住居址のパターンに大した異変は起こっていない。古典期後期から晩期にかけて増加の一途を辿った遺跡の 80% は続古典期にも引き続き残存している。この地域ではテオテナゴの様な防御施設を重視した遺跡は全て後期に入って築かれており、続古典期の初期に建設が始まったわけではない。要するに、トルカにおける古典期から続古典期への変遷は比較的穏やかなプロセスであったようである。

## 5. テオティワカン崩壊後のトルカ盆地—続古典期

こうした状況は続古典期に入ると一変する。表面採集のデータによると、住居址数は古典期の 2 倍以上の 230 に急増している（図 2）。トルカ全域のセトルメント・パターンから見ると、確かにルーラル（rural）的傾向が強く残っているが、この時期に入ると、古典期晩期に既に機能していた行政、催事、宗教儀礼を行う地方センターは発展し勢力を拡大し、さらに新たに設立されたセンターも加わり、スケールの異なる計 13 のセンターが確認されている（Sugiura 2005）。無論、



テオティワカンの様な超地域的メトロポリスは存在しなかったが、続古典期の成熟期には、都市のカテゴリーに相当する大規模遺跡テオテナンゴとカリストラワカが現れた。これらのセンターを通してトルカ盆地には独自の政治・経済構成が確立された。この時期を契機にトルカはメキシコ中央高原において、メソアメリカ西部および西南地方からの物資流通の中継地域として、また穀倉地帯として重要な位置を確保した。一方、古典期後期から顕著になった気候の変動、降雨量の減少に伴い、沼沢地の開拓はますます盛んに行われ、低湿地に築かれた住居の数も増え、水の文化の最盛期を迎えた。その一例として、形成期からこの地方で行われていた湧き水 (ojo de agua) に関連する宗教儀礼が、続古典期により盛んに行われていたことが、サン・アントニオ・ラ・イスラ市のオホ・デアグア遺跡の資料で確認できる。

続古典期の物質文化、特に土器は、前時代の伝統を継承する一方、異なった新たな特徴も表している。それは、コヨラテルコ式土器複合 (Coyotlatelco complex) と呼ばれ、メキシコ中央高原、特にテオティワカンと関係の深かった地帯に短期間に普及した。この土器群は各地域内にあるいくつかの土器製作村落で焼かれたもので、1ヶ所で集中的に作られた土器ではないことが中性子放射化分析 (NAA) や粒子線励起 X 線分析 (PIXE) (Crider *et al.* 2007; Nichols *et al.* 2002) による胎土の分析から判明している。しかし、その起源に関しては諸説紛々 (Piña Chán 1967; Rattray 1966; Solar 2006; Sugiura 2006) である。サンダースの率いるメキシコ地域調査隊によって作成された住居址の分布図 (Sanders *et al.* 1979) は、メキシコ中央西部に位置するグアダルレーバ山岳地帯周辺が古典期後期と晩期に急激な発展を遂げたことを示している。この地域はその後、続古典期に入っても繁栄し続け、コヨラテルコ式土器が多量に生産された (Rattray 1966; Tozzer 1921)。また、ラス・クルセス山岳地帯を挟んでトルカ盆地と隣接しており、距離的にも近く、言語民族としても深い関係がある。一方、続古典期に見られるトルカの遺跡数の急激な増加は、メキシコ盆地、特に衰退・崩壊をした「神々の都」テオティワカンを捨て去り、以前から緊密な関係を保ってきた肥沃なトルカへ逆移住した集団の存在を想定しなければ説明できない。かつてないこの住居址のパターンと並行して、盆地全域からコヨラテルコ式土器が出土していることは特筆すべきである。メキシコ中央高原、特にメキシコ盆地周辺の地域と比較して、コヨラテルコ式土器の出土量の多いトルカ盆地が、この土器の中心的生産・発展地域であると言っても過言ではないだろう。また、コヨラテルコ式土器複合体の起源に関しては、グアダルレーバ

山岳地帯が大きな役割を果たしたと筆者は考える (Sugiura 2013)。

コヨラテルコ式土器は、過渡期の特徴を最も良く表している土器複合体と言える。続古典期の不安定な情勢を象徴するかの様に、古典期からの伝統と新たな要素が入り混じっている。一見して、テオティワカン出土の土器とは異なるが、器形、製作および表面調整の技術において大都市の伝統を受け継いでいることは否定できない。特に初期には依然としてテオティワカンを象徴する花瓶壺 (florero) や深鉢の刻線文のモチーフが見られることは忘れてはならない。相違点として言えることは、コヨラテルコ式土器の器形の種類は多くなく、長頸壺や無頸壺を除いた大半は浅鉢であるということである。深鉢も少量ではあるが作られている (図 4)。これらの器形はテオティワカンの伝統を継承している面が多く、形成期から古典期にかけて、あるいは続古典期から後古典期にかけて見られるはっきりした変化とは異なる。一方、柄付き香炉 (sahumador) など、以前使われていなかった器形もある。焼成後の土器の表面の色合いも異なり、ベージュ系、あるいは薄茶色の器面下地が特徴とされる。しかし、何と言っても最大の違いは装飾モチーフにある。コヨラテルコ式土器複合は一目で分かる一連のモチーフで装飾が施されている。多種多様であるテオティワカンの伝統的土器と比較して、土器表面の装飾技法、モチーフは非常に限られている。初期に見られる刻線文様、および白地赤彩土器を除けば、装飾は赤色で描かれた曲線、直線、幾何学文様その他の複雑なモチーフにほとんど限られている。しかし、こうした文様を分析すると、「四葉文様 (flor de cuatro pétalos)」や「爬虫類の目 (ojo de reptil)」といったテオティワカンの土器伝統に採用されていたモチーフが継承されていることが確認される。また、装飾はほとんど鉢類のみに見られ、浅鉢は内側、深鉢は外側に施されている (Pérez 2011, 2017; Pérez *et al.* en proceso; Stoner *et al.* 2014) 傾向が顕著であるばかりか、地域性も強く表れている (図 5)。トルカのコヨラテルコ式土器は装飾モチーフのみならず、中性子放射化分析 (NAA) による胎土分析のデータが示すように、トルカ地域内にあるいくつかの集落で焼かれたものがほとんどである。盆地外から交換システムを通じて入ってきた土器はごく少数に過ぎない (Stoner 2015; Stoner & Glascock 2013, 2014)。同じ傾向がメキシコ盆地でも認められる。

前述した様に、メキシコの中央高原のみならず、メソアメリカ西部および現在のメキシコ州の南部との交換ルートの中継地区であるトルカ盆地は、土器、黒曜石などの物資、あるいは情報が頻繁に交錯する地理上有利な位置にある。こうし



図4 コヨトラテルコ式土器複合体一式



図6 メキシコ州の南部より続古典期に搬入されたエンゴベ・ナランハ・グルエソ式土器(厚手オレンジ色土器)



図5 コヨトラテルコ式土器複合体の代表的装飾土器

た条件を利用して、古典期後期・晩期には近隣地帯と盛んに物資の流通、供給、配布が行われていた。しかし、続古典期に入り、テオティワカンの統治力が衰退すると、トルカ盆地は大国家の支配から脱却し目覚ましい発展を遂げる。一方、地域間の交流ルートの範囲は狭まった。西北限はミチョアカンであり、ウカレオ／シナベクアロ原産の黒曜石が、サン・マテオ・アテンコやサンタ・クルス・アティサパンを経由して、テオティワカン衰退後、重要な都市として発展したモレロス州のショチカルコへ供給された(Hirth *et al.* 2006)。南限はメキシコ州南部に位置するトナティコと考えられ、トナティコ／イスタパン・デ・ラ・サルが生産地と推測されるエンゴベ・ナランハ・グルエソ式土器(Engobe Naranja Grueso; 厚手オレンジ色土器)(図6)という鮮やかなオレンジ色の分厚いスリップで表面が調整された土器が大量に流通した。この土器の分布の南限はマリナルコを超えショチカルコに至る。この様に、長距離交換網を通して運搬された物資の種類が減る一方、搬入された黒曜石と土器の出土量は前時代と比較して相当増加したことが確認されている。こうした状況は、テオティワカンという一大国家によって樹立され、管轄されてきた複雑な機能

を持つマクロ組織が崩れた後、トルカ社会が存続、繁栄するために、主に近隣の地域との間に、前時代とは異なる小規模の交流システムを確立した結果とも考えられる。

過渡期である続古典期は上述の様に社会のあらゆる面で混沌とした時期であった。セトルメント・パターンの再編成、新たな政治勢力の出現とそれに伴う経済の中心軸の移転、コヨトラテルコと呼ばれる新しい土器の普及、といった新たな要素が注目に値する。同時に、偉大であったテオティワカンは既に消滅していたが、その文化が直ちに消え去ることはなく、その後も何らかの形で受け継がれた。特に一考を要するのは、テオティワカンの世界観を象徴する一連のモチーフが続古典期を通して変化することなく用いられたことである。トラロックやウエウエテオトルといった神々と関係の深い金星、巻き貝、二枚貝、ヒトデ、チャルチウイトル(chalchihuitl; 貴石)などのシンボルが引き続き火桶(brasero)や香炉の飾りとして使われた(図7)。恐らく、古典期後期から続古典期にかけて記録された降雨量の減少という気候条件と関係があるのではないかと推測する。こうした続古典期まで続いたテオ



図7 テオティワカンのシンボリズムで装飾された火桶や香炉(古典期後期・続古典期)

ティワカン特有のシンボルは全て後古典期に入ると消え去り、新しいモチーフに切り替わるという現象をいかに理解すべきか、今後の研究課題として残されている。

## 6. マトラツインカ族の台頭とメシカの征服—後古典期のトルカ盆地

コヨラテルコが主である続古典期の土器文化は紀元後1000年前後に急な変化を見せる。これまで、トルカ全域から出土していたこの土器形態はマトラツインカ族の台頭と同時に姿を消す。言語学の研究 (Lastra 1992; Schumann 1975; Wright 2005a, 2005b) によると、紀元後900年から1000年頃に、オトミ系言語集団 (あるいは民族とも言える) はマトラツインカ、オトミ、マサワの3言語民族に分かれた。

後古典期 (後900/1000~1521年) のトルカの歴史は複雑であり、本稿が目的とする問題点と離れるので概略を述べるに留める。トルカ盆地の地域調査によると、形成期から現在に至るまで、ネバド・デ・トルカ火山の西麓および南麓の肥沃な平野は、常に住居址の密度の高い地域であった。マトラツインカ族の集落はまさにこの一帯に密集しており、これらの場所を押さえることによって、最終的にはトルカ盆地の政治的支配権を握った。16世紀の古文書ではトルカ盆地はマトラツインカ盆地とも呼ばれている (Quezada 1972)。この民族は盆地の「戦略的位置 (strategic position)」にいくつかの都市を築き、政治、経済、文化面において盆地内で絶対的威力を振るった (Piña Chán 1975; Quezada 1972; Smith 2011, 2015)。南にはテオテナンゴ (テナンゴ・デ・バジェ市) とテチュチュルコ市の山頂の少なくとも2都市、中央西部にはカリストラワカ・トルカが建設された。また、前時代から既に地方センターとしての機能を果たしていたサンタ・クルス・アティサパンやその他の勢力も衰えることは無かった様である。マトラツインカの勢力は地政学的な視点から見ると、トルカ盆地を越えミチョアカン州にも及んでいた。

セトルメント・パターンおよび土器の分布状態から、後古典期のトルカには、マトラツインカ族の他、オトミ、マサワという他のオトミ系言語民族が共存し、各々独自の土器文化を持っていたと考えられる。オトミ族は主に盆地の東方、南方を囲む山岳地帯、および平野部の中央に集落を構え、マトラツインカとは異なる土器を使っていた。一方、マサワ族と推測される集団の住居址は、トルカの北に位置するイストラワカ盆地に近い地域に広く分布している。こうした地域主義 (regionalism)

は隣接するメキシコ盆地においても同様に認められる現象である。

時代が変わると全てが変化する訳ではない。前期マトラツインカの特徴的土器には続古典期のコヨラテルコの影響が見られる。装飾は全て、赤色で描かれた曲線、直線、幾何学文様である。器形はコヨラテルコと異なり長い三脚付きの浅鉢が多い。器形の種類は以前と比較して減少する。壺、水瓶もマトラツインカ独特の赤彩の直線で装飾が施されている場合が多い。同時代にトルカで共存していたオトミ族は、マトラツインカと異なり、コマル (comal) と呼ばれるフライパンをさらに広げたような調理用具を使っていた。コマルの他、口縁が内弯する無頸壺、長頸壺類の3つに器形は限られており、胎土は雲母を含み、外側表面には薄い赤色のスリップ (泥漿) が施された。土器の特徴などから、山岳地帯を主に居住地としていたオトミ族の質素な生活状況がうかがえる。一方、盆地の北に分布するマサワ族の土器は、レルマ川上流北方のテマスカルシンゴ・イストラワカ盆地を起点に南に分布し、前述のマトラツインカ族やオトミ族の土器とは異なった特徴を有し、多色彩の深鉢、浅鉢、壺などがある。

結論として、形成期から続古典期までは中央高原の広い範囲に広まる特有の土器圏というものが存在していたが、後古典期に入りこうした伝統が崩れ、各地域内でその土地に応じた土器文化が繁栄した。地域主義と言われる地方色豊かな文化は、後古典期後期のメシカ帝国 (アステカ王国) の建国後、つまり三都市同盟の設立後、周辺諸地域が征服され、メシカ独特の土器複合体が急速に広がるまで続く。各地域を特徴づける土器群は続古典期からの発展過程の延長として理解できる。また、アイデンティティーの指標であるこうした物質文化は、後古典期のメソアメリカの政治・経済事情を反映しており、小規模な都市国家間の勢力争いが引き続き盛んであったことを示唆している。

後古典期後半、1476年、メシカ帝国 (アステカ王国) の王、アシャヤカトゥルによってマトラツインカが征服されると、トルカの歴史は一転する。テオティワカンと同様、三都市同盟にとってもトルカは不可欠な穀倉地帯であった。アステカの侵入はこの地域の社会全体に影響を及ぼした。表面採集および試掘調査によって、メシカによる征服を契機とし、小規模レベルの村落の住居址数が急激に増加し、盆地全域にアステカを象徴する土器様式が出土し始める。セトルメント・パターンにも変化が見られ、後古典期前期に発展したマトラツインカの都市は、後期に入って三都市同盟の統治下でも引き続き繁栄していたと見られる。一方、アステカの侵入と共に、黒い線条の複雑なモチーフで彩文されたアステカ III 様式、赤彩テ

スココ土器などの帝国の代表的土器文化がトルカ全域で現れるようになる。前期のマトラツインカの特徴的な赤彩文の二色土器から、後期の赤地に黒や白で文様が描かれた多彩色土器に変化する。長い三脚付きの皿も出現する。マトラツインカ後期の土器はアステカの土器とも異っており、前期から後期への著しい変化が、どの様な原因によるかは現在の所解明されていない。

## Ⅱ チグナワパン湖 での人と水の生活 形態

### —ケーススタディとしての サンタ・クルス・アティサパン

チグナワパン、チマリアパン、チコナワパンと呼ばれるトルカ盆地を象徴する3つの浅い湖は、本稿の初めに述べたように、水位も低く、長期気候の変化、雨期・乾期による年間降雨量の変化に対応し、時には湖ともなり、時には低湿地ともなる。湖畔の住民に限らず、アルト・レルマ盆地とも呼ばれるトルカ盆地に定住する全ての人々の生活は、3つのアルト・レルマ湖とそれを結ぶレルマ川との共生関係の上に成り立っていたとも言える。今から20年ほど前まで、世代から世代へと何百年もの間、住民の記憶の中で伝えられてきた太古からの知恵と伝統に基づいて、浅湖という特殊な生態環境に適した生業形態を保ってきた。採集、漁撈、狩猟といった比較的単純な技術で、ここに生息する生物資源を確保し、日常生活において必要な物資を獲得する生業が実践されていた。このような生業形態は、多機能を備えた用具や比較的単純な技術で充分成り立つが、季節、場所、時間、あるいは生物資源の生態条件といった身近な風景の熟知を必要とする。

また、1940年代以前には、東畔に沿って数多くの泉、あるいは湧き水から良質な飲み水が豊富に得られたことも、この地帯がいかに重要であったかを物語っている。

地域調査から得られた情報は、前述したように、3000年以上に及ぶトルカ盆地の社会の発展を理解することは、水、特に盆地を象徴する三湖沼およびレルマ川との関係を考慮せずには不可能であることを示唆している。一方、古典期、続古典期においてトルカ盆地で顕著に見られる複雑化の過程

は、テオティワカンとの関係を考慮せずには理解できない。

1993年より2年間に渡って行った、湖と川の生業形態に関する民族考古学調査から次の様なことがわかった。湖と川の生業形態を基盤にする生活様式は、海の漁撈形態と異なり、一定の生態環境、特に水位と水質が保持されれば継続可能である。また、使用される用具は、海の漁撈活動に必要である専門的技術や特殊な道具とは異なり、比較的単純で多様性を有する。むしろ重要なのは、古来伝承されてきた生物資源の生態環境に関する日常の知識・知恵・習慣である。前述の資料、および1979年に行われた試掘のデータに基づき、1997年、本格的にサンタ・クルス・アティサパン考古学調査を開始した(Sugiura 1997)。

この遺跡は度々述べて来たように、トルカ盆地の東南で重要な役割を果たしてきた地方センターであり、古典期後期から後古典期にかけての長い歴史を持つ。ラ・カンパナ・テポソコと呼ばれる行政・儀礼を司る中核地と、湖中の水産資源の供給地と見なされる住環境エリア(sustaining area)とに大きく二分される。調査目的は、主に2つである。第1は、この遺跡の発展過程において、メソアメリカの一大国家であったテオティワカンとの関係が及ぼした影響を解明すること。第2は、本稿の課題である、人と水との関わり合い、当時の生活史を復元すること。特に気候の変動で時に低湿地ともなるチグナワパン湖沼での不安定な生態環境に人々はどのように適応し、ボルド(bordo)と呼ばれる小規模な居住地を築き、独自の生業形態を持続したのか、そして、数百年に渡り湖沼内で人々はどのような日常生活を行っていたのかを解明することである。

一言で水の生活と言っても、決して単純な暮らしではない。現在サンタ・クルス・アティサパンに暮らす住民から、かつての生活について聞き取り調査を行うと、ボルドと呼ばれる人工的に構築された住居での暮らしは、多種多様な要素や局面が複雑に絡み合う日常生活であったことが理解できる。500年近い年月を湖沼という独特な環境と闘いながら、独自の水の文化を築き上げてきた人々の日々の全容は、未だ解明されていない。これらのボルドが分散する地区は、ラ・カンパナ・テポソコと称される中央行政地区へ水産資源を供給し、反対にこの地区に集められた外来土器、黒曜石、その他の奢侈物資はボルド地域へ再分配された。本節ではこの日常生活を構成する数多くの要素のうち6つ——1)ボルドの分布図、2)ボルドの住民、3)建築様式と公共スペース、4)湖沼内の日常生活、5)食生活に見える日常生活、6)精神生活(死者の祭り、生業用具の儀礼的価値)——に焦点を当てて考察する。まず考慮すべきは、サンタ・クルス・アティサパンの

歴史と切り離せない関係にある、古代気候、環境の変化である。この沼沢地内に人工的に築かれたマウンドで居住生活が可能であったかを検証するには、今から1500年ほど前の古代気候、環境状態を把握しておかなければならない。判明したことは、ボルドが構築された古典期後期は、気候の乾燥化により降雨量が減少し、水位が低下し、これまでの浅湖は低湿地となった。こうした環境は後古典期に入り再度の気候の変化で雨量が増し、チグナワパン湖の水位上昇が観測されるまで続く(Caballero *et al.* 2002; Lozano *et al.* 2009; Lozano *et al.* 2005; Valadez & Rodríguez 2009)。また、1年を通して、雨期・乾期によってどの様に環境や風景が変化するかを理解することも必須である。

## 1. ボルドの分布図

ボルドはラ・カンパナ・テボソコの西南地域に分布し、1979年度の表面採集でその存在が明らかになった。当時のデータでは、分布の範囲は約1km<sup>2</sup>に及び、ほとんどは低いマウンド状であり、高さ1mを超えない。当時はドローンが普及していなかったため、分布の全体像を把握するにまず低空飛行で得たデータを基に測量図を作成し、この基本図に水素バルーンで写した赤外線写真、そして1950年代および1980年初めに撮影された市販の航空写真を重ね、各ボルドの面積、高さ、分布状態を調査した。この地図を基に、2004年に地中レーダー探知機で各ボルドの探査を行い、マウンドの中心地点に直径10cmのアース・オーガーで穴を開け、構築されたボルドの編年を確定した。また、磁気探査および電気抵抗探査で得られたデータを活用し、各ボルドの内部構造を表面から把握する試験的調査も行った。これらのデータから、チグナワパン湖沼における環境整理・開発という大規模なプロジェクトの開始は、古典期後半の後450年頃にまで遡ることが確認された。ボルドの数は合計、約100基で、ラ・カンパナ・テボソコの南を源流とするレルマ川以北に分布している。サンタ・クルス・アティサパンの住環境エリアであったこの地帯の住居社が全て同時期に対応する訳ではない。初期に構築されたが後に廃墟化したボルド、続古典期に入って造られたボルド、後古典期の水位上昇でこの地域一帯の住居が放棄されるまで500年近く利用されたボルド、と様々である。分布図から推測すると、新しく構築されたボルドは往々にして古いものに隣接する様につくられた。また、杭で固定された木材の配置などの発掘資料から、基礎に木材を利用しその上に土を盛った土橋でボルド間が繋がっていたと推測される。別名イスローテ (islote) とも呼ばれるボルドには大き

さに差があるが、ほとんどが円形か楕円形をしている。ごく少数を除いて、1軒かせいぜい2軒の家が建つ直径15mから25m程度の狭い面積のものが大半を占め、耕作地、その他の生産活動に使用される空間はなかった(図8)。

居住目的のイスローテの建築工程は複雑で、時代、場所および地下の安定性、支える建造物の重量によって基礎に使用される材料が異なる。発掘資料によると、少なくとも2つの基礎造りの方法が採用されている。周辺に群生する葦を敷き分厚い基礎を築く場合と、盆地の東南を囲む森林から運ばれた木材、特に松や杉類の枝と葉を無造作に敷き詰める場合に分けられる(図9)。

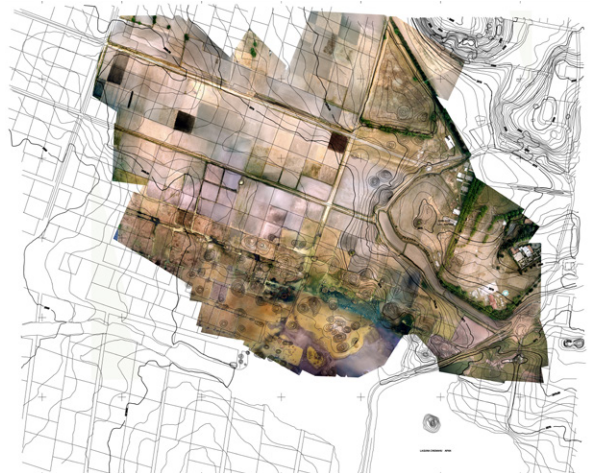


図8 サンタ・クルス・アティサパン遺跡と住環境エリアのボルドの分布図



図9 ボルド(イスローテ)の建築工程・基礎づくりに使用された松や杉類の木材

## 2. ボルドの住民

チグナワパン湖沼内に居住地を開拓するという大計画は、ラ・カンパナ・テポソコで行政、宗教行事を司る、この地域センターの統治者であるエリート階級の指揮下でなければ実現されなかったものである。発掘で出土された人骨の DNA (Buentello *et al.* 2009; Muñoz *et al.* 2014) および形質人類学 (Morales 2017; Torres 2004) の分析によると、ボルドの開拓者集団は現在のオトミ系民族と類似しており、近親婚を行っていた可能性が高い(図 10)。

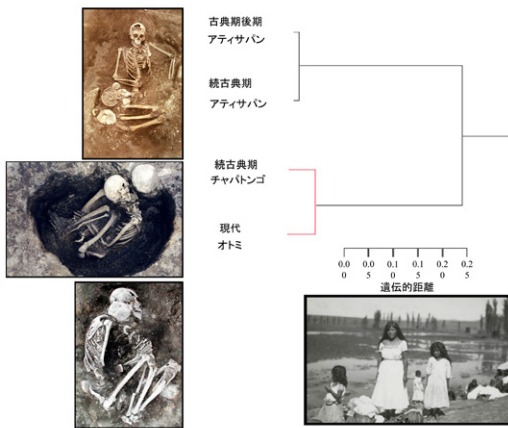


図 10 ボルド住民の DNA 分析とオトミ族との関係

オトミ系民族はメキシコ中央高原に住み着いた集団の中で最も古い歴史を持っている。15 世紀後半、メシカに征服されナワ語族の移住が顕著に現れるまで、トルカ盆地がオトミ系民族の居住地であったことは、マトラツインカ、オトミ、マサワ言語民族全てがパメ・オトミ系言語集団に属するという事実と、前述の分析データから判明している (Lastra 1992; Wright 2005a, 2005b)。

## 3. 建築様式と公共スペース

イスローテの住民が環境に適切に対応していたことは、ボルドの規模や機能の違いにより、建築に使用される資材の使い分けを行っていたことから明らかである。発掘資料によると、床面積は約 20m<sup>2</sup> で、石を並べた土台を有し、土塀か、現在でも一部の村落で使われているテハマニル (tejamanil) と呼ばれる幅 10cm ほどの平板を塀として利用していた様である。炭化したイネ科の植物が厚い層をなして出土していることから、屋根は民族考古学調査の資料にもある様に、ごく最近まで、この地方で使われていたサカトン・デ・モンテ (zacatón de monte) で葺かれていたようである (図 11)。



図 11 サカトン・デ・モンテで葺かれた屋根 (民族考古学資料)

この一帯には、一般の家屋の他、公共の場所も造られていた。湖沼集落の中心的位置に築かれた 20 号ボルドには、通常の民家面積の 5、6 倍にもなる公共的特徴を持つ建造物が存在していた。この大ボルドは古典期後期 - 晩期 (後 450~550/600 年)、つまりチグナワパン湖開拓の大計画の初頭から既に公共スペースとして位置づけられており、湖沼集落が終末を迎える続古典期 (後 600~900/1000 年) の終わりまで継続的に使用されていた。公共建造物はこの 500 年近くの間、東西の軸は多少変化してもほとんど同位置で建て替えが行われており、古典期に 4 回、続古典期に 3 回、計 7 回実施された。正面には狭い広場が設けられていた。建て替えの主な理由は、各時代の建築様式の変化、および地盤沈下問題を解決するためであった。古典期の建造物にはテオティワカンの影響が顕著に現れており、床面は長方形で、周辺は石で補強されてある。特に、一番古い第 7 建造物は周辺の建築物より床面が 60cm ほど高く、祭壇的な外観を持っていた様にも考えられる。第 4 建造物の入り口近くの床上で発掘された長方形の大型の炉 (80cm × 60cm) から大量の炭化した葦 (*Cyperus*) と思われる植物の出土、さらに象徴的な副葬品を伴った屈折葬 (no.10-2000) の検出から、この建物内で様々な儀礼が行われていたと推測できる。7 基の公共建造物の内、古典期後期に建てられた最古の第 7 建造物の西壁には階段が備えられおり、両側はテオティワカン建築様式の特徴であるイスタバルテテ (ixtapatete) と呼ばれる玄武岩のスレートを用いた低いタラー式の壁で覆われており、階段は聖なるネバド・デ・トルカ火山を臨めるように配置されている。またこの西壁からは、アルメナ (almena) と称される、テオティワカンを象徴する遺物も出土している。最大の相違はテオティワカンの建造物で見られる様な漆喰の使用はなく、土壁が細かい砂と泥と水を原材料として上塗り (厚さは 5~7mm ほど) が施されていることである。

テオティワカンの崩壊と共に、公共建築様式も一変する。続古典期に建設された 3 基の公共建造物の内、最後に建て

られた1基は遺跡形成過程において、跡形なく破壊され、一部の痕跡しか残っていない。続古典期の残りの2基(第2、第3建造物)は円形の床面であり、床は2、3層からなり張替えが行われていた。最下層は、近隣から運ばれたオレンジ色の土で、次の層ではテソントレ(tezontle)と呼ばれる火山岩が湿気除去の目的で使用されていた。床面である上層は厚さ4~5cmを超える。材質は判明していないが、コンクリートに匹敵するほどの硬度を持っている。10cm間隔で埋め込まれた木柱で床の周辺を囲み、その外側には大きさの異なる石が厚さ1m弱積み上げられ、建築物の土台を成している。出土状況から想定すると、壁はバハレケ(bajareque)と呼ばれる、現在でもメキシコの田舎では良く使われているイネ科の植物と混ぜ合わせた土塼であった様だ(図12)。沼沢地の環境加工という大計画を成功させた指導者は、この公共スペースおよび建物の建築工程を実行する適切な技術と知識を持っていた。また、これらの公共建造物は湖沼内に居住する各家長が定期的に集まり、年中行事、年間の生業計画、その他、集団の生存に関わる問題を討論する公共の場所であったと推定される。

## 4. 湖沼内の日常生活

注目すべきことは、床に掘られた浅い窪みに破損した壺や鍋を固定して造られた、囲炉裏、あるいは竈のような遺構が数多く検出されることである。煮炊き用の囲炉裏は周囲が石で囲まれ、その上に鍋や煮物用の壺を乗せる構造で、薪をくべる焚き口を伴う。こうした炉と異なり、床、あるいは地面に直接設置された囲炉裏は既に焼けて赤くなった薪をくべるためだけに用いられたようだ。その数の多さはボルドの住民が日常炊事に使用する数を遥かに超えている。また、住居と直接関係のない場所に配置されている状況から、恐らく、海拔2580mで耐えなければならなかった寒さと、湿気の高い湖沼内の厳しい環境の影響を軽減するために、この様な解決策を考案したのではないかと推測される(図13)。

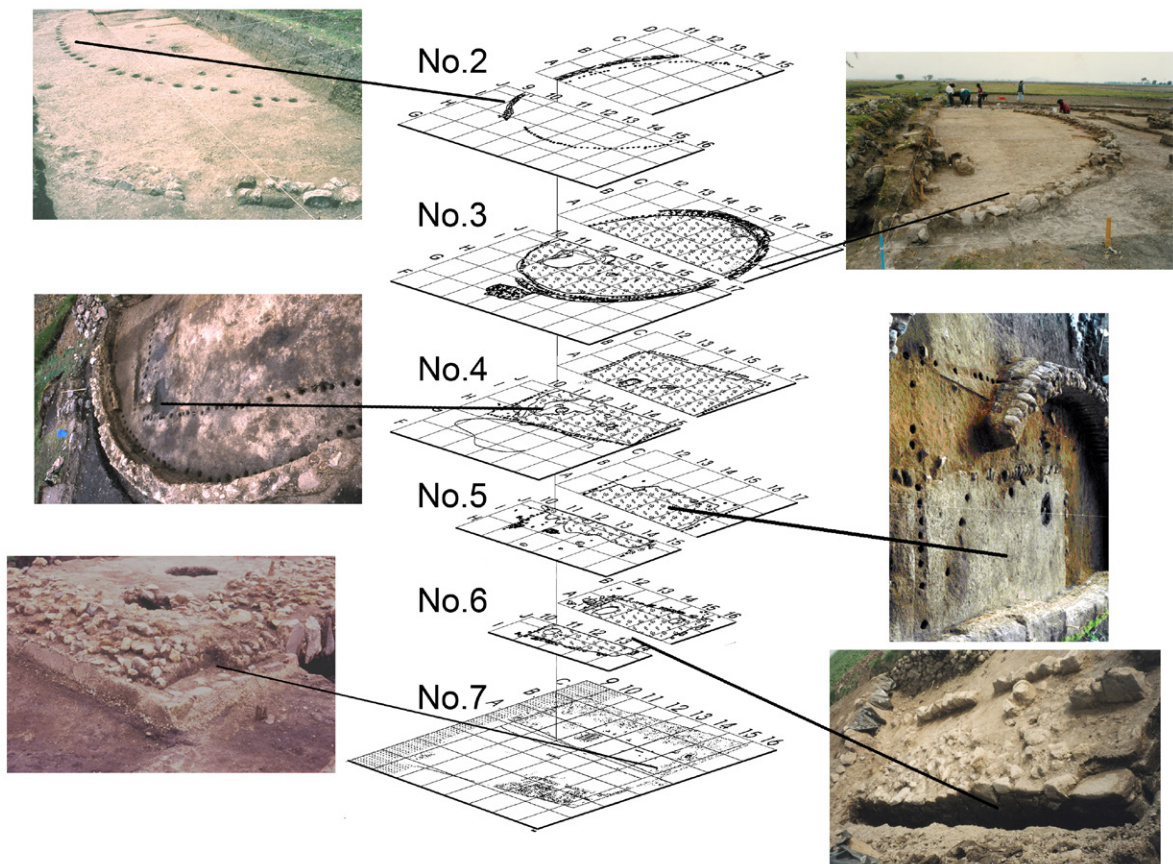


図12 公共建造物: no.2-3 (続古典期の円形建築); no.4-5 (古典期後期と続古典期の過渡期); no.6-7 (古典期後期)



図 13 寒さ、湿気を和らげる目的で供えられた「囲炉裏」

## 5. 食生活に見える日常生活

耕作地のスペースを持たないホルドの住民は、農産物の確保は内陸の集落に依存していた。炭化した種の同定によると(Martínez 2007; Martínez & McClung 2009)、トウモロコシはもちろん、豆、その他の耕作物のみならず、畑周辺の様々な野生の植物をも食料としていた。また、動物遺存体の研究成果からは、狩猟で得られる鹿、ウサギ、イノシシなどの他、家畜であった七面鳥、犬、その他の動物が食材として盆地周辺の森林地帯から交換によって入手されていたことを示唆している。もちろん、周囲の湖沼環境に適応した採集、漁撈、狩猟を基盤とした生業形態を営んでいたイスローテの人々は、年間を通じ、近郊で得られる水産物資、鴨や鴈といった水鳥など、季節によって異なるものを日常の食材 (Valadez & Rodríguez 2009) としていた(図 14)。一方では、こうした湖沼固有の物資は周辺の集落との欠かせない交換品でもあったのである。チグナワパンの開拓者は多様で豊かな食生活を送っていたのである。XRF (蛍光 X 線分析) による人骨の検査結果も、サンタ・クルス・アティサパンの人々は、テオティワカン都市の人骨と比較して良質な食事摂取を行っていたことを示している (Velázquez 2015)。しかし、形質人

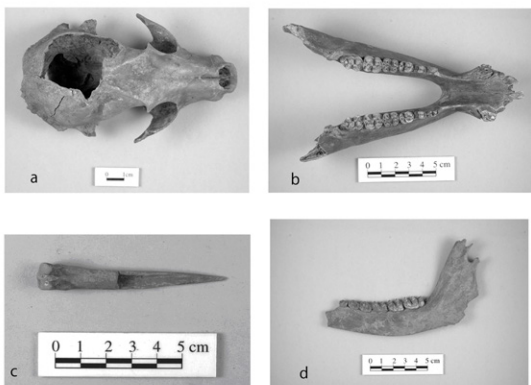


図 14 発掘検証された一部の動物の骨；a: アライグマ、b: ベッカリー、c: オオカミ、d: シカ

類学分析 (paleopathology) では、栄養失調や歯周病、その他の病気の痕跡が確認されており、当時の生活環境を考慮すれば当然とすべきであろう。また、ルーティンの日常活動が様々な形で男女の人体にそれぞれ異なった影響を与えていたことも、出土した人骨の研究から明らかとなっている (Morales 2017)。

何と言っても、メソアメリカ食生活を象徴するのはトルティジャである。一般には、トウモロコシを石灰入りの水で煮、すり石で粉状にしたニスタマル (nixtamal) と呼ばれる粘り粉で作る厚いクレープ状のものをトルティジャと言う。これをコマルで焼く習慣は、メソアメリカ形成期から継続的に実践されてきた代表的食事方法であると言われてきた。確かに、発掘資料の中でコマルの存在は、今から 2500 年ほど前、形成期中期まで遡るがその出土量は非常に少なく、トルティジャを焼くために日常使用されていた調理道具とは考え難い。日常炊事の用具として不可欠な土器ではなかった。むしろコマルは、後古典期後期つまり紀元後 14 世紀のアステカ様式 III の一部として急激にその出土量が増大するまで、日常使用される土器のなかで極少数しか占めていない。要するにトルティジャとコマルは常にセット関係にあると提言するのは間違えであると考えられる (Sugiura 1996)。

確かに、ニスタマルなしにメソアメリカの文明を理解することは出来ない。現代でもニスタマルの料理法には色々あり、トルティジャという形のみで食されるとは限らない。分厚くパン状にして食すこともある。サンタ・クルス・アティサパンの場合、コマルの割合は全出土土器の僅か 2.39% に過ぎない。古典期の 1.63% という低い数値から、続古典期には 2.82% と多少の増加が見られるが、いずれにしても、日常の炊事に欠かせない道具としては僅かな出土量である。器形もアステカ時代を代表するフライパンの様な平底ではなく、底部が僅かに尖底になっている形が大半を占める。こうしたコマルは豆、その他の種 (たね) 類を炒るのに現在でも良く使用されていることが民族学のデータで分かる。また、残渣分析によるとサンタ・クルス・アティサパンのコマルには、ニスタマルに必要な石灰が使用された痕跡があまり認められない (Obregón *et al.* 2019; Terreros 2013)。これに関して、民族考古学調査の情報から興味深いことがわかった。この遺跡の近辺では、最近まで石灰が入手困難な場合、無料で手近に得られるリュウゼツラン科の一種であるマゲイ (maguey) の葉の灰が、石灰の代わりにニスタマルの生成法として用いられていたと言う。確かに、古典期から続古典期にかけてサンタ・クルス・アティサパンに居住した人々がニスタマルを使って料理したものを主食としていたことには違いないが、ニスタマルの生成法や



調理法そしてトウモロコシの食し方は、時に応じた生活環境によって色々異なっていたことが、以上から理解できるだろう(図15)。



図15 コマルの器形(古典期/続古典期)

炊事や食事は日常生活 (Sugiura *et al.* 2019) で重要な位置を占めるルーティンである。食材を獲得し、用意した材料を煮炊きし、食事を摂り、後片付けをするという一連の行動に掛ける日々のエネルギーと時間は、日常生活に研究の焦点を当てる考古学においても重要視されるべきである。前述したように、食材は水産資源の他、近隣の平野部の耕地から得られる農産物、森林地帯の動植物など多様であったことは、分析された人骨の栄養状態でも明らかである。食事に纏わる一連の資料の中で、炊事道具は大きな割合を占めている。中でも、土器と石器は考古学者にとって、一番馴染みの深いものである。特殊なメソアメリカの文化において、土器は、社会生活の色々な領域の情報をもたらしてくれる。食事という日常のルーティンに必要な道具であり、器種の中で多数を占めるのは壺類である。しかし、残滓分析の結果によると、その用途は広範囲に及び煮炊きに限られてない。口径は17~66cm あるが、70%は14~26cm に集中している。長頸、短頸、長胴、円形胴部型などの器形がある。こうした壺は水の保存、食材の貯蔵、あるいはごく最近の民族考古学のデータにある様に、食器類の保管にも用いられていた。一方、口径の広い無頸壺、あるいは鍋の用途は比較的限られており、主に煮物に使われることが多い (Obregón *et al.* 2019; Pérez 2002, 2009; Pérez *et al.* en proceso)。調理された料理は、碗に近い浅鉢で食事をとっていたと推測される。日々

の食生活で使用された土器用具の破片、完形品、半完形品を含めると、全体の80%以上を占めている。壺や浅鉢など食事に使用される容器も時代と共に変化し、古典期に多い胎土と続古典期の胎土は異なる。コヨラテルコ式土器では白雲母 (mica muscovite) を含む胎土が現れ始める。これは、これまでの製作工程、そして需要と供給のルーティンを破る現象で、ジャンニニ (Giannini 2004) の唱えるトランスグレションに相当すると考えられる。しかし、こうした傾向も時を追うと共に安定し、続古典期を代表する胎土となり、日常生活に欠かせない土器の製造工程でルーティン化された。

メソアメリカの生業用具として、また食生活でも必要不可欠なもう1つの道具は、打製ないし磨製石器である。中でも、重要なのはすり石とすり棒である。主食のトウモロコシはすり石でひいて練り粉状にするので、メタテ (metate) と言われるすり石とマノ (mano) と呼ばれるすり棒は無くしてはならない。このような磨製石器は主に手近に得られる玄武岩で作られていた。一方、食料の確保や調理用器具として、黒曜石や珪石 (silic) で作られた打製石器も重要であった。サン・マテオ・アテンコでの黒曜石の石核と石片の出土状態から推測すると、地域外から交換物資として母岩や石核が搬入され、槍、投槍、鏃、ナイフなど、日常生活で必要とされる道具を各々の村落で加工されていたケースが多い様である。

## 6. 精神生活(死者の祭り、生業用具の儀礼的価値)

精神的側面が日常生活で重要な位置を占めることは言うまでもない。発掘出土品を検証してみると、このチグナワバン湖沼内に居住した人々の間では、多種多様な儀式、宗教行事、冠婚葬祭、その他の祝い事などが盛んに行われていた様である。オカリナ、笛、土偶、コパルの樹液から作られる香や松脂を燃やす火桶や香炉は、精神生活の一面を表している。こうした祭祀や行事で使用されるモノに関して特筆すべきは、大都市テオティワカンが崩壊した後も、テオティワカンの伝統を受継いだシンボリズムを示す文様全て(種々の貝類、ヒトデ、人顔、トラロックなど)が火桶の装飾に使われていることである。しかも、雨あるいは雷鳴の神(トラロック)と深い関わりのあるモチーフが大半を占めていることから、いかに人々が雨や水に関心を持っていたのかがわかる(図7)。

メキシコ盆地で一番乾燥度の高い地域に築かれた大都市テオティワカンの場合、トラロックに良い雨を祈願し豊作を祈ることは、統治者や神官にとって必須の行事であったに違いない。しかし、サンタ・クルス・アティサパンの人々にとって、

雨は両義的な影響を及ぼす恐れ多い自然現象である。住民は多過ぎもせず少な過ぎもしない適度の雨量を願っていた。過量な降雨は湖沼の水位を上げ、続古典期末時に起こった様に、イスローテにおける生活は不可能となる。逆に雨量が少な過ぎれば、湖沼の枯渇にも繋がり、食料として重要な水産資源の捕獲などを不可能にする。雷鳴の神やそれを象徴するモチーフを表すことは、使われる環境によって異なる意味を持つ可能性があることに注視すべきであると考え( Nuñez 2019; Silis 2005; Sugiura & Silis 2009)。

精神生活の一面は他にも表れている。前述した様に、チグナワパン湖の住民は採集、漁撈、狩猟という生業形態を生活の基盤としていた。漁撈では、少なくとも前述の打製石器の他、土製の1.5cmほどの梨形の錘や、特定の土器片を削って円形にして両端に切れ目を入れた錘が使われていた。また、狩猟には黒曜石や珪石で作られた槍や鏃の他、吹き矢筒に入れた直径1cmほどの土製の玉が使われていたことを、発掘出土品、民族資料、そしてスペイン征服以前の土器に描かれたモチーフなどから知ることができる。こうした用具もルーティンを破るトランスグレション的行為として何らかの行事、ないしは儀式で使用されることがあった様である。それは、コピトフ(Kopytoff 1986)が提唱するモノのライフヒストリーにおける役割や価値の変化性にも関わっていると思われる。こうした実用品の多義性を最も良く表しているのが発掘で出土したいくつかのコンテキストである。吹き矢筒の玉や土器片で作られた多数の錘が、一塊になって出土する状況から、日常の生業活動の成功を願う目的で意識的に供えられたと推測することも可能である(図16)。

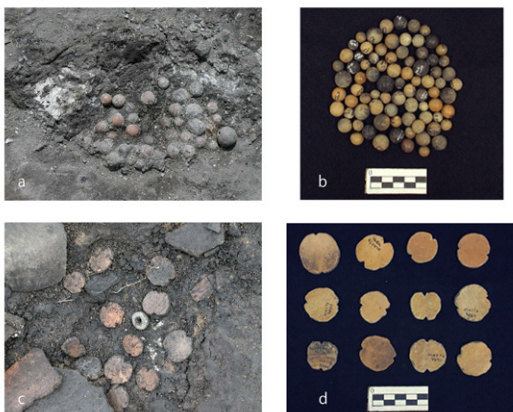


図16 a: 供え物として置かれた吹き矢の玉一式; b: 吹き矢の玉; c: 奉納物としての土器片の錘; d: 土器片の錘

埋葬、死者の祭りは精神生活の一側面を顕著に表しているトランスグレション的行為である。しかし、ジェニイニの説を幅広く解釈すると、この行為も考古学的時間、つまり50年、

100年あるいはそれ以上長い物理学的年月から見ると、ある時点ではトランスグレションと見られるアクションがルーティン化された事例と解釈することも可能である。サンタ・クルス・アティサパンにおいて特筆すべきことは、埋葬された62体の人骨(男性5、女性16、その他41は性別不明)の内、乳児(0-4歳; 出生直前の胎児を含む)が46.8%を占め、幼児(5-9歳)は12.9%に相当する。つまり、幼児の人骨は、全体のほぼ70%に達している。この内、人身供養とされた埋葬例がどれほどの数であったかは定かではないが、8歳未満の幼児8体(4体は一次埋葬で、その他は二次埋葬)は、同じコンテキストから出土している(埋葬3、2001年出土)。この事例については、自然死した幼児の遺体を祀るのが目的というよりは、人身供養の為に行われた儀式であったと解釈した方が合理的と考えられる。メソアメリカ、少なくとも中央高原において、幼児が雨乞いの儀式で雷鳴の神トラロクに捧げられる習慣が古文書に記録されていることを考慮に入れると、こうした埋葬が幼児の人身供養であった可能性がある。

もう1つ特殊なトランスグレション的行為のケースは、埋葬5(2000年出土)(図17)である(Sugiura *et al.* 2003)。埋葬されていたのは初産中に死亡した若い女性(15-20歳)で、仙骨部の外に胎児の半分が出て、下半身は胎盤の中に残っている状態で発掘された。恐らく埋葬後に胎児が体内から

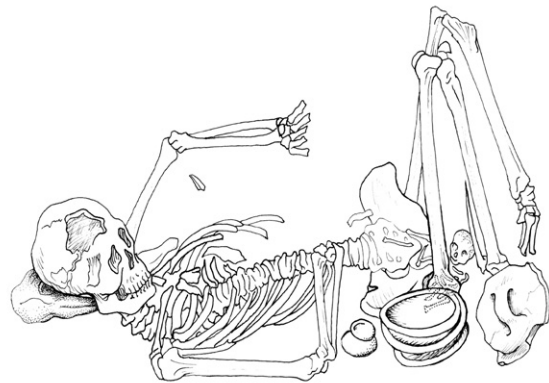


図17 埋葬5(2000年出土) 若年女性、胎児と副葬品

押し出されたと考えられる。頭蓋骨は西に聳える聖なるネバド・デ・トルカ火山の方角を向いており、目前にはレルマ川が流れている。サアグンをはじめとする記録者が種々の古文書に記述しているばかりか、多くの研究者 (Barba de Piña Chan 1993; Bray 1968; Dahlgren 1976; Graulich 1981; López Austin 1990, 1994; Quezada 1977; Rodríguez de Shadow 2000; Soustelle 1961, 1996; Vargas & Matos 1973; Viesca 1984) が無事初産を果たせなかった女性に関して論及している。メキシコ中央高原において、この様な死亡を遂げた女性はメシカ社会の宇宙観、あるいは宗教観において特別な扱いをされていた。分娩過程で死ぬことは、戦いで命を失った男に匹敵する最高の荣誉とされ、その女性は女神または女戦士シワピピルティン (cihuapipiltin) と見なされた。ロベス・アウスティンはこの様な宗教観はメソアメリカの世界観の中核にあり、メシカ以前から既にあり、現在のテペワ族の間でも認められ、長い歴史を持っていると主張している。この説と埋葬5(2000年出土)で認められる事実に基づけば、上記の信仰は古典期終末期から続古典期の初頭(後550/600年)に遡ると言える。

この埋葬は20号ボルドで発掘されたものの中で、副葬品の数が一番多い上、象徴的特徴を持つ遺物が目立つ。三重に重ねられた浅鉢の中に赤い顔料の粉が入っていた他、ミニチュアの浅鉢、突起の装飾で飾られた儀式用の火桶、把手付き香炉(sahumador)の一部など、供え物である土器は被葬者の腰の右側に集中して配置されていた。その他、石器類も出土している。副葬品の中で注目されるのは、女性の頭蓋骨の下から出土した犬の頭蓋骨であろう。サアグン(Sahagún 2000)によると、死者は長い過酷な旅を強いられ、4年後死者の国ミクトランに辿り着く。初めに渡る川はチグナワパンと呼ばれ、死者が犬に乗ってこの川を渡り無事死後の世界へ着くことが出来る様に、犬を死者と共に埋葬する習慣があったと述べている。

シワピピルティンと呼ばれる、分娩を終えずに死亡した若い女性は、雲、水、湿気、風、寒さとも深く関係づけられていた(Aramoni 1998; López Austin 1994)。簡潔に言うと、この埋葬を構成する全ての要素は、生殖に関わる複雑かつ象徴的な意味を表している。トルカ盆地の湖沼を開拓し、小さな島を築き居住した人々は、降雨量などの環境の変化の影響をまともに受けていた。水の生活を維持するためには、自然とのバランスを保つことが必要であり、そのためには神々、特にトラロックの恩恵に授かり、できる限り超自然世界と平穏な関係を維持することが必須の条件であったのである。

## 7. 地域内外との物々交換、情報交換関係

完全な自給自足は人の社会では存在しない。イスローテの住民も決して完全な形の自給自足、つまり閉ざされた生活を送ってはいなかった。前述した様に食生活の基盤であるトウモロコシさえ近隣の集落から取得していた。盆地内の交換ルート網は複雑であり、物資、特に各集団で不足している必需品は、こうした交換網組織を通して調達されていた。ボルドの発掘資料によると、チグナワパン湖沼内の居住者は、トルカ盆地内のローカルネットワークを利用するだけではなく、地域外との長距離流通システムを通して日常生活に欠かせない一連の土器類、食生活に必要な塩、石灰など様々な必需品を得ていた。

盆地内外を結ぶ交換ネットワークで配分された物資は、サンタ・クルス・アティサパンの行政、儀礼、宗教行事を司る中心部ラ・カンパナ・テボソコに集積された後、ボルドの住民に再配布されたと推測される。ただし、長距離流通網は政治的背景の変化に応じて再編され、それに伴い交換される物資も変わる傾向が見られる。20号ボルドと北西に隣接する13号ボルドの発掘調査から出土した土器の分析を基に構築されたメガ・データベース(600万点を超えるデータで構成されている)を検索すると、時代と共に地域外から得られた土器の組成、および交換システムの状況が明確に把握できる。

古典期後期には、多くのボルドがレルマ川沿いに造られた。チグナワパン湖沼が開拓され始めたこの時期に、メキシコ盆地内でテオティワカンが全盛期を迎える。メソアメリカ最初の大都市の管轄下で、長距離流通網が組織され、テオティワカンと直接的あるいは間接的な関わりを持ちつつ、メソアメリカ各地域は複雑な交換システムで結ばれていった。その後衰退期に入ると、このメカニズムに変化が現れる。特に中央高原では崩壊途上の大国家の政治力が衰えを見せ始めると、テオティワカンを経由せず、直接地方同士で組織した小・中規模の交換圏を通し、物資が活発に流通するようになった。サンタ・クルス・アティサパンもこの時期、中間距離ないしは近隣の地域と頻繁に物資を交換している。出土した土器や石器の多様性は、この時期以前には見られなかった状況を示している。

土器については、古典期後期に次の4種類がトルカ盆地に搬入された(Florentino 2015; Jaimes *et al.* 2019; Kabata 2010)(図18)。ロサ・グラスラール式土器(Rosa Granular)は567点、エンゴベ・ナランハ・ディルド式土器



図 18 古典期にトルカ盆地に搬入された一連の土器 (古典期)

(Engobe Naranja Diluido)は 1091 点、エンゴベ・ロホ・フォラネオ式土器 (Engobe Rojo Foráneo) は 724 点、最多の出土数を誇るミカ・アブンダンテ式土器 (Mica Abundante) は 3555 点出土している。NAA (中性子放射化分析)、XRF (蛍光 X 線分析)、XRD (X 線回折) による化学組成分析法で検証した結果、ロサ・グラヌラル式土器はテオティワカンで出土している同名の土器とは異なり、近隣のモレロス州辺からサンタ・クルス・アティサパンへ搬入されていたことが判明した。エンゴベ・ロホ・フォラネオ式土器の原産地ははっきりしないが、ミチョアカン州ではないかと推測されている。ミカ・アブンダンテ式土器はその名が示す様に、胎土が黒雲母 (mica biotite) を含んでいるが、トルカ盆地の雲母は白雲母 (mica muscovite) である。従って、黒雲母の特徴からミステカ・バハ地方で製作され、そこからの交換ルートを通じて入って来たものと考えられる。現在の研究成果で判明していないのはエンゴベ・ナランハ・ディルイド式土器の原産地である。この様な外来土器は日常生活で使用される壺類がほとんどで、ごく少数の浅鉢を除いて、特殊な器形は発掘されていない。しかし、サンタ・クルス・アティサパンで一番大量に出土する壺類が、どの様な目的で遠距離から運ばれなければならないかとは解明されていない。原料やその他の物資を運ぶ容器として使われたという解釈も否定できない。

日常生活で不可欠な黒曜石の原産地は、イダルゴ州のパチュカ、セロ・デ・ナバハス、サクアルティパン、メキシコ州のオトゥンバ、ミチョアカン州のウカレオ／シナペクアロ、プエブラ州のパレドン、ケタロ州のフエンテスエラスなどで、全てトルカ盆地の外にある (Benitez 2006: 82)。最も多量に出土しているのはミチョアカン州のウカレオ／シナペクアロ原産の灰色ないし黒色の黒曜石で、この時代に出土石器の 60% を超える相当量の黒曜石がメキシコ中央高原の西方からレルマ川を下ってトルカに運ばれていた (Benitez 2006; Kabata

2009, 2010)。さらに、チグナワバン湖北に位置するチマリャバン湖のサン・マテオ・アテンコ遺跡でも、出土石器の 80% 以上が黒曜石製である (Jaimes 2011)。これらの事実は、テオティワカンが東方のパチュカ原産の緑色黒曜石とオトゥンバ原産の灰色黒曜石の採掘、流通、配布を管轄し、それが繁栄を支える一要素であったとする解釈の再考を促すものである。少なくともトルカ盆地の事例は従来の解釈と合致しない。また、大都市テオティワカンではウカレオ／シナペクアロ原産の黒曜石の搬入が古典期を通して比較的少ないため、トルカ地域と近隣のウカレオ／シナペクアロ原産地との間で、メソアメリカで数少ない水運レルマ川を利用した黒曜石の直接交換圏が存在していたと考えられる。これは注目すべきことである。一方、宗教、その他の儀式の供物として使われた粘板岩片は、ネバド・デ・トルカの西山麓付近が原産地である可能性がある (Julieta López 私信 2019)。

以上の様に、古典期後期と晩期にサンタ・クルス・アティサパンの人々は、生活必需品の一部をトルカ地域外、特に南はモレロス州、北はミチョアカン州、西は現在のメキシコ州の西側の州境、東はプエブラ州とオアハカ州の州境との、一連の長距離交換網に依存していた。一方、トルカからどのような物資が各地方に送られたかは、周辺地域で十分に考古学調査が実施されていないため、現段階では不明である。

テオティワカンの崩壊後の続古典期に入ると、トルカ盆地は地域的繁栄の第一歩を迎えた。交換ネットワーク圏は拡大せず、逆に地域外との交流網は狭まった。搬入品として土器では唯一、エンゴベ・ナランハ・グルエソ式土器 (厚手オレンジ色土器) と呼ばれるオレンジ系のスリップを分厚くかけた独特な土器 (主に壺類) が多量に出土している (計 6713 点)。器形も特殊なものではなく、全て日常生活、特に食事に纏わる一連の活動に用いられる壺類である。これらの土器は、料理用具としての使用を目的とするよりは、むしろ特別な原料を運ぶために作られたものである。トルカ盆地の南部から中部、特にモレロス州の続古典期における代表的な都市遺跡ショチカルコで比較的多量に出土している。現在のメキシコ州の南部には先スペイン期から製塩で名の高いトナティコやイスタパン・デ・ラ・サルがあるため、これらの土器は塩の運搬用に使われた可能性も考えられる。

一方、ウカレオ原産の黒曜石の流通量に関しては、古典期前期から晩期にかけて多少増加はするが、大きな違いが認められない。

続古典期を通して、トルカ盆地からどのような物資が流出していたか、その全体像は定かでない。しかし、ウカレオ原産の黒曜石がトルカを通り続古典期に最盛期を迎えたショチカル

コで出土していること(Hirth *et al.* 2006)、コヨラテルコ土器の圏外にあったショチカルコでトルカ独特のコヨラテルコ式三脚付き浅鉢が供物として出土していること、テオテナンゴ遺跡の初期(図19)には、建築様式や石彫の象徴的モチーフにショチカルコの影響が見られること(Piña Chán 1975)から、両地域の間に関係があったことは明らかである。



図19 ショチカルコの影響が見られるピラミッド神殿、テオテナンゴ、続古典期

以上の様に、続古典期に入りトルカ地域外から長距離交換ルートを通して入手された物資の種類は激少する。こうした現象は恐らく続古典期の政治的背景を反映している。テオティワカンの統治下にあった中央高原の各地では、それぞれの地域内での勢力争いに焦点が集中した結果、以前のように広範囲の長距離交換網を利用することが無くなったとも解釈できるのではないと思われる。

## おわりに

メソアメリカ中央高原の考古学は、テオティワカンやテノチティランをはじめとして、歴史上重要であると思われる大遺跡に集中しているのが現状である。こうした長年の傾向は、エリート、神官層と言った社会の頂点の人々の様子を垣間見ているに過ぎない。反面、常に社会の大部分を占める、底辺に置かれた一般住民は歴史から抹殺されてしまっている。小規模の住居址は、20世紀に急激な発展を遂げた工業化、都市化、人口の急増に伴い、日々跡形もなく破壊され、古代の歴史から姿を消してしまっている。結果的に、メソアメリカの考古学が偏った視野からの歴史的解釈に基づく研究となっていることは、憂慮すべきである。トルカ盆地の場合も例外ではない。ルーラル的特徴の強いこの地域は、メキシコ盆地の西に隣接し、穀倉地帯として、またメソアメリカの西部地方からの生活必需品の中継地区として、メキシコ中央高

原の歴史で重要な役割を果たしてきた。それにも関わらず、メソアメリカの考古学研究においてこれまで余り注目されてこなかった。

このトルカ盆地を45年かけ種々異なった視点から続けてきた一連の研究成果の内、本稿ではまず、社会の複雑化過程をセトルメント・パターンの時代的変移を通して考察した。焦点を古典期と続古典期に置き、大国家テオティワカンの影響がこの地域の住民の日常的ルーティンにどのような形で現れているかに言及した。また、トルカ盆地、特にアルト・レルマ湖岸の住民の間にごく最近まで見られた、古来より受け継がれてきた水との深く、かつ独特な関わり合いは、トルカ盆地の歴史的特殊性を理解する為に重要な側面であることを主張した。サンタ・クルス・アティサパンという事例研究を通して、この人と水の生活関係にアプローチした。チグナワパン湖沼に居住地を建造し、自然環境条件が許す限りそこで日々を送っていた湖沼内の住民の生活様式がいかに複雑であったかに焦点を当て、それをジャンニニが提唱したルーティンとトランスグレションという視点から解釈してみた。こうした条件の中で築かれた社会は、物質面のみならず精神面においても周囲の環境の変化に適応すべく、様々な対処策を考案・実行したが、最終的には気候の変化による影響に対応することが出来ず、数世紀続いた人と水の絆で築かれた社会は放棄されるという結果となった。

## 謝辞

トルカ盆地に関する一連の考古学調査は次の援助を受けて実施された。

- a) Universidad Nacional Autónoma de México, UNAM (PAPIIT IN104797); b) National Geographic Society; c) Fundación para el Avance de los Estudios Mesoamericanos, Inc.-FAMSI); d) Consejo Nacional de Ciencia y Tecnología, CONACyT (CONACyT 30696H); e) UNAM (PAPIIT IN403199); f) UNAM (PAPIIT IN401402); g) UNAM (PAPIIT IN402006); h) CONAyT (CONACyT 60260); i) UNAM, (PAPIIT IN400410); j) CONACyT (CONACyT 167268); k) UNAM (PAPIIT IN400515).

## 参考文献

- Aramoni, M. Elena  
1998 *Complejos conceptuales indígenas alrededor del espacio sagrado del Tlalocan: un estudio comparado en México*. Tesis de doctorado, Facultad de Filosofía y Letras, Universidad Nacional Autónoma de México.
- Arce, José Luis, José Luis Macías & L. Vázquez-Selem  
2003 The 10.5 ka Plinian Eruption of Nevado de Toluca Volcano, Mexico: Stratigraphy and Hazard Implications, *Geological Society of America Bulletin* 115(2): 230-248.
- Barba de Piña Chan, Beatriz  
1993 Las cihuapiltin, sublimación de la muerte por parto. In B. Dahlgren (ed.), *III Coloquio de Historia de la religión en Mesoamérica y áreas afines*, pp.31-55. Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México.
- Benitez, Alexander Villa  
2006 *Late Classic and Epiclassic Obsidian Procurement and Consumption in the Southeastern Toluca Valley, Central Highland Mexico*. Ph.D. dissertation, Faculty of the Graduate School, University of Texas, Austin.
- Bourdieu, Pierre  
1977 *Outline of a Theory of Practice*. Cambridge University Press.
- Bray, Warwick  
1968 *Everyday Life of the Aztecs*. B.T. Batsford.
- Buentello, Leonor, Yoko Sugiura & Aída Pérez  
2009 Tras las huellas genéticas de los isleños de Santa Cruz Atizapán. In Y. Sugiura (ed.), *La gente de la ciénaga en tiempos antiguos: La historia de Santa Cruz Atizapán*, pp. 127-144. El Colegio Mexiquense A.C. Universidad Nacional Autónoma de México.
- Caballero, Margarita, Beatriz Ortega, Francisco Valadez, Sarah Metcalfe, José Luis Macías & Yoko Sugiura.  
2002 Sta. Cruz Atizapan: A 22-Ka Lake Level Record and Climatic Implications for the Late Holocene Human Occupation in the Upper Lerma Basin, Central Mexico, *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology* 186(3-4): 217-235.
- Chase-Dunn, Christopher & Thomas Hall  
1997 *Rise and Demise: Comparing World-Systems*. Westview Press.  
2000 Comparing World-Systems to Explain Social Evolution. In R. Denemark, J. Friedman, B. Gills & G. Modelski (eds.), *World System History: The Social Science of Long-Term Change*, pp. 85-111. Routledge.
- Crider, Destiny, Deborah L. Nichols, Hector Neff & Michael D Glascock  
2007 In the Aftermath of Teotihuacan: Epiclassic Pottery Production and Distribution in the Teotihuacan Valley, Mexico, *Latin American Antiquity* 18(2): 123-143.
- Dahlgren, Barbro  
1976 Una vida cotidiana. In C. Cook de Leonard (ed.), *Esplendor del México antiguo*, pp. 689-728. Editorial del Valle de México.
- Díaz, Clara Luz  
1998 Ocoyoacac: un sitio con influencia teotihuacana en el valle de Toluca. In R. Brambila & R. Cabrera (eds.), *Los ritmos de cambio en Teotihuacan: reflexiones y discusiones de su cronología*, pp. 353-375. Colección científica número 366. Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- Diehl, Richard & Janet Berlo  
1989 *Mesoamerica after the Decline of Teotihuacan A.D: 700-900*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Florentino, Jaqueline  
2015 *Caracterización de las composiciones elemental y físico-química de cerámicas foráneas de los grupos Rosa Granular y Engobe Naranja Diluido del valle de Toluca en el clásico tardío (ca. 450-650*

dC). Tesis de licenciatura en arqueología, Centro Universitario UAEMex Tenancingo, Tenancingo, Estado de México.

García Payón, José

1936 *La zona arqueológica de Tecaxic-Calixtlahuaca y los matlatzincas: etnología y arqueología (primera parte)*. Talleres Gráficas de la Nación.

1979 *La zona arqueológica de Tecaxic-Calixtlahuaca y los matlatzincas (textos de la segunda parte) XXX*. Toluca, Estado de México: Biblioteca Enciclopédica del Estado de México.

García Payón, José, Mario Colín, Wanda Tomassi & Leonardo Manrique

1974 *La zona arqueológica Tecaxic-Calixtlahuaca y los matlatzincas: pt. Etnología y arqueología: Textos 2*. Biblioteca Enciclopédica del Estado de México.

García-Palomo, Armando, José Luis Macías, José Luis Arce, Lucia Capra, Victor Hugo Garduño & Juan Manuel Espíndola

2002 *Geology of Nevado de Toluca Volcano and Surrounding Areas, Central Mexico. Map and Charts Series*, pp. 1-48. Geological Society of America.

García-Palomo, Armando, José Luis Macías & Victor Hugo Garduño

2000 *Miocene to Recent Structural Evolution of the Nevado de Toluca Volcano Region, Central Mexico, Tectonophysics* 318(1-4): 281-302.

Giannini, Humberto

2004 *La "reflexión" cotidiana: Hacia una arqueología de la experiencia*. Editorial Universitaria El saber y la cultura.

Graulich, Michel

1981 *The Metaphor of the Day in Ancient Mexican Myth and Ritual, Current Anthropology* 22(1): 45-60.

Hirth, Kenneth G.

1978 *Problems in Data Recovery and*

*Measurement in Settlement Archaeology, Journal of Field Archaeology* 5(2): 125-131.

Hirth, Kenneth G., Gregory Bondar, Michael D. Glascock, A. J. Vonary & Thierry Daubenspeck

2006 *Supply-Side Economics: An Analysis of Obsidian Procurement and the Organization of Workshop Provisioning*. In K. G. Hirth (ed.), *Obsidian Craft Production in Ancient Central Mexico. Archaeological Research at Xochicalco*, pp. 115-136. University of Utah Press.

Jaimes, Gustavo

2011 *La industria de obsidiana de San Mateo Atenco y su relación con el modo de subsistencia lacustre durante el Clásico y el Epiclásico*. Tesis de licenciatura en arqueología, Universidad Autónoma del Estado de México, Tenancingo, Estado de México.

Jaimes, Gustavo, Yoko Sugiura & Rubén Nieto

2019 *Objetos cerámicos de intercambio antes del ocaso de Teotihuacan Clásico*. In Y. Sugiura, G. Jaimes, C. Pérez & K. Hernández (eds.), *Cerámica y vida cotidiana en la sociedad lacustre del Alto Lerma en el Clásico y Epiclásico (ca. 450-950 d.C.)*, El Colegio Mexiquense A.C.

Jones, Sian

1996 *Discourses of Identity in the Interpretation of the Past*. In P. Graves-Brown, S. Jones & C. Gamble (eds.), *Cultural Identity and Archaeology. The Construction of European Communities*, pp. 62-80. Routledge.

Kabata, Shigeru

2009 *El abastecimiento y la industria de obsidiana en Santa Cruz Atizapán*. In Y. Sugiura (ed.), *La gente de la ciénaga en tiempos antiguos: La historia de Santa Cruz Atizapán*, pp. 243-260. El Colegio Mexiquense A.C. Universidad Nacional Autónoma de México.

2010 *La dinámica regional entre el valle de Toluca y las áreas circundantes: Intercambio antes y después de la caída de Teotihuacan*. Tesis de doctorado en Antropología, Universidad Nacional

Autónoma de México, México.

Kopytoff, Igor

- 1986 The Cultural Biography of Things: Commoditization as Process. In A. Appadurai (ed.), *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*, pp. 64-94. Cambridge University Press.

Lastra, Yolanda

- 1992 *El otomí de Toluca*. México: Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México.

López Austin, Alfredo

- 1990 *Los mitos del Tlacuache: caminos de la mitología mesoamericana*. Alianza Editorial Mexicana.
- 1994 *Tamoanchan y Tlalocan*. Fondo de Cultura Económica.

Lozano, Socorro, Susana Sosa, Margarita Caballero, Beatriz Ortega & Francisco Valadez

- 2009 El paisaje lacustre del valle de Toluca. Su historia y efectos sobre la vida humana. In Y. Sugiura (ed.), *La gente de la ciénaga en tiempos antiguos: La historia de Santa Cruz Atizapán*, pp. 43-61. El Colegio Mexiquense A.C. Universidad Nacional Autónoma de México.

Lozano, Socorro, Susana Sosa, Yoko Sugiura & Margarita Caballero

- 2005 23,000 yr of Vegetation History of the Upper Lerma Basin, a Tropical High-Altitude Basin in Central Mexico, *Quaternary Research* 64(1): 70-82.

Macías, José Luis, P.A. García, José Luis Arce, C. Siebe, J.M. Espíndola, J.C. Komorowski & K. Scott

- 1997 Late Pleistocene-Holocene Cataclysmic Eruptions at Nevado de Toluca and Jocotitlan Volcanoes, Central Mexico, *Brigham Young University Geology Studies* 42(1): 493-528.

Manzanilla, Linda

- 2003 El proceso de abandono de Teotihuacan y su reocupación por grupos epiclásicos, *TRACE* 43: 70-76.

Martínez, Diana

- 2007 *Subsistencia mixta en el Montículo 20b, La Campana-Santa Cruz Atizapán, Estado de México*. Tesis de maestría en antropología, Universidad Nacional Autónoma de México, México.

Martínez, Diana & Emily McClung

- 2009 Las plantas como recurso en Santa Cruz Atizapán. In Y. Sugiura (ed.), *La gente de la ciénaga en tiempos antiguos: La historia de Santa Cruz Atizapán*, pp. 175-194. El Colegio Mexiquense A.C. Universidad Nacional Autónoma de México.

Morales Ríos, Mónica Silvy

- 2017 *Evaluación biocultural: el proceso salud-enfermedad, las huellas de actividad física y las prácticas funerarias, en San Mateo Atenco y Santa Cruz Atizapán, periodo Epiclásico (650/700 a 900 D.C.)*. Tesis de maestría en antropología, Universidad Nacional Autónoma de México, México.

Muñoz, María de Lourdes, Minerva Janini Mejía-Rangel, Miguel Moreno & Yoko Sugiura

- 2014 Purificación, ampliación y análisis filogenético de secuencias de DNA mitocondrial de los pobladores del valle de Toluca. Paper presented at the XXX Mesa Redonda de la Sociedad Mexicana de Antropología "El bajío y sus regiones vecinas. Acercamientos históricos y antropológicos", México.

Nichols, Deborah L., Elizabeth M. Brumfiel, Hector Neff, Mary Hodge, Thomas H. Charlton & Michael D. Glascock

- 2002 Neutrons, Markets, Cities, and Empires: A 1000-Year Perspective on Ceramic Production and Distribution in the Postclassic Basin of Mexico, *Journal of Anthropological Archaeology* 21(1): 25-82.

Nuñez, Elide

- 2019 *Análisis formal y estilístico de los braseros de Santa Cruz Atizapán. Continuidad, innovación y cambio del Clásico tardío al Epiclásico*. Tesis de maestría en antropología, Posgrado en Antropología, Facultad de Filosofía y Letras, Universidad Nacional Autónoma



- de México, México.
- Obregón, Mauricio, Rocío Hernández & Luis Barba  
2019 Análisis de residuos químicos de las ollas, cazuelas, comales y cajetes de factura local y su interpretación. In Y. Sugiura, M. d. C. Pérez, G. Jaimes & K. Hernández (eds.), *Cerámica y vida cotidiana en la sociedad lacustre del Alto Lerma en el Clásico y el Epiclásico*. El Colegio Mexiquense A.C.
- Pérez, Ma del Carmen  
2002 *Determinación de la función de la cerámica arqueológica en el sitio de Santa Cruz Atizapán, Estado de México por medio del análisis químico*. Tesis de licenciatura en arqueología, Escuela Nacional de Antropología e Historia, México.  
2009 Análisis químicos para identificar la función de la cerámica en Santa Cruz Atizapán. In Y. Sugiura (ed.), *La gente de la ciénaga en tiempos antiguos: La historia de Santa Cruz Atizapán*, pp. 231-242. El Colegio Mexiquense A.C. Universidad Nacional Autónoma de México.  
2011 *Reflexiones en torno al estilo decorativo Coyotlatelco: el caso de la cerámica de Santa Cruz Atizapán*. Tesis de maestría en estudios mesoamericanos, Universidad Nacional Autónoma de México.  
2017 *La cerámica Coyotlatelco en el valle de Toluca: un análisis morfo-funcional y estilístico*. Tesis de doctorado en estudios mesoamericanos, Universidad Nacional Autónoma de México.
- Pérez, Ma del Carmen, Kenia Hernández & Mauricio Obregón  
en proceso Aproximación al uso cotidiano de recipientes cerámicos a partir del estudio sistemático de residuos químicos, Santa Cruz Atizapán en el valle de Toluca. In Y. Sugiura, R. Nieto & G. Jaimes (eds.), *Cerámica y vida cotidiana II. Estudios arqueométricos de la cerámica de Santa Cruz Atizapán*, El Colegio Mexiquense A.C.
- Piña Chán, Román  
1967 Un complejo Coyotlatelco en Coyoacán, México, D.F., *Anales de Antropología* 4(1): 141-160.
- 1975 *Teotenango, el antiguo lugar de la muralla. Memoria de las excavaciones arqueológicas*. 2 vols. Gobierno del Estado de México, Dirección de Turismo.
- Quezada, Noemí  
1972 *Los matlatzincas: Época prehispánica y época colonial hasta 1650*. Departamento de Investigaciones Históricas-Instituto Nacional de Antropología e Historia.  
1977 Creencias tradicionales sobre embarazo y parto, *Anales de Antropología* 14(1): 307-326.
- Rattray, Evelyn  
1966 An Archeological and Stylistic Study of Coyotlatelco Pottery, *Mesoamerican Notes* 7-8: 87-211.
- Rodríguez de Shadow, María  
2000 *La mujer azteca*. Colección Historia 6. Universidad Autónoma del Estado de México.
- Sahagún, Fray Bernardino De  
2000 *Historia general de las cosas de la Nueva España*. Consejo Nacional para la Cultura y las Artes.
- Sanders, William T.  
1956 The Central Mexican Symbiotic Region: A Study in Prehistoric Settlement Patterns. In G. Willey (ed.), *Prehistoric Settlement Patterns in the New World* (Viking Fund Publications in Anthropology, vol. 23) , pp. 115-127. Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research.
- Sanders, William T., Jeffrey R. Parsons & Robert S. Santley  
1979 *The Basin of Mexico: The Cultural Ecology of a Civilization*. Academic Press.
- Schiffer, Michael B.  
1972 Archaeological Context and Systemic Context, *American Antiquity* 37(2): 156-165.
- Schumann, Otto  
1975 Notas sobre la lengua ocuilteca y

- sus relaciones. In R. Piña Chan (ed.), *Teotlanango: el antiguo lugar de la muralla. Memorias de las excavaciones arqueológicas*, pp. 528-539. Dirección de Turismo, Gobierno del Estado de México.
- Silis, Omar
- 2005 *El ritual lacustre en los islotes artificiales de la ciénaga de Chignahuapan, Santa Cruz Atizapán, Estado de México*. Tesis de licenciatura en arqueología, Escuela Nacional de Antropología e Historia, México.
- Smith, Michael E.
- 2011 Calixtlahuaca. In Y. Sugiura (ed.), *Historia General Ilustrada del Estado de México*, vol. 1. Biblioteca Mexiquense del Bicentenario Toluca.
- 2015 Calixtlahuaca: capital del antiguo Matlatzinco. In F. Guerrero & A. L. Elías (eds.), *El patrimonio arqueológico de Toluca: herencia milenaria*, pp. 87-104. Colección Identidad/Historia. Fondo Editorial Estado de México.
- 2017 Aztec Urbanism: Cities and Towns. In D. Nichols & E. Rodríguez-Alegría (eds.), *The Oxford Handbook of the Aztecs*, pp. 201-218. Oxford University Press.
- Solar, Laura
- 2006 El fenómeno Coyotlatelco en el centro de México: consideraciones en torno a un debate académico. In L. Solar (ed.), *El fenómeno Coyotlatelco en el centro de México: tiempo, espacio y significado. Memoria del primer seminario-taller sobre problemáticas regionales*, pp. 1-16. Consejo Nacional para la Cultura y las Artes. Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- Soustelle, Jacques
- 1961 *Daily Life of the Aztecs*. Weindfeld & Nicolson.
- 1996 *El universo de los aztecas*. Fondo de Cultura Económica.
- Stoner, Wesley
- 2015 *Provenance Investigation for Uncommon Ceramics Found in the Toluca Valley*. Archaeometry Laboratory Research Reactor Centre. University of Missouri.
- Stoner, Wesley & Michael D. Glascock
- 2013 *Neutron Activation Analysis of Coyotlatelco Ceramics from the Toluca Valley and the Basin of Mexico*. Archaeometry Laboratory Research Reactor Centre. University of Missouri.
- 2014 *Neutron Activation Analysis of Coyotlatelco Ceramics from the Toluca Valley and the Basin of Mexico. Addendum to 2013*. Archaeometry Laboratory Research Reactor Centre. University of Missouri.
- Stoner, Wesley, Yoko Sugiura & Ma del Carmen Pérez
- 2014 Uniformidad regional y multilocalidad en la producción del Coyotlatelco: el caso del valle de Toluca. Paper presented at the VIII Coloquio Bosch-Gimpera "Relaciones entre las diferentes áreas de Mesoamérica con énfasis en las relaciones con Teotihuacan, México.
- Sugiura, Yoko
- 1975 Ceramic relationship between Ojo de Agua, State of Mexico, and Teotihuacan. Paper presented at the SAA Meeting, San Louis, Missouri.
- 1977 *Proyecto arqueológico Valle de Toluca*. Archivo Técnico del Departamento de Monumentos Prehispánicos del Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- 1981 *Informe de la segunda temporada de campo del Proyecto Arqueológico valle de Toluca*. Consejo Nacional de Arqueología, Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- 1996 La tecnología de lo cotidiano. In S. Lombardo & E. Nalda (eds.), *Temas mesoamericanos*, Instituto Nacional de Antropología e Historia/Consejo Nacional para la Cultura y las Artes.
- 1997 *Proyecto Arqueológico de Santa Cruz Atizapán*. Consejo de Arqueología del Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- 2005 *Y atrás quedó la ciudad de los Dioses: Historia de los asentamientos en el valle de Toluca*. Universidad Nacional Autónoma de México.

- 2006 ¿Continuidad o discontinuidad entre la cerámica teotihuacana y el Coyotlatelco?: una reflexión desde el valle de Toluca. In L. Solar (ed.), *El fenómeno Coyotlatelco en el Centro de México: tiempo, espacio y significado: Memoria del primer seminario-taller sobre problemas regionales*, pp. 127-162. Consejo Nacional de Cultura y Artes. Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- 2013 Reflexiones en torno a los problemas del Epiclásico y el Coyotlatelco. In C. Pomédio, G. Pereira & E. Fernández-Villanueva (eds.), *Tradiciones cerámicas del Epiclásico en el Bajío y regiones aledañas* (BAR International Series 2519), pp. 105-114. BAR.
- Sugiura, Yoko & Gustavo Jaimes  
2019 Grupo Pseudoanaranjado delgado: ¿una imitación del Anaranjado delgado, cerámica emblemática de Teotihuacan? In Y. Sugiura, G. Jaimes, C. Pérez & K. Hernández (eds.), *Cerámica y vida cotidiana en la sociedad lacustre del Alto Lerma en el Clásico y Epiclásico (ca. 450-950 d.C.)*, El Colegio Mexiquense A.C.
- Sugiura, Yoko, Gustavo Jaimes, Carmen Pérez & Kenia Hernández  
2019 *Cerámica y vida cotidiana en la sociedad lacustre del Alto Lerma en el Clásico y el Epiclásico (cerca 500-950 dC)*. El Colegio Mexiquense A.C.
- Sugiura, Yoko & Omar Silis  
2009 Figurillas, adornos de braseros, pesas de red y su significado en el ritual lacustre de Santa Cruz Atizapán. In Y. Sugiura (ed.), *La gente de la ciénaga en tiempos antiguos: La historia de Santa Cruz Atizapán*, pp. 261-284. El Colegio Mexiquense A.C. Universidad Nacional Autónoma de México.
- Sugiura, Yoko, Liliana Torres, Mariana Covarrubias & Mauro de Ángeles  
2003 La muerte de una joven en parto y su significado en la vida lacustre: El entierro 5 en el islote 20, la Ciénaga de Chignahuapan, Estado de México, *Anales de Antropología* 37(1): 39-69.
- Sugiura, Yoko, César Villalobos, Ma del Carmen Pérez & Elizabeth Zepeda  
2015 Una mirada hacia el proceso de identidad en el valle de Toluca precortesiano, México, *Revista de Indias* 75(264): 289-322.
- Sugiura, Yoko, César Villalobos & Elizabeth Zepeda  
2013 Biografía cultural de la cerámica arqueológica desde la perspectiva de la materialidad: el caso del valle de Toluca, *Anales de Antropología* 47(2): 63-90.
- Terreros, Martín  
2013 *Una aproximación a la alimentación por medio del análisis de residuos químicos y FRX de comales provenientes de un sitio lacustre, Santa Cruz Atizapán (550-900 d.c.)*. Tesis de licenciatura en arqueología, Escuela Nacional de Antropología e Historia, México.
- Torres, Liliana  
2004 *Informe final del análisis osteológico de los restos óseos humanos del Proyecto Santa Cruz Atizapán, Estado de México (temporadas 79, 97, 2000 y 2001)*. Documento interno del Proyecto Arqueológico de Santa Cruz Atizapán. México: Instituto de Investigaciones Antropológicas de la Universidad Nacional Autónoma de México.
- Tozzer, Alfred M.  
1921 *Excavation of a Site at Santiago Ahuizotla, D.F. Mexico*. Bureau of American Ethnology, Bulletin, 74. Smithsonian Institution.
- Valadez, Raúl & Bernardo Rodríguez  
2009 Los restos zoológicos de Santa Cruz Atizapán. In Y. Sugiura (ed.), *La gente de la ciénaga en tiempos antiguos: La historia de Santa Cruz Atizapán*, pp. 195-229. El Colegio Mexiquense A.C. Universidad Nacional Autónoma de México.
- Vargas, Luis Alberto & Eduardo Matos  
1973 El embarazo y el parto en el México prehispánico, *Anales de Antropología* 10: 297-310.

Velázquez, Seidy Guadalupe

- 2015 *Una aproximación al estado nutricional de la población prehispánica de San Mateo Atenco y Santa Cruz Atizapán, durante el Clásico tardío y Epiclásico: análisis de restos óseos por FRX*. Tesis de licenciatura en arqueología, Centro Universitario Tenancingo, Universidad Autónoma del Estado de México, Tenancingo, Estado de México.

Vergara, Nelson

- 2011 *Cotidianidad y significación: aproximaciones al tema de la memoria desde el pensamiento de Humberto Giannini, Desarrollo e Meio Ambiente* 23: 59-66.

Viesca, Carlos

- 1984 *Prevención y terapéuticas mexicas*. In F. Martínez Cortés (ed.), *Historia general de la medicina en México. Tomo I México antiguo*, pp. 201-216. Universidad Nacional Autónoma de México.

Wallerstein, Immanuel

- 1979 *El moderno sistema mundial I: La agricultura capitalista y los orígenes de la economía-mundo europea en el siglo XVI*. Siglo Veintiuno.

Wright, David Charles

- 2005a *Lengua, cultura e historia de los otomíes, Arqueología Mexicana* 73: 26-29.
- 2005b *Los otomíes: cultura, lengua y escritura. Volumen 1: texto*. Tesis de doctorado en ciencias sociales, El Colegio de Michoacán, Zamora, Michoacán.

# Human Groups and Waterscapes in Ancient Society: Archaeology of the Valley of Toluca, Central Mexico

Yoko SUGIURA\*

The Valley of Toluca is located to the west of the Basin of Mexico, where the capital of Mexico is situated. The history of this high-altitude basin goes back more than 3000 years. The valley has, also, been known for the presence of the three shallow water ecosystems located in the eastern portion of the valley.

Throughout their history, human groups settled in the valley have strong relationships with their surrounding lacustrine environment which constitutes deep rooted identity of the people of Toluca Valley. During the second half of the Classic period, ancient people colonized these shallow water ecosystems. The lacustrine culture flourished during the Epiclassic period, but towards the end of the same period the changes on environmental conditions, provoked by the increase of water levels, forced them to abandon their lacustrine settlements.

Archaeological materials show that these people received strong cultural influences of the adjacent Basin of Mexico, particularly of Teotihuacan. Based on the materials recovered from the excavations at Santa Cruz Atizapan, the article focuses on the ancient people who lived on man-made islet, from the perspective of the quotidian life, proposed by Giannini. It discusses how they lived their daily life in the marshland, highlighting its particular lifestyle and its complexity. These aspects are crucial for understanding the course of the history of Toluca Valley.

## **Keywords:**

Central Highland of Mexico, Valley of Toluca, Classic period, Epiclassic period, Teotihuacan legacy, lacustrine mode of life.

\* El Colegio Mexiquense

# 周辺の独自性

— トルカ盆地南東部とテオティワカンの黒曜石交易システム —

嘉幡 茂\*

古代メソアメリカ社会における黒曜石は重要な資源の1つであった。初期国家テオティワカンでは、この石材の原産地を支配し成熟した交易システムが確立していた。しかし、先行研究では周辺地域のダイナミズムを考慮せず、テオティワカンを中心に交易システムを復元する視点が一般的である。また、近年メソアメリカ考古学の分野では世界システム理論が援用され、中央対周辺という構図から周辺地域の政治・経済的重要性を分析する観点に注目が集まっている。しかし、本稿ではこの枠組みからではなく周辺対周辺の交流という観点から、周辺のダイナミズムを明らかにする。

上記の中央から支配される周辺の独自性について、黒曜石の獲得システムやその利用価値から考察する。そのため、トルカ盆地に位置するサンタ・クルス・アティサパン遺跡から出土した黒曜石遺物の肉眼及び空間分析を行う。

結果、テオティワカンに従属する交易システムのみならず、周辺地域が主体的に構築したシステムの存在を指摘する。つまり、トルカ盆地はテオティワカンの支配下にありながらも、決して中央のみに依存する静的な存在ではないことが分かる。最終的に、このような独自の交易システムの確立が、テオティワカンの崩壊後も継続した社会の安定を維持しえた結論付ける。

## Key Words

古代メキシコ  
テオティワカン  
トルカ  
黒曜石  
交易システム

## 目次

- I はじめに
- II メキシコ中央高原における黒曜石の供給地変化とトルカ盆地の役割
  - 1. テオティワカン崩壊による黒曜石の供給地変化
  - 2. トルカ盆地の地政学的及び研究対象としての重要性
- III サンタ・クルス・アティサパン遺跡の黒曜石資料と分析方法
  - 1. 遺跡の性格と黒曜石資料の出所
  - 2. 分析の方法と目的
- IV 黒曜石の供給地変化
  - 1. 肉眼分析の結果
  - 2. 原産地別の供給パターン
- V 石器組成及び空間分析から見る黒曜石の利用
  - 1. 石器組成と空間分析の結果
  - 2. サンタ・クルス・アティサパン遺跡における黒曜石の利用価値
- VI トルカ盆地の独自戦略

# I はじめに

古代メソアメリカ社会における黒曜石は、生活必需品以上の利用価値が与えられていた。経済的には、短距離・遠距離交易を通して交換される市場価値が挙げられ、社会的には、王権のシンボルを象徴する威信財、そして宗教的には、エリート階級の人々によって執り行われる儀礼用のアイテムとして利用されていた。上記の多様な利用価値からも推測できるように、この石材や製品の獲得・生産・流通活動は、古代メソアメリカ社会で大規模に行われ(Cobean 2002: 26)、各地域間の交流を促進させる1つの要因であった。

これに関して、メキシコ中央高原の紀元前1世紀頃から後7世紀頃まで機能していた初期国家テオティワカン(Teotihuacan)も例外ではない。この都市ではより積極的な戦略が採られ、為政者たちによって黒曜石交易は一大事業として政治・経済的にコントロールされていた(Charlton & Spence 1982: 60-64; Millon 1973: 57; Santley 1983; Santley & Arnold 2004; Spence 1981, 1984, 1987)。具

体的には、テオティワカンは、近郊にあるオトゥンバ(Otumba)及びパチューカ(Pachuca)の黒曜石原産地(図1)を支配下におき、獲得・生産・流通といった一連の活動を制御していた。同時に、このような組織化された事業は、テオティワカンの経済的繁栄を担い(Charlton 1984; Santley 1983, 1984)、その富の蓄積が古典期(後200～600年)の間、メキシコ中央高原一帯に覇権をもたらす要因の1つであったと考えられている(Santley & Alexander 1996)。

遠距離交易に関して述べると、オアハカ盆地そしてマヤ地域出土のパチューカ原産黒曜石に注目したサントリー(Santley 1983, 1984)は、テオティワカンが発達した交易システムを確立させていたと主張する。そして、この遠距離交易が、テオティワカンに大きな利益をもたらした。しかし、この大規模な経済活動を疑問視する研究者もいる。特にマヤ地域におけるサントリーの形式主義的な観点を批判する声があがっている。マンサニージャ(Manzanilla 1992)は、ティカル(Tikal)遺跡で出土した黒曜石の内の僅か1.6%がパチューカ原産地であるという報告、そして、マヤ地域の各遺跡で見られる黒曜石の出土パターンが、市場原理より

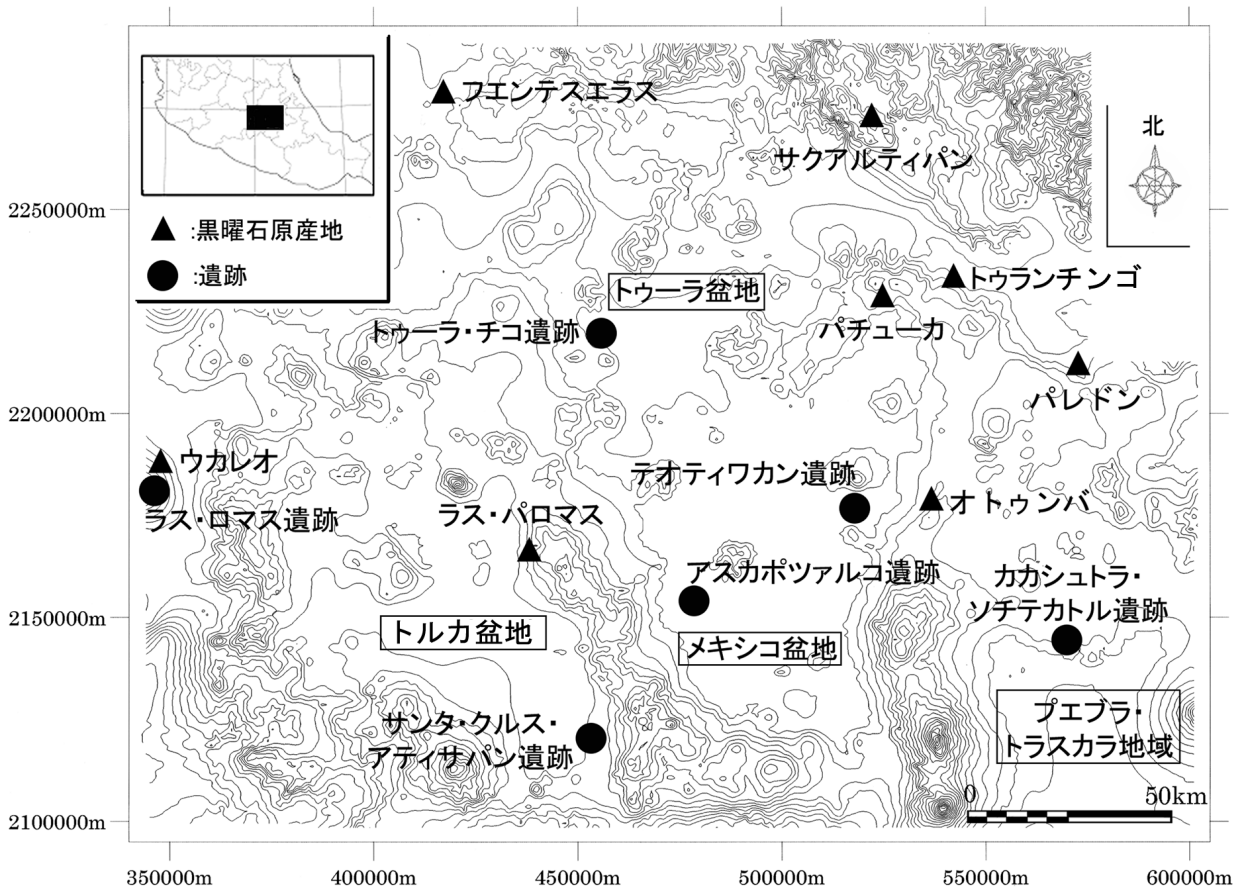


図1 メキシコ中央高原に位置する黒曜石原産地と主要遺跡

\* 京都外国語大学

も再分配の形態に基づいているという主張 (Sidrys 1976) を援用し、マヤ地域における遠距離交易がテオティワカンに実益をもたらすものではないと指摘している。さらに、スペンス (Spence 1996) はマンサニージャの主張を補強する。彼は、マヤ地域の各遺跡から出土するパチューカ原産の黒曜石製製品の出土状況に着眼し、その大部分は宗教儀礼品や埋葬墓などからの副葬品であるとし、商業用としてよりもテオティワカンの為政者からの贈与品であると結論付けている。このような現状を考慮し、先述のサントリーとアレクサンダー (Santley & Alexander 1996: 190-194) は、マヤ地域での黒曜石における遠距離交易の存在を否定しないが、テオティワカンが受けた経済余剰価値は低かったと修正している。

一方、テオティワカン盆地やその周辺地域であるメキシコ中央高原内での近距離交易に関しても、ドレンナ (Drennan *et al.* 1990) はメキシコ盆地以外でのテオティワカンによるこの活動が、経済的な利益を目的としたものではなく、むしろテオティワカンの為政者たちにとって社会・政治的な宣伝効果を狙ったものであると結論付けている<sup>1</sup>。

各研究者の相違点は、遠距離交易であれ近距離交易であれ、黒曜石の出土量およびコンテキストを考慮して、その解釈が実体主義的であるのか、あるいは、形式主義的であるのかにある<sup>2</sup>。他方、見解の一致は、テオティワカンがこれらの交易活動を管理していたと主張するところにある。しかしながら、いずれの主張が正しいとしても、従来指摘されてきたテオティワカンの黒曜石獲得、及びその生産や流通システムが、国家によって規制され大規模であったとの解釈には修正が迫られている (e.g. Clark 1986)。

このような解釈が支配的であるのは、研究が2つの方向に偏っていることに拠る。まず、テオティワカンではパチューカとオトゥンバ原産地の黒曜石が大量に出土しているため、これらの原産地黒曜石のみを対象とした分析から、交易システムの復元を行ってきた点にある。カルバージョ (Carballo *et al.* 2007) は、オヤメレス (Oyameles) やパレドン (Paredon) そしてトゥランチンゴ (Tulanchingo) 原産地の黒曜石も、テオティワカンに搬入されていた事実を理化学分析から指摘し、オトゥンバとパチューカ原産地のみが供給源ではなく、より複

雑な獲得システムが存在していたと指摘している。特に、オヤメレスは、テオティワカンの支配圏外に位置しているため、単純に黒曜石の獲得が国家によって管理されていたとは言えなくなる。確かに、先行研究はテオティワカンが黒曜石に関する活動のすべてを統制していたわけではなく、他の獲得・生産・流通システムが存在していたことを指摘している (e.g. Spence 1987: 442-445)。しかしながら、現状では、黒曜石に関する活動をポリティカル・エコノミーの視点から解釈することが一般的である。

メイスンとペレサ (Masson & Perez Lopez 2004) は、古代社会において一般階層の人々が重要な役割を果たしていたことを指摘している。さらにマーカス (Marcus 2004) は、彼らは決して均質な存在でもなく、また単にエリートによって支配される静的な存在でもないことを指摘し、社会を構成する重要な成員であったと主張する。このような一般階層という概念を、単にエリート対一般として対極に位置付けず、後者の主体性を認識し、当時の黒曜石活動について考察する視点が欠如している。

2 点目は、テオティワカンという中央から周辺を解釈する視点が優勢であることを指摘できる。テオティワカンやこれが支配する衛星都市を中心として、パチューカとオトゥンバ原産地の石核や黒曜石製製品が各地域に流通していたと主張するサントリーとアレクサンダー (Santley & Alexander 1996) のモデルは顕著な例である。確かにこのような流通システムが存在していたかもしれないが、テオティワカンの周辺地域の動向を忘れてはならない。テオティワカンが位置するメキシコ盆地は、トルカ盆地、モレロス盆地、プエブラ・トラスカラ地域、トゥーラ盆地と隣接している。これら各地域は、テオティワカンの統治下にありながらも、独自の社会発展があったことを看過してはならず、地域レベルでの歴史性を考慮する視点が求められる (e.g. Kabata 2007; Sugiura 2006)。以下で述べるように、続古典期 (後 600 ~ 900 年) に認められる中央高原全体の社会再編成は、この古代都市テオティワカンを中心とした研究のみでは解明することができない。

マヤ地域とテオティワカンの政治・経済的關係について再考したブラスウェル (Braswell 2003a) は、両者の関係を解明

1 しかしながら、筆者は、必ずしもメキシコ中央高原全体にドレンナの主張が援用できるわけではないと考える。この論考では、まず、食料や生活必需品を扱う場合に得られる実益を、人力による陸上輸送コストの面から考察し、輸出处から半径 275km 圏内に有効射程距離であると指摘する。その後、テオティワカンから見てこの圏内に位置するテワカン盆地で実施された発掘調査データを用い、黒曜石の出土量及び出土状況を分析している。筆者は、テワカン盆地内のケーススタディーのみに基づき、テオティワカンのメキシコ中央高原全体における黒曜石の活動を解釈する類推に問題があると考え。例えば、ハース (Hirth 2006: 289-290) は、モレロス州にあるミアワトラン遺跡 (Miahuatlan) におけるパチューカ原産の黒曜石の出土量が、他の原産地のものと比較して大部分であったことを指摘している。これは、ドレンナの解釈と一致しないケースである。

2 テオティワカンの経済システムが、基本的に再分配であったのか市場交換であったのか議論は一致していない (e.g. Manzanilla 1992; Millon 1992: 376-382)。筆者は、テオティワカンの経済システムとして、両者が補完しながら機能していたと考えている。



するためには、従属論の影響を受けている近代世界システム論的な中心対周辺といった静的な観点ではなく、様々な地域が1つの相互ネットワークを構成していたとする動的な観点からのアプローチが必要であると述べる。この指摘は、何もマヤ地域とテオティワカンのような政治組織が異なり、地理的に広範囲を覆う領域を研究する際にのみ適用可能なのではない。本稿が対象とするトルカ盆地とテオティワカンの関係を考察する際にも有効である。

本稿の研究目的は、上述の視点に基づき、テオティワカン崩壊後、周辺地域（特にトルカ盆地）がどのように新たな社会秩序を形成するに至ったのかを解明することにある。この実践の一例として、トルカ盆地における黒曜石交易システムの復元に焦点を当てる。同盆地内に位置するサンタ・クルス・アティサパン (Santa Cruz Atizapán) 遺跡から出土した黒曜石の分析を通し、この地域がテオティワカンの支配を受けながらも、石材及び製品の獲得や流通に独自の戦略を採用していたことを指摘する。さらに、この地域戦略は、続古典期のメキシコ中央高原で広く分布するミチョアカン州ウカレオ (Ucareo) 原産地の黒曜石の出現にも影響を与えていた可能性が高いことを述べる。最終的に、周辺地域ではこのような地域戦略がテオティワカン崩壊による社会混乱から免れ、連続した発展を維持しえたとのモデルを提供する。

## II メキシコ中央高原における黒曜石の供給地変化とトルカ盆地の役割

### 1. テオティワカン崩壊による黒曜石の供給地変化

メキシコ中央高原の続古典期は社会変動の時代であり、テオティワカンの覇権喪失と、この時期に台頭してきた勢力による新たな政治秩序の形成と発展が認められる (Sugiura 2001)。その一例に、黒曜石の供給地変化が挙げられる。テオティワカンの崩壊により、それまでメキシコ中央高原で大多数を占めていたパチューカとオトゥンバ原産黒曜石の出土は減少する。代わって、ウカレオ原産の黒曜石が広く利

用される (e.g. Braswell 2003b: 139; Charlton & Spence 1982: 60-67; Cobean 2002: 202-204; Hirth *et al.* 2003; Sorensen *et al.* 1989)。

テオティワカンがオトゥンバ及びパチューカ地域を政治・経済的にコントロールしていたことにより、古典期ではメキシコ中央高原内におけるこれらの広い流通を問題なく理解できる。また、この巨大都市の覇権失墜により、これらを流通させていたシステムが破綻し、続古典期には両原産地の黒曜石が利用されなくなったことは合理的である。

しかしながら、問題は、テオティワカンの崩壊後、何故そしてどのようにウカレオ原産地の黒曜石が、先の両原産地の黒曜石に取って代わったのかである。この問題は2つの点から考える必要がある。1つ目は、他の黒曜石供給地と比較して、この黒曜石流通の優勢には、かつてオトゥンバやパチューカがそうであったように、テオティワカンのようなある中央集権的な政体が関与していたのか。2つ目は、テオティワカンの崩壊後にこの黒曜石の優勢を得るため、どのように流通システムが発展したのか。

前者に関して、ウカレオ地域を支配していたと考えられる政体は存在していない。この地域を調査したヒーラン (Healan 1997: 95-96) は、古典期後期 (後450～600年) から続古典期の間、ウカレオ盆地に隣接するラス・ロマス (Las Lomas) 遺跡が他の集落よりも大規模であったと報告している。しかし、これは地方都市センターのように周辺地域を支配するほどの勢力を持っていなかった (Hirth 2006: Note 6)。ハース (Hirth 2006: 291) は、ウカレオ原産地はある特定の政体によって支配されず、地方の諸集団が共有して管理を行っていたとの見解を示している。

2つ目の点について答えるのは困難である。しかしながら、テオティワカンがオトゥンバ及びパチューカの黒曜石をメキシコ中央高原に流通させていた時期から、ウカレオのものが各地域でも少数ながら利用されていた報告 (Hirth 2008, 2009) から判断すると、この黒曜石の流通システムの萌芽は、遅くとも古典期後期にまでさかのぼる可能性がある。

このように、続古典期におけるウカレオ原産黒曜石の流通基盤には不明な点が多い。それは、黒曜石の供給システム変化についての研究が、充分に行われてこなかったことに起因する。テオティワカン崩壊前後を対象にした通時的研究、またテオティワカンとその周辺地域を射程とする共時的研究が必要である。また、先に述べたように、古典期におけるテオティワカンの黒曜石研究が、テオティワカン中心主義の観点で分析されてきたことも一因である。このような背景において、黒曜石の供給地変化についての問題を解決するため

に、テオティワカンの支配下にあったトルカ盆地を事例として検討する。

## 2. トルカ盆地の地政学的及び 研究対象としての重要性

黒曜石の供給地変化を見る場合、トルカ盆地を研究対象とすることは、以下の2点で合理的である。

トルカ盆地はテオティワカンの発展に伴い、早くからその支配下に置かれていた(Sugiura 2005b: 293-294)。テオティワカンがこの盆地を支配するメリットは、豊富な水産資源に恵まれ、また、穀物の生産性が高い点にある。ここを支配すれば当時人口密度の高かったテオティワカンに十分な食料を供給することが可能となる。さらに、トルカ盆地は、ミチョアカン州をメキシコ盆地と結ぶのみならず、ゲレロ州やモレロス州そしてケレタロ州への人や物資の往来に欠かせない戦略上の要所に位置している。その結果、この地域におけるテオティワカンの政治的・文化的影響は、土器様式、土偶のモチーフ、建築スタイルなどの考古学データ(Covarrubias 2003; Figueroa 2006; Silis 2005)に表れ、テオティワカンとトルカ盆地の関係は、他のメキシコ中央高原の各地域よりもより密接であった(Sugiura 1998b: 108)。

上記の関係から、テオティワカン方面から流通してくるオトゥンバとパチューカ原産の石材及び製品も、豊富であったことが想像できる。一方、テオティワカンの崩壊後、トルカ盆地がテオティワカンからの黒曜石供給に深く依存していたのであれば、その反動は激しく、続古典期にはこれらの黒曜石の出土量は激減することが想定される。

研究対象地としてのもう1点の妥当性は、ミチョアカン州とこのトルカ盆地が隣接しており、他のメキシコ中央高原へウカレオ原産地の黒曜石を供給する場合、この盆地を経由する必要があることである(González 1999: 58)。従って、先述したこの黒曜石が古典期後期からメキシコ中央高原に流通していたことを考慮すると、トルカ盆地内でも、その出土が認められるはずである。同盆地内において、テオティワカン崩壊前後の様々な原産地の黒曜石の出土量や出土状況を比較することにより、ウカレオ黒曜石の供給が、どのように変化していったのかを理解できるだろう。

このように、テオティワカン支配を受けていたトルカ盆地におけるオトゥンバとパチューカ、そしてウカレオ原産地の黒曜石の相対的比率を分析することは、後者の黒曜石が続古典期に優位性を確保していった過程を解明する有効な方法と考える。

## Ⅲ サンタ・クルス・アティサパン遺跡の黒曜石資料と分析方法

### 1. 遺跡の性格と黒曜石資料の出所

本稿で分析対象となる黒曜石は、すべてトルカ盆地南東部に位置するサンタ・クルス・アティサパン遺跡(図2)から出土したものである<sup>3</sup>。遺跡の帰属時期に関して、古典期後期から続古典期に活動の痕跡が認められる。古典期後期にはテオティワカンの支配を受け、続古典期にはテオティワカン衰退の影響を受けず、逆に繁栄期を迎える。繁栄期にはトルカ盆地の南東部一帯を政治・経済的に支配する地方センターにまで発展した。政治的・宗教的中心地である「ラ・カンパナ・テポソコ(La Campana-Tepozoco)」地区を始め、遺跡全体の面積は3km<sup>2</sup>を越えていた(Sugiura 2005b: 265-268)。また、葦が生い茂り、多種にわたる魚類、鳥類、両生類、甲殻類などが棲息するチグナワパン(Chignahuapan)湖の畔に建設された当遺跡は、農耕による生活基盤の他に、水産資源獲得を中心とする生業が活発であった(Sugiura 2005a: 317-326)。

上述のように、この遺跡から出土している黒曜石を分析することにより、オトゥンバとパチューカ、及びウカレオ原産地の黒曜石の供給変化を解明することが可能になる。ただ、サンタ・クルス・アティサパン遺跡は様々な物資や人の流れが活発

3 サンタ・クルス・アティサパン遺跡では、メキシコ国立自治大学(Universidad Nacional Autónoma de México)・人類学調査研究所(Instituto de Investigaciones Antropológicas)に所属する杉浦洋子教授の指揮の下、1997年から2005年までの間に、5期(1997, 2000, 2001, 2004, 2005年)の発掘調査が実施されている。筆者は4期及び5期に参加し、発掘調査及び測量調査に従事した。

であった地方センターとして栄えていたが、1遺跡から得られる分析結果を、トルカ盆地全体の傾向として認識するのは危険である。しかし、当遺跡がトルカ盆地南東部を支配していたことから、少なくともここから得られる分析結果は、この地域内部の傾向を反映していると理解できるだろう<sup>4</sup>。

以下に分析する黒曜石は、当遺跡の中でも、異なった性格を持つ「マウンド20」地区と「ラ・カンパナ・テポソコ」地区の2地区から出土したものである。「マウンド20」は、サンタ・クルス・アティサパン遺跡の中でも約100基確認されているマウンドの1つであり、これらの大部分は一般住居群であった(Sugiura 2005a: 319)(図3)。しかしながら、「マウンド20」は一般住居群であったのみならず、その中心部に公共用の建造物を備えていたこと(Covarrubias 2003)で、他のマウンドと規模および性格が異なる。土器分析の結果から、この地区の生活の開始は紀元後450年ごろにまでさかのぼることが分かっている(Figueroa 2006)。

一方の政治・宗教的な中心地であった「ラ・カンパナ・テポソコ」地区は遺跡の東方に位置しており、当遺跡を一望できる高台に築かれている。この高台はマウンド群がある地区より5mほど標高が高い位置にあり、人工的に建設された地

形であると考えられる(Sugiura 2005b: 267)。さらに、この中心には為政者によって宗教儀礼などに利用された土製建造物が築かれていた。他のマウンドと異なり、この地区は繁栄期を向かえる続古典期に属すると考えられる。

## 2. 分析の方法と目的

分析対象の黒曜石は、上記のように帰属時期及び性格の異なる2地区から出土しているため、「マウンド20」地区と「ラ・カンパナ・テポソコ」地区と別個に分析した。「マウンド20」地区で対象となった黒曜石遺物は、12,427点、16,373.2g、「ラ・カンパナ・テポソコ」地区は、706点、832.3gである。本稿では、遺物の時期決定、肉眼による産地同定、石器組成、「マウンド20」における空間分析の4つの分析を行った。

まず「マウンド20」地区の黒曜石を、古典期後期と続古典期の2時期に分類した。これはテオティワカン崩壊前後の2時期に分けることによって、黒曜石の供給地及び石器組成における変化を知るためである。黒曜石遺物の時期決定には、サンタ・クルス・アティサパン遺跡の土器編年や各建造物の層位を基準にし、黒曜石が共伴する土器及び包含され

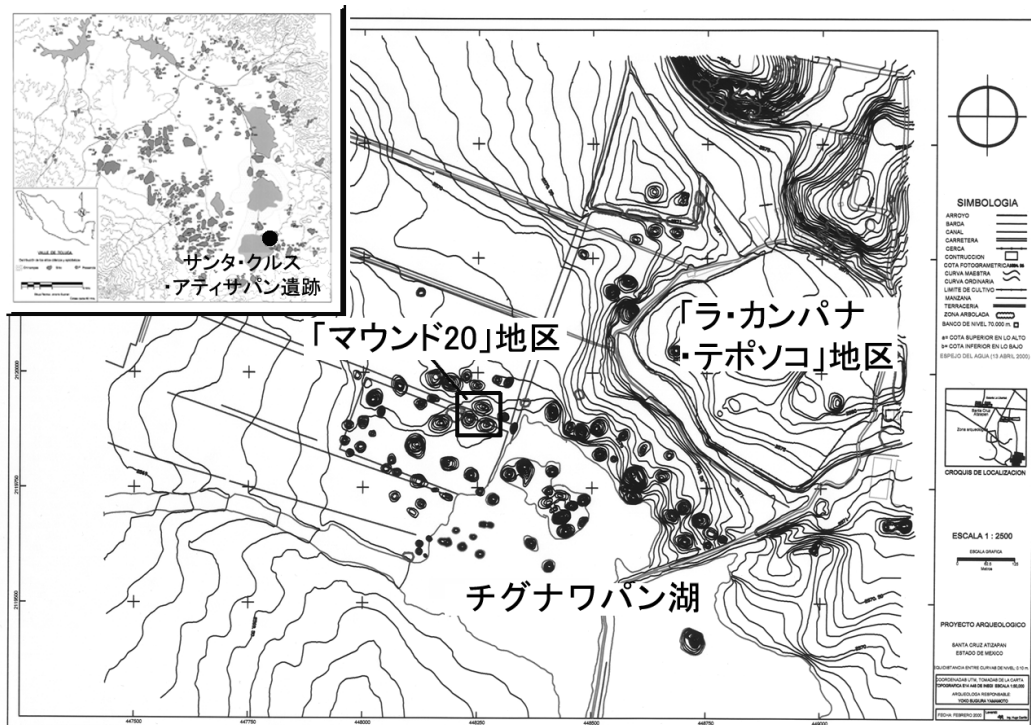


図2 サンタ・クルス・アティサパン遺跡の測量図(Sugiura 1998a: fig.1より転用・作成)

4 当然のことながら、トルカ盆地内で実施された他の遺跡からの黒曜石の分析結果と比較する必要があることは言うまでもない。しかしながら、サンタ・クルス・アティサパン遺跡以外の遺跡から、本研究の対象となる層位的発掘調査に基づいた資料は皆無である。

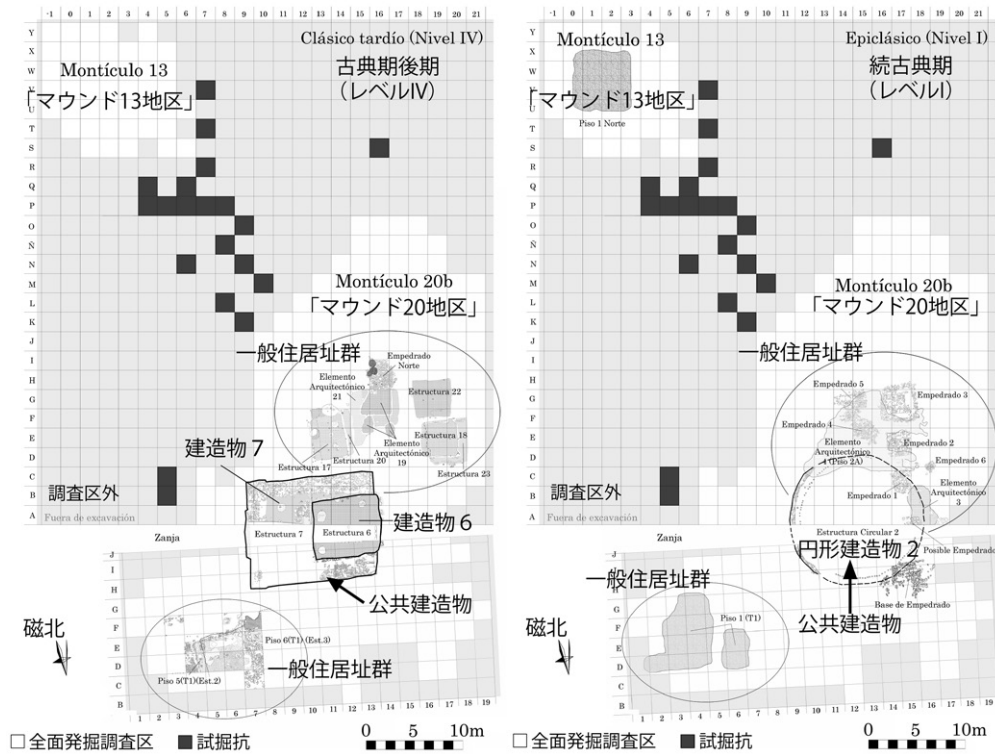


図3 サンタ・クルス・アティサバン遺跡の「マウンド20」地区の平面図(左:古典期後期;右:続古典期)

る建造物の帰属時期を考慮した。一方の「ラ・カンパナ・テポソコ」地区の黒曜石は、この地区が土器分析の結果から続古典期に属するため、すべてこの時期のものとした。

肉眼による産地同定では、「マウンド20」地区から無作為に抽出した2,152点、1,841.6gの黒曜石を分析した。後述するが、既に行われた中性子放射化分析のデータ結果では、オトゥンバ、パチューカ、ウカレオ原産地以外の黒曜石も、少量であるが当遺跡で確認されている。しかしながら、本稿がオトゥンバとパチューカそしてウカレオ原産地の黒曜石における相対的出土量を対象としているため、ここではこれら3原産地の黒曜石のみを分析した<sup>5</sup>。一方、「ラ・カンパナ・テポソコ」地区から出土したすべての黒曜石を「マウンド20」のケースと同じ方法で同定した。

ここでの分析の目的は2点ある。まず、古典期後期と続古典期とに分類された「マウンド20」地区の黒曜石の供給地における通時的変化を見ることである。テオティワカンの崩壊

前後を比較することにより、オトゥンバとパチューカの出土量比率における増減パターンを知ることが可能となる。これは、当遺跡がテオティワカンの黒曜石供給にどれくらい依存していたのかを知る手掛かりになる。さらに、ウカレオの出土量比率の比較は、古典期後期にどれくらいの割合を持っていたのかを解明できる。それは、続古典期にメキシコ中央高原一帯に大きな出土量を持つに至ったこの流通システムが、テオティワカンの崩壊と共に突然発展したものなのか、それとも古典期後期に既にトルカ盆地である程度成熟したものであったのかを知る建設的なデータとなる。

もう1点は、続古典期の「マウンド20」地区と「ラ・カンパナ・テポソコ」地区のデータを比較し、空間利用の異なる2つの地区で、原産地の違いに基づき製品利用における何らかの選択性があったかどうかを確認することである。ここでは、前述のスペンス (Spence 1996) の指摘を思い出さねばならない。彼は、マヤ地域で発見されているパチューカ原産地の

5 肉眼による原産地の同定分析には、Braswell *et al.* (2000: 270-271) で採用されている基準を参考にした。本稿では以下の7つの属性を設けた。①太陽光下の反射色、②太陽光による透過色、③半透明及び不透明の程度、④縞(バンド)の有無、出現密度、大きさ、色、⑤密集した際に認められる縞の形状、⑥含有物や小胞の有無、⑦剥離された表面の光沢と硬度。古典期後期に属する黒曜石は510点、526.5gであり、続古典期は1,642点、1,315.1gである。パチューカ原産地の黒曜石は、世界的にも珍しい緑色または黄金色をしているため、肉眼による産地同定精度は高い。しかしながら、オトゥンバ及びウカレオの黒曜石は色調が類似しているため、太陽光が透過しやすい遺物(例えば、石刃や厚さの薄い剥片)での産地同定は比較的容易であるが、それ以外の遺物では困難である。そのため、本稿ではどちらか峻別つかない場合、グラフ1と2では「その他」に分類した。

黒曜石製品は、テオティワカンにとって実益を得るためではなく、マヤ地域のエリートたちへ贈与されたものであり、また、マヤ地域のエリートにとっては宗教的なアイテムまたは権威を象徴する威信財であった傾向が強いと指摘している。原産地の違いによってそのような付加価値が与えられていたのかを分析することは、ある特定の原産地の黒曜石は、経済的よりも宗教的・政治的にシンボルとして利用された可能性を指摘できる。仮に、原産地別の出土量比率において両地区で顕著な相違がない場合、サンタ・クルス・アティサパン遺跡の黒曜石は、より日常使用目的、あるいは、経済的側面に基づいて獲得されていた可能性を示す1つの材料になるだろう。しかし、この仮定は黒曜石の原産地別出土量の相対比率のみからでは言えない。石器組成やコンテキストにおける比較検討が必要である。従って、次に石器組成の分析に移る。

分析段階での石器組成はさらに細分されているが、本稿では研究テーマを考慮し、主に①石刃残核、②石刃、③両面調整石器(石槍など)、④スクレイパー、⑤錐、⑥小型彫器、⑦剥片・碎片の7つを石器組成として使用する(図4)。

最後に遺物の出土量を空間的に処理した図を利用し、建造物との配置関係及び遺物の廃棄場所などを考慮し三次

元分析する。ここでは、マヤ地域におけるパチューカ原産地の黒曜石が他の原産地のものより特異なコンテキストで利用されていたことを重視する。「ラ・カンパナ・テポソコ」地区では、全面発掘調査が実施されず調査面積が限られているため、この分析を行わなかった。しかし、「マウンド20」地区におけるパチューカとその他原産地の黒曜石の出土パターンを総合的に比較することは、パチューカ原産の黒曜石が、当該地区でどのように利用されていたのかを知るデータを与えるだろう。

上記の分析を通して、最終的に黒曜石の需要者側(サンタ・クルス・アティサパン)が、テオティワカンの覇権喪失前後でどのような戦略を採用していたのか考察する。

## IV 黒曜石の供給地変化

### 1. 肉眼分析の結果

中性子放射化分析の結果によると(Benitez 2006: 93-

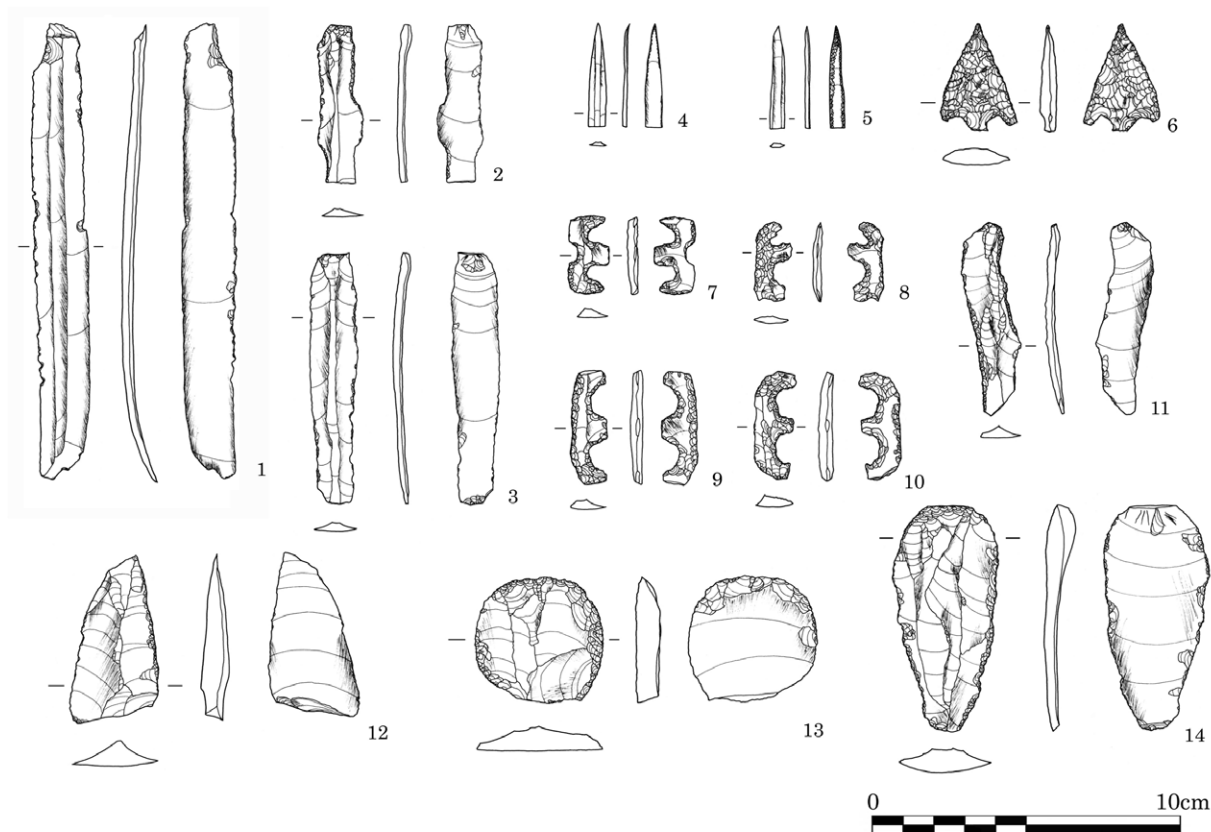


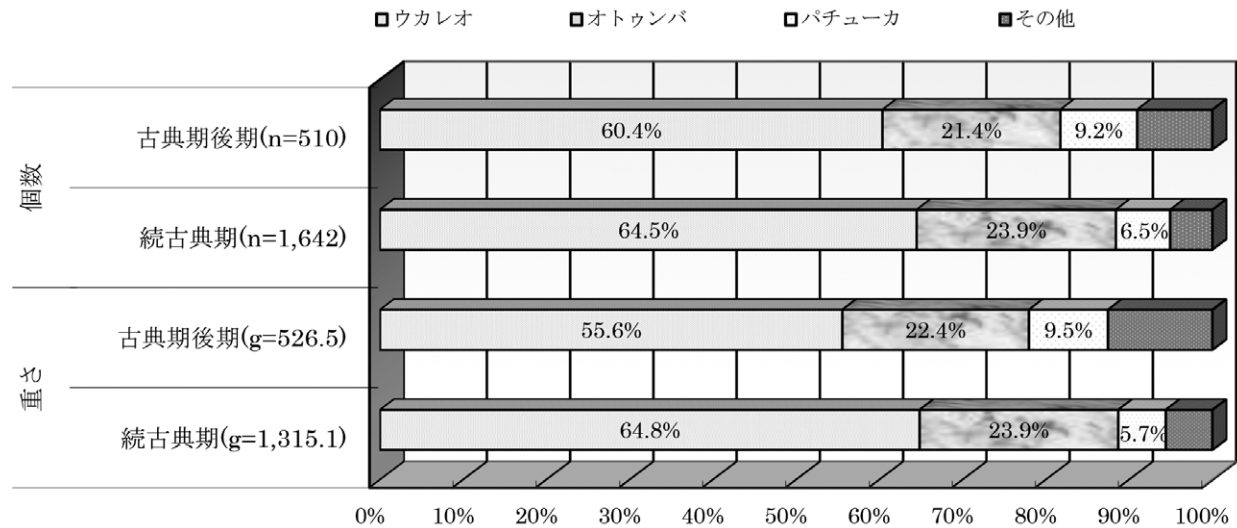
図4 サンタ・クルス・アティサパン遺跡出土の黒曜石製品(1-3:石刃;4-5:小型彫器;6:石槍;7-10:異形石器;11-14:スクレイパー)

102)、サンタ・クルス・アティサパン遺跡では、本稿で問題としている黒曜石原産地以外にもパレドン (Paredón)、フエンテ

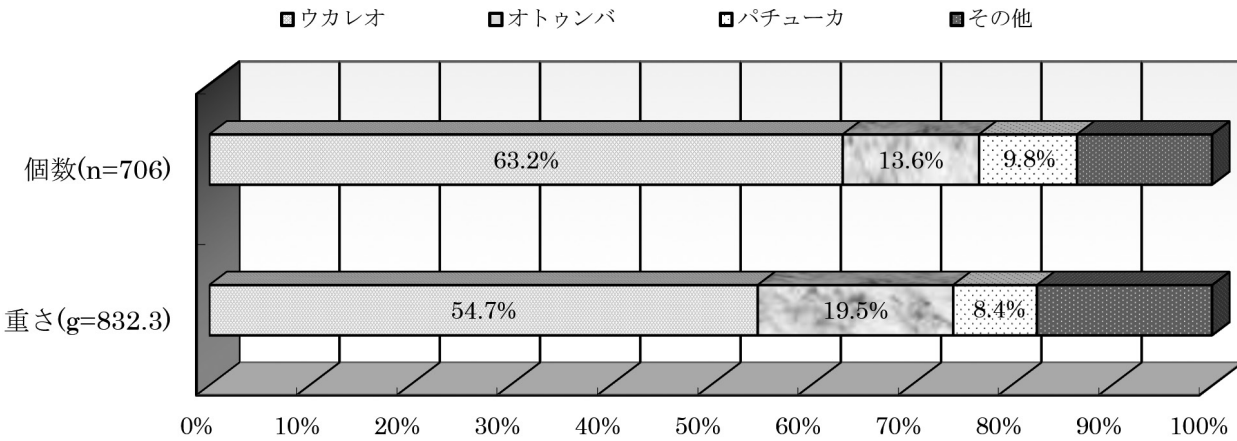
スエラス (Fuentezuelas)、サクアルティパン (Zacualtipán) の原産地から獲得されていたことが理解できる(表1)。

黒曜石原産地	個数	比率(%)	サンタ・クルス・アティサパン遺跡までの直線距離(km)
オトゥンバ	14	31.1	105
パチューカ	3	6.7	145
ウカレオ	24	53.3	145
パレドン	1	2.2	170
フエンテスエラス	1	2.2	170
サクアルティパン	2	4.4	190
合計	45	100	-----

表1 中性子放射化分析の結果と原産地からサンタ・クルス・アティサパン遺跡までの直線距離(中性子放射化分析の結果は Benitez 2006: 93-102より作成)



グラフ1 「マウンド20」地区における黒曜石原産地別の出土量比較



グラフ2 「ラ・カンパナ・テボンソコ」地区(続古典期)における黒曜石原産地別の出土量比較

しかし、「マウンド 20」地区から出土した 45 点のサンプルは、総計 12,427 点の僅か 0.36%に過ぎないため、この分析結果が遺跡全体の傾向を示すとは言えない。従って、古典期後期から続古典期にかけての黒曜石の供給地変化を、可能な限り多くの資料分析を通して理解するため、先述した肉眼分析の結果に基づいて考察する。

上記の結果をまとめたグラフ 1 によると、古典期後期において、既にウカレオ原産地の黒曜石が個数と重さ共に 55%以上から 60%を占め、大多数であったことが理解できる。一方、オトゥンバの黒曜石は 20%強、パチューカは 10%弱である。

では、続古典期ではこの傾向はどう変化するだろうか。古典期後期と同様に、ウカレオ原産地の黒曜石の比率が多数を占め、傾向に大きな変化は見られない。しかし、個数で約 4%、重さで約 9%の増加が認められる。また、オトゥンバの比率には目立った変化は見られないが、パチューカ原産地の黒曜石比率では減少が認められる。

次に、当遺跡の政治的・宗教的な中心地である「ラ・カンパナ・テポソコ」地区での傾向を見てみる(グラフ 2)。続古典期の比率(グラフ 1)と比較し、ウカレオ原産地のものが多数である傾向に変化はない。しかし、オトゥンバの個数と重さが若干減少すると共に、パチューカのものが増加している。また、「その他」の比率も増加している。

## 2. 原産地別の供給パターン

上記の分析結果から、興味深いことが理解できる。当初、テオティワカンに支配されていた古典期後期のサンタ・クルス・アティサパン遺跡では、オトゥンバとパチューカ原産地の黒曜石が大多数を占めると考えられたが、結果は逆のパターンを示している。これは、ハース(Hirth 2009)の見解と異なる。彼はテオティワカンの崩壊により、これに支配されていたパチューカ地域の黒曜石供給システムも機能しなくなり、ウカレオ原産地の黒曜石が突然流通し始めると指摘する。しかし、トルカ盆地南東地域では、ウカレオ原産地の黒曜石は、テオティワカン支配期に既に大きな割合を持ち流通している。さらに、続古典期において、パチューカ並びにオトゥンバ原産地の黒曜石も 30%前後の割合を占めている<sup>6</sup>。

この結果から、テオティワカンの崩壊により、メキシコ中央

高原内の黒曜石供給地が、単純にパチューカ・オトゥンバからウカレオへ移行したと言えなくなる。また、トルカ盆地内のみならず、他地域においてもこの傾向を補強するデータも存在している。メキシコ盆地に位置するアスカポツァルコ(Azcapotzalco)遺跡では、続古典期にオトゥンバ原産地の黒曜石が約 30%供給されていた(García *et al.* 1990)。また、崩壊後のテオティワカンにおいても、オトゥンバの黒曜石が利用されていた(Rattray 1981)。さらに、この近郊にあるシヨメトラ(Xometla)遺跡や続古典期の指標土器であるコヨトラテルコ式土器が出土する遺跡において、パチューカ原産地の黒曜石が大量に出土している(Diehl 1989: 15)。ここから、テオティワカンの崩壊後も、両原産地へ石材獲得のためアクセスされており、少なくともメキシコ盆地およびトルカ盆地には流通していたことが理解できる。

一方、ウカレオ原産地の黒曜石に関して、テオティワカンの崩壊後にこの黒曜石が突然流通し始めたという解釈(Hirth 2006: 291-292)も成立しなくなる。確かに、テオティワカンの覇権の喪失により、それまでコントロールされていたパチューカ原産地の黒曜石の供給が減少したことは理解できる。しかし、この国家の覇権喪失により、ウカレオ原産地のものが突然取って代わったことを考古学データは示していない。それよりも、ウカレオ地域の東部に隣接するトルカ盆地では、続古典期のメキシコ中央高原において第 1 の黒曜石供給源となるための流通システムが、古典期後期の段階で既に確立していたとの考えが妥当である。

さて、古典期後期におけるサンタ・クルス・アティサパン遺跡の黒曜石供給地に関して、上記の分析結果から別の疑問が惹起される。何故、テオティワカンが支配していた当遺跡では、オトゥンバとパチューカ原産地の黒曜石が大多数を占めないのか。

同様の問題に関して、レンフリーュー(Renfrew 1975)は、原材料と製品の及ぶ地理的範囲が原産地からの距離によって減少することを指摘している。しかし、傾向は一様ではなく、原材料や製品が日常目的として使われるのか、または威信財や奢侈品として使われるのかによっても、異なった減少パターンが認められると述べている。同時に、そのようなパターンは交易形態の違いによっても多様であると主張している。

パチューカ原産地から当遺跡までは約 145km ある(表

6 本稿の分析結果がハースの見解と一致しない理由は、現在まで、トルカ盆地のこれに関するデータが皆無であったことが挙げられる。

1)。これは、ウカレオ原産地から当遺跡までとほぼ同じ距離である。一方、オトゥンバからの距離は、約 105km であり、パチューカ並びにウカレオよりも近い。単純に直線距離のみを比較するとオトゥンバが最も近く、輸送コストと距離が比例すること(Earle 2002: 86)を考慮すると、ここからのものが大多数を占めてもおかしくないはずである。また、パチューカそしてウカレオからの距離を比較すると、テオティワカンの支配圏にあったトルカ盆地では、その圏外に位置するウカレオよりも、パチューカからの黒曜石が流通しやすかったはずである。しかし、もしマヤ地域で見られるように、パチューカ原産地のものが社会的関係を示すための威信財として利用されていたのなら、出土量は少なくとも理解可能である。

以下では、この問題を考察するために、サンタ・クルス・アティサパン遺跡では、特にパチューカ原産地の緑色黒曜石のコンテキストを重視し、どのような利用価値が与えられていたのか考察する。

## V 石器組成および空間分析から見る黒曜石の利用

### 1. 石器組成と空間分析の結果

先に、グラフ 1 の続古典期の原産地別出土量比率とグラフ 2 の比率を比較し、目立った変化がないことを指摘した。これは、サンタ・クルス・アティサパン遺跡において、政治・宗教的中心部(ラ・カンパナ・テポソコ)と一般住居地区(マウンド 20)のように社会的性格が異なっても、黒曜石の利用は原産地によって左右されなかったと指摘できる可能性がある。もちろん、「ラ・カンパナ・テポソコ」地区(グラフ 2)では、「マウンド 20」地区の続古典期と比較し(グラフ 1)、オトゥンバの比率が減少し、パチューカの比率が若干増加しており、パチューカの黒曜石製製品は一般住居地区と比べ、異なる利用方法があったのかもしれない。しかしながら、「ラ・カンパナ・テポソコ」地区から出土した黒曜石遺物はすべて包含層から出土しており、埋葬施設や祭祀遺構からの出土例はない。

グラフ 3 は「ラ・カンパナ・テポソコ」地区の石器組成を、

パチューカ原産地とウカレオおよびオトゥンバ(灰色・黒色)原産地の黒曜石とに分けたものである。両者とも大部分が石刃に利用されていたことが理解できる。しかし、興味深いのは、「灰色・黒色黒曜石」では両面調整石器の比率が認められるが、パチューカの黒曜石を使ったこの器種がこの地区では存在していないことである。また、両者共に石核や石刃残核は出土しておらず、スクレイパーや錐または小型彫器など「マウンド 20」地区で出土している器種の出土は僅少である(グラフ 4・5)。

グラフ 4 は「マウンド 20」地区の「灰色・黒色黒曜石」の石器組成であり、グラフ 5 は「緑色黒曜石(パチューカ)」のものである。両者共に、石刃として利用されていた傾向が高い。古典期後期では、続古典期と比較して、両者共に両面調整石器に利用された割合が高いが、この器種がある特定の原産地の黒曜石により生産された可能性は見当たらない。スクレイパー、錐、そして小型彫器は、石刃や両面調整石器と比較し、全体的に比率は低い。しかしながら、「灰色・黒色黒曜石」と「緑色黒曜石」の両者を利用して生産されていたことが分かる。

他方、グラフ 4・5 を「ラ・カンパナ・テポソコ」地区の石器組成(グラフ 3)と比較すると、この地区では石核や石刃残核が出土していないこと、そして先に述べたようにスクレイパー、錐、小型彫器の出土が少ないことが理解できる。さらに、両面調整石器の出土が認められるものの、石刃の比率が大部分を占めている。上記の分析結果、並びに、この空間が政治・宗教的中心部であることから、「ラ・カンパナ・テポソコ」地区は生業や手工業の活動場として利用されなかったことが指摘できる。

上記のように、「マウンド 20」地区と「ラ・カンパナ・テポソコ」地区とでは、石器組成に違いが確認できた。しかしながら、パチューカ原産地の黒曜石製製品が特別なコンテキストで出土した、または、この黒曜石を利用して特定の器種のみを生産していたという選択規制は見当たらなかった。

では、緑色黒曜石におけるこの解釈が妥当であるのかを確認するため「マウンド 20」地区の出土パターンを空間的に分析してみる。

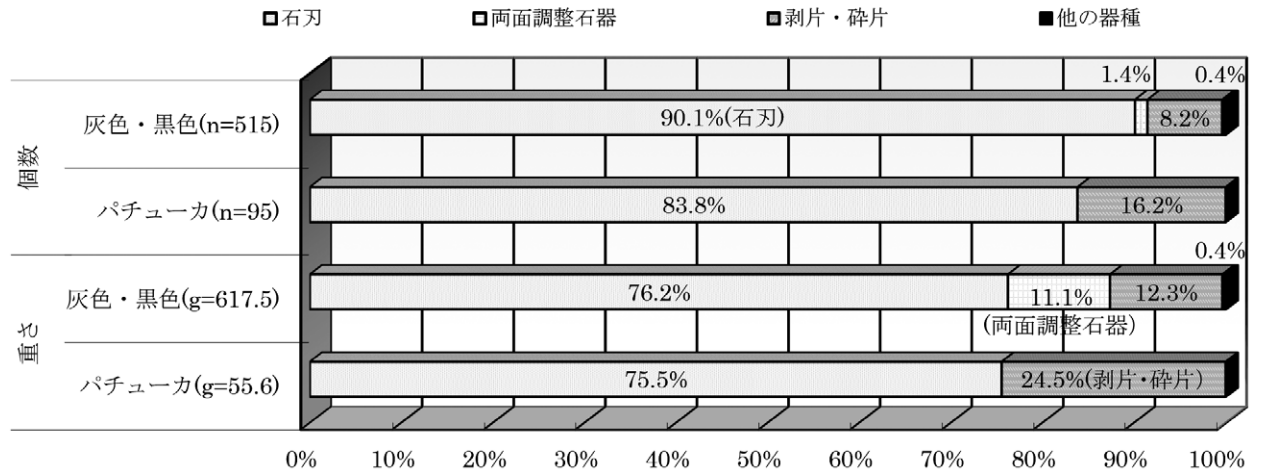
「マウンド 20」地区の公共用建造物の存在は、この遺跡の建設当初から確認されており、5 回の建て替えが行われていた(Covarrubias 2003)。マヤ地域のように、緑色黒曜石が日常生活用として利用されていなかったことを考慮すると、サンタ・クルス・アティサパン遺跡において、公共用建造物周



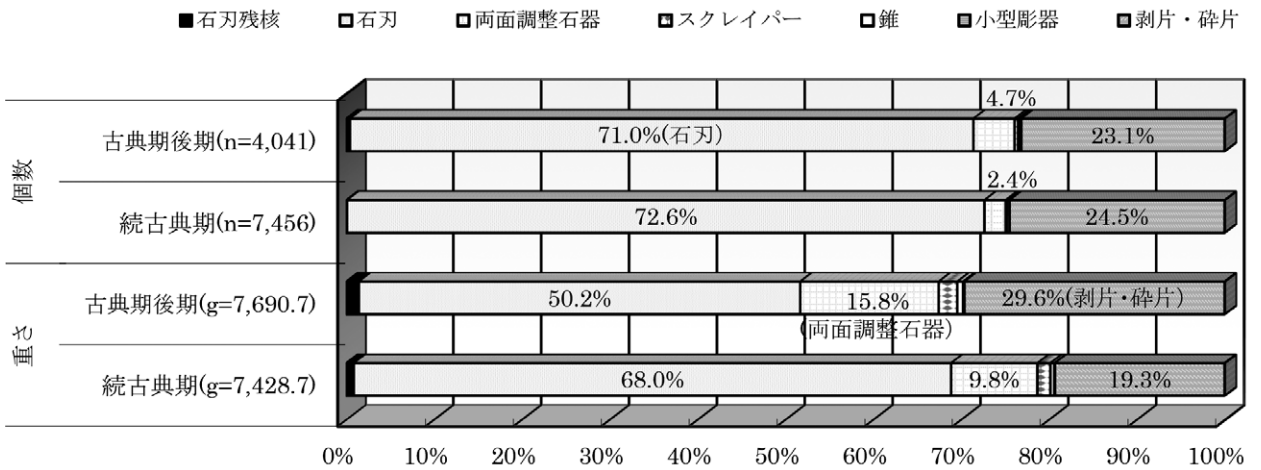
辺に遺物の分布が偏る可能性が想定される。

ターンを考察する<sup>7</sup> (図5、図6)。

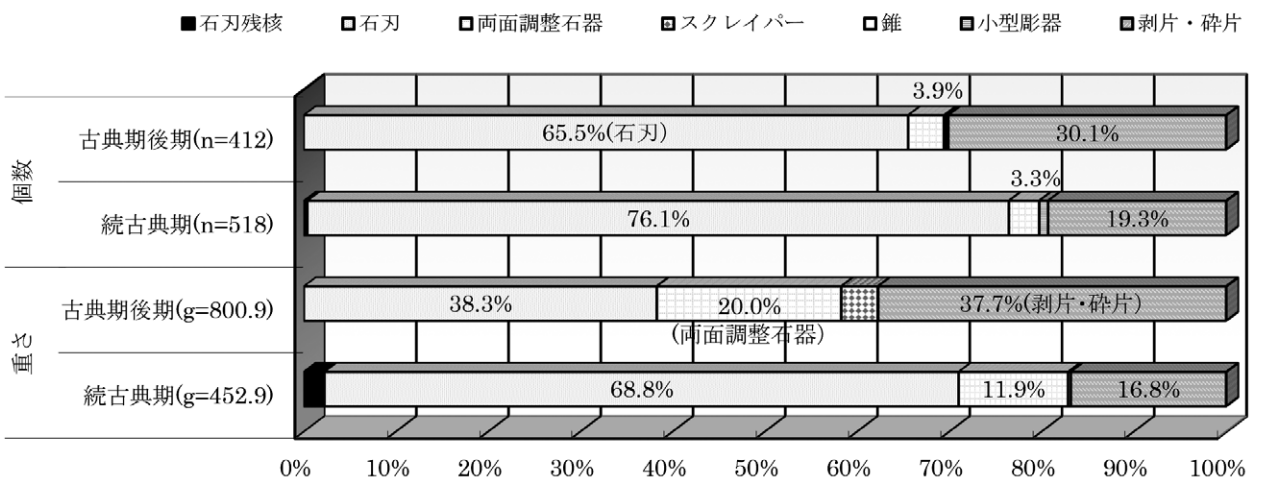
そこで、引き続き緑色黒曜石の石刃における空間分布バ



グラフ3 「ラ・カンパナ・テポスコ」地区(続古典期)におけるパチュウカと灰色・黒色(ウカレオとオトゥンバ)黒曜石の石器組成



グラフ4 「マウンド20」地区から出土した灰色と黒色(ウカレオとオトゥンバ)黒曜石の石器組成



グラフ5 「マウンド20」地区から出土した緑色(パチュウカ原産地)黒曜石の石器組成

7 この空間分析には、石刃に分類されるものの中でも、出土地点並びに帰属時期の決定できるサンプルのみを対象とした。古典期後期の「灰色・黒色黒曜石」は2,774点、「緑色黒曜石」は257点、続古典期の「灰色・黒色黒曜石」は5,351点、「緑色黒曜石」は391点を使用し、空間分布図を図6と図7に示した。このサンプルには押圧剥離によるものだけでなく、石刃石器の製作過程を考慮し、直接・間接打撃によって剥離された剥離物も含まれている。

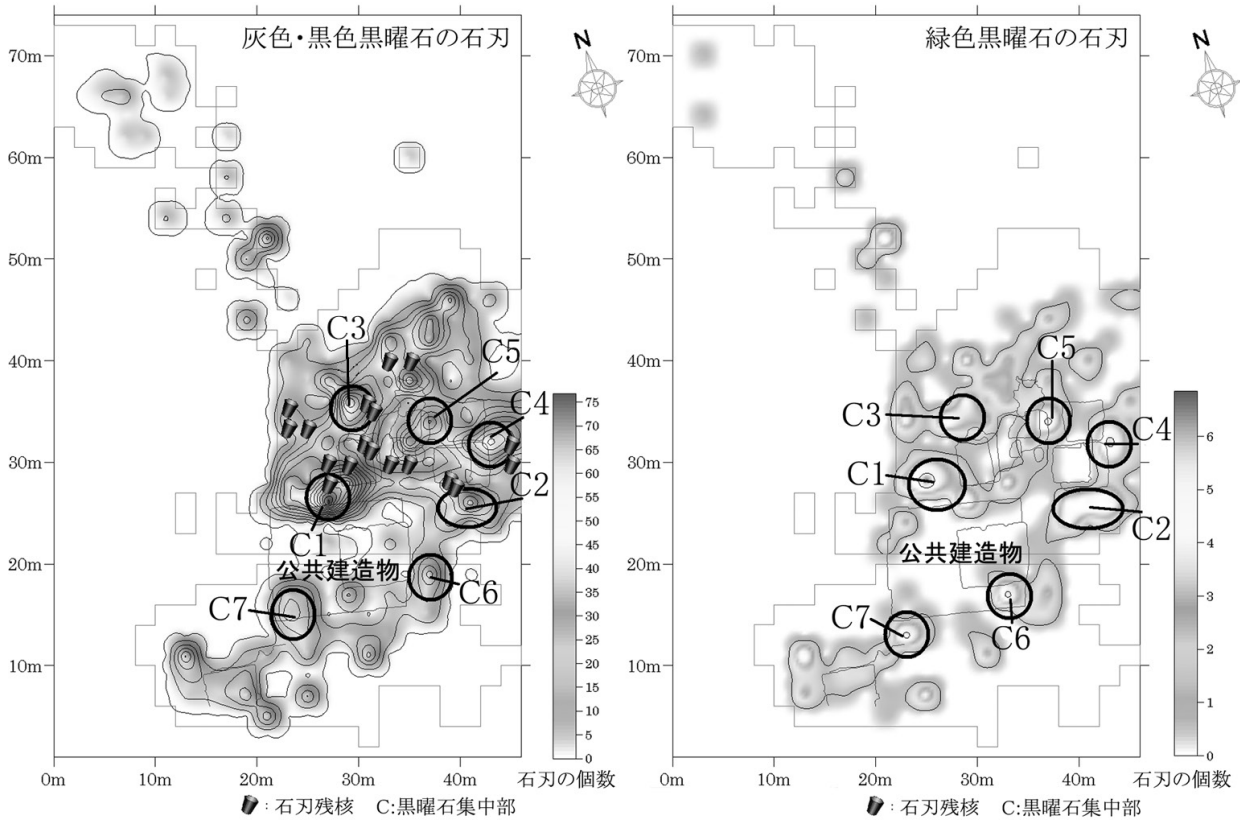


図5 古典期後期における石刃の空間分布図(左:灰色・黒色黒曜石;右:緑色黒曜石)

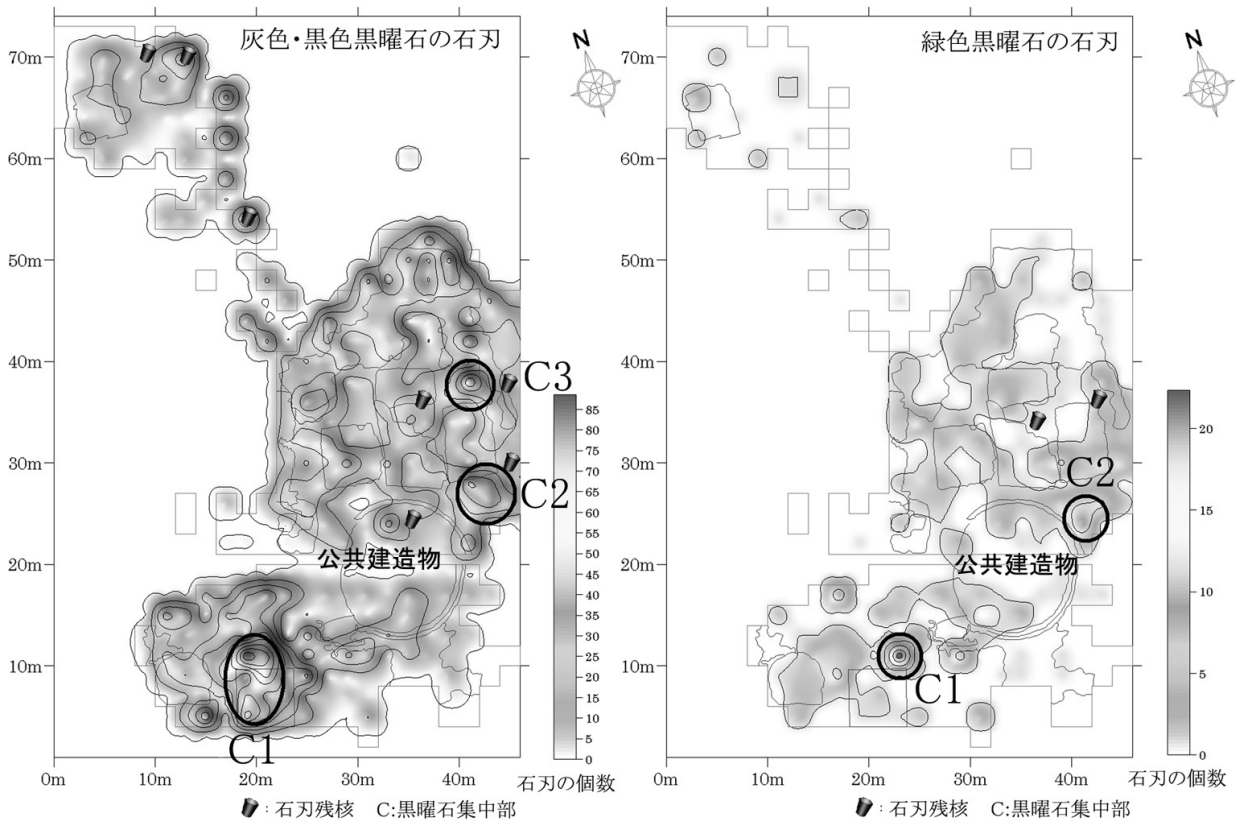


図6 続古典期における石刃の空間分布図(左:灰色・黒色黒曜石;右:緑色黒曜石)

古典期後期の「灰色・黒色黒曜石」の分布図(図5)には、公共建造物内部より、その周辺部や「マウンド20」地区全体に分布している。また、多くの石刃集中部(「C=Concentration」)が確認され、石刃残核も多く見つっている。石器加工用の鹿の角1点が「C1」周辺(図5:灰色・黒色黒曜石)から出土している(Sugiura 2002: 129)が、この周辺部から石器工房であったと同定できる資料は確認されていない。

一方、図5の「緑色黒曜石」の分布図は「灰色・黒色黒曜石」と比較し、出土量が少ないため分布密度は薄い。しかし、「灰色・黒色黒曜石」の分布図とよく似た傾向を示している。公共建造物内部からの出土は乏しく、「マウンド20」地区全体で分布が確認される。

では、続古典期の分布傾向はどうだろうか。図6の「灰色・黒色黒曜石」の分布図から、発掘調査が実施されたほぼ全域から大量に石刃が出土している。これと比較し「緑色黒曜石」では古典期後期同様に密度がかなり低い。しかし、「緑色黒曜石」の分布図には特別な出土傾向を読み取ることができない。

## 2. サンタ・クルス・アティサパン遺跡における黒曜石の利用価値

マヤ地域ではパチューカ原産地の黒曜石を特別な石材と認識し、この石材を用いたある特定の器種のみを利用してしたが、当遺跡の「マウンド20」地区では、その傾向とは異なる結果が提示できる。つまり、他の原産地の黒曜石と比較して、特別な石材または製品としての価値が与えられていなかった。

これは、マヤ地域と異なり、トルカ盆地がテオティワカンの支配下にあったため、同じ石材で作られる製品であっても、この支配圏内と外部とでは、パチューカ原産地の黒曜石の価値が異なることを示唆している。つまり、この支配圏では、パチューカ原産地の黒曜石のみが特別なコンテキストで利用されたのではなく、むしろ他の原産地のものと同様に扱われた。これを補強する資料がテオティワカンの都市内部からも挙げられている。「月のピラミッド」内部で発見された埋葬施設から、大型製品であれミニチュア製品であれ、器種に区別なくパチューカとオトゥンバ原産地の黒曜石製品が副葬品として出土している(Parry & Kabata 2004)。

上記の分析から、当遺跡で出土する黒曜石には、原産地の違いによって異なった利用はされていなかったと考えられ

る。もちろん、ウカレオ及びオトゥンバの石器組成分析と空間分析を個別に行っていないため、今後これを確認する必要がある。しかしながら、当遺跡の埋葬施設3・6・10から出土した黒曜石製製品には、色調の区別なくウカレオやオトゥンバそしてパチューカ原産地のものが副葬品として納められている。さらに、サンタ・クルス・アティサパン遺跡においてウカレオ原産地の黒曜石の出土量が大多数を占めることを考慮すると、それらの大部分は日常生活用として利用されていたと考えられる。

では何故、当遺跡では、距離的にも近くテオティワカン支配圏のオトゥンバとパチューカ原産黒曜石の出土量が、ウカレオのものより少ないのか。

ファーラーら(Fowler *et al.* 1987: 159)は、「黒曜石の資源獲得における多様性は、同盟や交易網の脆弱さに対して、効果的な戦略であったらう」と述べている。また、複数ある世界システム圏の融合は、異なる中央に包含されるが隣接する周辺地域間の接触から始まると、チェイス=ダンとホール(Chase-Dunn & Hall 1997: 59-77)は主張する。

上記の答は以下である。古典期後期から徐々にテオティワカンの崩壊が進行し、トルカ盆地の住人が黒曜石の新たな供給源として積極的にウカレオと交易システムを確立させた。そして、黒曜石の十分な供給を、テオティワカンの領域とウカレオ原産地が位置するミチョアカン州方面の領域の双方から確保していた結果であろう。ここに周辺地域の独自性が認められる。

## VI トルカ盆地の独自戦略

古典期後期から続古典期にかけてのトルカ盆地とテオティワカンとの歴史的動向は、トルカ盆地の独自戦略を考察する上で重要な資料を提供している。この時期、トルカ盆地では、テオティワカン盆地の政治・経済的混乱を避けるために移住してきた避難民によって人口が激増する(Sugiura 2005a)。しかし、古典期に存在していた約70%の遺跡が放棄されることなく、続古典期にも連続して認められる(Sugiura 2005b: 284-285)。

この連続性は、トルカ盆地においてのみ確認される現象である。メキシコ盆地の他の周辺地域では、テオティワカン

と密接な関係にあった衛星都市や拠点は放棄され、新たな勢力が台頭し、古典期後期と続古典期に非連続性が認められる。例えば、モレロス地域ではソチカルコ (Xochicalco) が、プエブラ・トラスカラ地域ではカカシュトラ・ソチテカトル (Cacaxtla-Xochitécatl) が、トゥーラ盆地ではトゥーラ・チコ (Tula Chico) がこの例に相当する。

テオティワカン盆地の避難民の一部をトルカ盆地が吸収可能であったのは、そして、テオティワカンの崩壊後、その前と連続したセトルメント・パターンを示すのは、この地域が単にテオティワカンの政治・経済システムのみ依存せず、トルカ盆地全体の社会的安定を支える周辺地域の独自戦略があったことを示している。

その一例に、本稿で考察した黒曜石獲得システムが挙げられる。

テオティワカンの崩壊後に流通し始めたと考えられていたウカレオ原産地の黒曜石は、既に古典期後期のトルカ盆地に流通していた。そして、ウカレオ地域とトルカ盆地との流通経路が確立していたことにより、続古典期にはトルカ盆地を玄関口として、この黒曜石を他のメキシコ中央高原地域へ大規模に流通させることが可能であった (Kabata 2009)。ここから、トルカ盆地がテオティワカンの支配下にありながらも、決して中央に従属する静的な存在ではないことが分かる。

テオティワカンを介さず、日用品や奢侈品を生産する黒曜石以外の資源の獲得経路も、地域レベルで積極的に構築していたと考えられる。嘉幡 (2008) は、トルカ盆地で出土する搬入土器の通時的分析を基に、既にテオティワカンの繁栄期からこの国家を仲介としない土器 (厚手オレンジ色土器: Engobe Anaranjado Grueso) が、トルカ盆地と周辺地域で流通していたことを報告した。そして、国家の衰退と共に、厚手オレンジ色土器の出土量は劇的に増加したと指摘し、トルカ盆地社会は、国家の消滅が起因となる交易システムの変化に柔軟に対応したと主張した。仮にこのような地域戦略が存在せず、トルカ盆地が中央のシステムのみ依存していたのなら、テオティワカン崩壊後の混乱を受け、多くの人口を吸収しえなかったはずである。また、テオティワカン崩壊前後に見られる連続したセトルメント・パターンを維持しえなかっただろう。

最後に、何故トルカ盆地では、同様に周辺地域であったモレロス地域やプエブラ・トラスカラ地域やトゥーラ盆地とは異なり、社会秩序の解体と再編成が認められないのかについて述べたい。結論から言うと、トルカ社会のテオティワカンへの極端な依存性と、その反動にあると筆者は考える (Kabata 2010: 339-344; 嘉幡 2019: 158-159)。

テオティワカンの国家建築当初、トルカ地域の社会は脆弱であったため、独自で安定した資源を獲得するシステムを形成することができなかった。そのため、テオティワカンへの依存が高まった。一方、さらなる発展を迎えたかったテオティワカン自身にとっても、地理的に近く確かな流通先を確保でき、互恵的關係が成立していたと考えられる。

しかし、テオティワカンの黒曜石における独占事業と言ってもいい展開は、供給源をテオティワカンだけに頼る過度な依存を意味している。もし何らかの原因でテオティワカンからの供給が滞ってしまうと、生活必需品であった黒曜石を確保できなくなる。そのため、社会的にまとまりつつあったトルカ盆地は、テオティワカンの一元戦略から打開する独自戦略を展開する必要を感じ始めた。

それは、テオティワカン経済圏外との関係を深める結果に繋がる。テオティワカンの経済圏に属せず、トルカ盆地にとって近郊に位置するウカレオ原産地からの資源獲得は、トルカ盆地とミチョアカン州との新たな経済圏を形成させることになる。この成功が、テオティワカンという国家の庇護がなくなった後も、トルカ社会では、古典期の旧体制を継続させたと考えられる。

この独自戦略の展開は、トルカ盆地だけでなく、他の地域でも認められることだろう。ここに筆者は、中央対周辺のみならず、周辺対周辺という枠組み設定の重要性を主張する。同時に、この枠組みの下、共時的・通時的観点の両者から社会の諸様相について考察を行うべきであると考え。モレロス地域やプエブラ・トラスカラ地域やトゥーラ盆地の社会は、独自戦略を採ったにもかかわらず、解体と再編成がなされた。その戦略は、共時的に見て、失敗だったと言えるかもしれない。一方、通時的には、この「失敗」が新たな秩序を誕生させ、メキシコ中央高原の続古典期社会を牽引していくに至る。

両方の視点を併せ持つことで、周辺社会への考察は、人類学的にも歴史学的にも価値を持つと考える。

## 謝辞

本稿は、筆者の博士号取得論文の一部 (Kabata 2010: 209-298) を改変し、JSPS 科研費 19H01347 (令和元年度-4年度・基盤研究(B))「古代メキシコの都市形成史: 世界の知的体系化と物質化」(研究代表者: 嘉幡茂) から得られたデータを基に作成された。博士論文作成時、指導教官で

あった杉浦洋子教授に多大なご尽力を頂いた。感謝の意を表したい。

## 参照文献

- 嘉幡茂  
2008 「トルーカ盆地のダイナミズム——メキシコ州、サンタ・クルス・アティサパン遺跡のデータを基に」『古代アメリカ』11: 1-26。  
2019 『テオティワカン——「神々の都」の誕生と衰退』雄山閣。
- Benitez, Alexander Villa  
2006 *Late Classic and Epiclassic Obsidian Procurement and Consumption in the Southeastern Toluca Valley, Central Highland Mexico*. Ph.D. dissertation, Faculty of the Graduate School, University of Texas, Austin.
- Braswell, Geoffrey E.  
2003a Introduction: Reinterpreting Early Classic Interaction. In G. E. Braswell (ed.), *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction*, pp. 1-43. University of Texas Press.  
2003b Obsidian Exchange Spheres. In M. E. Smith & F. F. Berdan (eds.), *The Postclassic Mesoamerican World*, pp. 131-158. University Utah Press.
- Braswell, Geoffrey E., John E. Clark, Kazuo Aoyama, Heather I. McKillop & Michael D. Glascock  
2000 Determining the Geological Provenance of Obsidian Artifacts from the Maya Region: A Test of the Efficacy of Visual Sourcing, *Latin American Antiquity* 11(3): 269-282.
- Carballo, David Manuel, Jennifer Carballo & Hector Neff  
2007 Formative and Classic Period Obsidian Procurement in Central Mexico: A Compositional Study Using Laser Ablation-Inductively Coupled Plasma-Mass Spectrometry, *Latin American Antiquity* 18(1): 27-43.
- Charlton, Thomas H.  
1984 Production and Exchange: Variables in the Evolution of a Civilization. In K. G. Hirth (ed.), *Trade and Exchange in Early Mesoamerica*, pp. 17-42. University of New Mexico Press.
- Charlton, Thomas H. & Michael Spence  
1982 Obsidian Exploitation and Civilization in the Basin of Mexico. In P. C. Weigand & G. Gwynne (eds.), *Mining and Mining Techniques in Ancient Mesoamerica*, pp. 7-86. State University of New York.
- Chase-Dunn, Christopher K. & Thomas D. Hall  
1997 *Rise and Demise: Comparing World-Systems*. Westview Press.
- Clark, John E.  
1986 From Mountains to Molhills: A Critical Review of Teotihuacan's Obsidian Industry. In B. L. Isaac (ed.), *Economic Aspects of Prehispanic Highland Mexico* (Research in Economic Anthropology, Supplement 2) , pp. 23-74. JAI Press.
- Cobean, Robert H.  
2002 *Un mundo de Obsidiana: Minería y Comercio de un Vidrio Volcánico en el México Antiguo*. INAH.
- Covarrubias García, Mariana  
2003 *Arquitectura de un Sitio Lacustre del Valle de Toluca desde Finales del Clásico y durante el Epiclásico (550-900 d.C.). Una Reconstrucción de las Estructuras Públicas del Montículo 20 de Santa Cruz Atizapán*. Tesis de licenciatura, ENAH, México, D.F.
- Diehl, Richard A.  
1989 A Shadow of Its Former Self: Teotihuacan during the Coyotlatelco Period. In R. A. Diehl & J. C. Berlo (eds.), *Mesoamerica after the Decline of Teotihuacan, A.D. 700-900*, pp. 9-18. *Dumbarton Oaks Research Library and Collection*.
- Drennan, Robert D., Philip T. Fitzgibbons & Dehn Heinz  
1990 Imports and Exports in Classic Mesoamerican Political Economy: The Tehuacan Valley and the Teotihuacan Obsidian Industry. In B. L. Isaac (ed.), *Research in Economic Anthropology* 12, pp. 177-199.

- Earle, Timothy K.  
 2002 Commodity Flows and the Evolution of Complex Societies. In J. Ensminger (ed.), *Theory in Economic Anthropology*, pp. 81-103. AltaMira Press.
- Figueroa Sosa, Sandra  
 2006 *Cronología Cerámica de los Pozos Estratigráficos del Isote 20b del Sitio de Santa Cruz Atizapán, Edo. de México. Clásico y Epiclásico en el Valle de Toluca*. Tesis de licenciatura, ENAH, México, D.F.
- Fowler, William R., Jr., Jane H. Kelley, Frank Asaro, Helen V. Michel & Fred H. Stross  
 1987 The Chipped Stone Industry of Cihuatán and Santa María, El Salvador, and Sources of Obsidian for Cihuatán, *American Antiquity* 52(1): 151-160.
- García Chávez, Raúl, J. Michael Elam, Harry B. Iceland & Michael D. Glascock  
 1990 INAH Salvage Archaeology Excavation at Azcapotzalco, Mexico, *Ancient Mesoamerica* 1: 225-232.
- González de la Vara, Fernán  
 1999 *El Valle de Toluca hasta la Caída de Teotihuacán*. Colección Científica Núm. 389. INAH.
- Healan, Dan M.  
 1997 Pre-Hispanic Quarrying in the Ucareo-Zinapecuaro Obsidian Source Area, *Ancient Mesoamerica* 8(1): 77-100.
- Hirth, Kenneth G.  
 2006 Mesoamerican Obsidian Systems and Craft Production at Xochicalco. In K. G. Hirth (ed.), *Obsidian Craft Production in Ancient Central Mexico. Archaeological Research at Xochicalco*, pp. 287-300. University of Utah Press.  
 2008 The Economy of Supply: Modeling Obsidian Procurement and Craft Provisioning at a Central Mexican Urban Center, *Latin American Antiquity* 19(4): 435-457.  
 2009 Economía política prehispánica: Modelos, sueños y realidad arqueológica. In N. M. Robles García (ed.), *Bases de la Complejidad Social en Oaxaca. Memoria de la Cuarta Mesa Redonda de Monte Albán*, pp. 17-53. INAH.
- Hirth, Kenneth G., J. Jeffery Flenniken & Bradford Andrews  
 2003 The Xochicalco Production Sequence for Obsidian Prismatic Blades. Technological Analysis and Experimental Inferences. In K. G. Hirth (ed.), *Mesoamerican Lithic Technology: Experimentation and Interpretation*, pp. 182-196. University of Utah Press.
- Kabata, Shigeru  
 2007 Obsidian Procurement Strategies in the Toluca Valley before and after the Fall of the Teotihuacan System. Paper presented at the 72th Society for American Archaeology, Austin.  
 2009 La industria de obsidiana y su abastecimiento a Santa Cruz Atizapán. In Y. Sugiura Yamamoto (ed.), *La Gente de la Ciénaga en Tiempos Antiguos: La Historia de Santa Cruz Atizapán*, pp. 243-260. UNAM.  
 2010 *La dinámica regional entre el valle de Toluca y las áreas circundantes: Intercambio antes y después de la caída de Teotihuacán*. Tesis de doctorado, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.
- Manzanilla, Linda R.  
 1992 The Economic Organization of the Teotihuacan Priesthood: Hypotheses and Considerations. In J. C. Berlo (ed.), *Art, Ideology, and the City of Teotihuacan: A Symposium at Dumbarton Oaks 8th and 9th October 1988*, pp. 321-338. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Marcus, Joyce  
 2004 Maya Commoners: The Stereotype and the Reality. In J. C. Lohse & J. Valdez, Fred (eds.), *Ancient Maya Commoners*, pp. 255-283. University of Texas Press.
- Masson, Marilyn A. & Carlos Perez Lopez  
 2004 Commoners in Postclassic Maya Society: Social versus Economic Class Constructs. In J. C. Lohse & J. Valdez, Fred (eds.), *Ancient Maya Commoners*, pp. 197-223. University of Texas Press.

- Millon, René
- 1973 *Urbanization at Teotihuacán, México, Vol. 1, Part 1: The Teotihuacan Map: Text.* University of Texas Press.
- 1992 Teotihuacan Studies: From 1950 to 1990 and Beyond. In J. C. Berlo (ed.), *Art, Ideology, and the City of Teotihuacan: A Symposium at Dumbarton Oaks 8th and 9th October 1988*, pp. 339-429. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Parry, William J. & Shigeru Kabata
- 2004 Chronology of Obsidian Artifacts from the Moon Pyramid, Teotihuacan, Mexico. Paper presented at the 69th Annual Meeting of the Society for American Archaeology, Montreal.
- Rattray, Evelyn C.
- 1981 Anaranjado Delgado: Cerámica de comercio de Teotihuacan. In E. Childs Rattray, J. Litvak King & C. Díaz Oyarzabal (eds.), *Interacción Cultural en México Central*, pp. 55-80. UNAM.
- Renfrew, Colin
- 1975 Trade as Action at a Distance: Questions of Integration and Communication. In J. A. Sabloff & C. C. Lamberg-Karlovsky (eds.), *Ancient Civilization and Trade*, pp. 3-59. University of New Mexico Press.
- Santley, Robert S.
- 1983 Obsidian Trade and Teotihuacan Influence in Mesoamerica. In A. G. Miller (ed.), *Highland-Lowland Interaction in Mesoamerica: Interdisciplinary Approaches*, pp. 69-124. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- 1984 Obsidian Exchange, Economic Stratification, and the Evolution of Complex Society in the Basin of Mexico. In K. G. Hirth (ed.), *Trade and Exchange in Early Mesoamerica*, pp. 43-86. University of New Mexico Press.
- Santley, Robert S. & Rani T. Alexander
- 1996 Teotihuacan and Middle Classic Mesoamerica: A Precolumbian World System? In A. Guadalupe Mastache, J. R. Parsons, R. S. Santley & M. C. Serra Puche (eds.), *Arqueología Mesoamericana: Homenaje a William T. Sanders*, pp. 173-194. UNAM.
- Santley, Robert S. & Philip J. Arnold III
- 2004 El intercambio de la obsidiana y la influencia teotihuacana en la Sierra de los Tuxtles. In M. E. Ruiz Gallut & A. Pascual Soto (eds.), *La Costa del Golfo en Tiempos Teotihuacanos: Propuestas y Perspectivas. Memoria de la Segunda Mesa Redonda de Teotihuacan*, pp. 115-138. INAH.
- Sidrys, Raymond V.
- 1976 Classic Maya Obsidian Trade, *American Antiquity* 41(4): 449-464.
- Silis García, Omar
- 2005 *El Ritual Lacustre en los Islotes Artificiales de la Ciénega de Chignahuapan, Santa Cruz Atizapán, Estado de México.* Tesis de licenciatura, ENAH, México, D.F.
- Sorensen, Jerry H., Kenneth G. Hirth & Stephen M. Ferguson
- 1989 The Contexts of Seven Obsidian Workshops around Xochicalco, Morelos. In M. Gaxiola G. & J. E. Clark (eds.), *La Obsidiana en Mesoamérica*, pp. 269-275. Colección Científica Núm. 176. INAH.
- Spence, Michael W.
- 1981 Obsidian Production and the State in Teotihuacan, *American Antiquity* 46(4): 769-788.
- 1984 Craft Production and Polity in Early Teotihuacan. In K. G. Hirth (ed.), *Trade and Exchange in Early Mesoamerica*, pp. 87-114. University of New Mexico Press.
- 1987 The Scale and Structure of Obsidian Production in Teotihuacan. In E. McClung de Tapia & E. Childs Rattray (eds.), *Teotihuacan: Nuevos datos, Nuevas Síntesis, Nuevos Problemas*, pp. 429-450. UNAM.
- 1996 Commodity or Gift: Teotihuacan Obsidian in the Maya Region, *Latin American Antiquity* 7(1): 21-39.
- Sugiura, Yoko
- 1998a *Informe Técnico del Proyecto Arqueológico de Santa Cruz Atizapán.* Informe presentado al Consejo Nacional de Arqueología del INAH. México, D.F.

- 1998b Desarrollo histórico en el valle de Toluca antes de la Conquista Española: Proceso de conformación pluriétnica. In *Estudios de Cultura Otopame*, pp. 99-122. UNAM.
- 2001 La zona del Altiplano Central en el Epiclásico. In L. R. Manzanilla & L. López Luján (eds.), *Historia Antigua de México, Vol. 2*, pp. 347-390. UNAM.
- 2002 *Informe Técnico del Proyecto Arqueológico de Santa Cruz Atizapán. Tercera Temporada*. Informe presentado al Consejo Nacional de Arqueología del INAH. México, D.F.
- 2005a El hombre y la región lacustre en el valle de Toluca: Proceso de adaptación de los tiempos prehispánicos. In E. Vargas Pacheco (ed.), *Arqueología Mexicana. IV Coloquio Pedro Bosch Gimpera*, pp. 303-329. UNAM.
- 2005b *Y atrás Quedó la Ciudad de los Dioses. Historia de los Asentamientos en el Valle de Toluca*. UNAM.
- 2006 ¿Cambio gradual o discontinuidad en la cerámica?: Discusión acerca del paso del Clásico al Epiclásico, visto desde el valle de Toluca. In L. Solar Valverde (ed.), *El Fenómeno Coyotlatelco en el Centro de México: Tiempo, Espacio y Significado. Memoria del Primer Seminario-Taller sobre Problemáticas Regionales*, pp. 127-162. INAH.



# Particularity of the Periphery: Exchange Systems between the Southeast Toluca Valley and Teotihuacan

Shigeru KABATA\*

This study examines the changing relationship between Teotihuacan, the capital of a regional state in Central Mexico, and the Toluca Valley, a peripheral area of the Teotihuacan state, based on the analyses of obsidian artifacts recovered from a site in the Toluca Valley. During the Classic Horizon (ca. A.D. 150-600), Teotihuacan controlled the procurement of obsidian from deposits at Pachuca, Hidalgo, and Otumba, Estado de Mexico. This unique old city also controlled the exchange of elaborate obsidian products with nearby and distant regions. The monopolistic enterprise served to maintain the Teotihuacan hegemony for several hundreds of years. In the process of the fall of the Teotihuacan state, the distribution of Otumba and Pachuca obsidian diminished, and a new network of obsidian circulation appeared in Central Mexico, in which materials from Ucareo, Michoacán, were widely distributed. These overall changes in the obsidian distribution, however, do not correspond to our observations in the Toluca Valley, although the valley was under the control of Teotihuacan.

In this paper I explore changes and continuities in the obsidian procurement strategies in the Toluca Valley before and after the fall of Teotihuacan from a perspective that focuses on the practice of peripheral people. Social relations between center and periphery are not static, but dynamic and floating, which implies that it is indispensable for peripheral people to assure the procurement of important resources. Based on macroscopic and distributional analyses of obsidian recovered during the survey and intensive excavations at the site of Santa Cruz Atizapán, I specifically examine transformations in the procurement patterns of the Otumba, Pachuca, and Ucareo sources.

The results of my analyses suggest that the circulation system of Ucareo obsidian was established in the Toluca Valley during the Late Classic (ca. A.D. 450-600) or before the fall of Teotihuacan and that this may have facilitated the circulation of Ucareo obsidian in other areas of the Central Mexican Highlands after the fall of the Teotihuacan system. What about Otumba and Pachuca? You should say something here. All this indicates that the inhabitants in Santa Cruz Atizapán procured obsidian not only through the center (Teotihuacan) but also through other interaction spheres. I suggest two explanations, which are not mutually exclusive, for the obsidian procurement patterns observed at San Cruz Atizapán. First, the Teotihuacan system probably had begun to disintegrate by the beginning

\* Kyoto University of Foreign Studies

of the occupation of Santa Cruz Atizapán, and the inhabitants of this site had to depend on other sources of obsidian than Otumba and Pachuca. Second, if the Teotihuacan system was still functioning, it would have been economically or even politically more profitable for the inhabitants to secure multiple sources and to maintain the balance between demand and provision in case that the trade of one or the other sources declines. These observations suggest that the inhabitants at Santa Cruz Atizapán employed obsidian procurement strategies that are to some extent independent from the central system. This explains why the site continued to flourish after the decline of Teotihuacan. Exchange networks in Classic period Central Mexico were certainly more complex than a simple relationship between a dominant core and a passive periphery; they were multidimensional with multiple participants from different regions. To investigate the multidimensionality of exchange networks requires focusing on the particularity of different regions that were built into the Teotihuacan system as well as other regions that maintained some relationships with the Teotihuacan system.

**Keywords:**

Ancient Mexico, Teotihuacan, Toluca, Obsidian, Exchange Systems

# 噴火災害をどう乗り越えたか

— 古代マヤ人の火山とともに生きる知恵・記憶 —

市川 彰 \*

2000年代以降、大規模災害の経験を通じて、短期的周期かつ突発的に起こる破壊的な自然現象によって生じる急激な環境変化に対して、社会的・学術的関心がさまざまな分野で高まってきている。本稿では、紀元後400/550年～1000年の間に、イロバンゴ火山、ロマ・カルデラ火山、エル・ボケロン火山という、少なくとも3度にわたり噴火災害に罹災したサボティタン盆地社会の事例をもとに、当時の人々がどのように急激な環境変化に対峙したのかを考古学的に検討する。特に、噴火のタイプや規模の異なる火山噴火前後における物質文化の変化、また古代マヤ人の世界観の中心にあった聖なる山への信仰に着目しながら考察する。サボティタン盆地の複数遺跡の考古学資料をもとに検討した結果、神殿ピラミッドの建設活動が噴火後の再興過程を理解するうえで鍵であることがわかった。例えば、イロバンゴ火山の噴火では、加害因子である火山灰を建築材として用いる行為により、神殿ピラミッドに象徴的な意味や噴火の記憶が付与されるだけでなく、有効な建築材であるという認識が新たに付与されていった。さらにロマ・カルデラ火山の噴火後には、複数の規格と異なる原材料からなる日干しレンガを用いて神殿ピラミッドが建替えられていることから、再建にあたり盆地内の多様な集団が参加していたことが示唆された。すなわち、マヤ社会の核であり、聖なる山信仰に基づき築造された神殿ピラミッドや公共建造物を再建するという協働作業によって社会的紐帯の確認と強化をはかることが、噴火災害による急激な環境変化を乗り越えるうえで重要であった。

## KeyWords

環境変化  
火山噴火  
神殿ピラミッド  
マヤ  
技術

## 目次

はじめに

- |                        |                          |
|------------------------|--------------------------|
| I 急激な環境変化と人間の相互関係を探る視点 | 2. エル・カンビオ遺跡             |
| II メソアメリカ文明における火山      | 3. サン・アンドレス遺跡            |
| III サボティタン盆地と火山活動      | VI エル・ボケロン火山の噴火          |
| 1. イロバンゴ火山             | 1. ホヤ・デ・セレン遺跡とエル・カンビオ遺跡  |
| 2. ロマ・カルデラ火山           | 2. サン・アンドレス遺跡            |
| 3. エル・ボケロン火山           | VII 古代マヤ人の火山とともに生きる知恵・記憶 |
| IV イロバンゴ火山の噴火への対応      | 1. 神殿ピラミッドと火山噴火          |
| 1. イロバンゴ火山の噴火前         | 2. 人間集団の連続性・不連続性         |
| 2. イロバンゴ火山の噴火後         | おわりに                     |
| V ロマ・カルデラ火山の噴火への対応     |                          |
| 1. ホヤ・デ・セレン遺跡          |                          |

# はじめに

人類はいかに急激な環境変化に対応してきたのか。「環境変化」というと、寒冷化や温暖化のように長期的周期あるいは漸次的に起こる現象がすぐにあげられる。考古学は、そうした長期的なスケールで起こる環境変化と人間社会の変化や適応などについて厚い研究蓄積がある。しかし、近年では、北中米を襲ったハリケーン・ミッチ (1998 年) や東日本大震災 (2011 年) など、大規模災害の経験を通じて、短期的周期かつ突発的に起こる破壊的な自然現象によって生じる急激な環境変化に対して、社会的・学術的関心がさまざまな分野で高まってきている (e.g. Cooper & Sheets [eds.] 2012; Grattan & Torrence [eds.] 2007; Hoffman & Oliver-Smith [eds.] 2002; Oliver-Smith & Hoffman [eds.] 1999; Torrence & Grattan [eds.] 2002)。なお、ここでいう環境変化というのは、噴火、津波、洪水などによって生じる自然環境の変化を単に示すだけではなく、それとともに生じる都市や集落など人工的な環境における変化も含む。

突発的に生じ、日常生活を危機にさらす急激な環境変化への対応や適応には、人間社会の本質があらわれ、それは往時の技術、価値観、社会のあり様などによって多様であることが予想される。本稿では、筆者が専門とするメソアメリカ文明、そのなかでもマヤ南東地域に位置するサポティタン盆地を事例として、古代の人々が火山噴火によって生じた急激な環境変化にいかに対応あるいは適応していったのか、考古学資料をもとに考察する。特に、噴火の前後に物質文化がどのように変化したのか、あるいはしないのか、という点に着目しながら、火山とともに生きる知恵や記憶への接近を試みる。

## I 急激な環境変化 と人間の相互関係 を探る視点

急激な環境変化に関する研究は、その主要因となる噴

火、津波、地震などの自然現象の発生要因や頻度、性質など自然科学系的手法から主に推進されてきた。そこに、とりわけ 2000 年代以降、人間の社会的文化的な側面という視点が加わり、それが急激な環境変化による被害の大小と強く関わっていることが本格的に意識化されていった。つまり、自然現象の強度=被害の大きさではなく、自然現象に対する人間側の認識や対策などによって被害の大小は多様であることが示されてきた。今日、急激な環境変化に対する人間の適応・対応というトピックは、考古学が今後取り組んでいくべき「大課題 (Grand Challenges)」のひとつとして重要視されるほどになっている (Kintigh *et al.* 2014: 18)。

人類史を数千年・数万年規模で長期的かつ通時的視点から研究することができる考古学は、急激な環境変化を研究する際に大きなメリットがある。なぜなら、考古学は、文献記録もなく、また現代人の体験・記憶にない災害痕跡を時空間的に大きなスケールで把握しながら、過去の人々の災害の対応と適応、災害による社会・文化変容の有無を明らかにできるだけでなく、そこから多くの歴史的教訓を学ぶ機会を提供してくれるからである (文化庁編 2017)。温暖化や寒冷化といった長期的かつ漸次的な気候変動と比較して、短期的周期かつ突発的に起こる環境変化への対応や適応を、予測不能かつ劇的な環境変化への適応過程の一種として認識することで、より大きな研究テーマへと昇華することも可能である (e.g. Cooper & Sheets [eds.] 2012)。

例えば、古典期マヤ文明の崩壊などのように、文明社会の崩壊という長年多くの関心を集めてきたテーマにおいて、環境変化はその主たる要因のひとつとして議論の俎上にあがることが多い (e.g. Aimers 2007; Tainter 1988; Yoffee & Cowgill [eds.] 1988)。しかし、こうした研究の潮流にも変化がみられる。単に「崩壊」の部分のみを扱うのではなく、「発展→崩壊・衰退→再興」といったより長期的な社会・文化変容をみる傾向になってきた (e.g. Faulseit [ed.] 2016; Iannone [ed.] 2014; McAnany & Yoffee [eds.] 2010; Schwartz & Nichols [eds.] 2006)。環境変化それ自体のみに焦点をあててしまうと、非常に限定された時間だけが対象になってしまいがちである。そのため環境変化の評価は単にそれを引き起こした自然現象の強度に依拠することになってしまう。崩壊という事象だけを捉えるのではなく、それを社会変容の一過程と捉えて、より包括的に文明論を展開しようとする視座が求められているといえよう。本稿では、火山噴火によって複数の急激な環境変化を経験したサポティタン盆

地社会の事例をもとに、それぞれの火山噴火前後の物質文化の変化に着目し、当時の人々がどのように急激な環境変化に対応していったのかを考えてみたい。

## Ⅱ メソアメリカ文明における火山

「メソアメリカ文明」とは、現在のメキシコ北部からコスタリカ西部にまたがる地域に栄えた、アステカ文明やマヤ文明など諸文明の総称をさす。このメソアメリカ文明が栄えた地域の自然環境は、大きく高地と低地に分けられる。高地は、西シエラマドレ山脈、東シエラマドレ山脈、メキシコ横断火山帯、南シエラマドレ山脈、チアパス・グアテマラ高地などからなり、主に太平洋岸側やメキシコ中央部に山々が連なっている(図1)。主な火山として、メキシコ・中米最高峰のオリサバ火山(標高5699m)、ナワトル語で「煙を吐く山」を意味するポポカテペトル火山(標高5452m)などがあげられる。こうしたメソアメリカ文明圏にある山々では数々の噴火活動が確認されている。そして、こうした山々は、メソアメリカの人々の世界観を構築する極めて重要な構成要素であった。したがって、火山噴火という自然現象への認識や対応にも深く影響を与

えていたことが容易に想像できる。

メソアメリカの人々は、世界が「天上界・地上界・地下界」からなると考えていた。そして、これらの三つの世界を結ぶのが「聖なる山」であった(e.g. 嘉幡 2019; Brady & Ashmore 1999; Schele & Freidel 1990; Vogt 1981)。聖なる山は、生命の起源地、神々や神聖王の先祖が宿る場所、そして世界の中心であった。聖なる山への信仰に関連する情報は、後古典期あるいは植民地時代の絵文書などから多く得られるが、その萌芽は、サン・ロレンソ遺跡やラ・ベンタ遺跡などのオルメカ文明に認められ、少なくとも先古典期前期から中期(紀元前1200～400年)にさかのぼると言われている(e.g. Cyphers & Di Castro 2009; Heizer 1968)。以降、聖なる山信仰を基盤とするメソアメリカ人の世界観は「神殿ピラミッド」を核とする公共建造物群によって構成される都市景観に埋め込まれ具現化されていった。マヤ文明では、山は「ウイツ(Witz)」として神格化され、神殿ピラミッドなどの装飾にも表現された。山の神は、しばしば権力の象徴でもある玉座とも関連づけられた(Stone & Zender 2011: 138-139)。実際に山々が連なるマヤ高地よりも、地形の激しい起伏がほとんどないマヤ低地において、山の神の表象や神殿ピラミッドの高層化が目立つ点は、マヤ地域における聖なる山信仰の起源や波及の過程を考えるうえで興味深い。

聖なる山と洞窟の関係も切り離すことができない。グアテマラ高地に居住するケクチ・マヤに関する民族学的研究によれば、聖なる山とされる場所には、必ずと言ってよいほど洞

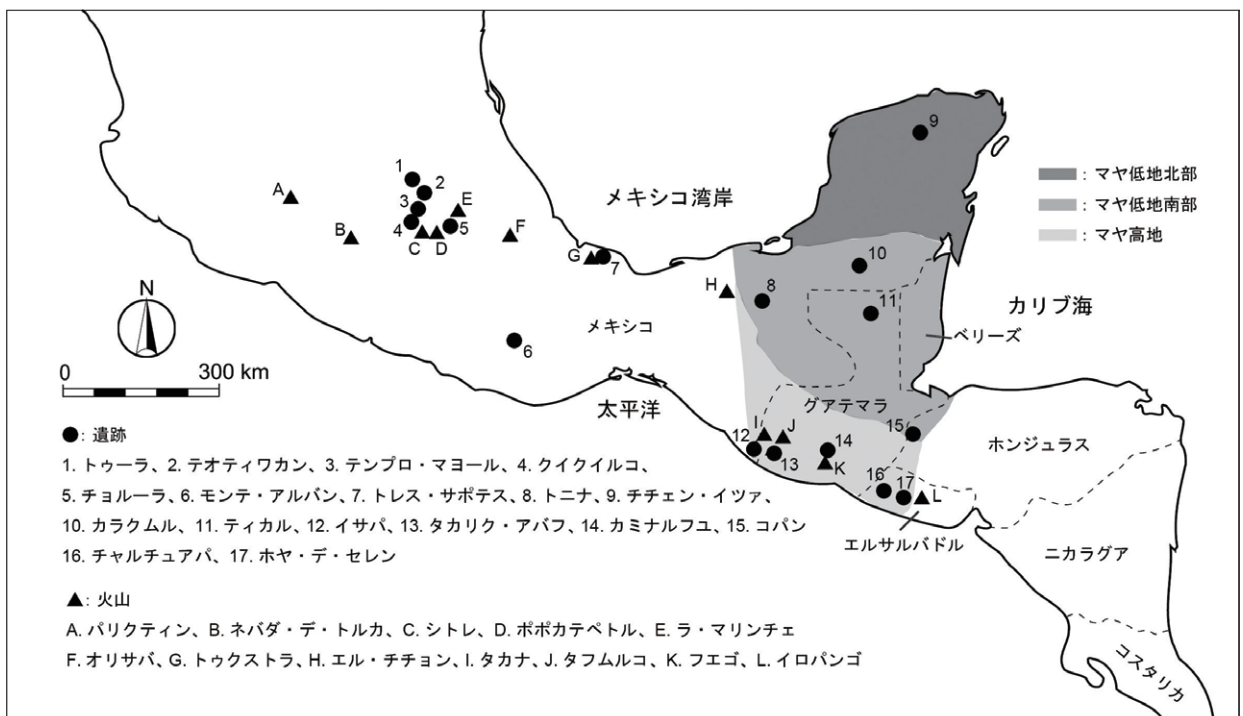


図1 メソアメリカの主な火山と遺跡(筆者作成)

窟がともなっている(Brady 1997: 603)。洞窟は、地下界への入り口であり、同時に水や動物など生命の起源が宿る場所でもあるとされる。こうした自然によって造られた聖なる景観をモデルとして、それをマヤの人々は、都市計画や儀礼などに反映させた。都市の象徴となる神殿ピラミッドが、洞窟の上あるいは近くに建てられることはメソアメリカの広い範囲で認められ、都市の選地と深く関わっている(e.g. Brady 1997; Heyden 1975)。神殿ピラミッドを聖なる山とみなし、その内部を洞窟や生命の起源とする思想は、単に表面装飾だけではなく、可視化されることのない神殿ピラミッドの内部にまで意味づけがなされていることを示唆する。

山々が都市の方位軸や公共建造物の配置を決定する際にも重要な役割を果たしていたことは、マヤ地域に限らず広くメソアメリカで認められる。こうした都市設計には、先の世界観に加えて、高度な層体系や天文学的知識が組み込まれた(e.g. Šprajc 2017; Sugiyama 1993)。この際、暦の計算などの参考となる天文学的レファレンスとして、近隣の山々、そして聖なる山を具現化した神殿ピラミッドや公共建造物などの配置が重要となった(e.g. Aveni 2003; Dowd & Milbrath [eds.] 2015)。

このように、メソアメリカでは聖なる山である神殿ピラミッドを中心とした聖なる空間・景観が創造され、そこでさまざまな儀礼が執りおこなわれた。神殿ピラミッドの建設活動とそこでおこなわれた儀礼には神々からの神託が反映されているのである。そして、建設や儀礼は、それを取り仕切る往時の支配者の権力を正当化・強化するための手段であると同時に、

それに参加する人々の社会的紐帯を強化する装置となっていた。このように人々が居住する自然環境や景観は、生業形態や経済的側面から理解されやすいが、メソアメリカの場合にはとりわけ文化的・象徴的側面も含めて考慮していく必要がある(Joyce & Goman 2012)。

### Ⅲ サポティタン盆地と火山活動

サポティタン盆地は、エルサルバドルのほぼ中央部に位置する(図2)。同盆地は、行政区としてはラ・リベルタ県とソンソナテ県にまたがる。盆地内の標高は約400～500m、年間平均気温は24.8℃、年間降水量は約1500mmである(MARN 2015)。スシオ川やアグア・カリエンテ川などの河川とその支流、サポティタン湖(1960年代に埋め立てられ、現在は存在しない)、チャンミコ湖などの水源の周囲に肥沃な農地が広がっている。こうした肥沃な農地は、盆地周囲に位置する火山の長期的な活動によって形成されてきたものである。盆地の北側にはロマ・カルデラ火山やエル・プラヨン火山、南側にはエル・バルサモ山系、西側にはサンタ・アナ火山、そして東側には複数の火山からなるサン・サルバドル火山複合がある。この火山複合のひとつに、エル・ボケロン火

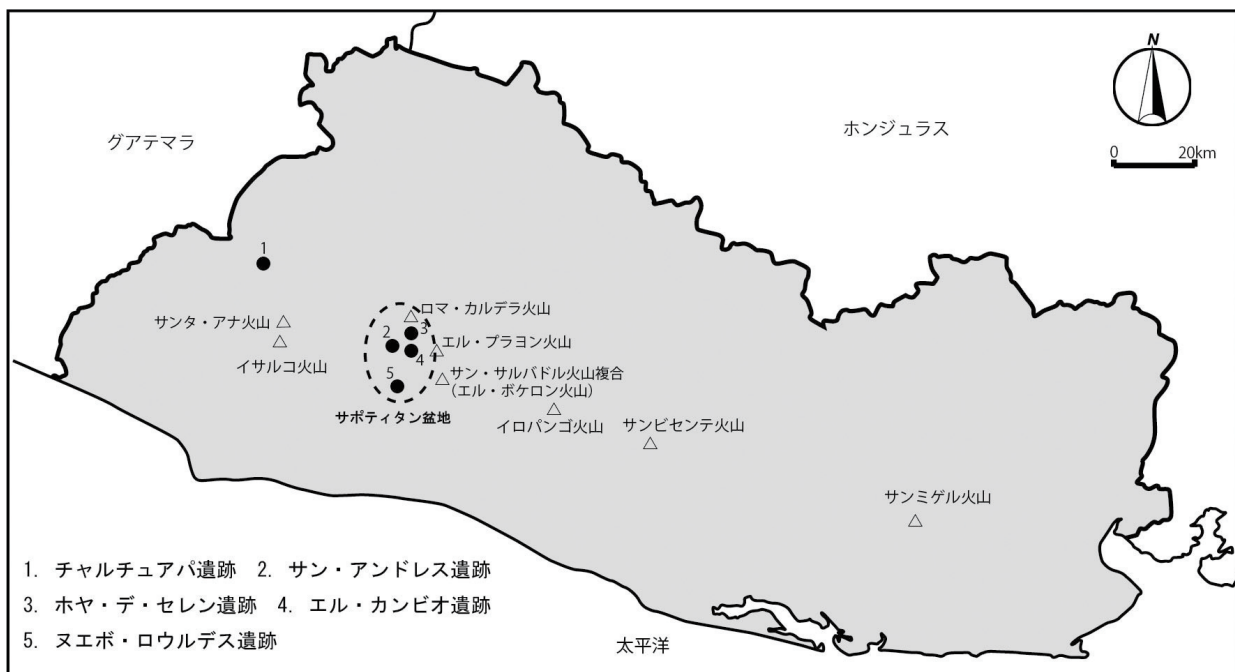


図2 エルサルバドル共和国の主な火山と本稿で扱う遺跡(筆者作成)

山がある。この火山複合の活発な噴火史は、噴火によって形成された大小さまざまなクレーターや、露頭にみられる幾層もの火山灰からうかがい知ることができる (Ferrés *et al.* 2011: 837)。先スペイン期の人々はサポティタン盆地に居住を開始して以来、こうした度重なる噴火活動に対峙してきたのである。

サポティタン盆地に所在する先スペイン期遺跡を発掘すると、少なくとも3つの噴火の痕跡を容易に確認することができる。噴火年代の古い順から、イロパンゴ火山の噴火 (紀元後400～450年頃)、ロマ・カルデラ火山の噴火 (紀元後650年頃)、エル・ボケロン火山の噴火 (紀元後1000年頃) である。火山爆発指数3～6 (やや大規模～巨大) に相当し、物理的に環境の変化をうながしたことが明瞭にわかる噴火は、この3つである。他にも噴火活動自体は記録されているが、より小規模である (Ferrés *et al.* 2011: 836-837)。以下、それぞれの火山と噴火の概要について火山学的観点からその特徴を記す。

## 1. イロパンゴ火山

イロパンゴ火山は、上述したサポティタン盆地を囲む火山群ではなく、盆地中央部から東に約40km、首都サン・サルバドルの東端に位置する (図2)。現在、火口は約8km×11kmのカルデラ湖になっている。湖面の標高は約450m、湖の周囲の外輪山の標高は約700～1000mとなっている。1879～1880年に最後の噴火の記録が残っているが、それ以前のものとして4つの巨大噴火が記録されている。各噴火の火山噴出物は、それぞれ噴火年代の古い方から、TB4 (約36000年前)、TB3 (約19000年前)、TB2 (約9000年前)、そしてTBJ (約1500～1600年前) と呼ばれている。本稿で扱うのはTBJ テフラである。TBとはスペイン語でTierra Blanca、すなわち「白い土」、Jovenは「若い」を意味する。字義どおり、イロパンゴ火山の噴火を由来とするテフラは明瞭な白色を呈しているため、判別が容易であること、広域に分布していることから、火山学や地質学、そして考古学にとって年代決定の重要な指標となっている。ただしTBJ テフラの年代については諸説あり (Dull *et al.* 2001; Sharer 1978; Sheets [ed.] 1983)、注意が必要である。研究史をさかのぼると、大まかに紀元後260年頃、紀元後420年頃、紀元後535年頃というように年代に関する見解が変遷してきている。最新の研究成果では、紀元後539/40年という説が有力となっている (Dull *et al.* 2019)。詳細は拙稿 (市川 2017; Ichikawa 2016) に譲るが、TBJ テフラの年代は、放射性炭

素年代から較正年代を導き出す際の較正曲線が平坦な部分に相当し、常に400-550 cal AD (2 $\sigma$ ) の幅がでてしまうために年代決定を困難にしている。この年代を絞り込む作業は、噴火年代の特定だけに終始せず、推定噴火年代の前後に相当する考古資料や年代データをもとに評価していく必要があると筆者は考えている。

TBJ テフラを噴出した噴火の規模は、火山爆発指数が6とされ、10000km<sup>2</sup>以上にわたってテフラが確認されている。こうしたことから、TBJ 噴火は、新大陸で完新世最大規模であったと評されている (Pedrazzi *et al.* 2019)。

火山学的観点からもう少し詳しく見てみよう。TBJ テフラは下位からA～Gのユニットに分けられている (Hernandez 2004; 北村 2016: 253)。以下、北村の記述にならって記すと、C・Fが火砕流 (TBJ 軽石流堆積物) で、他は降下火山灰である。A・D・Gが細粒火山灰で、D・Gは火山豆石を含む。遠方まで到達した降下火山灰の多くは最後のGである。火砕流は、火口から半径約40kmの範囲に分布する。降下火山灰は、火口付近では数10mを超す厚さがあり、火口から約50kmで厚さ40～60cm、約80kmで厚さ20cm程度である。もちろん地形や方角によっても一様ではなく、主に火口から西側に厚い降下火山灰の堆積がみられる。

## 2. ロマ・カルデラ火山

ロマ・カルデラ火山は、サポティタン盆地の北側に位置する。「ロマ」というのは「丘」という意味であり、現在はその名の通り丘のような形状になっている。標高はおおよそ430～450mである。火山の東側には、南北にスシオ川が流れている。火口から南に約600mのところろに位置する集落遺跡ホヤ・デ・セレンから出土した炭化物試料の年代測定より、噴火の年代は紀元後600～650年頃とされている (Sheets [ed.] 2002)。ホヤ・デ・セレン遺跡からは古典期後期 (600～900年) の指標土器である多彩色のコパドール (Copador) 土器グループが出土していることから絶対年代は妥当な範囲にある。ただし、年代測定自体は加速機質量分析計 (AMS) の導入以前におこなわれたものであり、年代誤差がやや大きいこともあり、最新の年代測定技術により再測定し、噴火年代を高精度に推定することが望まれる。火山爆発指数は3であり、テフラは火口から半径約3～4kmの範囲に到達している。主に火口から南側に厚い堆積が見られる。火口から半径1km以内は1～10m+の堆積が見られるが、半径3kmを超えると10cm以下となる。テフラは約35km<sup>2</sup>の範囲に堆積した。先のイロパンゴ火山の噴火に

比べれば、影響は局所的であるが、古代集落ホヤ・デ・セレンは5mを超えるテフラによって埋没、壊滅した。ゆえに、ホヤ・デ・セレンは「中米のポンペイ」と称され、1993年にユネスコ世界遺産に指定されている。

通称セレン・シークエンスと呼ばれるテフラの堆積は、主に火砕流堆積物で構成されている(Miller 2002)。大きく降下火砕屑物(pyroclastic-fall deposit)と火砕サージ堆積物(pyroclastic-surge deposit)とに分類され、15のユニットに細分されている。降下火砕屑物は主に細粒スコリアで構成され、火砕サージ堆積物は層状になっている。特徴的なのは、非常に細かい黒色の火山礫(lapilli)が互層状に含まれていることである。この黒色の火山礫ユニットのうち4・7・9が最も広範囲に飛散した。

現地表面であるユニット15を除いて、ユニット1～14までは攪乱層はなく、一度の噴火で短期間に堆積したものと考えられている。この厚い堆積物によってホヤ・デ・セレン集落は壊滅したが、住居内や集落内で被災したと思われる人々の人骨が出土していないことから、噴火の予兆となる地震の揺れ、それにとまなう家屋の倒壊に恐れの人々が、火砕流などが到達する前に集落から離れた場所に避難できたと考えられている(Miller 2002: 19-20)。

### 3. エル・ボケロン火山

エル・ボケロン火山は、サポティタン盆地の東側に位置するサン・サルバドル火山複合の一角をなす。筆者の個人的な印象にすぎないかもしれないが、サポティタン盆地側から見るシルエットが印象的な山々は、エル・ボケロン火山を含むサン・サルバドル火山複合である(図3)。標高は火口の最も高い場所で、約1890mである。Ferrésらの研究(Ferrés *et al.* 2011)によれば、先スペイン期には2回の噴火が確認



図3 サン・アンドレス遺跡アクロポリスからみたサン・サルバドル火山複合(筆者撮影)

されている。それぞれ「タルペタテ I」と「タルペタテ II」と呼ばれている。前者の噴火によって噴出したテフラは「サン・アンドレス・タフ(San Andres Tuff)」とも呼ばれている。火山爆発指数は4であり、テフラは火口から西側・南側を中心に約270km<sup>2</sup>の範囲で明瞭に確認されている。後者の噴火は、火山爆発指数は不明だが、噴出物は火口から1.5～4.4km<sup>2</sup>の範囲に分布が確認されている。

噴火年代は、放射性炭素年代測定の結果、タルペタテ I が964-1041 cal AD (2σ)、タルペタテ II が1214-1285 cal AD (2σ)という年代が与えられている(Ferrés *et al.* 2011: 840)。テフラの分布範囲からタルペタテ II については、サポティタン盆地にまで到達していないため、本稿では扱わない。タルペタテ I の年代は、土器の型式学的年代や出土遺構の状況などから蓋然性はある程度高いと思われるが、AMSによる年代測定資料が1点のみであることから、今後さらなる高精度化が必要とされる。本稿では紀元後1000年頃ということで進める。

テフラは、全体的に灰褐色を呈しているが、その特徴から大きく2つのユニットに分けられている。上層ユニットは、基本的には細粒火山灰で積層構造になっており、非常に硬く締まっている。層内には、噴出物が降下していく過程で混入したとされる植物が多く含まれている。下層ユニットには細かい火山礫が多く含まれ、それ以外の火山砕屑物はほとんどない。サポティタン盆地では、約10～30cm程度の厚さで確認することができる。

## IV イロパンゴ火山の噴火への対応

### 1. イロパンゴ火山の噴火前

イロパンゴ火山の噴火以前の遺跡は、サポティタン盆地では少なくとも6遺跡<sup>1</sup>が確認されている(Black 1983: 75)。遺跡は、サン・アンドレス遺跡などがある盆地中央部や北東部に位置する河川や湖畔といった水源近くに位置している。

1 これは1983年時点である。現在はより多くの遺跡が登録されていると思われるが、登録遺跡がまだ公表されておらず不明のため、1983年時点のデータを参照する。



出土土器グループから判断すると、遅くとも先古典期中期の紀元前 650 年までには土器製作と農耕を中心とする集落が形成されていたようである(市川 & 八木 2016; Ichikawa & Guerra 2018)。神殿ピラミッドを含む公共建造物群は、紀元前 200 年頃から紀元後 200 年頃、すなわち先古典期後期から終末期に相当する時期に造られたようである。以下、発掘資料のデータがある主な遺跡の状況から、イロパンゴ火山が噴火する前のサポティタン盆地の状況をみていこう。

### 1.1. ホヤ・デ・セレン遺跡

ホヤ・デ・セレン遺跡は、サポティタン盆地の北東部に位置し、スシオ川沿いに位置している(図 4)。標高は約 460m である。既述の通り、ロマ・カルデラ火山の噴火によって埋没したことで有名な集落遺跡である。その集落は土壌化した TBJ テフラの上に建てられている。主にイロパンゴ火山噴火後の保存状態の良い集落の調査が主体であり、イロパンゴ火山噴火以前の居住に焦点を当てた研究はおこなわれていない。しかし、TBJ テフラよりも下層からはノワルコ(Nohualco)土器グループやネガティブ装飾をもつ土器など、いわゆる先古典期後期・終末期(紀元前 200～紀元後 200 年頃)に相当する土器が出土している。このことから、ホヤ・デ・セレンでは少なくとも土器の利用をとまなう生活形態を有した小規模集落がイロパンゴ火山の噴火以前に存在していたと考えられる。ここで注意しておきたい点は、古典期前期(紀元後 250～400/550 年頃)に相当する土器が出土していない点である。このことから噴火する前にはすでに社会活動が停滞していた可能性がある。これは後述するサン・アンドレス遺跡も同様である。

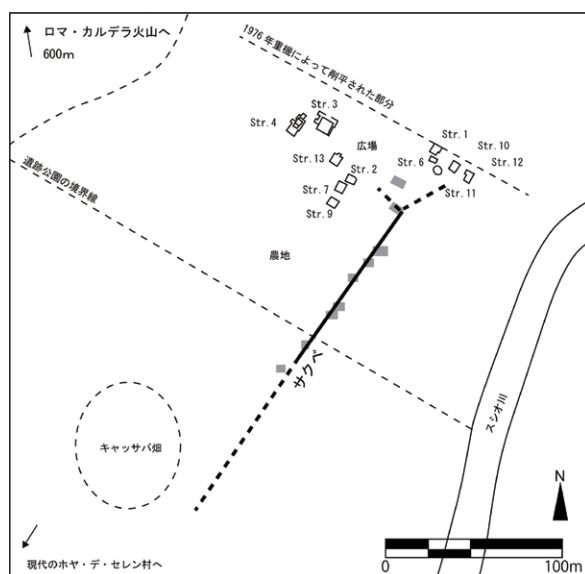


図4 ホヤ・デ・セレン遺跡 (sheets *et al.* 2015 図2をトレス・加筆)

### 1.2. サン・アンドレス遺跡

サン・アンドレス遺跡(San Andrés)は、盆地中央部に位置し、スシオ川とアグア・カリエンテ川の間位置する(図 5)。標高は約 470m である。同遺跡ではイロパンゴ火山噴火以前に相当する遺構は、畝状遺構のみが確認されている。後述するエル・カンビオ遺跡のように公共建造物の存在を示唆するマウンドといえる遺構は現時点では確認できていない。しかしながら、後に最盛期と呼ばれる古典期後期(紀元後 650～900 年)の出土土器量と比べても大量かつ多様な土器グループが確認されており、活発に土器製作がおこなわれていたと考えられる(Ichikawa & Guerra 2018: 436)。

出土する土器は古いものではホコテ(Jocote)やラマテペケ(Lamatepeque)土器グループといった先古典期前期(紀元前 1200～600 年)に相当する土器がわずかだが出土している。先古典期中期(紀元前 650～400 年頃)から土器の出土量が次第に増えていく。したがって、紀元前 650～400 年頃から土器製作が次第に活発になっていったと考えられる。土器の種類や生産量が増え、土器製作が最も活発になる時期はミサタ(Mizata)やノワルコ土器グループが生産されていた時期、すなわち先古典期後期から終末期(紀元前 200～紀元後 200 年頃)である。この時期にはイシュ

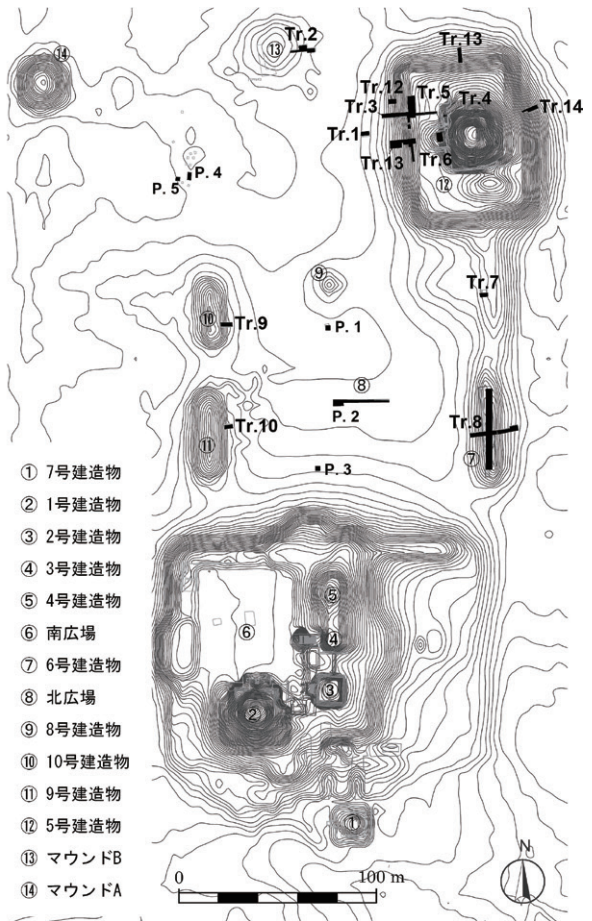


図5 サン・アンドレス遺跡(筆者作成)  
 (Tr. はトレンチ発掘、P. 試掘坑)

テベケ (Ixtepeque) 産の黒曜石も出土しており、サン・アンドレスに居住した人々は、遠距離交易ネットワークにも参加していた(八木 2017: 44-45)。しかし、イロパンゴ火山の噴火直前に相当する古典期前期(紀元後 250 ~ 400/550 年頃)に生産された土器は、グアサバ (Guazapa) とグアルポパ (Gualpopa) 土器グループのわずか 2 点しか出土していない。したがって、先のホヤ・デ・セレン同様に、イロパンゴ火山の噴火直前には、サン・アンドレスではすでに社会活動が停滞していた可能性が高いと考えている。

### 1.3. エル・カンビオ遺跡

エル・カンビオ遺跡 (El Cambio) は、サポティタン盆地の北東部、スシオ川の東側に位置し、標高は約 450m である(図 6)。遺跡は 5 つの土製マウンドで構成されている。遺跡の北側に位置し、最も大きい 1 号マウンドは高さ約 12m を有する。その他は、いずれも高さ 2m 以下の小型マウンドである。マウンド群は南北軸を有し、おそらくは 1 号マウンドを頂点として三角形に配置されていたと考えられる。これはチャルチュアパのエル・トラピチュエ地区やカサ・ブランカ地区の建造物配置と類似しており、先古典期後期から終末期に建造された可能性が高いことを示している。また、1 号マウンドの南側の空間には畝状遺構が広く検出されている。マウンド周辺で畝状遺構が発見される事例はチャルチュアパ遺跡カサ・ブランカ地区でも確認されている(伊藤 2004: 138-139)。こうした規則的な配置や多くの労働力が投資されたと考えられる建造物は、「公共建造物」として往時の社会にとって重要

な意味を有しており、エル・カンビオはサポティタン盆地の中心センターとして機能していたに違いない。特に高さ 12m を有し、ひと際目立つ 1 号マウンドは神殿ピラミッドとして機能していたと筆者は想定している。

エル・カンビオ遺跡では、TBJ テフラよりも下層からグアサバ土器グループが見つかった(Yagi *et al.* 2015)。化粧土削り文 (Scraped slip) が特徴的なこの土器グループは、古典期後期の指標土器とされるが、イロパンゴ火山の噴火以前にはすでに生産されていたことを示す。チャルチュアパ遺跡でもタスマル地区において TBJ テフラより下層から検出例がある(市川 2017: 63)。このことから遅くともイロパンゴ火山が噴火以前からグアサバ土器グループが生産され始めていたと考えられる。上述の公共建造物群が先古典期終末期から古典期前期頃まで機能していたとは限らないが、エル・カンビオでは少なくとも人々が居住していた景観に神殿ピラミッドを含む公共建造物群が存在したことは間違いない。

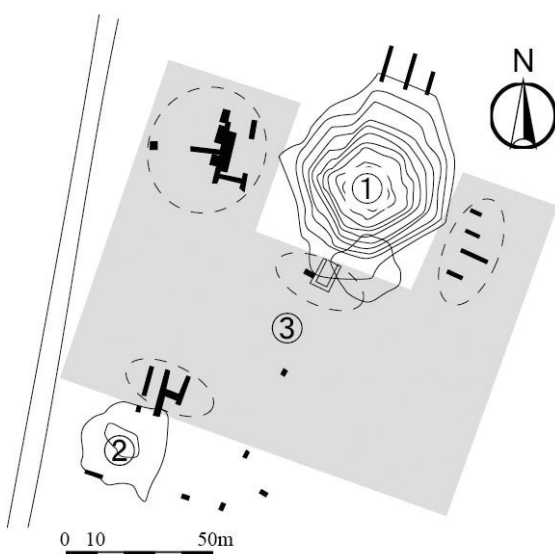
### 1.4. ニエボ・ロウルデス遺跡

ニエボ・ロウルデス遺跡 (Nuevo Lourdez) は、サポティタン盆地の南東部に位置し、盆地の南東部からスシオ川に向かって流れる支流の右岸に位置する。標高は約 500m である。宅地造成にともなう緊急発掘ではあったが、TBJ テフラに覆われた畝状遺構や土壙墓が検出されている(八木 2017: 48)。Black によるサポティタン盆地の遺跡類型(Black 1983: 71)に基づけば、遺物の散布範囲が 400m<sup>2</sup> を超えていることから、大規模集落として分類することができる。ただし、公共建造物などの存在を示すマウンド群や住居址は現時点では確認されていない。

すべての土器を実見できている段階ではないが、八木宏明による一連の研究(八木 2017)、筆者らによる土器の実見観察と年代学的研究(Ichikawa *et al.* 2015)に基づくと、先古典期終末期から古典期前期に相当するグアサバやウイスコヨル (Huiscoyol) といった土器グループ、この時期の指標となる球根状脚部が多数確認されている。つまりイロパンゴ火山が噴火する直前まで活発に土器製作をおこなっていた社会が存在したと考えられる。

イロパンゴ火山の噴火以前のサポティタン盆地の状況をまとめると次のようになる。

先古典期前期頃から居住が開始され、先古典期中期頃から土器生産が活発になり、先古典期後期・終末期には土器製作や農耕を基盤とする集落、公共建造物を有するセンターが形成された。古典期前期には一部の集落で土器生



① 1 号マウンド ② 2 号マウンド  
③ 耕作地の広がる範囲 (灰色囲み・推定)

図 6 エル・カンビオ遺跡 (Shibata & Moran 2009) をトレス・加筆

産は停滞し、公共建造物も放棄されるようだが、引き続き社会生活は営まれていった。

盆地内の広い範囲に集落が分布しているが、人口密度はそれほど高くなかった。そのなかでエル・カンビオは、先古典期後期から終末期にかけて公共建造物群が建てられ、盆地の中心的なセンターとして発達した。おそらくはチャルチュアパとの交流を介して、神殿ピラミッドを含む公共建造物を中心とする聖なる空間を創出していったのであろう。ただし土器組成をみても、サポティタン盆地の諸遺跡とチャルチュアパ遺跡とは、主体となる土器グループが異なっており、土器製作レベルでは在地の志向が優先されたと思われる(市川 & 八木 2016: 21-22)。エル・カンビオの公共建造物がいっ頃まで機能していたかは不明であるが、土器から判断するに続く古典期前期まで公共建造物群が傍らに存在する景観に人々が居住していたと考えられる。ヌエボ・ロウルデスでも古典期前期の土器がみられる。一方で、ホヤ・デ・セレンやサン・アンドレスでは古典期前期に相当する土器は極めて少なく、集落としてはすでに衰退していた可能性が高い。ただし盆地全体という観点から俯瞰してみると、単に集落が盆地内の別の場所に遷移している可能性もあり、必ずしも盆地全体の社会活動が停滞していたというわけではなく、噴火の直前まで土器生産と農耕を中心とする社会がサポティタン盆地には存在していたと筆者は考えている。

## 2. イロパンゴ火山の噴火後

イロパンゴ火山の噴火は、先にも述べたように新大陸では完新世最大規模と評されており、火口から半径約 40km 圏内で、火砕流が到達した地点は壊滅的影響を被り、それ以外でも火山灰が厚く堆積した地域では、農耕はできず、また水源も汚染されてしまうため生活は困難であったとされている(Dull *et al.* 2019: 14)。噴火年代を紀元後 539/40 年とする Dull らの見解では、サポティタン盆地におけるイロパンゴ火山による被害は従来考えられていたよりも小さかったとしながらも、公共建造物群を中心とする社会が再び現れるのは 7 世紀中頃からであったと述べている(Dull *et al.* 2019: 12)。しかし、下記に示すように筆者らの調査で得られた考古学的データからは異なるシナリオを想定することができる。

### 2.1. ホヤ・デ・セレン遺跡

ホヤ・デ・セレン遺跡は、イロパンゴ火山の火口中心部から西約 37km に位置する。ホヤ・デ・セレン遺跡の主な居住痕跡は、TBJ テフラとロマ・カルデラ火山の噴火によって

噴出したテフラ(以下、LC テフラ)の間にある(Sheets [ed.] 1983, 2002)。したがって、仮にイロパンゴ火山の噴火年代を最新の研究成果にしたがって紀元後 539/40 年とするならば、その後に居住が開始され、紀元後 650 年頃に発生したロマ・カルデラ火山の噴火によって埋没したことになる。古典期後期の指標土器であるコパドール土器グループがあることから、少なくとも紀元後 600 年前後から居住が再開されたと推測できる。TBJ テフラは、約 30cm 堆積している。このイロパンゴ火山灰の上の、さらに約 30cm の厚さの固く締まった茶褐色土層の上に住居址はある。また、キャッサバやトウモロコシなどを栽培していたと思われる畝、そして TBJ テフラを硬く叩きしめて造られたサクベ(Sacbe)と呼ばれる古代の道(幅が約 2m、高さ約 21cm)や水路も造られている(Sheets *et al.* 2015: 353-356)。加えて、土製の住居、倉庫、祭祀施設などがある。すなわち、集落の形成にあたっては、さまざまな土木事業が展開されたことになる。

興味深いのは、TBJ テフラをサクベの造成に利用していることである。TBJ テフラは社会生活を困難にさせた加害因子であり、Dull らは少なくとも 10 万人以上の罹災民がいたと想定している(Dull *et al.* 2019: 14)。また一面が白色になり往時の風景が一変した状況は、当時の人々がこれまで想像できなかった環境の変化、そして心理的なインパクトを与えたに違いない。つまり、人々がホヤ・デ・セレンで集落を形成する際には、一面はまだ TBJ テフラで覆われた白銀の世界であり、そこに人々が人工的に手を加えていったことになる。これは後述するサン・アンドレス遺跡でも同様である。

### 2.2. エル・カンビオ遺跡

エル・カンビオ遺跡は、イロパンゴ火山の火口中心部から西約 37km に位置する。火山灰は約 30cm 堆積している。TBJ テフラよりも上層に公共建造物と対応する床面などの建築材は確認されていないことから、噴火以前に存在した公共建造物の建設と利用は、エル・カンビオでは継続されていない。ただし、噴火後に相当する文化層からは、噴火前から生産されていたグアサパ土器グループが確認されており、古典期前期の指標土器のひとつでもあるマチャカル(Machacal)土器グループも確認されている。古典期後期(紀元後 600 ~ 900 年)の指標土器とされるコパドールやグアルポパ土器グループも出土している。こうしたことから、噴火後に公共建造物が再び造られることはなかったものの、噴火以前から存在する土器製作の伝統をもつ集落が継続的に営まれていたと考えられる。

エル・カンビオ遺跡における TBJ テフラよりも上層の文化

層は LC テフラよりも下層である。先にも述べたように、この文化層から出土する土器には古典期後期の指標土器であるコパドールやグアルポバ土器グループが含まれる。先のホヤ・デ・セレン遺跡でも同様である。こうしたことから、イロパンゴ火山の噴火の年代をより新しい時期（5 世紀ではなく、6 世紀代）に想定することができるのかもしれない。あるいは、コパドールやグアルポバ土器グループの出現年代がこれまで考えられていたよりも早い可能性もありうる。これらについては今後の資料増加を待って検討するほかない。

### 2.3. ヌエボ・ロウルデス遺跡

ヌエボ・ロウルデス遺跡は、火口の中心部から西に約 35km に位置している。この遺跡の TBJ テフラは約 40cm である。他のサボティタン盆地の遺跡同様に、壊滅的な影響を与えた火砕流は到達していない。

噴火後の遺構としては 1・2・3 号埋葬があげられる。いずれの墓壙も TBJ テフラよりも上層から掘りこまれている。これらの埋葬の副葬品として共伴する土器は、グアサパやアラムバラ (Arambala) 土器グループといった古典期後期 (紀元

後 600 ~ 900 年) に相当する土器である。また各人骨の放射性炭素年代測定の結果、早いもので 650 cal AD という年代が得られている (Ichikawa *et al.* 2015)。土器は現在も整理中であるため、より早い時期から社会生活が再開されている可能性もあるが、遅くとも紀元後 600 年頃から死者を葬る儀礼を含む社会生活が営まれていた可能性があるといえよう。仮に紀元後 600 年頃から社会生活が再始動しているとするならば、ホヤ・デ・セレンで集落が形成される時期と重なる。

### 2.4. サン・アンドレス遺跡

サン・アンドレス遺跡は、イロパンゴ火山の火口中心部から約 40km に位置している。遺跡で確認できる TBJ テフラの堆積層は、厚いところで約 60cm、薄いところでは 2 ~ 3cm であり、概ね 20 ~ 30cm の厚さが確認されている。遺跡内の発掘地点によってテフラの厚さに差異があることは、後述するように意味があると筆者は考えている。

サン・アンドレスは、イロパンゴ火山の噴火が起こる以前に社会活動が停滞していた。しかし、噴火後に従来から考えら

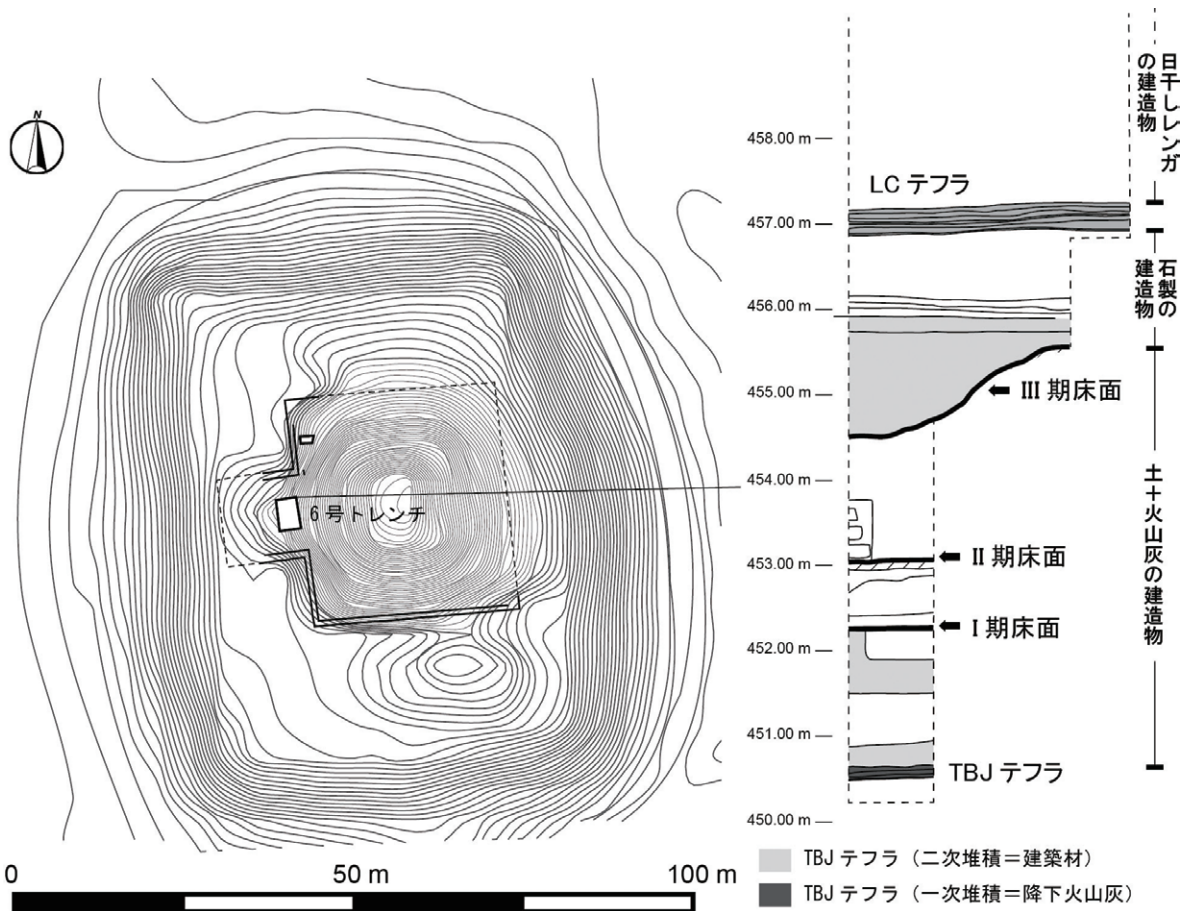


図7 サン・アンドレス遺跡 5 号建造物平面図と 6 号トレンチ断面図 (筆者作成)

れているよりも早くに再居住が開始され、それは公共建造物の建設活動をともなっていることが筆者らによる発掘調査の結果明らかとなっている。以下、重要な成果であるため詳述したい。

筆者らは、遺跡内で最大規模を有する5号建造物(南北約90m、東西約80m、高さ約20m)の発掘を実施した。発掘の結果、5号建造物は厚さ約40cmのイロパンゴ火山灰の直上に建てられていることが判明した(図7)。調査区が限られており正確な規模や形状は不明だが、噴火後に最初に造られた建造物は、土製であり、マウンド状の建造物であったと考えられる。この建造物は、メソアメリカ特有の重層建築の習慣にしたがって、次第に大型化していく。この増築の際に建築材として用いられたのが、大量の火山灰である。土と火山灰を交互につき固めたマウンドは次第に高さを増し、3度の増築過程を経て、最終的には高さ約5mに達した。サン・アンドレス最初の公共建造物である。

こうした土と火山灰で造られたマウンド状の建造物を埋めるようにして、石造の基壇が造られる(Ichikawa 2017: 49)。基壇の上には別の建造物が造られたと思われるが、現状では詳細不明である。基壇は階段状で4段あり、高さは1段あたり1.5mあるため約6mを有する。部分的な発掘から基壇は、推定60m×50mの規模を有していたと考えられる。この石造基壇を造成する際にも大量のTBJテフラが充填されている。また、石積みの技術は、土製建造物が主流であった当該地域において特殊であることも指摘しておきたい。それまで土製建造物を築造していた集団にとって、石材の入手から加工、設計、建築に至るまでの過程は当然ながら異なる技術を要する。また工人組織の再編も必要となるだけでなく、それを指揮し労働力を集約することのできる新たな指導者が存在していたと筆者は想定する。在地で独自に発展した可能性も否定できないが、この石造の技術を外来のものとして想定するならば、エルサルバドル東部に位置するケレパ遺跡(Quelepa)や、ホンジュラス西部に位置し、マヤ文明を代表するコパン遺跡(Copan)などが起源の候補としてあげられる。石の建築技術は、後述するように、日干レンガや泥漆喰といった土の建築技術に再びとってかわられるが、コパドル様式土器や蛇型石彫といったコパンとのつながりを示す器物が増加することに鑑みると、石の建築技術はコパンから導入されたと考えるのが妥当ではないかと筆者は考えている。

ここで興味深いのが、往時に人々の生活を脅かす加害因子のひとつであったTBJテフラを建築材として使用している点である。筆者らは、サン・アンドレス遺跡内の19地点で発掘を実施しているが、先に述べたようにTBJテフラの一次堆

積層の厚さはさまざまであった。一様ではないこの状況は、古代の人々がさまざまな地点からTBJテフラを集めてきた証拠といえる。また、他の盆地内の諸集落同様に人々が建築活動を始める時、サン・アンドレスに広がっていた景観はテフラで一面が真っ白な状況にあったはずである。

さて、噴火後どれくらいの期間を経て、上記の公共建造物の建造は開始されたのだろうか。放射性炭素年代測定の結果、土と火山灰の建造物が450～550 cal AD、石造基壇が550～650 cal ADという年代が得られている。先にも述べたように、イロパンゴ火山が噴火したとされる時期は較正曲線が平坦になる時期に相当するため特定が困難である。しかし550 cal AD以降は較正曲線が急になるため誤差範囲も小さくなる。ここで鍵となるのが、次の噴火、ロマ・カルデラ火山の噴火時期である。ロマ・カルデラ火山の噴火で埋没したホヤ・デ・セレン遺跡の年代測定結果に基づけば、ロマ・カルデラ火山の噴火は、紀元後650年頃に起きたと考えられる。イロパンゴ火山の噴火を紀元後539/40年と仮定するならば、噴火後、すぐに土と火山灰の公共建築が建てられ始め、その後すぐに石製建造物へと変貌していったと考えられる。もしイロパンゴ火山の噴火を紀元後450年頃と仮定したとしても、Dullらが想定するよりも早い段階で噴火後に公共建造物が建てられたことは間違いない。

以上がイロパンゴ火山の噴火後の状況である。サン・アンドレスやホヤ・デ・セレンをみれば噴火前にすでに土器生産が停滞し、噴火後の土器グループとの間に断絶があるかのようにみえる。しかし、エル・カンピオやヌエボ・ロウルデスのようにサボティタン盆地内の他の遺跡では噴火の直前まで土器製作をおこなっていた集落も存在しており、エル・カンピオに限っては土器グループに継続性が認められる。そして、サン・アンドレスでは噴火後すぐに公共建造物が建てられている。すなわち、罹災後にサボティタン盆地の複数地点に居住していた複数の集団がまとまって新たな集団をつくり、サン・アンドレスを拠点として再興を図っていった。そして、そのあとにホヤ・デ・セレンやヌエボ・ロウルデスなど、次第にその周辺にも集落が再び形成されていった、というシナリオを描くことができると筆者は想定している。

## V ロマ・カルデラ火山の噴火への対応

ロマ・カルデラ火山の噴火は紀元後 650 年頃に起きた。この火山の噴火による物理的な被害は 35km<sup>2</sup> の範囲であり、周辺地域への影響はさほど大きくなかったといわれている (Sheets 2006: 78)。とはいえ、高温の火砕流によって埋没したホヤ・デ・セレンの状況をみれば、火口周辺に居住していた人々にとって、その影響は必ずしも小さいわけではなかっただろう。LC テフラが確認でき、考古資料が豊富な遺跡は、ホヤ・デ・セレン遺跡、エル・カンビオ遺跡、サン・アンドレス遺跡である。ロマ・カルデラ火山の噴火前の状況は、前節のイロパング火山の噴火後の状況を反映しているため、ここでは、ロマ・カルデラ火山の噴火後の状況を中心について詳述する。

## 1. ホヤ・デ・セレン遺跡

火口から南に約 600m に位置するホヤ・デ・セレンの集落は厚さ 5m にも及ぶ LC テフラによって完全に埋没した。この完全に埋没した集落は、「中米のポンペイ」と呼ばれ、極めて保存状態が良好であり、噴火直前の生活の様子や噴火に対峙した人々の緊迫した様子をうかがい知ることができる。

噴火が起きた時期は、トウモロコシの穂軸の大きさなどから雨期の半ば、すなわち 8 月頃と考えられている。さらに噴火は、日が暮れた夕方、夕食時から寝る前に起こったと想定されている (Sheets 2006: 37)。これは日常什器や石器などの道具が、昼間の作業場とされる場所にないことや、住居内に残っていた食器にまだ食べ物の残滓が残っていることを根拠とする。

注目すべき点は、遺跡内で罹災者と思われる人骨が見つかっていない点である。住居址内やその周辺に残っていないということは、食事や道具をそのままにして避難した可能性が高い。また突発的な噴火から避難できたということは、「寝る前」というシーツの想定の上証ともいえよう。火山は集落の北側に位置していること、上述したサクベが南に延びていることを考えれば、罹災者たちは南に向かって避難したと想定することができる。

その後のホヤ・デ・セレンの居住痕跡を示すのは、後古典期前期 (900/1000 ~ 1250 年頃) の土器である。この時期の指標土器であるコサトル (Cozatl) やマリワ (Marihua) 土器グループに同定される土器が極少量ではあるが出土しているのである。これらの土器は、LC テフラと紀元後 1658 年に起きたエル・プラヨン火山噴火によって降下したテフラの間の層から見つまっている (Sheets & Dixon [eds.] 2013:

189)。層位的には後述するエル・ボケロン火山噴火 (紀元後 1000 年頃) によるテフラが見つまっているはずだが、報告書に詳細な記述がないため不明である。

## 2. エル・カンビオ遺跡

火口から南に約 2.8km に位置するエル・カンビオ遺跡では、LC テフラを約 10 ~ 25cm 確認することができる (Ferrés *et al.* 2011: 841)。イロパング火山の噴火後に放棄されていた公共建造物が、ロマ・カルデラ火山の噴火後に再興された形跡は確認できていない。単に発掘調査が進んでいないためか、あるいは、イロパング火山の噴火からロマ・カルデラ火山の噴火まで少なくとも 150 年以上は経過しているため、当該地域の熱帯の植生を考慮するならば、公共建造物は草木に覆われ、単に土饅頭と化していた可能性もあるだろう。出土土器については、グアサパ土器グループをはじめ、ロマ・カルデラ火山の噴火前と噴火後ではほとんど変化がないことがわかっている (八木 2017: 25-26)。イロパング火山の噴火後同様に、土器製作を主とする社会活動が継続的に営まれていたと考えられる。

## 3. サン・アンドレス遺跡

火口から南に約 5km 離れているサン・アンドレス遺跡では、これまでの研究によれば LC テフラの到達は確認されていなかった (Miller 2002: 14)。今回、筆者らの新たな発掘調査によって、サン・アンドレス遺跡にも LC テフラが到達していたことが明らかとなった。今後、LC テフラの理化学的特性の分析も進めていく必要はあるが、根拠となるのは、層位的に TBJ テフラと後述するエル・ボケロン火山噴火によって降下したテフラの間にあること、LC テフラに特徴的な粒径数 mm ~ 2cm 程度の黒色の火山礫 (ユニット 4) があることである。LC テフラの厚さは、水平な部分で約 5 ~ 30cm であると確認できている。遺跡の南側にいくほど堆積が薄くなっている。サン・アンドレス遺跡 5 号建造物の基壇の裾野部分では厚さが約 40cm である。これは基壇が傾斜しているためにテフラが下方へと流れ堆積した結果であると考えられる。ホヤ・デ・セレン遺跡で確認できるような厚い火砕流の堆積は、サン・アンドレス遺跡では確認されていない。

特筆しておきたい点は、ロマ・カルデラ火山の噴火後からサン・アンドレスでは公共建造物群の建設ラッシュが始まることである。LC テフラの直上に充填土や日干レンガといった建築材が置かれているという層位的な観察はその根拠の

ひとつである(図8)。ただし、LCテフラが建築材として使われることはなかった。おそらくTBJテフラと比較して火山礫の多いLCテフラは建築材としての有効性を見いだせなかった可能性が考えられる。しかし、テフラが退けられるというわけでもなく、テフラの直上に充填土や日干しレンガを置いている点は興味深い。細かい火山礫が多いため建造物内部の水はけという利用を意識した可能性もある。

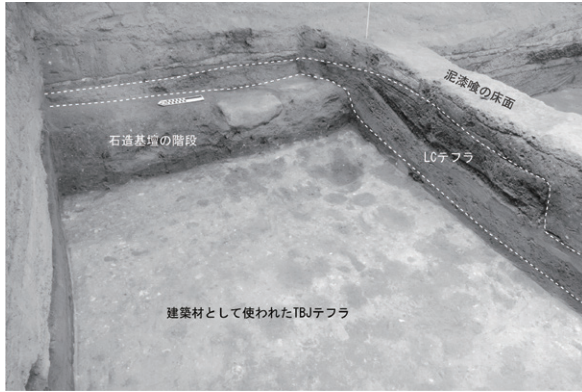


図8 サン・アンドレス遺跡5号建造物11号トレンチ検出のLCテフラ(筆者撮影)

日干しレンガには複数の規格や原材料に違いがあることから、筆者は複数の日干しレンガ製作集団が存在していたと考えている。このことは公共建造物の再建にあたって、多様な集団が関わっていたことを示唆している。日干しレンガの製作工程はおおまかに、必要な原材料の採取(粘土、火山礫など)、製作、運搬という工程がある。サン・アンドレス遺跡周辺には現在でも日干しレンガ工房が多く経営されているが、それは原材料が豊富であることによる。またアグア・カリエンテ川やスシオ川など、必要不可欠な水源が近くにあることも重要だろう。今後、理化学分析などを進めていく必要はあるが、複数の日干しレンガ製作集団は、盆地内のさまざまな集落で構成されていたと想定している。あるいは、盆地内のさまざまな集落で製作された日干しレンガが運搬されてきた可能性も考えられる。原材料の採取および運搬を考えると盆地外の遠距離から日干しレンガがもち込まれてくることは考えにくい。罹災後の再建過程において、多様な集団がまとまり公共建造物の建築活動に参加したと考えておきたい。

ロマ・カルデラ火山の噴火後に建造される日干しレンガの建造物の放射性炭素年代測定では、おおよそ650～800 cal AD (2σ)という年代が得られている。この年代学的データも、噴火後の早期建設ラッシュを支持するデータとなる。

ロマ・カルデラ火山の噴火前に相当する公共建造物は5号建造物のみであったが、噴火後には5号建造物が大型化するだけでなく、祭祀施設や支配層の住居など複数の建造物からなるアクロポリス、大広場、大広場を囲む長方形基

壇など、遺跡で確認できる建造物はほとんどロマ・カルデラ火山の噴火後に造られたことも建設ラッシュを支持するデータである。アクロポリスの一部をなす広場では、歯牙装飾を施された人骨の埋葬、奉納儀礼がおこなわれている(Boggs 1943: 109-111)。この間、サン・アンドレスは、サボティタン盆地の政治・経済・宗教の中心地として最盛期を迎えることになる。

## Ⅵ エル・ボケロン火山の噴火

エル・ボケロン火山の噴火は、紀元後1000年頃に起きたとされる(Ferrés *et al.* 2011: 842)。この火山の噴火による噴出物は、サン・アンドレス・タフとして知られているが、ここではわかりやすいように火山名と対応させて、エル・ボケロン・テフラ(以下、EBテフラ)とする。EBテフラは、火口から西側を中心に約300km<sup>2</sup>の範囲に降下した。灰褐色を呈したEBテフラは、発掘作業に苦慮するほど硬質であり、堆積層は薄くとも往時の農耕や水源に影響を与えたに違いないと考えられている(Sheets 2007: 80)。EBテフラが確認できる主な遺跡は、ホヤ・デ・セレン遺跡、エル・カンビオ遺跡、サン・アンドレス遺跡である。

### 1. ホヤ・デ・セレン遺跡とエル・カンビオ遺跡

ホヤ・デ・セレン遺跡では、先に述べたように後古典期前期に同定される土器グループが報告されているが、噴火時期と関連して位置づけることができない。エル・カンビオ遺跡についても火山灰自体は報告されているが(Ferrés *et al.* 2011: 841-842)、それにとまなう考古学データの報告は希薄なため詳細は不明である。少なくとも噴火前には土器製作をとまなう社会活動が営まれていた。噴火後の状況を語る資料も現時点ではない。

### 2. サン・アンドレス遺跡

サン・アンドレス遺跡では、エル・ボケロン火山の噴火前後の様子を復元することができる。筆者らの発掘調査によれ

ば、エル・ボケロン火山が噴火する前に、少なくともサン・アンドレスの5号建造物はかなりの程度、崩壊していたと思われる。つまり、噴火はサン・アンドレス社会の崩壊の要因にはならない。具体的に崩壊の要因がどのようであったかは、今後の課題であるが、少なくとも噴火以前に崩壊していたことは間違いない。建造物を覆っていたと思われる泥漆喰壁はほとんど崩れ落ち、内部構造の一部である日干レンガがむき出しになり、浸食していた惨状が推測できる。5号建造物の基壇部分の最終時期に相当する床面からEBテフラまで約1mに及ぶ堆積層があり、この堆積層には大量の泥漆喰片が混じっている(図9)。5号建造物の基壇に建てられた階

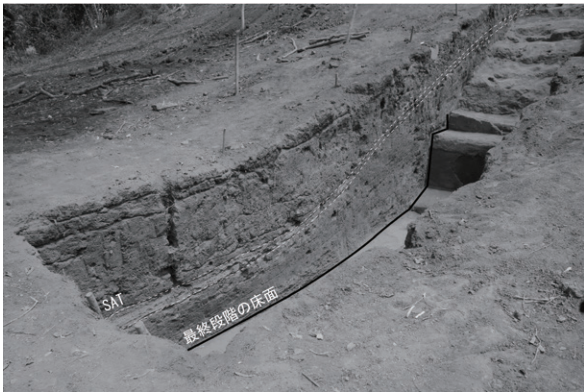


図9 サン・アンドレス遺跡5号建造物基壇部の状況(筆者撮影)

段状ピラミッドもまたかなり崩壊が進んでいたと思われる。この階段状ピラミッドの高さは約13mであるが、泥漆喰壁はわずか3段しか残っていない(高さ約3.3m)。そして、こうした崩壊したピラミッドを修復するかのように、凝灰岩製ブロックを用いた建築段階が確認できる(図10)。



図10 サン・アンドレス遺跡5号建造物階段状ピラミッド南西角にみられる凝灰岩ブロックによる補修(筆者撮影)

問題は、この凝灰岩製ブロックを用いた建築段階の時期である。ピラミッド部分ではEBテフラが検出されていないため層位的な前後関係が不明である。この凝灰岩ブロックとEBテフラの層位的関係がわかるのはマウンドBと呼ばれる

建造物である。マウンドBは、5号建造物の西側に位置している。1996・1997年の発掘調査によれば、このマウンドBは、凝灰岩ブロックで築造された高さ約1.7mの建造物であり、EBテフラの上に築造されている(Card 1997: 53)。さらに、1970年代の発掘記録によればアクロポリスでもEBテフラとその上にある凝灰岩ブロックが残っている。

この凝灰岩ブロックの建築技術をもった集団は、メキシコ中央高原もしくはメキシコ西部からのナワトル語系の移民としばし関連づけられる。これは黒・白・赤の彩色が特徴的な多彩色土器(Polychrome Bandera)と呼ばれるメキシコ中央高原もしくはメキシコ西部に起源を有するとされる土器が出土しているからである(Amaroli & Bruhns 2013)。すなわち、エル・ボケロン火山の噴火前後のシナリオは次のように復元できる。まず、古典期後期に最盛期を迎えたサン・アンドレス社会は、エル・ボケロン火山が噴火する以前に、なんらかの理由によって瓦解した。公共建造物はその機能を失い、しばらく放棄された。その後、エル・ボケロン火山が噴火し、サン・アンドレスはEBテフラによって覆われた。噴火後、おそらくは噴火前に居住していた集団とは異なる集団がサン・アンドレスにあった公共建造物を再利用して、新たに活動を始めた。

## Ⅶ 古代マヤ人の火山とともに生きる知恵・記憶

以上、サポティタン盆地において、紀元後5世紀頃から11世紀にかけて起きた3つの火山噴火前後の様相について記述してきた。ひとえに火山噴火といっても規模や遺跡の性格などによって多様な対応や適応過程がうかがえる。このことは、過去の急激な環境変化への対応や適応過程をみる場合には、限られた遺跡だけではなく、噴火の影響が及んだ地域を包括的に見る必要があることを示している。依然としてデータに偏りがあることは否めないが、前節までのデータに基づきながらサポティタン盆地の人々の火山とともに生きる知恵や記憶、さらにこうした知恵や記憶の在り方から、人間集団の連続性や不連続性という問題についても検討を加えてみたい。



# 1. 神殿ピラミッドと火山噴火

興味深いのは、イロパング火山とロマ・カルデラ火山の噴火後にみられる公共建造物、とりわけ山のような形状を有する神殿ピラミッドの早期建設である。公共建造物の建設は数人で達成できるものではなく、労働力を集約してこそ可能なものである。イロパング火山の噴火によって白銀の世界と化した景観に身を置いた往時の人々はなぜ神殿ピラミッドを建設したのか。

このヒントは「聖なる山信仰」にあると筆者は考えている。聖なる山信仰の始原は先古典期にさかのぼり、現代のマヤ人にも通底する基本となる信仰である。公共建造物、特に神殿ピラミッドを核として発展したメソアメリカ文明の特質を考慮するならば、建造活動という協働作業が、それらに参加した人々の社会的紐帯を強化することにもつながり、急激な環境変化によって混乱した社会を立て直す原動力になったと筆者は考える。調査地域では、メキシコ中央高原やマヤ低地のように聖なる山信仰の存在を具体的に示す図像資料や考古資料は今のところ存在しない。とはいえ、四方を山々に囲まれた自然景観、広範な遠距離交易ネットワークに参加していたこと、エル・カンピオのように一際大きなマウンドを中心に規則的な建造物配置が存在することなどから、イロパング火山が噴火する以前から聖なる山信仰がサポティタン盆地の人々のなかに存在していたとしても不思議ではない。聖なる山信仰に基づいて得られる神託が人間世界に平穏をもたらすと考える人々にとって、噴火は神々の怒りに相当したであろう。この怒りを鎮静化するために、人々は聖なる山を人工的に建造し、供物や祈りを捧げることを決めたのかもしれない。先に述べたように聖なる山信仰が反映された神殿ピラミッドは、最終的には見えない内部にも何らかの意味づけをもっていることがある。一面に広がる火山灰を用いて公共建築を作る行為には、神々の怒りを鎮めるといった意図に加えて、噴火の記憶をとどめておくといった意図があったのかもしれない。

火山の噴火後に、建築技術の変化があったことも興味深い。先に述べたように TBJ テフラは建築材の一部となった。TBJ テフラについては、最初は象徴的な意味で用いていた可能性があるが、次第に優れた建築材であったことを古代の人々が認識していった可能性がある。発掘作業員らによるとエルサルバドル全国で見られる TBJ テフラは現在の建築業界においても重宝されているという。テフラに一定量の水を加えると、硬く締まるため、野外施設などに床材を設置するときに有効であるという。古代の人々が意識していたかどうかは推測の域を出ないが、降灰後に雨などに濡れて硬く締

まったテフラを目にした古代の人々が、それらを建築材として利用しても不思議ではない。一方で、ロマ・カルデラ火山の噴火後には、LC テフラを建築材として使用しなかった。イロパング火山の噴火の記憶が継承されているのならば、神殿ピラミッド内部に建築材として使われても良い。使われなかった理由としては、LC テフラが建築材として適していなかったからであると考えられる。その代わりに、日干しレンガと泥漆喰を用いた建築技術が発展した。聖なる山信仰は継承されながらもこの場合には建築学的構造上の合理性が優先されたのかもしれない。このような建築技術の変化は、その背後に労働組織の変化があったことも想像できよう。また時代によって建築材が変化していく背景には、単に建築学的構造上の合理性だけではなく、人々の自然に対する認識の変化が反映されているかもしれないことを指摘しておきたい。

マヤ地域の事例では、旱魃のときにこそ宗教儀礼が増加するという傾向がある他 (Moyes *et al.* 2009)、南米のアンデス文明では、エル・ニーニョ現象によって引き起こされた土砂災害を被り、その後に神殿建設が活発するケースが確認されている (Nesbit 2016) ことから、上記の仮説は必ずしも外的外れとは言えない。

しかし、一面が火山灰で覆われた環境で生活の基本となる食料や水の確保、すなわち農耕や水源はどうしたのか、という重要な問題が残る。考古学的証拠から立証することは現時点では難しいが、先スペイン時代の主食であるトウモロコシの農耕は、山の斜面などを利用すれば可能であったと筆者は考えている。なぜなら、斜面に堆積した火山灰は雨が降れば下位に流れ落ちるので、耕作も不可能ではないからである。現在でも山の急斜面を利用したトウモロコシ農耕はエルサルバドルの広い範囲で認められることも大きな理由のひとつである (図 11)。サポティタン盆地の周囲に広がる斜面の上部と下部を発掘すれば、上記の仮説を支持するデー



図 11 サポティタン盆地西端の急斜面にみられるトウモロコシ畑 (筆者撮影)

タを獲得できるかもしれない。自然に対する洞察や感覚が現代の我々とは異なる古代の人々ならば、我々が思いもよらぬ知恵があっても不思議ではない。こうした知恵をさまざまな方法や角度から明らかにしていくことが肝要である。

## 2. 人間集団の連続性・不連続性

時代の異なる3つの火山噴火と関連する考古資料から、サポティタン盆地における人間集団の連続性・不連続性について考えてみたい。資料的な制約から推測の域を出ない部分も多いが、今後の作業仮説のひとつとして明示しておきたい。3つの火山噴火は、約600年間の間に起きている。年代の高精度化は今後の課題であるが、イロパango火山の噴火からロマ・カルデラ火山の噴火までは約100～200年、ロマ・カルデラ火山からエル・ボケロン火山の噴火までは約350年の間隔がある。

イロパango火山の噴火前は、盆地内に集落が点在するなかで、エル・カンピオが盆地の中心的なセンターとして機能していた。噴火後にはエル・カンピオではなく、サン・アンドレスに公共建造物が造られるようになる。先行研究によると、イロパango火山の噴火によって壊滅状態に陥ったサポティタン盆地では、噴火後100年以上してから、チョルティ・マヤ(Cho'rti' Maya)という集団が居住し始めるとされる(Sheets 2009)。しかし、噴火年代の高精度化が進み、噴火から社会が再興するまでの期間が短く想定されてきていることと、本稿で示したように土器伝統の連続性を考慮するならば、噴火前と同じ系譜を有する人間集団が居住していたのではないかと筆者は考えている。それまで盆地内に分散的に居住していた集団が、噴火災害を契機として社会的紐帯を強化し、サン・アンドレスとその周辺に集住し、それまでとは異なる集団関係が構築されたことが想定される。ただし、石造基壇の建造段階では、盆地外の集団からの介入があった可能性も考えておきたい。石造基壇は紀元後550～650年頃に造られたと考えられるが、この時期にはサポティタン盆地やチャルチュアバが位置するエルサルバドル西部でも土製建築が主流であった。上述したように石造建築の技術は、おそらくコパンから導入された技術である。この場合、建築活動を指導するエリートあるいは工人たちがコパンからサン・アンドレスにやってきて、在地の人々と協働し石造建造物を築造したと考えられる。

ロマ・カルデラ火山の噴火後は、再び伝統的な土製建築に戻り、アクロポリスや大広場など建築ラッシュが起こる。噴火後に建築活動が活発になる傾向は先のイロパango火山の

噴火の時にもみられる傾向であり、100～200年以前の噴火の記憶や在来知が伝承されていたのかもしれない。また、土器型式もロマ・カルデラ火山噴火の前後で大きな変化はなく、人間集団の大きな変化はなかったと想定される。噴火で埋没したホヤ・デ・セレン遺跡で人骨が見つかっていないように、盆地の人々は避難する時間があったとするならば、噴火による犠牲者はそれほど多くなかったのだろう。しかし、土器伝統は継続されながら、アクセスや視界の制限された広場、その広場における儀礼痕跡、大量の埋納品などの存在に鑑みるならば、以前よりも社会の複雑化が進み、エリート層を頂点とする階層的な社会がサポティタン盆地内に形成されたものと考えられる。建造物配置、エキセントリック石器や貝製品をともなう埋納儀礼、双頭の蛇のモチーフが刻まれたヒスイ製品は、コパンのものと類似していることから、ロマ・カルデラ火山噴火後の建設ラッシュやエリート層の台頭は、コパン王朝の後ろ盾を得たことに起因するのかもしれない。

エル・ボケロン火山の噴火後は、それまではとは異なる人間集団が居住したと想定している。先に述べたようにエル・ボケロン火山が噴火する以前にサン・アンドレスは崩壊していた。年代測定データから、この崩壊は紀元後800～850年頃であると想定される。サン・アンドレスの崩壊にともなう、盆地内の人口も減少したであろう。そして、紀元後1000年頃に起きた噴火のあと、廃墟と化していたサン・アンドレスに新しい集団が居住を開始した。この集団は、先に述べたようにメキシコ中央高原もしくはメキシコ西部から南下してきたナワトル語系の集団である。噴火前と噴火後で、完全に人間集団の置換があったとは言い切れないが、ナワトル語系の集団が主導権を握るような状況であったと推測される。この新しい集団は、過去の産物を破壊し、新しい場所に自分たちの新しい建造物を築くのではなく、過去の集団が建築した神殿ピラミッドやアクロポリスを凝灰岩ブロックという新しい建築材で修復し、再利用した。エル・ボケロン火山の噴火以降の文化層は表土に近いために、新しい集団に関するデータは少ない状況であり、現時点でこれ以上の考察は難しい。この場合の人間集団の置換は、火山の噴火とは直接的には連動しておらず、火山や噴火に対する認知や信仰に変化があったのか否かは不明である。とはいえ、聖なる山信仰がメソアメリカ文明の基層をなす信仰のひとつであるならば、新しい集団によるサン・アンドレスの再利用は、火山と関係している可能性もあるだろう。

ここで、サポティタン盆地における人間集団の連続性・不連続性についてまとめよう。サポティタン盆地では、イロパango火山の噴火やロマ・カルデラ火山の噴火に対して、往時の

世界観が反映された神殿ピラミッドや公共建造物を建造することで対応した。つまり、イロパング火山が噴火してからロマ・カルデラ火山が噴火するまでの100～200年という期間は、火山に対する認識や噴火災害への記憶が集団内で伝承されていたと推測される。土器に大きな変化がないこともその証左といえよう。しかし、ロマ・カルデラ火山の噴火後に社会はより階層的な社会へと変貌した。これはその背景に往時の政治的な関係が反映されていることを示す。ロマ・カルデラ火山の噴火からエル・ボケロン火山の噴火までの約350年の間に、サン・アンドレスをはじめとするサポティタン盆地社会は衰退し、エル・ボケロン火山が噴火する以前に、すでに廃墟と化していた可能性が高い。噴火後、それ以前の噴火で見られたような建築活動の活発化はみられない。それまであった火山に対する認知やそれに基づく在来知は、この期間に途切れてしまったのかもしれない。その後、メキシコ中央高原あるいはメキシコ西部から新しい集団がサポティタン盆地にやってきて廃墟化したサン・アンドレスの公共建造物群を修復し、新たに居住を開始した。火山との関係など詳細は不明であるが、過去の殷賑が残るサン・アンドレスに、新しい集団はそれまでとは異なる意味づけをおこない、居住したのであろう。

## おわりに

これまでの急激な環境変化に関する研究、とりわけ火山噴火に関する研究は、その噴火のインパクトが強調され、人間社会における負の側面だけが強調される傾向にあった。完新世最大級と評されるイロパング火山の噴火はその代表的な事例といえる。自然科学的データからみれば、確かに噴火のインパクトは強烈であったに違いない。しかし、本稿で見てきたように過去の人々の活動痕跡を示す考古学データからは異なるイメージを想起することができる。このことは、急激な環境変化と人間の相互関係を明らかにしようとするならば、自然科学と人文社会科学の共同作業がより一層必要になってくることを示している。

また、数千年・数万年という時間スケールで火山噴火を評価するならば、負の側面ばかりでもない。例えば、噴火によってできたクレターは自然の一大貯水池となり、噴出物は農耕に適した肥沃な火山性土壌を形成する場合もある。現在のサポティタン盆地はまさにその恩恵に預かっている。また、

TBJ テフラや軽石は、建築材や土木工事用として重宝されていることは先に述べた通りである。火山活動のエネルギーを利用した地熱発電も我々の生活を支える一部となっている。

最後に、本稿から想起される今後の研究の方向性について言及し、まとめたい。まず、神殿ピラミッド以外の性格の異なる公共建造物群や住居址における噴火前後の変化の有無を突き詰めていく必要があるだろう。とりわけ人々の日常生活の場でもある住居の噴火前後での変化の有無、火山灰が使われているように災害の記憶を呼び起こすような痕跡の有無などにも関心を払うことで、支配層だけではなく多様な社会成員の急激な環境変化への対応が読み取れるだろう。さらに通時的な視点を加えることによって、時間の流れとともに火山への認識や記憶が変化するのか、それとも継承されていくのかといった点も注視していく必要がある。また、災害への対応のなかで被災前後の地域間ネットワークの変化の有無を読み取ることも重要であると筆者は考えている。土器の胎土分析や黒曜石の原産地分析などは有効であろう。また日干しレンガや泥漆喰壁の理化学分析を進めることで、工人集団の多様性なども立証できると思われる。考古学的に立証することは難しいかもしれないが、多様な資源を獲得するためのネットワークを常に維持することによって、リスクを分散し、急激な環境変化に限らず社会を長期持続させる能力を高めることが可能になる。さらに、植民地時代から現代までの噴火記録やそれにまつわる歴史文書や言説などに関する研究も火山と関連する記憶や在来知の伝承、継承、あるいは断絶について考えるヒントを与えてくれるであろう。

## 謝辞

本稿は、2018年12月26日に南山大学人類学研究所の主催のもとに開催された公開シンポジウム「遺跡に見る在来知——モニュメント、自然環境、インターアクション」の発表のもとに、コメンテーターやその後の議論をふまえて、内容に加筆修正をしたものである。渡部森哉所長をはじめ南山大学人類学研究所の皆様方に深謝申し上げる。

海外調査にあたっては、エルサルバドル文化庁文化自然遺産局考古課、エルサルバドル技術大学人類学教室の皆様方から多大なるご支援をいただいた。放射性炭素年代測定については、東京大学総合研究博物館放射性炭素年代

測定室にお世話になった。また、本研究成果の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金（#26101003、19K13400）、日本学術振興会海外特別研究員制度、三菱財団、村田学術財団、大幸財団、稲盛財団からの支援を受けておこなった調査研究に基づく。記して感謝申し上げる。

## 参考文献

(日本語文献)

市川彰

- 2017 『古代メソアメリカ周縁史——大噴火と大都市の盛衰のはざままで』溪水社。

市川彰 & 八木宏明

- 2016 「マヤ南東地域サポティタン盆地の編年再考——テフロクロロジーと土器の分析から」『古代アメリカ』19: 1-34。

伊藤伸幸

- 2004 「チャルチュアパ遺跡における畝状遺構からの一考察」『金沢大学考古学紀要』27: 138-146。

嘉幡茂

- 2019 『テオティワカン——「神々の都」の誕生と衰退』雄山閣。

北村繁

- 2016 「中米・エルサルバドル共和国南部海岸低地における砂州の形成時期と巨大噴火の影響」『微地形学——人と自然をつなぐ鍵』藤本潔・宮城豊彦・西城潔・竹内裕希子(編)、pp. 251-266、古今書院。

文化庁(編)

- 2017 『日本人は大災害をどう乗り越えたのか——遺跡に刻まれた復興の歴史』朝日新聞出版。

八木宏明

- 2017 『マヤ南東部におけるイロパング火山噴火と社会変容の考古学的研究』修士論文、愛媛大学大学院法文学研究科人文科学専攻提出。

(欧文文献)

Aimers, James J.

- 2007 What Maya Collapse? Terminal Classic Variation in the Maya Lowlands, *Journal of Archaeological Research* 15: 329-377.

Amaroli B., Paúl E. & Karen Olsen Bruhns

- 2013 450 Years Too Soon: Mixteca-Puebla Style Polychrome Ceramics in El Salvador, *Anales del Instituto de Investigaciones Estéticas* XXXV(103): 231-249.

Aveni, Anthony F.

- 2003 Archaeoastronomy in the Ancient Americas, *Journal of Archaeological Research* 11(2): 149-191.

Black, Kevin D.

- 1983 The Zapotitán Valley Archaeological Survey. In P. D. Sheets (ed.), *Archaeology and Volcanism in Central America: The Zapotitán Valley of El Salvador*, pp. 62-97. University of Texas Press.

Boggs, Stanley H.

- 1943 Notas sobre las excavaciones en la Hacienda "San Andrés", Departamento de La Libertad, *Tzunpame* 3(1): 104-126.

Brady, James E.

- 1997 Settlement Configuration and Cosmology: The Role of Caves at Dos Pilas, *American Anthropologist* 99(3): 602-618.

Brady, James E. & Wendy Ashmore

- 1999 Mountains, Caves, Water: Ideational Landscapes of the Ancient Maya. In W. Ashmore & A. B. Knapp (eds.), *Archaeology of Landscape: Contemporary Perspective*, pp. 124-145. Blackwell Publishing.

Card, Jeb

- 1997 Excavations on Mound B. In C. Begley, R. Gallardo, J. Card, A. Wilson, L. Brown & N. Herrmann (eds.), *Informe de proyecto arqueológico San Andrés*, pp. 50-67. Report Submitted to Patronato Pro-Patrimonio Cultural.

Cooper, Jago & Payson D. Sheets (eds.)

- 2012 *Surviving Sudden Environmental Change: Understanding Hazards, Mitigation, Impacts, Avoiding Disasters*. University

Press of Colorado.

- Cyphers, Ann A. & Anna Di Castro  
2009 Early Olmec Architecture and Imagery. In W. L. Fash & L. López Luján (eds.), *The Art of Urbanism: How Mesoamerican Kingdoms Represented Themselves in Architecture and Imagery*, pp. 21-52. Dumbarton Oaks Library and Collection.
- Dowd, Anne S. & Susan Milbrath (eds.)  
2015 *Cosmology, Calendars, and Horizon-Based Astronomy in Ancient Mesoamerica*. University Press of Colorado.
- Dull, Robert, John Southon, Steffen Kutterolf, Kevin J. Anchukaitis, Armin Freundt, David B. Wahl, Payson D. Sheets, Paul Amaroli, Walter Hernandez, Michael C. Wiemann & Clive Oppenheimer  
2019 Radiocarbon and Geologic Evidence Reveal Ilopango Volcano as Source of the Colossal 'Mystery' Eruption of 539/540 CE, *Quaternary Science Reviews* 222: Online.
- Dull, Robert, John Southon & Payson D. Sheets  
2001 Volcanism, Ecology and Culture: A Reassessment of the Volcan Ilopango TBJ Eruption in the Southern Maya Realm, *Latin American Antiquity* 12(1): 25-44.
- Faulseit, Ronald K. (ed.)  
2016 *Beyond Collapse: Archaeological Perspectives on Resilience, Revitalization, and Transformation in Complex Societies*. Southern Illinois University Press.
- Ferrés, Dolores, Hugo Delgado Granados, Walter Hernández, Carlos Pullinger, Hugo Chávez, Rafael Castillo Taracena & Carlos Cañas-Dinarte  
2011 Three Thousand Years of Flank and Central Vent Eruptions of the San Salvador Volcanic Complex (El Salvador) and Their Effects on El Cambio Archeological Site: A Review Based on Tephrostratigraphy, *Bulletin of Volcanology* 73(7): 833-850.
- Grattan, John & Robin Torrence (eds.)  
2007 *Living under the Shadow: Cultural Impacts of Volcanic Eruptions*. Left Coast Press.
- Heizer, Robert F.  
1968 New Observations on La Venta. In E. P. Benson (ed.), *Dumbarton Oaks Conference on the Olmec*, pp. 9-36. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Hernandez, Walter  
2004 *Características geomecánicas y vulcanológicas de las tefras de tierra blanca joven, caldera de Ilopango, el Salvador*. Master's thesis in Tecnologías Geológicas, Universidad Politécnica de Madrid,
- Heyden, Doris  
1975 An Interpretation of the Cave underneath the Pyramid of the Sun in Teotihuacan, Mexico, *American Antiquity* 40(2): 131-147.
- Hoffman, Susanna M. & Anthony Oliver-Smith (eds.)  
2002 *Catastrophe and Culture: The Anthropology of Disaster*. School for Advanced Research Press.
- Iannone, Gyles (ed.)  
2014 *The Great Maya Droughts in Cultural Context: Case Studies in Resilience and Vulnerability*. University Press of Colorado.
- Ichikawa, Akira  
2016 Cuándo y cómo fue la erupción del volcán Ilopango, El Salvador: síntesis desde la óptica arqueológica, *Journal of the School of Letters, Nagoya University* 12: 23-43.  
2017 Secuencia constructiva de La Campana (Estructura-5), San Andrés, El Salvador, *Journal of the School of Letters, Nagoya University* 13: 45-55.
- Ichikawa, Akira, Roberto Gallardo, Hugo Díaz & Julio Alvarado  
2015 Nuevos datos de radiocarbono relacionados con la erupción del volcán Ilopango, *Anales del Museo Nacional de Antropología Dr. David J. Guzmán* 53(4): 160-175.
- Ichikawa, Akira & Juan Manuel Guerra Clará  
2018 Producción de alfarería en el sitio arqueológico San Andrés, *The Journal of*

Joyce, Arthur A. & Michelle Goman

- 2012 Bridging the Theoretical Divide in Holocene Landscape Studies: Social and Ecological Approaches to Ancient Oaxacan Landscapes, *Quaternary Science Reviews* 55: 1-22.

Kintigh, Keith W., Jeffrey H. Altschul, Mary C. Beaudry, Robert D. Drennan, Ann P. Kinzig, Timothy A. Kohler, W. Fredrick Limp, Herbert D. G. Maschner, William K. Michener, Timothy R. Pauletat, Peter Peregrine, Jeremy A. Sabloff, Tony J. Wilkinson, Henry T. Wright & Melinda A. Zeder

- 2014 Grand Challenges for Archaeology, *American Antiquity* 79(1): 5-24.

MARN (Ministerio de Medio Ambiente y Recursos Naturales)

- 2015 *Boletín climatológico anual* 2015. MARN, San Salvador, El Salvador.

McAnany, Patricia A. & Norman Yoffee (eds.)

- 2010 *Questioning Collapse: Human Resilience, Ecological Vulnerability, and the Aftermath of Empire*. Cambridge University Press.

Miller, C. Dan

- 2002 Volcanology, Stratigraphy, and Effects on Structures. In P. Sheets (ed.), *Before the Volcano Erupted: The Ancient Cerén Village in Central America*, pp. 11-23. University of Texas Press.

Moyes, Holley, Jaime Awe, George A. Brook & James W. Webster

- 2009 The Ancient Maya Drought Cult: Late Classic Cave Use in Belize, *Latin American Antiquity* 20(1): 175-206.

Nesbit, Jason

- 2016 El Niño and Second-millennium BC Monument Building at Huaca Cortada (Moche Valley, Peru), *Antiquity* 90(351): 638-653.

Oliver-Smith, Anthony & Susanna M. Hoffman (eds.)

- 1999 *The Angry Earth: Disaster in Anthropological Perspective*. Routledge.

Pedraza, Dario, Ivan Sunye-Puchol, Gerardo Aguirre-Díaz, Antonio Costa, Victoria C. Smith, Matthieu Poret, Pablo Dávila-Harris, Daniel P. Miggins, Walter Hernández & Eduardo Gutiérrez

- 2019 The Ilopango Tierra Blanca Joven (TBJ) Eruption, El Salvador: Volcano-stratigraphy and Physical Characterization of the Major Holocene Event of Central America, *Journal of Volcanology and Geothermal Research* 377: 81-102.

Schele, Linda & David Freidel

- 1990 *A Forest of Kings: The Untold Story of the Ancient Maya*. William Morrow Paperbacks.

Schwartz, Glenn M. & John J. Nichols (eds.)

- 2006 *After Collapse: The Regeneration of Complex Societies*. University of Arizona Press.

Sharer, Robert J.

- 1978 *The Prehistory of Chalchuapa, El Salvador (vol. I-III)*. University of Pennsylvania Press.

Sheets, Payson

- 2006 *The Cerén Site: An Ancient Village Buried by Volcanic Ash in Central America*. Second Edition. Thomson Wadsworth.

- 2007 People and Volcanoes in the Zapotitan Valley, El Salvador. In J. Grattan & R. Torrence (eds.), *Living under the Shadow: The Cultural Impacts of Volcanic Eruptions*, pp. 67-89. Left Coast Press.

- 2009 Who Were Those Classic Period Immigrants into the Zapotitán Valley, El Salvador? In B. E. Metz, C. L. McNeil & K. M. Hull (eds.), *The Ch'orti' Maya Area: Past and Present*, pp. 61-76. University Press of Florida.

Sheets, Payson (ed.)

- 1983 *Archaeology and Volcanism in Central America: The Zapotitán Valley of El Salvador*. University of Texas Press.

- 2002 *Before the Volcano Erupted: The Ancient Cerén Village in Central America*. University of Texas Press.

- Sheets, Payson & Christine C. Dixon (eds.)  
 2013 *The Sacbe and Agricultural Fields at Joya de Cerén, El Salvador: Report of the 2013 Research*. Boulder: University of Colorado.
- Sheets, Payson, Christine C. Dixon, David Lentz, Rachel Egan, Alexandria Halmbacher, Venicia Sloten, Rocio Herrera & Celine Lamb  
 2015 Sociopolitical Economy of an Ancient Maya Village Cerén and Its Sacbe, *Latin American Antiquity* 26(3): 341-461.
- Shibata, Shione & Liuba Moran  
 2009 *Informe del proyecto El Cambio temporada 2009*. Informe presentado al Juzgado de Paz de San Juan Opico. La Libertad, El Salvador.
- Šprajc, Ivan  
 2017 Astronomy, Architecture, and Landscape in Prehispanic Mesoamerica, *Journal of Archaeological Research* 25(1): 1-55.
- Stone, Andrea & Mark Zender  
 2011 *Reading Maya Art: A Hieroglyphic Guide to Ancient Maya Painting and Sculpture*. Thames & Hudson.
- Sugiyama, Saburo  
 1993 Worldview Materialized in Teotihuacan, Mexico, *Latin American Antiquity* 4(2): 103-129.
- Tainter, Joseph  
 1988 *The Collapse of Complex Societies*. Cambridge University Press.
- Torrence, Robin & John Grattan (eds.)  
 2002 *Natural Disasters and Cultural Change*. Routledge.
- Vogt, Evan. Z.  
 1981 Some Aspects of the Sacred Geography of Highland Chiapas. In E. P. Benson (ed.), *Mesoamerica Sites and World-Views*, pp. 119-142. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Yagi, Hiroaki, Shione Shibata & Liuba Morán  
 2015 La cerámica de El Cambio, valle de Zapotitán, El Salvador. In B. Arroyo, L. M. Salinas & L. Paiz (eds.), *XXVIII Simposio de investigaciones arqueológicas en Guatemala 2014*, pp. 855-863. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.
- Yoffee, Norman & George L. Cowgill (eds.)  
 1988 *The Collapse of Ancient States and Civilizations*. University of Arizona Press.

# How Ancient People Overcame Volcanic Eruptions:

## Knowledge and Memory Living in the Volcanic Area

Akira ICHIKAWA\*

Since the 2000s, social and academic concerns have been growing in various fields for sudden environmental changes caused by destructive hazards occurring in short-term cycles and suddenly through the experience of large-scale disasters. In this paper, based on the examples of the Zapotitán Valley, El Salvador, which suffered from at least the following three eruption disasters; Ilopango, Loma Caldera, and El Boquerón volcanoes between 400/550 and 1000 A.D. This paper examines how ancient inhabitants in the area have been confronted by the abrupt environmental changes. In particular, I focus on changes in material culture before and after volcanic eruptions, the different types of eruptions and their respective scales, and the belief in sacred mountains that is at the heart of the ancient Maya worldview. According to archaeological materials from multiple archaeological sites in the Zapotitán Valley, I would like to emphasize the renovation of monumental architectures after the eruption. For instance, after the eruption of Ilopango Volcano, the ancient people immediately constructed monumental architectural structure using volcanic ash as construction material. Additionally, it is presumed that after the Loma Caldera eruption the monumental architecture renovated by different groups of adobe makers because we observe adobes that have several size and row materials. These data argue for the importance of collective work in the recovery process of rebuilding the pyramid temple subsequent to the eruption, as this site was sacred and an important public space for Mesoamerican civilization.

### Keywords:

abrupt environmental change, volcanic eruption, monumental architecture, Maya, building technology

\* Nagoya University



# アンデス文明形成期研究に見る在地性の問題

— チャビン問題の学史的考察より —

松本 雄一 \*

本論ではアンデス考古学において、その草創期から長く重要な課題であり続けているチャビン問題を学史的に考察し、アンデス文明の形成過程を研究する中で在地性がどのように認識されてきたかを解明することを試みる。チャビン問題をめぐる研究は、フーリオ・C・テーヨとラファエル・ラルコ・オイレ以来、チャビンと名づけられた広域にみられる物質文化のパターンを汎地域的な現象（チャビン現象）としてとらえようとするマクロな視点と、在地性、すなわち地域的な多様性の発展に焦点を当てたミクロな視点が、その時に使用可能なデータと調査者の理論的背景との関わりの中で揺れ動き、絡み合いながら進んできた。本論では、これまでの学史上特に重要と考えられる研究を年代別に取り、その背景に存在する当時使用可能であったデータと研究者の問題意識を考察する。さらに現在の研究動向を過去からの学史の中に位置づけることでチャビン問題をめぐる研究の現在の到達点を考察し、今後の方向性を模索する。

## Key Words

アンデス文明  
形成期  
チャビン問題  
学説史  
在地性

## 目次

- I はじめに
- II 考古学における在地性
  - 1. 分析スケールの問題
  - 2. アンデス考古学におけるホライズンの概念
- III チャビン問題の成り立ちに見る在地性の問題
- IV チャビン現象の歴史への関心
- V リチャード・バーガーのチャビン論
- VI チャビンとクピスニケ再び
- VII チャビン・デ・ワンタルにおける新たな調査
- VIII 汎地域的視点と在地性
- IX おわりに

# I はじめに

アンデス形成期（紀元前 3000-50 年）は、神殿を中心として社会が統合されていた時代と定義することができる(e.g. 加藤・関編 1998; 大貫・加藤・関編 2010)。この時代は、人口の集中、モニュメントの出現、社会の階層化、権力の発生(e.g. Burger 1992; 関編 2017) など、アンデス文明形成の画期となる社会変化が起きた時代である。ここで、社会組織の変化と地域間交流の活発化に焦点を当てた時に、形成期後期前半（紀元前 800-500 年）に明確な画期が存在するという点はこの時期に興味を持つ研究者間の共通認識であると言ってよい(図 1)。しかし一方で、この変化を汎地域的な現象としてどのように理解するか、あるいはそもそも汎地域的

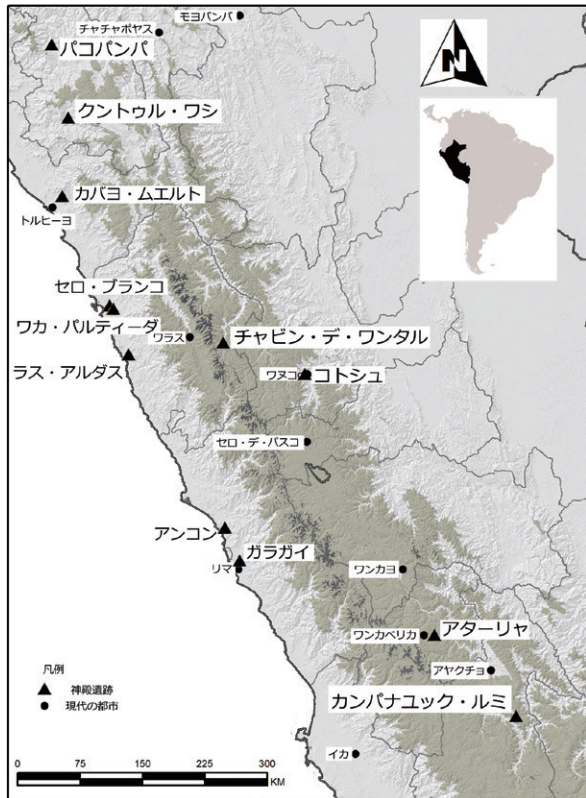


図 1 本論で言及する形成期後期の神殿遺跡 (Matsumoto et al. 2018: Fig. 1 を改変)

な現象として認めるかどうかに関しては対立する視点が交錯しているのが現状である。

この問題は、ペルー中央高地に位置する大神殿、チャビン・デ・ワントルをめぐって議論が展開されてきたことから「チャビン問題」(Willey 1951) と呼ばれ、アンデス考古学の学史上最も重要な課題の 1 つであり続けている。また、チャビン問題を議論する際に取りあげられる物質文化のパターン、想定さ

\* 山形大学

れる社会変化、そして歴史的過程は分析対象として「チャビン現象」(Burger 1988)と呼ばれている。本論では、このチャビン問題／チャビン現象に関する学説史的な考察を行い、この問題をめぐる関心とアプローチが、どのような背景でどのように変遷したかを分析する。筆者の考えでは、チャビン問題をめぐる議論の進展は、汎地域的な社会変化と在地的発展という両極の間を揺れ動いて現在に至っており、今後の研究の方向性としては、汎地域的な現象としてチャビン問題をとらえつつも、マイクロな在地性の視点を組み込むことが必要となる。そこで本論では、学史上の帰結としての現状を総括し、今後チャビン問題に関する考察を深めるための枠組みの提示を試みる。

## II 考古学における在地性

言うまでもなく在地性 (Locality) とは、「在地でないもの」、 「ローカルでないもの」の存在、すなわち「より広範囲な地理的分析ユニット」を前提とした概念である。このような在地性とある意味で対になるグローバル、インターナショナル、世界システムなど、現在の人文社会科学で広く用いられる用語は、考古学においてもマクロなパターンを解釈するためのモデルとして用いられることも多い (e.g. Hall et al. 2011; Jennings 2011)。

本章では、具体的な学史の分析に入る前にまず、「汎地域的な現象としてのチャビン問題に在地性という視点を組み込む」という本論の目的に必要な形で考古学における在地性の問題を簡潔にまとめ、アンデス考古学におけるマクロな現象を扱う「ホライズン」の概念に含まれる在地性に関わる問題を抽出しておくことにする。

### 1. 分析スケールの問題

考古学では文化の境界を、物質文化の様式 (style) によって設定し、特定の社会の存在をその背景に想定してきた(e.g. Conkey 1990; Hegmon 1992, 1998)。これはアンデス考古学においても 20 世紀前半から継承されており、モチェ文化、ナスカ文化など、特定の時代、地域、物質文化の様式を共有するものとして受け入れられている。一方で、

このように定義された文化が、その内部で完全な均一性を有するものでないこと、外部の刺激から閉じたものではないことは広く認識されており、それぞれの様相を分析するための枠組みの模索は現代に至るまで続けられていると云ってよい。ごく大雑把に整理すると、ある文化の内部の多様性、不均衡を分析する概念として、相互作用圏 (interaction sphere) (e.g. Caldwell 1964; MacNeish *et al.* 1975)、同等政体間における相互作用論 (peer polity interaction) (Renfrew 1986) が、外部との関係の分析に対応するものとして、世界システム論 (world systems theory) (e.g. Blanton & Feinman 1984; Chase-Dunn & Hall 1997; Kohl 1987; Hall *et al.* 2011; Schneider 1977; Wallerstein 1974)、ソーシャル・フィールド (Wolf 1984; Kohl 2008)、グローバルゼーション (Jennings 2011; Pitts 2008) などが挙げられよう。ここで認識すべきは、これらの枠組みが、異なるレベルの分析スケールを結びつけるために用いられており、明確に特定の地理的範囲や社会規模を前提としていないという点である。この点は、世界システム論が、その考案者であるウォーラステインの意図を超えて、様々な地理的範囲の中の社会経済的不均衡を解釈するために用いられている点 (e.g. Hall *et al.* 2011; Wallerstein 1993)、それぞれの概念をテーマとした著作や論集が、多様な地理的スケールを分析対象としている点 (e.g. Jennings 2011; Renfrew & Cherry [eds.] 1986) を指摘しておけば十分であろう。当然ながら、それぞれの脈絡に応じて、経験論的に枠組みが選択され、異なるレベルの事象が分析対象としての「全体・総体」として定義されることになる。

この中で「在地性」が問題となるのは、「在地」よりもマクロな存在 (政体、現象、文化など) がその外部に想定される場合であり、古典的な文化接触と変容の問題と密接に関わることとなる。人類学と考古学において、文化接触とそれがもたらす変化は依然として重要なテーマであり続けているが、特に考古学においては、地域間交流の活発化と複合的社会 (complex society) の成立と発展の間にある種の相関関係が存在することは様々な地域で指摘されている (e.g. Feinman & Marcus [eds.] 1998; McIntosh 2005; Trigger 2004)。双方の間に単純な因果関係を想定する研究者も存在する (e.g. Shady Solís 2014) が、このような立場は、古典的な伝播論や文化変容理論 (acculturation theory) の流れに属し、一方の文化の優位性を前提とし、優位な側から他方への一方的なプロセスを想定する古典的な理論に基づいている (e.g. Spicer 1961)。1980年代以降、一方向的なプロセスを前提とする理論は強く批判され、より

相互作用に重点を置いて、地域間交流と文化接触の動態をとらえようとする試みへと問題意識が移行している点は認識しておく必要がある (e.g. Cusick [ed.] 1998; Schortman & Urban [eds.] 1992)。

## 2. アンデス考古学におけるホライズンの概念

先スペイン期のアンデス社会を中央アンデスというマクロな視点から考察する際に避けて通れないのが、20世紀半ばから議論が始まり、現在も確固として残る「ホライズン (Horizon)」の概念である (e.g. Rice 1993)。半世紀をゆうに超えるその歴史の中で、ホライズン概念は、「芸術様式」 (e.g. Phillips & Willey 1953; Willey & Phillips 1958)、「進化論的な価値判断を避けた中立的な時期名称」 (e.g. Menzel *et al.* 1964; Rowe 1956, 1962, see also Ramón 2005)、「物質文化のマクロなパターンとその背景を解釈するための枠組み」 (e.g. Burger 1993)、などの様々な役割を、時として複数同時に担ってきた。この点は、アンデスの先スペイン期、時に形成期の考古学における議論がどのようになされてきたかと密接に関わっているように思われる。

ホライズンという用語は、マックス・ウーレのコレクションを再分析して編年案を提示したアルフレッド・クローバーによってはじめて使用されたとされる (Ramón 2005: 9-10; Rice 1993: 4)。ウーレはティアワナコ様式とインカ様式の土器がペルーとボリビアにおける編年の指標となることに気づいており (Rice 1993: 4; Rowe 1962: 45; Uhle 1902)、クローバーはここにチャピンを加えて、現在の編年にも通じる3つのホライズンを、美術史的な物質文化の様式として定義した (Kroeber 1944)。ホライズンの概念は、ホライズン様式として「広範囲に広がる特異なものであり、その故に他の、より在地の様式との相対的な時間関係を位置づけるために役立つ」ものとして定義された (Kroeber 1944: 108; Rice 1993: 4の引用を筆者訳)。一方で、クローバーの定義においては、ホライズン様式それ自体が内包する時間とその生成過程に関しては明確に考察されていないという問題を抱えていた。この点を明示的に組み込んだフィリップ・フィリップスとゴードン・ウィリーによる1953年の定義が、現在までアンデス考古学で用いられているホライズンの1つの基盤であると言ってもよい。彼らは、最初にホライズンを比較的限定された時間に広範囲に広がる様式 (ホライズン様式) として定義し (Phillips & Willey 1953: 625)、その後この定義を様式それ自体から拡張し、特定の技術、交易、文化的慣習の総体、すなわち文

化史的パラダイムにおける「文化」に近い概念によって再定義した(Willey & Phillips 1958; Rice 1993: 2)。ここで注意すべきは、「短期間に広い地理的範囲に拡大する様式」とその背景に比定される「文化」としてのホライズンという概念は、「中央 / 周縁」という二項対立的な区分を暗黙の裡に含意するというドン・スティーヴン・ライスの指摘であろう(Rice 1993: 2)。短期間の拡大という定義は、その様式、文化が生まれた「中心」が存在することを意味しており、「中心」からその影響が「周縁」に伝播するという認識を前提としている。そして、その中心とみなされるものは、同時期の社会の中で特異な形で発展した遺跡(e.g. チャビン・デ・ワントル、ワリ、ティワナク) やその背後に想定される政体(e.g. インカ帝国) であったということになる。ホライズンは、様式、文化を時空間上に位置づける概念であると同時に、文化史的パラダイムにおける文化とその変化に関する視点としての伝播論を内包するものとしてアンデス考古学史上に立ち現われたことになる。

ウーレやクローバーがその価値を認めた、広い空間を同時代性で結びつけることを可能とする有益な編年的指標という側面は、ウィリーたちにとっても維持されていた。ここでは、ウィリーによるホライズン概念は、時間を限定すると同時に、その広大な空間の内部を均質な文化現象として定義してしまいかねないという問題点をはらんでいたことに注目する必要がある。「トップダウンの視点からのマクロなパターンの存在を前提としている」という批判が可能であり、地域の歴史的固有性、あるいは在地性を重視する視点の必要性が指摘されるという点は、考古学における世界システム論の援用をめぐる議論と同一の構造を有している(e.g. Hall *et al.* 2011)。さらにホライズンに関しては、マクロなパターンを解釈するためのモデルであると同時に、編年を反映した時期区分のための概念という意味が付加されることとなった。ある解釈モデルが、特定の地域と時期に関する使用を前提とするという特殊な状況が生じたのである。ここまでの一般的な議論を踏まえたうえで、以下でアンデス考古学におけるチャビン問題の生成過程を概観し、研究の現状とその問題点を指摘していきたい。

### Ⅲ チャビン問題の 成り立ちに見る 在地性の問題

20世紀初頭にドイツ人考古学者マックス・ウーレが唱えた、アンデス文明の起源を中米に求める伝播論に対して、ペルー人考古学者フーリオ・C・テーヨはアンデス文明のアンデス起源説を提唱し、チャビン文化をアンデス文明の文化的母体とみなした(Tello 1943, 1960)。この文化は、アンデス中央高地に位置する形成期の大神殿、チャビン・デ・ワントル遺跡を指標遺跡とし、同遺跡の建築、遺構、遺物と様式的に共通する要素が、中央アンデスの広い地理的範囲に存在するという主張によって定義されていた。

チャビン・デ・ワントル遺跡にみられる建築や遺物、特に石彫に表現された図像表現の精緻さと多様性、建築規模の大きさと複雑な遺構の存在は、テーヨにチャビン・デ・ワントルから中央アンデス全域への文化要素の伝播を想定させるに至り、同様の視点はテーヨの弟子たちによって継承されることとなった(e.g. Carrión Cachot 1948; Tello 1943)。テーヨの論においては、チャビン・デ・ワントルが「伝播の中心」であるという認識が前提となっていたため、その他の地域は必然的に「周縁」とみなされることとなった。

この論調に真っ向から対立する論を唱えたのが、ペルー北海岸を中心として活発な調査と編年研究を行った、ラファエル・ラルコ・オイレである。同地域のチカマ河谷下流のバルバコアやバレンケといった墓域の遺跡を発掘したラルコは、北海岸においてテーヨがチャビン文化の拡散の証拠と考えたものは(e.g. Tello 1943: 135)、北海岸で出現し独自に発展した在地の文化であるという説を唱えた(Larco 1941, 1948)。彼の立場は以下の記述に明確に示されている。

“もし我々が、いわゆるチャビン文明と呼ばれるものに含まれるとされる多様な文化を注意深く分析するならば、以下のような結論に達する。それらの文化が共通する文化的要素を有するとしても、より多くのその他の要素もまた存在し、それによってある文化を他から区別することができる。… 共通要素は文化的要素の交流によるものであり、人々が自身の文化的モードを放棄したことを意味するわけではない”(Larco 1948: 16; Burger 1993: 44 の引用を筆者訳)。

テーヨとラルコの立場の違いは、その後のチャビン問題をめぐる様々な論点を先取りしていると言ってよい。ラルコによって定義されたクピスニケ文化は、テーヨから見ればチャビン文明の周縁社会であり、ラルコから見ればペルー北海岸独自の在地文化であった。さらに、リチャード・バーガーが指

揃るように、テーヨがチャビン文化を広い範囲で比較的均一なものとしてとらえ、細かな文化的多様性は地域の環境と資源の差異によると考えた一方で、ラルコはテーヨがチャビン文化として想定した時期を地域的な多様性によって特徴づけられる時代とみなしたのである(Burger 1989: 546, 1993: 44)。後に述べる通り、北海岸とチャビン文化の関係性をめぐる論争は、チャビン問題をめぐる学史上、繰り返し現れることになる。また、ウーレとテーヨ、テーヨとラルコの対立は、扱う地域的なスケールが異なり、その背景に当時の政治的、社会的な状況が存在する(e.g. Mesía 2006; 関 2008)が、その一方で在地性をどのように評価すべきかという共通した論点を含んでいる。

その後、テーヨのチャビン論は、ペルー国内以外にもアメリカ合衆国の研究者を中心として基本的に支持され(e.g. Bennett 1944; Kroeber 1944; Rowe 1967b; Willey 1948, 1951)、ホライズンをめぐる議論において極めて重要な位置を占めることになる。バーガーは、この時期に「チャビン・ホライズンの概念は統合的な記述を行うためだけでなく、ペルーの先史時代をめぐる語りを組織するための編年上の枠組みとしても用いられるようになった」(Burger 1993: 46)と指摘している。テーヨの均一な文化現象としてのチャビン文化が、先述のクローバー、ウイリーたちの編年指標としてのホライズン概念の中に組み込まれたという理解が可能である。

チャビン拡散のメカニズムの考察と背景に想定される社会組織(Carrión Cachot 1948; Willey 1948, 1962)に関する考察や、チャビンを定義する文化要素の基準の厳格化(Willey 1951)などは、その後数十年にわたって主要なテーマであり続けたが、その多くの場合ホライズン概念に含まれる文化的均一性、時間と空間の在り方などが前提として組み込まれていた(Burger 1993: 47)。結果としてこの時期までは、ペルーの先史時代におけるチャビン文化の編年の位置づけが問題となることはあっても、チャビン現象の歴史的過程それ自体はホライズン概念に取り込まれて問題化が困難になっていたことになる。この点は1950年代後半以降、歴史学者であり考古学者でもあったジョン・ロウによって、批判されていくこととなる。

## IV チャビン現象の 歴史への関心

ロウは、ウイリーとフィリップス(Phillips & Willey 1953; Willey & Phillips 1958)の定義とは異なる形でホライズンを用いることを提唱した。ロウはホライズンが同時性と文化的相同性を前提とした発展プロセスの段階(stage)として定義されることに明確な異議を唱えており、「文化的過程は調査のゴールであって、土器を編年順に整理しようとしている段階での前提となるべきではない(Rowe 1956: 627)」という言明に彼の立場が明確にあらわされているといえよう。実際のところはウイリー自身も、現象としてのホライズンには伝播を前提とするが故の地域間のタイムラグが存在することに気づいてはいたが、時期区分という視点からは、この点をあえて無視して用語を用いていた(Willey 1945: 55)。そこでロウは、このような文化的相同性を示す分析単位と同時期性を扱う分析単位を混同することを避けるための方法論を模索することになる。彼はある地域の編年を確立し、より広い地理的範囲の編年を関連づけるための指標編年(master sequence)とみなすことでこの問題を解決することを試み、ペルー南海岸のイカ河谷においてドロシー・メンゼルやローレンス・ドーソンと共に土器様式に基づいた通時的編年を構築することを試みた(e.g. Menzel 1964, 1976; Menzel *et al.* 1964; Rowe 1956, 1962)。ロウは用語法として従来の3つのホライズンを保持したが、その概念は様式あるいは文化の相同性という前提となる含意から解放され(e.g. Burger 1988: 107)、中立的な同時性のみを示し、それによって地域間比較の枠組みを確立し、ある様式の伝播や文化の変化のプロセスを分析することを可能とするものとして意図されたのである。そのため、チャビン・ホライズンではなく、前期ホライズンという用語が選択され、前期ホライズンは「チャビンの影響がイカ河谷に到達した時期から、土器に見られる焼成後の顔料充填の技法が多彩色の顔料を用いた装飾に取って代わられるまでの時間」(Rowe 1962: 49)と定義される。さらにその時期幅もウイリーらの定義による「短期間」という意味を持たないものであり(Rowe 1962: 50)、実際に前期ホライズンに関しては、紀元前1100年から700年という時間幅が想定されていた(Menzel *et al.* 1964: 4)。このようなロウの定義においては、「前期ホライズン」はある時間幅を表すのみであり、チャビン文化がいつその中心で出現したか、その影響がいつ他の地域に到達したかなどとは関係がないことになる。このようなロウのアプローチは、それまでの文化的相同性を前提としたチャビン論の問題点を解消するという意図に基づいていたが、2つの問題点を残してしまったように思われる。1つ目は

絶対年代の問題である。ロウは、いち早く放射性炭素年代測定法の重要性に気づいていたが<sup>1</sup> (Rowe 1967a)、当時のデータ不足から仮説的な年代設定しかなかった。皮肉にもロウが指標編年とみなしたイカ河谷においては絶対年代データの蓄積が遅れ、イカ河谷を中心としてアンデス全体の編年を関連づける試みはついに達成されることはなかった。もう1つは、ロウによる前期ホライズンの定義それ自体において、伝播の中心としてのチャビン・デ・ワントルが明確な前提とされていたことである。この点においては、ロウ自身もテヨのチャビン論を受け入れたうえで、その歴史的過程を明らかにするというスタンスを取っていたことがうかがえよう。ロウにとってチャビン文化の地域的多様性は、伝播の速度、順番という形で主に認識されていたと考えられる。ただ一方で、「チャビンの影響がイカ河谷に到達した時期」が絶対年代で確定できず、最も重要な点である「文化的な含意から解放された時間幅」を明確に設定できなかったことから、ロウによるホライズン概念は客観的な時期区分としての役割を十全に果たせなかった。また、そもそもの「チャビンの影響」をどのように定義するかという点に関しては、テヨ、ウィリーらの立場を踏襲していたことから、チャビン・ホライズンと前期ホライズンがその後長く混同される結果を招いた(e.g. Pozorski & Pozorski 1993)。

このようなチャビン文化の歴史性、チャビン現象の歴史的プロセスの解明は、その編年上の細分という形でロウの他の研究に反映されており、様式的セリエーションを用いた石彫と土器の編年(Menzel 1964; Rowe 1962, 1967b)は、様々な批判を受けながらも現在に至るまでその影響力を保持していると言ってよい(e.g. Burger 2019)。発掘データや絶対年代から半ば独立した形で行われる様式的な分析に関する補完と批判の試みは常に存在してきたが(e.g. Burger 1988; Kembel 2001)、ここではロウとその協力者たちが、チャビン・デ・ワントルの石彫の様式変化とイカ河谷の土器に見られるチャビンの図像の様式の変化が並行して起こった、とみなしていた点を指摘するにとどめておく(Menzel *et al.* 1964: 257-259)。ホライズン概念に含まれる同時性と文化的相同性を批判し、チャビン現象の歴史過程を考察するための枠組みを意図する一方で、その確立のために「チャビン・デ・ワントルを中心とした周縁への伝播」というチャビン・ホライズン論を前提とせざるを得なかった当時の学問的な状況がうか

がえる。ただし、チャビン現象の歴史性に着目し、中央アンデスの各地を編年的に結びつける必要性を指摘した点は、高く評価されるべきであろう。

同時代の研究者の中で、ロウが指摘したチャビン現象の歴史性に関する問題点を具体的な発掘調査から提示するに至ったのが、ペルー人考古学者であるルイス・G・ルンブレラスである。チャビン・デ・ワントル遺跡の異なる回廊を発掘調査したルンブレラスは、オフレングス回廊とロカス回廊で発見された土器の様式が異なることに着目し、はじめてチャビン・デ・ワントル遺跡の土器編年を提示した(Lumbreras 1971; Lumbreras & Amat 1969)。当時の絶対年代データの問題点に加え、それぞれの様式の層位的関係を確定するためのデータが得られなかったこともあり、その編年は後年大きな変更を迫られた(e.g. Lumbreras 1989, 1993)。しかし、チャビンを時間的に均一なものとしてとらえていた当時のチャビン・ホライズン論からは明確に一線を画した試みであったと位置づけられる。さらに、土器様式の地域間比較を通じてチャビン・デ・ワントルの土器編年と関連づけており、方法論は異なってもその問題意識はロウと共通していたことが読み取れよう。

ロウとルンブレラスに代表される1960年代から70年代までのチャビン現象をめぐる研究は、均質な歴史性を前提としたそれまでのチャビン・ホライズンの問題点を具体的なデータから浮き彫りにしたと位置づけることができよう。また、両者ともチャビン・デ・ワントル自体が中心であり、その時期的変化に対応する変化はチャビンの影響を受けた他地域でも起こっていたという認識を有していたと考えられる。そのため、在地性という問題は地域間編年の確立という点に限定されていた。両者にとってチャビン現象における地域的多様性は主要なテーマとはならなかったように思われる。チャビン現象の時間的空間的な均一性を前提とする従来のホライズン論から、時間的な均一性という前提を問い直し、歴史性に関する理解が進んだのが70年代までの研究であると位置づけることが可能であろう。

1 ロウの編年体系全体に関する解説と分析としては、Ramón 2005を参照。

# V リチャード・バー ガーのチャビン論

1970年代になると、それまで漠然と「チャビン」あるいは「チャビンの」とされていたいくつかの遺跡において、放射性炭素年代測定法による絶対年代データが提示されるようになった(e.g. Burger 1981)。同時にチャビン・デ・ワントル遺跡自体においてもロサ・フン率いるペルー国立サン・マルコス大学の調査団と、アメリカ合衆国の考古学者であるリチャード・バーガーによって新たな調査がなされた(e.g. Burger 1978, 1984, 1998; Silva 1978)。ここでは、その後のチャビン問題／現象をめぐる研究を牽引することとなった、バーガーの研究をやや詳しく見ておくこととしよう。

カリフォルニア大学バークレイ校人類学部博士課程においてジョン・ロウの学生であったリチャード・バーガーは、1975年から76年にかけて、チャビン・デ・ワントル遺跡で発掘調査を行い、はじめて層位と土器様式を対応させた編年を提示した。バーガーは神殿建築ではなくその周囲の居住域に焦点を当てたが、この選択によって小規模な調査であったにもかかわらず、異なる土器様式間の層位的関係を考察することが可能となった。この調査で得られた絶対年代データに基づいて、ウラバリウ相(850-460 B.C.)、チャキナニ相(460-390 B.C.)、ハナバリウ相(390-200 B.C.)の3時期の遺跡編年提示され、ロウによる石彫と建築の編年との関連づけと、ルンプレラスの土器編年の見直しがなされることとなった(Burger 1978, 1984)。さらに、居住域に焦点を当て、遺物分布範囲の全体でサンプリングを行うことができたため、人口規模の通時的変化に対する仮説を提示することが可能であった。この時点での彼の考えを本論に必要な範囲で以下にまとめておく。

- ①チャビン・デ・ワントルは紀元前850年頃に出現し、その後建築と人口の拡大を伴い、紀元前400年頃に始まるハナバリウ相においてその最盛期を迎えた。
- ②特にハナバリウ相の居住域からは、遺物の分布状況の差から階層分化が存在したことがうかがわれた。
- ③ハナバリウ相は200年程度と比較的短期間の後に終焉を迎え、チャビン・デ・ワントルの神殿としての機能は失われた。

この時点で、バーガーはロウが意図したチャビン・デ・ワントルの石彫と建築の編年、ルンプレラスが意図した土器編年を統合したと位置づけられよう。さらに、それまで漠然と論じられるのみであった、チャビン・デ・ワントルの社会組織とその変化に関する具体的なデータを手に入れたことになる(e.g. Miller & Burger 1995)。このような自身の研究を基に、バーガーはチャビン・デ・ワントルと他の中央アンデス諸地域との関係を考察する道へと踏み出すことになったが、その際に彼が目にしたのは、土器様式と絶対年代であった。

まず、当時使用可能であった絶対年代データを整理したバーガーは、「チャビンの」と漠然と考えられていたカバヨ・ムエルト、ガラガイ、ラス・アルダスなどの遺跡が、チャビン・デ・ワントル成立以前、あるいはその最盛期であるハナバリウ相以前に終焉を迎えていたと論じた。さらに、土器様式の地域間比較を通じて、ハナバリウ相と類似し、同時代と考えられる土器が中央アンデスの広い範囲に分布していると指摘した(Burger 1981, 1988)。このようなデータを注意深い民族誌的類推によって統合したのがバーガーによる新たなチャビン・ホライズン論であり、その後現在に至るまで彼は補強と修正を続けている。以下に簡単にまとめておく(松本 2009)。

バーガーによれば、ハナバリウ相に対応する時期に汎地域レベルで1つの土器様式が広まり、祭祀建築が大型化する。この現象は冶金、石材加工、土木、織物等の様々な技術革新をともなっており、それらが図像などを運ぶメディアともなった。さらに時期を同じくしてチャビン・デ・ワントルを中心とした巡礼システムが確立し、それによって地域間交流が加速した。バーガーはこれらの要因が複合的に結びつくことによりチャビン・デ・ワントルの宗教的なイデオロギー(チャビン・カルト)が各地に広まり、階層化に代表される大きな社会変化に対応して起こったと考えている(Burger 1988, 1992, 1993, 2008)。また、このような変化が200年という比較的短期間において起こり、類似した物質文化の様式が広範囲にみられるようになる現象の背景を説明するため、新たにチャビン・ホライズンという概念の有効性を主張した(Burger 1989, 1993)。

ここではバーガーによるチャビン・ホライズンの定義をウィリーとロウとの比較において検討してみよう。基本的にバーガーによるホライズン論は、「短期間のうちに広範囲の地理的領域に、類似した物質文化の様式が確認される」という時空間的な定義という点でウィリーとフィリップスによるもとの概念を継承している(Phillips & Willey 1953; Willey & Phillips 1958)。一方で、テーヨ以来の「均一な文化現象としてのチャビン文化」というテーゼを明確に否定しているが、背

景に特定の文化現象を想定している点は共通しているといえる。さらに、チャビン現象の歴史性という師ロウから受け継いだ視点は、チャビン・デ・ワントルの歴史の中でその最終相であるハナバリウ相に至る通時期的変化を重視する点、特定の遺物様式、技術の出現を時期決定の客観的基準とする点、ホライズンの年代を確定し地域間比較を行うための枠組みとして用いようとする点に現れている<sup>2</sup>。ウィリーらによってホライズン概念の前提として組み込まれた文化的同一性を、絶対年代をはじめとする新たなデータを用いて解体し、様式論としてのホライズンの背景にある汎地域的な社会変化のプロセスを考察したのがバーガーの研究であり、その成果に基づいたうえで、客観的な時期区分というロウの意図と類似した形でチャビン・ホライズンの有効性が主張されたのである(Burger 1989, 1993)。またここでは、バーガーの議論が、「プロセス考古学の流れを汲む地域を限定してセトルメントシステムを考察するアプローチ」に対するアンチテーゼとして意図されていたことを理解する必要があるだろう(e.g. Burger 1993: 41; Burger & Matos 2002)。バーガーのチャビン・ホライズン論は、河谷や盆地などの、限定された地理的領域に焦点を当てるアプローチが隆盛であった1970年代から1980年代にかけての研究において前提として存在していた、「特定の地理的領域を閉ざされたものとして扱う視点」に対して、その前提自体への批判として位置づけられることとなる(e.g. Burger & Matos 2002: 169)。

先にも触れた通り、バーガーの論においては、それまでのチャビン問題をめぐる議論で暗黙の前提とされてきた「均一な文化現象としてのチャビン文化」というテーゼが明確に否定されており「同質性と異質性 (Unity and Heterogeneity)」の双方を理解することに主眼が置かれている点が重要である(Burger 1988, 1992)。「同質性」に対する焦点が従来のチャビン論、ホライズン論の流れを汲んでいることは明らかであるが、では「異質性」をバーガーはどのように理解しているかという点を考えてみたい。筆者の理解では、この点は地域的な多様性を文化現象としてのチャビンの中に組みこむ試みであり、汎地域的な視点と常に対になっている。まずバーガーは、形成期前期・中期に各地に栄えた多様な文化の存在を前提とし、チャビン・デ・ワントル神殿を中心とした社会が、それらの要素を取捨選択して組み合わせ、形成期後期後半の紀元前400年頃、チャビン・デ・

ワントルにおけるハナバリウ相に対応する時期に新たな宗教(チャビン・カルト)として再構成したと考える。そして、その拡散が様々な地域に共通する様式が存在と同時期に起きた社会変化を説明することとなる。この場合、地域的多様性は「チャビン・カルトを受け入れたかどうか」、あるいは「どのように受け入れたのか」という形で探求されることになる。多様な地域文化の「後の統合者 (late synthesizer)」(Quilter 2008: xxv) という意味でチャビン・デ・ワントルが位置づけられているため、紀元前400年を境として、地域的多様性の認識が、ホライズン現象の中の「異質性」として読み替えられることとなる。土器様式を例として述べるならば、紀元前400年以前の土器様式に見られる多様性は地域文化の展開と位置づけられるのに対し、紀元前400年以降に各地にみられる多様性はチャビン・デ・ワントルの宗教的影響(チャビン・カルト)に対して、それぞれの地方がどのように関わったかという視点から解釈される。例えば、ネペーニヤ谷、カスマ谷などはチャビン・カルトを拒絶し在地伝統が継続、興隆した地域とみなされ(e.g. Burger 1993: 67, 2008: 699)、それを受容した他地域に関しても在地様式とハナバリウ的な様式の併存、融合が様々な形で現れると論じられることになる(e.g. Burger 1988: 116-117, 1993: 60-63)。

## VI チャビンとクピス ニケ再び

1990年代以降、中央アンデス各地における新たなデータの蓄積に伴い、バーガーのチャビン論を批判的に検討する研究が相次ぎ、現在に至るまで論争が続いている(e.g. 井口1996; Inokuchi 1999; Kaulicke 1994, 2015; Silverman 1996)。この議論は、北海岸クピスニケ文化に関する研究の蓄積(e.g. Elera 1993, 1997, 1998)と長期にわたる大規模な発掘で基礎となる精緻な編年が確立されたクントウル・ワシ遺跡(e.g. Onuki [ed.] 1995)のデータが提示されることによって可能となったと言ってよい。これらの研究をチャビン問題の脈絡でとらえるならば、バーガーがチャビン・ホライズンと定義する現象の中に組み込んだ地域文化、あるいは在

<sup>2</sup> 筆者は、ロウによる指標編年(Master Sequence)に対応するものが、バーガーにとっては自身が確立したチャビン・デ・ワントルの土器編年であったのだろうと考えている。



地社会に関して、逆に地域レベルのデータからその独自性とチャビン現象からの独立性を重視した論を提示する点が重要である。この点で、テヨとラルコの対立図式が、類似したホライズンや伝播の問題をめぐって再生産されたとみなすことも可能であろう。物質文化の様式的差異が議論の1つの鍵となっていた点も同様である。ただし、当時に比べると絶対年代データの存在、理化学的手法の導入によりはるかに精緻な議論が可能となってきたのである。特にクントゥル・ワシ遺跡に関しては土器の様式編年と絶対年代の充実が著しく、異なる立場の研究者がクントゥル・ワシの編年を基準として議論を進める状況が継続している(e.g. Burger & Salazar 2008; Kembel 2008)。

カルロス・エレラは、埋葬伝統とその背景にある宗教伝統を共有する社会の複合体としてのクピスニケ文化の伝播論的な意味での、あるいは直接の移住による拡散が、物質文化の共通性を生み出したとしている(Elera 1993, 1997, 1998)。エレラによる議論は、彼の定義するクピスニケ文化の側での絶対年代データの不足から、その論理構造としては物質文化の様式にその主な根拠を置いており、その点でこれまでの地域文化の定義問題に回帰してしまった印象をうける。ごく単純化すれば、クピスニケ拡散論は、言い換えればクピスニケ・ホライズン論といっても差し支えないものであり、その様式が何処で生まれたかに関してバーガーとは異なる立場を取っているということになる。

クントゥル・ワシ遺跡のデータは、年代と様式の両面から、バーガーの議論を批判的に検討することを可能とした(井口 1996; Inokuchi 1999; Onuki [ed.] 1995)。明確な層位と出土コンテクストに対応した遺物様式のデータは、バーガーによって提示された編年の枠組み、特に彼によってハナバリウ相との対応が想定されたクントゥル・ワシ期の年代が、紀元前 400 年というバーガーが想定したハナバリウ相の時期に数百年以上先行することを実証的に示した。またクントゥル・ワシ期に関しては、豊富に出土した土器資料と共に、金製品や、人骨のデータからも北海岸クピスニケ文化との強いつながりが論じられた(加藤・井口 1998: 211-214)。結果として、バーガーの唱えるホライズン現象とは別個の地域的发展とし

てベルー北高地の発展が描写された<sup>3</sup>。

実証的かつ経験論的なデータの蓄積のうえに立って、ホライズン現象としてのチャビンに対立する地域的发展としてのクピスニケ文化や、クントゥル・ワシをはじめとする他地域における大センターの多様性、すなわち在地性に目が向けられたと言ってよいであろう。アンデス文明の形成過程において、神殿を生み出した社会の具体的な生成と変化のプロセスを実証的に追うという日本調査団独自の問題意識は、チャビン問題をめぐる地域的な視点の重要性を明確に示し、バーガーのチャビン論に存在するチャビン・デ・ワントルを「中央」とし、それ以外の同時代の遺跡を「周縁」ととらえる視点に異議を唱えたことになる<sup>4</sup>。

一方で、1990 年代に盛んになった、クピスニケ文化をめぐる議論は、バーガーの議論にあった汎アンデス的な視点を保持できなかったという印象は否めない。議論は、チャビン・デ・ワントルやクントゥル・ワシをはじめとする北部の大センターと北海岸の関係に集中し、ワスコ、アヤクチョ、パラカスといったチャビン・デ・ワントルより南側に位置する社会が詳細な分析のもとにクピスニケ文化との関りで論じられることは少なく、あったとしても漠然とした伝播論的な視点から様式的類似性を言及されるにとどまっていた(e.g. Elera 1998; Ochatoma 1985, 1998; Kaulicke 2015)。

## VII チャビン・デ・ワントルにおける新たな調査

現在チャビン・デ・ワントルにおいては、ジョン・リック率いるスタンフォード大学の調査団が 1994 年から調査を行っており、主に建築のプロセスと絶対年代に関する新たなデータを発表している(Kembel 2001, 2008; Kembel & Haas

3 ネペーニヤ河谷においてセロ・ブランコ遺跡とワカ・パルティエダ遺跡を調査した芝田幸一郎も、バーガー自身がハナバリウ相とチャビン現象を結びつける根拠としたレリーフの年代をはじめとする絶対年代データから、同様の指摘を行っている(e.g. Shibata 2010: 306)。芝田による、チャビン現象とは別個のものとしてネペーニヤ河谷の地域間交流の在り方や、その後の在地的変化に焦点を当てた論考に関しても、クントゥル・ワシにおいて北海岸と北高地の在地的発展に焦点が当てられたことと同じ脈絡でとらえることが可能であろう(e.g. Shibata 2014; Chicoine *et al.* 2017)。

4 ホライズンを念頭に置く、あくまでもチャビン・デ・ワントルを中心とした社会変化の議論を脱し、対等に共存するセンターとしてクントゥル・ワシを位置づけた点は、地域での経験論的な実証データの厚みに重きを置くその方法論的独自性とも深く結びついていると考えられる(Onuki 2002)。

2015; Kembel & Rick 2004; Rick 2005, 2008; Rick *et al.* 2010)。彼らのデータは、チャビン・デ・ワントルの建築プロセスが従来考えられてきたよりもはるかに複雑であったことを明らかにし、その編年上の位置づけに関して新たな議論を提示している。しかし、スタンフォード大学調査団の研究に関して包括的な出版はなされておらず、その議論も大きく変わり続けているため、学史上に位置づけることが難しい。またその出版物はチャビン・デ・ワントルの建築に焦点を当てたものが多く、特に近年はチャビン問題、あるいはチャビン現象を扱ったものは少ない。このような点を踏まえたうえで本論では、バーガーのチャビン論とスタンフォード大学チームの議論を本論に必要な範囲で比較しておくにとどめたい。

リックとシルビア・ケンベルは、チャビン・デ・ワントルの編年上の位置づけと他センターとの関係に関してバーガーの論と大きく異なる新たな解釈を提示している。彼らによれば、チャビン・デ・ワントルの歴史は、ウラバリウ相の開始時期である 1000 – 900 cal. B.C. ではなく、1500 – 1200 cal. B.C. (Rick 2005: 75) のセパレート・マウンド・ステージ (Separate Mound Stage) にさかのぼり (Kembel 2001, 2008)、その建築が最後に更新されたのはハナバリウ相に対応する 500 – 400 cal. B.C. ではなく 900 – 780 cal. B.C. であるという。さらに、彼らはチャビン・デ・ワントルが形成期前期の後半に、クピスニケ文化やマンチャイ文化の祭祀センターとはほぼ同時期に出現し、形成期中期を通じて並行して発展したと考えている (Kembel & Rick 2004; Rick 2005)。彼らの論においては、チャビン・デ・ワントルと他地域の祭祀センターで共有される様々な要素は、先行文化の統合ではなく、両者が長い期間を通じて相互に交流し続けたことの結果として現れたものということになる。このため、多様な地域文化の「後の統合者 (late synthesizer)」として、ハナバリウ相におけるチャビン・デ・ワントルを位置づけるバーガーとは明確に対立する。また彼らは、バーガーの論のもう 1 つの重要な点、すなわち形成期後期後半における汎地域的な宗教イデオロギー (チャビン・カルト) の拡散を否定している。

その初期の議論において彼らは、チャビン・デ・ワントルは 500 cal. B.C. 頃に、祭祀センターとしての機能を失ったと論じた。つまり、バーガーが論じたような宗教ネットワークの形成、技術革新、社会変化などはこの時期に起こらず、ハナバリウ的土器の出現は、チャビン・デ・ワントルが祭祀センターとして機能しなくなってからの現象であるという解釈であった (Kembel 2001; Kembel & Rick 2004; Rick 2005)。数年後の最新の出版物において彼らはその立場を大きく変化させ、ハナバリウ的土器に対応する年代を 800 cal. B.C. に

変更し、彼らの建築上の編年におけるブラック・アンド・ホワイト・ポータル・ステージ (Black and White Portal Stage) に対応させている (Kembel 2008; Mesia 2007)。そしてさらに近年の出版物では、ハナバリウイデ (ハナバリウ相的) という用語を用い、チャビン・デ・ワントルにおける明確な土器の変化を否定するに至っている (e.g. Rick *et al.* 2010; Kembel & Haas 2015)。ただし、この変更がここまで論じてきたチャビン問題／現象とどのように関わるのかは、いまだ示されていない。

変化し続けるリックとケンベルの論を明確に位置づけることは困難であるが、明確なバーガーに対する批判として以下の 2 点が挙げられるだろう。

- ①チャビン・デ・ワントルの最盛期は紀元前 900-780 年であり、バーガーのハナバリウ相の年代と大幅にずれる (e.g. Kembel 2008; Rick *et al.* 2010)。
- ②チャビン・デ・ワントルは唯一の中心ではなく、複数の対等なセンターの中の 1 つであるにすぎない (e.g. Kembel & Rick 2004)。

これらのリックとケンベルの主張は、紀元前 400-200 年というバーガーが設定したハナバリウ相に対応する時期 (e.g. Burger 1981, 1984) が山地における形成期神殿の最盛期ではない点を指摘し、チャビン・デ・ワントルを中心とした宗教の拡散を否定するなど、クントウル・ワシの成果によって 90 年代に指摘された点と大きく重なっている。紙幅の都合から彼らの根拠を詳細に吟味することは割愛するが、チャビン・デ・ワントルの最盛期はバーガーが想定した時期より早いという点は、現在では彼を含む多くの研究者に受け入れられている成果であるといえるだろう。

現時点で指摘しておくべき点は、リックのアプローチに根強いプロセス考古学的な数量化と科学主義的傾向、そして地域を閉じたものとして扱う視点が指向性として見受けられることである (e.g. Rick 2005, 2008, 2014)。この点は上記②の彼の解釈の傾向にも表れており、チャビン・デ・ワントルの地域を超えた重要性和地域間交流の展開というよりは、チャビン・デ・ワントル自体の発展プロセスに記述の詳細が置かれる傾向にあり、バーガーとの対立も実際のところは年代それぞれをめぐり議論にとどまっていることが多い。この点は、彼のこれまでの研究が、強いプロセス考古学の影響下で行われてきたこと (e.g. Rick 1980) を考えれば理解できる点であり、バーガーとリックの対立はアメリカ考古学における異なる理論的潮流の対立でもあると整理できよう。文化史学

派の巨人であるジョン・ロウに深く学び、プロセス考古学の隆盛に対峙しながらポストプロセス考古学の影響を取り込んだバーガー (e.g. Burger 1983, 1988)と、プロセス考古学の中心地であるミシガン大学でケント・フラナリーに学んだジョン・リックの対立は、マクロなパターン認識が在地における適応プロセスかという、基本的な理論的立場の違いを前提として生じたものともいえる。

## VIII 汎地域的視点と 在地性

2000年代に入ると、さらに形成期中期・後期の遺跡の調査が進展し、チャビン問題は新たな局面を迎えていると言えてよい。山地と海岸で数多くの新たな調査が行われたことと、補正年代の普及と相まって絶対年代資料が充実し、編年を地域間レベルで構築することが可能となったことが特に重要な点であろう(e.g. Burger *et al.* [eds.] 2019)。分析手法や理論の面でも様々な新たなアプローチが生まれているが、本論では学史上の在地性をめぐる議論に焦点を当てて研究の現状を整理してみたい。

とりわけ重要なのは、バーガーが定義した「ハナバリウ相土器に対応する土器」が各地で出現する年代に、ある程度の同時代性が見られることが明らかになったことである。ただしそれは、バーガーが最初に提示した紀元前400年ではなく、クントゥル・ワシのクントゥル・ワシ期の開始に近い紀元前850-700年であった(e.g. Matsumoto 2019)。また、この時期に中央アンデスの様々な地域で、豊かな副葬品を有する埋葬や、貴金属製品などの装身具が発見されるなど、社会経済組織の変化が生じたことが明らかとなりつつある(e.g. Burger *et al.* [eds.] 2019)。このような状況において、バーガーは新たなデータを得たうえでチャビン・デ・ワンタル遺跡に関する自身の編年案を以下のように更新している(Burger 2019: Table 2)。

ウラバリウ相	紀元前 950-800 年
チャキナニ相	紀元前 800-700 年
ハナバリウ相	紀元前 700-400 年

さらに、このチャビン・デ・ワンタル遺跡の編年案を基に、

バーガーは改めて自身のチャビン論に関して、変更を加える必要を認めつつも現在でも有効であると論じている(Burger 2019)。これまでのバーガーの論への批判で、最も説得力に富んでいた部分の1つは、彼の「紀元前400年に類似した物質文化の様式が広い地理的に広がる」という点(e.g. Burger 1988)に関する、具体的な絶対年代データからの批判であった(e.g. Mesia 2007; Rick *et al.* 2010)。そのため、この点に変更を加えた新たな編年案に基づいてこれまでの議論を再検討しておくことは極めて重要であろう。

おそらく最も重要なのは、クントゥル・ワシとクピスニケをめぐる議論であろう。バーガーがハナバリウ相と同時期であると考え、年代データからそのずれが指摘されてきたクントゥル・ワシ期の年代は(e.g. 井口 1996: 19; Onuki [ed.] 1995: 210)、この修正案においてハナバリウ相の年代にかなり近づいたといえる。このように考えた時に、クントゥル・ワシ期とハナバリウ相をめぐる解釈の違いは(e.g. Burger 1988; Inokuchi 1999)、物質文化の様式をめぐる解釈の違いという点が前面に出ることとなる。つまり、様式上の類似性を北海岸とクントゥル・ワシの関係という在地的な現象として解釈するか、汎地域的なホライズン現象として解釈するかは、絶対年代によってその是非を問うことができるものではなくまってしまっている。クピスニケ文化とクントゥル・ワシ期の類似性は、バーガーの論においては「チャビン・カルトがクピスニケの要素を取り込んで再構成し、それがクントゥル・ワシに伝播した結果」となるだろうし、クントゥル・ワシの在地的な展開から見た時には、クピスニケ文化との直接的なつながりを想定することになる。実際のところ、ハナバリウ相のチャビン・デ・ワンタル、クントゥル・ワシ、クピスニケ文化の諸遺跡の間には、図像表現や遺物様式の点で非常に多くの一般的な類似が見取れるうえに、それぞれをチャビンと呼ぶかクピスニケと呼ぶかという議論は現代に至るまで連綿と受け継がれているのである(e.g. Burger 2012; Kaulicke 2016)。

現状では、遺物様式にとどまらない包括的な分析に基づく日本調査団のクントゥル・ワシをめぐる議論(井口 1996; 加藤・井口 1998)がより説得力を持つと筆者は考えているが、ここでいくつかの疑問が浮かぶ。このようなクピスニケをめぐる議論は、大きな社会的経済的変化が北海岸と北高地にとどまらない、中央アンデス全域に紀元前800年前後に起こったというデータとどのように関わってくるのか? クントゥル・ワシとクピスニケ文化をめぐる動きは、チャビン・デ・ワンタルと完全に切り離すことが可能なのだろうか? それまでクピスニケ文化やチャビン・デ・ワンタルとの緊密な交流がなかった多くの地域で、紀元前800年頃突如として在地伝統の断絶と物質文

化の様式的類似が確認されるようになるのはなぜなのか<sup>5</sup>? 同時期の中央海岸のネペーニヤ谷下流域において、チャビン／クピスニケ的な宗教伝統が維持されつつもその直接的な図像表現などへの影響が減少し、在地的な要素を有する祭祀建築が興隆し始めるという逆のパターンが見られるのはなぜなのか(e.g. Shibata 2014; Chicoine *et al.* 2017)? こうしてみると、在地性という点で説得力を有する解釈が必ずしもマクロなパターンの中に位置づけられていないという現状が浮かびあがってくる。改めて汎地域的なパターンと在地性をめぐる解釈を両立させるような枠組みが求められているのではないだろうか。

## IX おわりに

チャビン問題をめぐる学史の流れは、チャビンと名づけられた広域にみられる物質文化のパターンを汎地域的な現象(チャビン現象)としてとらえようとするマクロな視点と、在地性、すなわち地域的な多様性の発展に焦点を当てたミクロな視点が、その時に使用可能なデータと調査者の理論的背景との関わりの中で揺れ動き、絡み合いながら研究が進んできたことを示唆している。そして現状は、豊かな在地性をめぐるデータを汎地域的な枠組みの中に位置づける必要性が浮かびあがってきた状態にあると考えられる。ここでは簡略にこの点に関する筆者のアイデアを模式的に提示して結論に代えたい。

チャビン問題を考える際に根強く残ってきたホライズン概念はここにきてその限界を露呈したと考えざるを得ない。特にクントゥル・ワシとパコパンパという北高地の大神殿における調査の進展は、チャビン・デ・ワンタルと同時期に異なる地域で独自の歴史背景を有した大神殿が存在したことを実証的に明らかにした。そしてこれらの神殿を中心とした社会で紀元前 800 年頃、同時といっても良い時期に大きな社会変化が生じたことを、チャビン・デ・ワンタルの中心性を暗黙の裡に担保するホライズン概念に基づく伝播論によって説明することは適切ではない(e.g. 関編 2017)。特にパコパンパ遺跡における変化のプロセスが、北海岸との関わりというよりは、北高地の在地的な発展と密接に結びついていることを示すデータは、チャビン・ホライズンのみならず、チャビンとクピスニケという長年にわたる二項対立の図式を乗り越える成果であ

ると位置づけられるであろう。

しかし一方で、筆者が調査を行ってきたペルー南高地、アヤクチョ地方は、バーガーがそれまで唱えていたチャビン論の枠組みで明確に解釈し得る。紀元前 700 年頃にいわゆるハナバリウ的な土器が出現すると共に神殿の発生と大規模化、社会階層化の萌芽が見られる。同時に黒曜石など、チャビン・デ・ワンタルとの交流が活発化したことが示されるのである(松本 2017; Matsumoto 2010, 2019)。このような変化はチャビン・デ・ワンタルとアヤクチョ地方の神殿群の関係を、黒曜石を経済的要因として介在させた「中央と周縁」、あるいは「世界システム論」などの視点から解釈する必要性を浮かびあがらせている(Matsumoto *et al.* 2018)。

このような状況を総体として考察するための枠組みとしてどのようなものが適切なのであろうか。当面は、古典的な概念である相互作用圏 (Interaction Sphere) (Caldwell 1964) の用語を用いることが有効であろう。相互作用圏はアメリカ中南東部のホープウェル文化の研究から生まれた概念で、ある種の伝統や地理的範囲を超えた広がりの中での物質文化の共通性を、威信財経済や宗教的信仰の共有のネットワークという視点から分析するために使われたものであるが、現在ではより広い意味で、1つの「文化」、あるいは「伝統」を超えた地理的範囲に見られる物質文化のパターンを描写するために用いられることが多い(e.g. Church 1996)。筆者の考えは、異なる性質の相互作用圏が中央アンデスにおいて共存し重なり合う、その総体としてチャビン現象をとらえるべきであるという点にある。上述の2つの異なる事例、北高地の大センターであるパコパンパ、クントゥル・ワシとチャビン・デ・ワンタルの関係と、チャビン・デ・ワンタルと南高地のセンター群の関係はこの点を示す好例である。前者の関係は対等な政体としてのセンターが交流し、結果として社会組織や宗教的信仰に連動した変化が起こるという、レンフリューとチェリーによる同等政体間の相互作用 (Peer-Polity Interaction) として理解することが可能である(Renfrew & Cherry [eds.] 1986)。つまり、パコパンパ、クントゥル・ワシとチャビン・デ・ワンタルは同等政体間の相互作用を特徴とする相互作用圏を構成し、そしてそれぞれのセンターが、自身の在地的な、いわば下位の相互作用圏を有していることになる。この場合、先述のチャビン・デ・ワンタルと南高地の「中央と周縁」の関係によって描写される相互作用圏は、チャビン・デ・ワンタルを中心とした地域的／在地的な

5 例として、中央高地ワスコ盆地に位置するコシュ遺跡(e.g. Izumi & Terada [eds.] 1972)、南高地に位置するアターリヤ遺跡(Young 2017)と後述するカンパナユック・ルミ遺跡(e.g. Matsumoto 2010)などが挙げられる(図 1)。

相互作用圏と定義し得る。同様に、クントゥル・ワシは、同様の在地的な相互作用圏を北海岸との間に構成し、パコパンパにとっては、北部高地から東斜面にかけての範囲が自身を中心とした相互作用圏を構成する。これらの地域的／在地的な相互作用圏は、パコパンパ、クントゥル・ワシ、チャビン・デ・ワタルによって構成されるより上位の相互作用圏の下に、お互いに重なり合うように存在している。ここでよりミクロな事例を提示するのであれば、南高地のカンパナユック・ルミ神殿は、「チャビンの」要素が存在しない南高地の地域との間に、黒曜石の取引を通じた独立した相互作用圏を保持していたと論じることでもできる (Matsumoto *et al.* 2018)。このようなスケールも性質も異なる相互作用圏の共存と重なり合い、そのマクロな総体がチャビン現象であるという認識に立ち、それぞれの在り方を比較検討することが今後の課題であろう。そして、チャビン現象における在地的性は、時に重なり合い、溶け合い、反発しあいながら、共存する相互作用圏のある地域における動的な絡み合いの歴史的産物として位置づけることができると筆者は考えている。

## 謝辞

本稿は、2018年12月26日に南山大学人類学研究所の主催のもとに開催された公開シンポジウム「遺跡に見る在来知——モニュメント、自然環境、インターアクション」での発表とその後の議論より着想を得たものである。本稿の執筆にあたっては、渡部森哉氏、佐藤吉文氏、山本陸氏にきわめて建設的なコメントをいただいた。また、井口欣也氏、芝田幸一郎氏には重要な文献をご送付いただいた。御礼申し上げます。本稿は、新学術領域研究（研究領域提案型）出ユーラシアの統合的人類史学 - 文明創出メカニズムの解明 - A02 班：心・身体・社会をつなぐアート／技術（研究代表者：松本直子）の成果であるが、本稿で言及したカンパナユック・ルミ遺跡の調査成果は、科研費若手 B 25770282（研究代表者：松本雄一 2013-2014）、科研費若手 A 15H05383（研究代表者：松本雄一 2015-2018）に基づくものである。

## 参考文献

(日本語文献)

井口欣也

1996 「チャビン問題再考——中央アンデス地域形成期研究の新たな展開に向けて」『リトルワールド研究報告』13: 1-35.

大貫良夫・加藤泰建・関雄二(編)

2010 『古代アンデス——神殿から始まる文明』朝日新聞出版。

加藤泰建・井口欣也

1998 「コンドルの館」『文明の創造力——古代アンデスの神殿と社会』加藤泰建・関雄二(編)、pp. 163-224、角川書店。

加藤泰建・関雄二(編)

1998 『文明の創造力——古代アンデスの神殿と社会』角川書店。

関雄二

2008 「アンデス文明の起源を求めて 日本アンデス考古学調査50周年記念シンポジウムより」『チャスキ』38: 7-9.

関雄二(編)

2017 『アンデス文明——神殿から読み取る権力の世界』臨川書店。

松本雄一

2009 「カンパナユック・ルミとチャビン問題——チャビン相互作用圏の周縁からの視点」『古代アメリカ』12: 65-94.

2017 「ペルー南高地の神殿と権力生成:——「周縁」から見た形成期社会」『アンデス文明 神殿から読み取る権力の世界』関雄二(編)、pp. 403-432、臨川書店。

(欧文文献)

Bennett, Wendell C.

1944 The North Highlands of Peru: Excavations in the Callejon de Huaylas and at Chavin de Huantar, *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History* 39(1): 1-114.

Blanton, Richard E. & Gary M. Feinman

1984 The Mesoamerican World-System, *American Anthropologist* 86: 673-682.

Burger, Richard L.

- 1978 *The Prehistoric Occupation of Chavin, Ancash, in the Initial Period and Early Horizon*. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of California at Berkeley.
- 1981 The Radiocarbon Evidence for the Temporal Priority of Chavín de Huántar, *American Antiquity* 46(3): 592-602.
- 1983 Review of Symbols in Action: Ethnoarchaeological Studies of Material Culture, by Ian Hodder, *American Scientist* 71(3): 322.
- 1984 *The Prehistoric Occupation of Chavín de Huántar, Peru*. University of California Press.
- 1988 Unity and Heterogeneity within the Chavín Horizon. In R. W. Keatinge (ed.), *Peruvian Prehistory*, pp. 99-144. Cambridge University Press.
- 1989 El Horizonte Chavín: ¿Quimera estilística o metamorfosis socioeconómica?, *Revista Andina* 2: 543-573.
- 1992 *Chavín and the Origins of Andean Civilization*. Thames & Hudson.
- 1993 The Chavin Horizon: Stylistic Chimera or Socioeconomic Metamorphosis? In D. S. Rice (ed.), *Latin American Horizons*, pp. 41-82. *Dumbarton Oaks Research Library and Collection*.
- 1998 *Excavaciones en Chavín de Huántar*. Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.
- 2008 Chavín de Huántar and Its Sphere of Influence. In H. Silverman & W. H. Isbell (eds.), *Handbook of South American Archaeology*, pp. 681-703. Springer.
- 2012 Central Andean Language Expansion and the Chavín Sphere of Interaction. In P. Heggarty & D. Beresford-Jones (eds.), *Archaeology and Language in the Andes: A Cross-Disciplinary Exploration of Prehistory*, pp. 135-161. The British Academy & Oxford University Press.
- 2019 Understanding the Socioeconomic Trajectory of Chavín de Huántar: A New Radiocarbon Sequence and Its Wider Implications, *Latin American Antiquity* 30(2): 373-392.
- Burger, Richard L. & Ramiro Matos Mendieta  
2002 Atalla: A Center on the Periphery of the Chavín Horizon, *Latin American Antiquity* 13(2): 153-177.
- Burger, Richard L. & Lucy C. Salazar  
2008 The Manchay Culture and the Coastal Inspiration for Highland Chavín Civilization. In W. Conklin & J. Quilter (eds.), *Chavín: Art, Architecture and Culture* (Monograph 61), pp. 85-105. *Cotsen Institute of Archaeology, University of California*.
- Burger, Richard L., Lucy C. Salazar & Yuji Seki (eds.)  
2019 *Perspectives on Early Andean Civilization in Peru: Interaction, Authority, and Socioeconomic Organization during the First and Second Millennia BC*. Yale University Publications in Anthropology 94. Peabody Museum of Natural History, and the Department of Anthropology, Yale University.
- Caldwell, Joseph R.  
1964 Interaction Spheres in Prehistory. In J. R. Caldwell & R. L. Hall (eds.), *Hopewellian Studies*, pp. 133-143. *Illinois State Museum*.
- Carrión Cachot, Rebeca  
1948 La Cultura Chavín. Dos nuevas colonias: Kuntur Wasi y Ancón, *Revista del Museo Nacional de Antropología y Arqueología* 2(1): 99-172.
- Chase-Dunn, Christopher & Thomas D. Hall  
1997 *Rise and Demise: Comparing World-Systems*. Westview Press.
- Chicoine, David, Hugo Ikehara, Koichiro Shibata & Matthew Helmer  
2017 Territoriality, Monumentality, and Religion in Formative Period Nepeña, Coastal Ancash. In S. A. Rosenfield & S. L. Bautista (eds.), *Rituals of the Past: Prehispanic and Colonial Case Studies in Andean Archaeology*, pp. 123-149. *University Press of Colorado*.
- Church, Warren B.  
1996 *Prehistoric Cultural Development and Interregional Interaction in the Tropical Montane Forests of Peru*. Ph.D. Dissertation, Yale University, New Haven.

- Conkey, Margaret W.  
1990 Experimenting with Style in Archaeology: Some Historical and Theoretical Issues. In M. W. Conkey & C. A. Hastorf (eds.), *The Uses of Style in Archaeology*, pp. 5-17. Cambridge University Press.
- Cusick, James G. (ed.)  
1998 *Studies in Culture Contact: Interaction, Culture Change, and Archaeology* (Occasional Paper No. 25). Center for Archaeological Investigations, Southern Illinois University at Carbondale.
- Elera, Carlos G.  
1993 El complejo cultural Cupisnique: antecedentes y desarrollo de su ideología religiosa. In L. Millones & Y. Onuki (eds.), *El Mundo Ceremonial Andino* (Senri Ethnological Studies No. 37), pp. 229-257. National Museum of Ethnology.  
1997 Cupisnique y Salinar: algunas reflexiones preliminares. In E. Bonnier & H. Bischof (eds.), *Arqueologica Peruana 2: Arquitectura y Civilización en los Andes Prehispánicos*, pp. 176-201. Reiss-Museum.  
1998 *The Puemape Site and the Cupisnique Culture: A Case Study on the Origin and Development of Complex Society in the Central Andes, Peru*. Ph.D. Dissertation, University of Calgary, Calgary.
- Feinman, Gary M. & Joyce Marcus (eds.)  
1998 *Archaic States*. School for Advanced Research Press / University of New Mexico Press.
- Hall, Thomas. D., Nick P. Kardulias & Christopher Chase-Dunn  
2011 World-Systems Analysis and Archaeology: Continuing the Dialogue. *Journal of Archaeological Research* 3: 233-279.
- Hegmon, Michelle  
1992 Archaeological Research on Style. *Annual Review of Anthropology* 21: 517-536.  
1998 Technology, Style, and Social Practices: Archaeological Approaches. In M. T. Stark (ed.), *The Archaeology of Social Boundaries*, pp. 264-279. Smithsonian Institution Press.
- Inokuchi, Kinya  
1999 La cerámica de Kuntur Wasi y el problema Chavín. *Boletín de Arqueología PUCP* 2[1998]: 161-180.
- Izumi, Seiichi & Kazuo Terada (eds.)  
1972 *Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966*. University of Tokyo Press.
- Jennings, Justin  
2011 *Globalizations and the Ancient World*. Cambridge University Press.
- Kaulicke, Peter  
1994 *Los Orígenes de la Civilización Andina. Arqueología del Perú*. Historia General del Perú, tomo 1. Editorial Brasa.  
2015 Paracas y Chavín: variaciones sobre un tema longevo. *Boletín de Arqueología PUCP* 17[2013]: 263-289.  
2016 Las funciones de Chavín de Huántar, su impacto suprarregional y el problema lingüístico en los Andes centrales. *Revista Andina* 54: 153-168.
- Kembel, Silvia Rodríguez  
2001 *Architectural Sequence and Chronology at Chavín de Huántar, Peru*. Ph.D. dissertation, Department of Anthropological Sciences, Stanford University.  
2008 The Architecture at the Monumental Center of Chavín de Huántar: Sequence, Transformations, and Chronology. In W. Conklin & J. Quilter (eds.), *Chavín: Art, Architecture and Culture* (Monograph 61), pp. 35-81. Cotsen Institute of Archaeology, University of California.
- Kembel, Silvia Rodríguez & Herbert Haas  
2015 Radiocarbon Dates from the Monumental Architecture at Chavín de Huántar, Perú. *Journal of Archaeological Method and Theory* 22: 345-427.
- Kembel, Silvia Rodríguez & John W. Rick  
2004 Building Authority at Chavín de Huántar: Models of Social Organization and Development in the Initial Period and Early Horizon. In H. Silverman (ed.), *Andean Archaeology* (Blackwell Studies in Global Archaeology), pp. 51-76. Blackwell

Publishing.

- Kohl, Philip L.  
 1987 The Use and Abuse of World Systems Theory: The Case of the Pristine West *Asian State, Advances in Archeological Method and Theory* 11: 1-35.  
 2008 Shared Social Fields: Evolutionary Convergence in Prehistory and Contemporary Practice, *American Anthropologist* 110(4): 495-506.
- Kroeber, Alfred L.  
 1944 *Peruvian Archaeology in 1942*. Viking Fund Publications in Anthropology 4. Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research.
- Larco Hoyle, Rafael  
 1941 *Los Cupisniques*. Casa Editora La Crónica y Variedades.  
 1948 *Cronología Arqueológica del Norte del Perú*. Sociedad Geográfica Americana.
- Lumbreras, Luis G.  
 1971 Toward a re-evaluation of Chavín. In E. P. Benson (ed.), *Dumbarton Oaks Conference on Chavín*, pp. 1-28. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.  
 1989 *Chavín de Huántar en el Nacimiento de la Civilización Andina*. Instituto Andino de Estudios Arqueológicos.  
 1993 *Chavín de Huántar: Excavaciones en la Galería de las Ofrendas*. Materialien zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie, Band 51. Verlag Philipp von Zabern.
- Lumbreras, Luis G. & Hernan Amat Olazabal  
 1969[1965-66] Informe preliminar sobre las galerías interiores de Chavín (primera temporada de trabajo), *Revista del Museo Nacional* 34: 143-197.
- MacNeish, Richard S., Thomas C. Patterson & David L. Browman  
 1975 *The Central Peruvian Prehistoric Interaction Sphere*. Papers of the Robert S. Peabody Foundation for Archaeology, vol. 7. Robert S. Peabody Foundation for Archaeology, Phillips Academy.
- Matsumoto, Yuichi  
 2010 *The Prehistoric Ceremonial Center of Campanayuc Rumi: Interregional Interactions in the South-central Highlands of Peru*. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, Yale University.  
 2019 South of Chavín: Initial Period and Early Horizon Interregional Interactions between the Central Highlands and South Coast. In R. L. Burger, L. C. Salazar & Y. Seki (eds.), *Perspectives on Early Andean Civilization in Peru: Interaction, Authority, and Socioeconomic Organization during the First and Second Millennia BC* (Yale University Publications in Anthropology 94), pp. 173-188. Peabody Museum of Natural History, and the Department of Anthropology, Yale University.
- Matsumoto, Yuichi, Jason Nesbitt, Michael D. Glascock, Yuri Caverro Palomino & Richard L. Burger  
 2018 Interregional Obsidian Exchange during the late Initial Period and Early Horizon: New Perspectives from Campanayuc Rumi, *Latin American Antiquity* 29(1): 44-63.
- McIntosh, Roderick J.  
 2005 *Ancient Middle Niger: Urbanism and the Self-organizing Landscape*. Cambridge University Press.
- Menzel, Dorothy  
 1964 Style and Time in the Middle Horizon, *Ñawpa Pacha* 2: 1-105.  
 1976 *Pottery Style and Society in Ancient Peru: Art as a Mirror of History in the Ica Valley, 1350-1570*. University of California Press.
- Menzel, Dorothy, John H. Rowe & Lawrence E. Dawson  
 1964 *The Paracas Pottery of Ica: A Study in Style and Time* (University of California Publications in American Archaeology and Ethnology 50). University of California Press.
- Mesía M., Christian J.  
 2006 Julio C. Tello: Teoría y Practica en la Arqueología Andina, *Arqueología y*



- Sociedad* 17: 141-158.
- 2007 *Intrasite Spatial Organization at Chavín de Huántar during the Andean Formative: Three Dimensional Modeling, Stratigraphy and Ceramics*. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropological Sciences, Stanford University.
- Miller, George R. & Richard L. Burger  
1995 Our Father the Cayman, Our Dinner the Llama: Animal Utilization at Chavín de Huántar, Peru, *American Antiquity* 60(3): 421-458.
- Ochatoma Paravecino, José  
1985 *Jargam Pata de Huamanga: Investigaciones arqueológicas en un yacimiento Correspondiente al Horizonte Temprano*. Tesis de Bachiller, Facultad de Ciencias Sociales, Universidad Nacional de San Cristóbal de Huamanga, Ayacucho.  
1998 El período formativo en Ayacucho: balances y perspectivas, *Boletín de Arqueología PUCP* 1[1997]: 79-114.
- Onuki, Yoshio  
2002 Japanese Research on Andean Prehistory, *Japanese Review of Cultural Anthropology* 3: 57-78.
- Onuki, Yoshio (ed.)  
1995 *Kuntur Wasi y Cerro Blanco: Dos Sitios del Formativo en el Norte del Perú*. Hokusen-Sha.
- Phillips, Philip & Gordon R Willey  
1953 Method and Theory in American Archaeology: An Operational Basis for Culture-Historical Integration, *American Anthropologist* 55(5-1): 615-631.
- Pitts, Martin  
2008 Globalizing the Local in Roman Britain: An Anthropological Approach to Social Change, *Journal of Anthropological Archaeology* 27(4): 493-506.
- Pozorski, Thomas & Shelia Pozorski  
1993 Review: Chavín and the Origins of Andean Civilization, by Richard L. Burger, *Latin American Antiquity* 4(4): 389-390.
- Quilter, Jeffrey  
2008 Preface. In W. Conklin & J. Quilter (eds.), *Chavín: Art, Architecture and Culture* (Monograph 61), pp. xxiii-xxvi. Cotsen Institute of Archaeology, University of California.
- Ramón Joffré, Gabriel  
2005 Periodificación en Arqueología peruana: geología y aporía, *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 34(1): 5-33.
- Renfrew, Colin  
1986 Introduction: Peer Polity Interaction and Socio-political Change. In C. Renfrew & J. F. Cherry (eds.), *Peer Polity Interaction and Socio-political Change*, pp. 1-18. Cambridge University Press.
- Renfrew, Colin & John F. Cherry (eds.)  
1986 *Peer Polity Interaction and Socio-political Change*. Cambridge University Press.
- Rice, Don Stephen  
1993 The Making of Latin American Horizons: An Introduction to the Volume. In D. S. Rice (ed.), *Latin American Horizons*, pp. 1-13. *Dumbarton Oaks Research Library and Collection*.
- Rick, John W.  
1980 *Prehistoric Hunters of the High Andes*. Academic Press.  
2005 The Evolution of Authority and Power at Chavín de Huántar, Peru. In K. J. Vaughn, D. Ogburn & C. A. Conlee (eds.), *Foundations of Power in the Prehispanic Andes* (Archaeological Papers of the American Anthropological Association, Number 14), pp. 71-89. University of California Press.  
2008 Context, Construction, and Ritual in the Development of Authority at Chavín de Huántar. In W. Conklin & J. Quilter (eds.), *Chavín: Art, Architecture and Culture* (Monograph 61), pp. 3-34. Cotsen Institute of Archaeology, University of California.  
2014 Cambio y continuidad, diversidad y coherencia: Perspectivas sobre variabilidad en Chavín de Huántar y el Período Formativo. In Y. Seki (ed.), *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas*

- Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo* (Senri Ethnological Studies 89), pp. 261-290. Museo Nacional de Etnología.
- Rick, John W., Christian Mesia, Daniel Contreras, Silvia R. Kembel, Rosa M. Rick, Matthew Sayre & John Wolf  
 2010 La cronología de Chavín de Huántar y sus implicancias para el Periodo Formativo, *Boletín de Arqueología PUCP* 13[2009]: 87-132.
- Rowe, John Howland  
 1956 Archaeological Explorations in Southern Peru, 1954-1955, *American Antiquity* 22(2): 135-151.  
 1962 Stages and Periods in Archaeological Interpretation, *Southwestern Journal of Anthropology* 18(1): 40-54.  
 1967a[1966] An Interpretation of Radiocarbon Measurements on Archaeological Samples from Peru. In J. H. Rowe & D. Menzel (eds.), *Peruvian Archaeology: Selected Readings*, pp. 16-30. Peek Publications.  
 1967b[1962] Form and Meaning in Chavin Art. In J. H. Rowe & D. Menzel (eds.), *Peruvian Archaeology: Selected Readings*, pp. 72-103. Peek Publications.
- Schneider, Jane  
 1977 Was There a Pre-capitalist World-system?, *Peasant Studies* 6: 20-29.
- Schortman, Edward M. & Patricia A. Urban (eds.)  
 1992 *Resources, Power, and Interregional Interaction*. Plenum Press.
- Shady Solís, Ruth  
 2014 La civilización Caral: Paisaje cultural y sistema social. In Y. Seki (ed.), *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo* (Senri Ethnological Studies 89), pp. 51-103. Museo Nacional de Etnología.
- Shibata, Koichiro  
 2010 El sitio de Cerro Blanco de Nepeña dentro de la dinámica interactiva del Periodo Formativo, *Boletín de Arqueología PUCP* 12[2008]: 287-315.  
 2014 Centro de "Reorganización costeña" durante el Período Formativo Tardío: Un ensayo sobre la competencia faccional en el valle bajo de Nepeña, costa nor-central peruana. In Y. Seki (ed.), *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo* (Senri Ethnological Studies 89), pp. 245-260. Museo Nacional de Etnología.
- Silva, Jorge Elias  
 1978 *Chavín de Huántar: un complejo multifuncional* (Series Investigaciones, No. 1). Gabinete de Arqueología, Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
- Silverman, Helaine  
 1996 The Formative Period on the South Coast of Peru: A Critical Review, *Journal of World Prehistory* 10(2): 95-146.
- Spicer, Edward H.  
 1961 Types of Contact and Processes of Change. In E. H. Spicer (ed.), *Perspectives in American Indian Culture Change*, pp. 517-544. University of Chicago Press.
- Tello, Julio C.  
 1943 Discovery of the Chavín culture in Peru, *American Antiquity* 9(1): 135-160.  
 1960 *Chavín: Cultura Matriz de la Civilización Andina*. Publicación Antropológica del Archivo "Julio C. Tello" de la Universidad Nacional Mayor de San Marcos, volumen II. Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
- Trigger, Bruce G.  
 2004 *Understanding Early Civilizations*. Cambridge University Press.
- Wallerstein, Immanuel  
 1974 *The Modern World System I. Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy in the Sixteenth Century*. Academic Press.  
 1993 World Systems versus World System: A Critique. In A. G. Frank & B. K. Gills (eds.), *The World System: Five Hundred Years or Five Thousand?*, pp. 292-296. Routledge.
- Uhle, Max  
 1902 Types of Culture in Peru, *American Anthropologist* 4(4): 753-759.

- Willey, Gordon R.
- 1945 Horizon Styles and Pottery Traditions in Peruvian Archaeology, *American Antiquity* 11(1): 49-56.
- 1948 A Functional Analysis of "Horizon Styles" in Peruvian Archaeology. In W. C. Bennett (ed.), *A Reappraisal of Peruvian Archaeology* (Memoirs of the Society for American Archaeology 4), pp. 8-15. Society for American Archaeology and the Institute of Andean Research.
- 1951 The Chavín Problem: A Review and Critique, *Southwestern Journal of Anthropology* 7(2): 103-144.
- 1962 The Early Great Styles and the Rise of the Pre-Columbian Civilizations, *American Anthropologist* 64(1): 1-14.
- Willey, Gordon R. & Philip Phillips
- 1958 *Method and Theory in American Archaeology*. University of Chicago Press.
- Wolf, Eric R.
- 1984 Culture: Panacea or Problem?, *American Antiquity* 49(2): 393-400.
- Young, Michelle E.
- 2017 De la Montaña al Mar: Intercambio entre la sierra centro-sur y la costa sur en el periodo Horizonte Temprano, *Boletín de Arqueología PUCP* 22: 9-34.

# Issues of Locality in the Study of the Andean Civilization:

## Perspectives from a Study History of the Chavín Problem

Yuichi MATSUMOTO\*

For the purpose of understanding the issues of locality in Andean archaeology, this article focuses on the study history of the Chavín problem, which continues to be one of the most important themes for more than half a century. From the time of Julio C. Tello and Rafael Larco Hoyle, the focus of the Chavín Problem has swung between the two poles of pan-regional uniformity and regional variability. These perspectives repeatedly emerged in intertwined ways in relation to the advance of archaeological researches and theoretical trends of the time. This article reviews the study history through a historiographic approach and intends to contextualize recent studies in a broader academic context. Through the synthesis of the multiple ideas that emerged in the study history, possible productive directions for future research are explored.

### **Keywords:**

Andean civilization, Formative period, Chavín problem, study history, locality

\*Yamagata University

# 首都と地方社会

— 古代アンデス諸国家における在地性について —

渡部 森哉 \*

中央アンデス地帯では、前 3000 年頃から神殿建設が始まった。神殿建設と神殿の更新は約 3000 年間続き、その後、後 1 世紀頃にアンデスの初期国家モチェが成立した。先スペイン期最終期に台頭したインカ帝国においては、地方統治のために地方行政センターが各地に設置された。行政センターは、首都クスコと共通する特徴を有するが、同時に各遺跡の独自性も目立つ。

本論文では、インカ帝国とワリ帝国を事例として、地方にローカル性がどのように現れるかを考察する。中央からの一方向的な支配を否定し、地方社会の主体性を認める研究者は、地方独自の、つまりローカルな特徴に目を向けがちである。しかし地方に現れるローカル性には、中央が意図的に残した、あるいは造り上げた結果という場合もある。ローカル性は関係性を捉える概念であり、中央と地方を対立的にのみ捉えるべきではない。

## KeyWords

首都  
地方支配  
インカ  
ワリ  
土器

## 目次

- I はじめに
- II ローカルとは何か
- III インカ帝国の首都
  - 1. クスコ
  - 2. 中央の拡大
- IV アンデスにおける人と場、境界
- V インカ帝国の民族集団
- VI ローカル性のレベル
- VII ワリ帝国
- VIII おわりに

# I はじめに

南米大陸西部のアンデス地方はアメリカ大陸最古の古代文明が興った場所として知られる。神殿を中心とした社会は紀元前 3000 年頃から約 3000 年間続いたが、その間に王が統治する国家と認定できる社会は成立しなかった。この神殿を中心として社会がまとまっていた社会の時代を形成期（前 3000-50 年）と呼ぶ。形成期の間に、神殿は場所を変えつつも建設され、更新が続けられた（渡部 2019）。

アンデスにおける初期国家が成立したのは、紀元後 1 世紀頃とされる。アンデスの初期国家と認定されるのは、ペルー北海岸に発展したモチェと呼ばれる社会である。その後、海岸地帯、あるいは山間盆地を中心としたいくつかの国が盛衰を繰り返した。先スペイン期最後にインカ帝国が台頭したが、1533 年にはフランシスコ・ピサロ率いるスペイン人一向が首都クスコに入城し、滅亡したとされる。

本論文は、紀元後 1 世紀から 16 世紀まで発展した古代アンデスの諸国家のうちインカとワリの 2 つを事例として、国家社会における中央（首都）と地方の関係に着目し、アンデスの国家社会における地方のローカル性の特徴を考察することを目的とする。ローカルを局所的な特徴とすれば、理論上は首都など中央の特徴に関してもローカルな場合がある。ただし、アンデス研究ではこれまでローカルという概念は、首都ではない地方の特徴を説明するのに主に使われてきた。本論文では、地方に現れるローカル性に焦点を当て、それと中央との関係を考察する。国家社会を対象とする場合、中央の特徴と違うものが認められると、ローカルとってしまう傾向があり、ローカル性を厳密に議論してきたわけではない。本論文は、考古学における先行研究を踏まえ、アンデスの特徴の検討から、ローカル性の議論をいくつかのレベルに分けて整理し、改善することを目的とする。

アンデスで国家社会と認定されるのは、新しい方から、インカ（後 15-16 世紀）、チムー（後 14-15 世紀）、シカン（後 11-13 世紀）、ワリ（後 8-10 世紀）、ティワナク（後 8-11 世紀）、そしてモチェ（後 1-8 世紀）の 6 つの社会である。それ以外の社会については国家であるかどうかについて意見の一致を見ない。例えば形成期に建設された神殿を中心とした社会を国家と見なす研究者もいるが、多くの研究者は形成期の神殿社会を国家とは認定していない（渡部 2019）。

以下でははじめに、アンデスにおけるローカル性を論じるための基本的な情報についてまとめ、その後、具体例を論じる。取り上げるのは、アンデス文明の集大成として見なされるインカ帝国（図1）、およびその祖型と見なされるワリ帝国（図2）である。まずインカ帝国の首都クスコと地方との関係に着目し、アンデスにおける人間と場所の関係について論じる。そして地方に現れるローカル性の特徴を考察するため、インカ帝国の支配下の民族集団に着目する。その後、ローカルと呼ばれる現象には様々なレベルがあり、それらを類型化する必要性を論じる。次にワリ帝国の事例を扱うが、そのためにインカ帝国を参照枠として、それと対照させながら、中央と地方の関係性を論じる。インカとワリに共通の特徴を抽出すると同時に、各国家の個別的なローカル性の特徴について論じる。

## II ローカルとは何か

まずローカルという概念について考えてみたい。文化人類学や哲学においては在来知、ローカル・ノレッジという概念に関する先行研究がある（ギアツ 1991[1983]; 藤垣 2008; 中空 2019）。そうした研究においては、近代的な科学知と対立するものとして、説明され、科学知にもローカル性が認められるという指摘がされている。

文化人類学などでは、ローカルはグローバルと対比され用いられる概念であり、グローバリゼーションとローカリゼーション（ローカライゼーション）が図式的に用いられる。しかし、考古学ではグローバルという概念が用いられること自体が少ないため、ローカル性がグローバル性と対比的に論じられることはあまりなかった。ローカルという考え方が用いられるのは、主に中央と地方の関係性の記述においてである。そうした中、考古学者ジャスティン・ジェニングス（Jennings 2011）は、文明やホライズン（後述）という概念の代替案としてグローバリゼーションという概念の導入を提案した<sup>1</sup>。つまりローカル性と対比させるための概念としてではなく、広範囲に共通の文化要素が広まる現象を説明する概念として、考古学における新たな選択肢として示した。グローバリゼーションの事例として西アジアのウルク、北米のカホキア、アンデスのワリが取り上げ

\* 南山大学

1 また、同様に世界システム論も 1980 年代から考古学に応用されている（Chase-Dann & Hall 1997）。

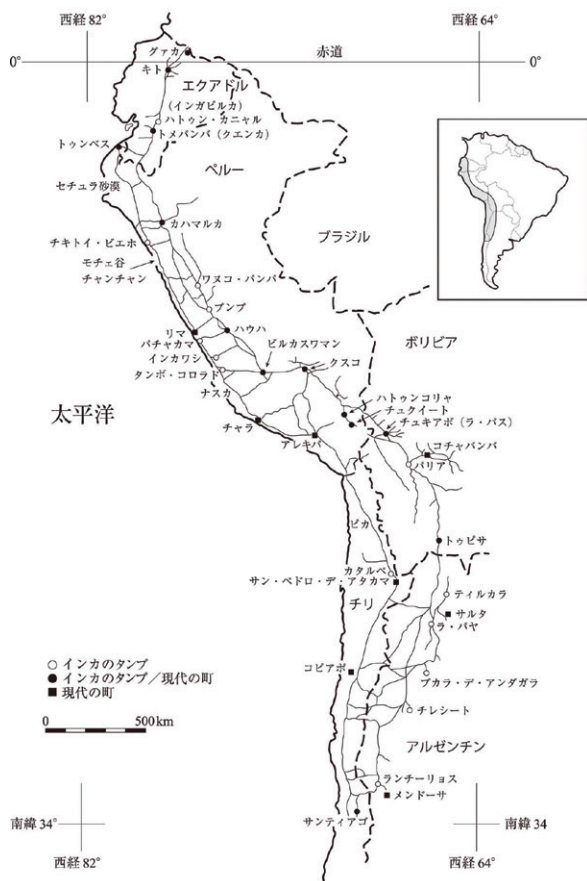


図1 インカ帝国の行政センターとインカ道  
(渡部 2010)

られている。

これまでインカ研究、ワリ研究では、グローバルとローカルを対比させる議論に平行するように、中央の介在を認め一枚岩的に国の特徴を論じるか、あるいは地方の主体性、エージェンシーを認めローカルな特徴を強調する議論か、そのどちらかにぶれる傾向が強かった(Jennings [ed.] 2010; Malpass [ed.] 1993; Malpass & Alconini [eds.] 2010)。グローバルゼーションという考え方には、特定の中心が想定されない場合も、グローバルな現象を直接的、間接的に中心・中央と結びつける場合もある(Jennings 2010, 2011)。本論文は後者を扱うが、中央による統治と在地の動きを対比的に論じる従来の考古学の議論の延長上に位置づけられる。

考古学では大規模な遺跡をセンターと呼び、その性格によって例えば祭祀センター、行政センター、などと呼称する。あるセンターに存在する特徴が地理的に離れた他のセンターにも認められる場合、それは広範囲に認められる証拠とされローカルな特徴とはみなされず、逆に単独あるいは近接した諸センターに分布が限定されればローカルな特徴と認定される。広範囲に同一の文化要素が認められる場合として、インカやワリのように1つの巨大な中央(首都)から要素が広がる場合もあるし、形成期のように対象範囲内に大規模遺跡(神



図2 ワリ帝国の関連遺跡

殿)が複数含まれる場合もある。

国家などの大規模社会では、中心である首都に存在する特徴が基準とされる。地方において中央の特徴が見つければ、それはローカルな特徴とは見なされない。ローカルは、在地的、土着的、局地的、などと訳されるが、要するに地方にはあるが、中心とは異なる特徴を説明するのに用いられる、相違点に着目した概念である。従って、中央の特徴を把握しなければ、ローカルの特徴を説明することはできない。ただし、局地的な現象としてローカルを捉えれば、首都についてもローカルと表現することもできる。中央の特徴が地方に認められない、広まっていないという場合もあり、それを中央のローカル性と説明することもできる。例えばインカ帝国の首都クスコにしか見られない場合は、クスコのローカルな特徴となる。

本論で扱うのは地方におけるローカル性であるが、それは中央の特徴のローカル性を論じることにも繋がる。つまり中央の要素がない、薄い場合がローカルな現象とされるが、逆に中央に着目する場合、それが地方に認められなければ、中央のローカルな現象となる。またローカルといった場合、遺跡ごとではなく、ある程度の地理的範囲を対象とする。単独の遺跡、単独の墓にのみ認められる特徴がローカルと認定されることはない。

ローカル性と対置されるのは、同一の特徴が広範囲に広がる現象である。アメリカ大陸の考古学ではホライズンという

概念が用いられるが、それは主に国家などの大規模社会の拡張、あるいは形成期の神殿のネットワークにより共通の特徴が短期間に広まったことを示す概念である(本号の松本論文参照)。アメリカ合衆国の考古学者ジョン・H・ロウはチャビン、ワリ、インカの3つの時期をホライズン期と設定し、それらの間の時期を「中間期」とする編年を提唱した(Rowe 1962; Rowe & Menzel [eds.] 1967)。大まかな年代は次のようであった<sup>2</sup>。

現在ではこの編年が、年代を修正しつつ、アメリカ合衆国のアンデス考古学者の間で一般的に使用されている。3つのホライズン以外にもネガティブ・ホライズン、赤地白彩ホライズンなど同一の特徴の土器が広まる現象を説明す

	Rowe 1962	現在主に用いられる年代
後期ホライズン	後 1450-1532 年	後 1450-1532 年
後期中間期	後 900-1450 年	後 1000-1450 年
中期ホライズン	後 550-900 年	後 600-1000 年
前期中間期	前 400- 後 550 年	前 400- 後 600 年
前期ホライズン	前 1400-400 年	前 800-400 年
草創期	前 2100-1400 年	前 1500-800 年
先土器時代	前 2100 年以前	前 1500 年以前

るのにもホライズン概念は使用された(ウィリー & サプロフ 1979[1974]: 264)。ホライズン概念は同時代性に着目した概念であり、理想的には同一の特徴が時期差を伴って広まる場合には使用されないが、実際には短期間と言っても数十年、あるいは100年以上の時間幅を指して用いられている。一方「中間期」は、地方的な、つまりローカルな特徴が強い時代と言える。そして、広範囲に同一様式が広まり社会間関係が拡張する時期と、内向的な発達の時代が交互に現れるパターンがアンデスの特徴として強調される<sup>3</sup> (Willey 1991)。

本論文で扱うインカ帝国は後期ホライズン期に、ワリ帝国は中期ホライズン期に台頭した(前期ホライズンについては本号の松本論文を参照)。ホライズンの中にもローカル性があり、共通性に重きを置くか、あるいは個別性に着目するかで、その時代の見方は異なる。各ホライズンにおける中心は明確であり、インカにおいては首都クスコ、ワリ帝国においては首都ワリ遺跡の特徴が基準とされる。そして首都と比較した際

に、それとの違いに応じてローカル性が定義され、説明される。ローカル性が中心との比較で説明される以上、まずアンデスにおける中心性とは何かを考察し、その後、ローカル性を考えるという手順で議論するのが建設的であろう。

地球規模で人、物、情報が行き交う現代社会におけるローカル性を考えることと、古代国家におけるローカル性を分析することは規模、性格が異なる。現代社会を対象とする場合、グローバリゼーションの逆の動きとしてローカルな現象の強化を捉えることもできるが、本論文で扱うのはあくまで古代社会、それも国家社会内のローカル性であり、中心との関係に着目し、静態的な分析を行う。古代社会におけるローカル化の動き自体を論じる通時的分析は次のステップの課題となろう<sup>4</sup>。近代世界システムというモデルで説明されたのは(ウォーラーステイン 1981[1974])、その原動力となる中心が1つ、あるいは複数ある場合である。ローカル性を中央との関係で考えるか、グローバル現象との関係で捉えるかは、排他的な関係ではない。

インカ研究やワリ研究では、帝国を一枚岩のものとして捉える傾向が強かったが、1990年代から各地の多様性を認めるという研究が目立つようになってきた(Jennings 2006a, 2006b; Lau 2005; Malpass [ed.] 1993)。その場合に用いられる概念が、エージェンシー、在地性(ローカル性)などである。中央と地方の間には不均衡な関係が想定され、ローカルな現象を、中央への反発、対応として捉えられる場合が多い。また中央と地方と言っても、地方に同じように中央との関係を示す証拠が現れることはなく、中央との距離などに連動しグラデーションを伴った関係となる(Stein 1998)。そのため在地性が強く現れるのは、地方に首都に匹敵するだけの力がある場合というわけではない。中央からの距離の他、地方それぞれの状況から、首都との関係を考える必要がある。

ではまずインカ帝国のクスコの例を見てみよう。その際、ローカルの特徴の1つである場所の意味についても考える。もちろん対象となる人々の立ち位置と場所を捉えれば、それは空間に固定されていない場合もあろう。ただし、今回扱う対象は特定の場所に位置している遺跡であるため、空間的に固定されている事例のローカル性について考える。

2 バルや日本のアンデス研究者は別の編年を用いる。古期(前 5000-3000 年)、形成期(前 3000-50 年)、地方発展期(前 50- 後 600 年)、ワリ帝国期(後 600-1000 年)、地方王国期(後 1000-1450 年)、インカ帝国期(後 1450-1532 年)、という編年である。

3 メソアメリカでも外交的な動きと内向的な動きを対置するデュアル・プロセス理論と呼ばれる議論がある(Blanton et al. 1996)。

4 「振り子モデル」に関しては渡部 2010 を参照。



# Ⅲ インカ帝国の首都

## 1. クスコ

そもそも首都という概念は西洋的な概念である。スペイン語で首都を表す Capital という単語をスペイン語=ケチュア語の辞書で引いても出てこない。街を意味するスペイン語 ciudad は、カパックリヤクタ (Kapakllakta) と訳されている (González Holguín 1989[1608]: 470)。カパック (Kapak) とリヤクタ (llacta) が一緒になっている。カパック (Kapak, capac) はインカの王族の称号である。キャサリン・ジュリアンは、インカにおけるカパックはヨーロッパの王という役割よりも重要であったと考えている (Julien 2000)。インカ族の中でも限られた人物がカパックと呼ばれたのである。リヤクタ (llacta) は「pueblo 村」と訳される (González Holguín 1989[1608]: 207)。カパックは王族を示すため、まず Kapakllacta (ciudad) は人にまつわる概念であると理解できる。それは、非常に政治的理由によって建設された東アジア的な都市と類似している部分である (藤本 2007)。また、カパックと「家、建物」を意味する「ワシ huasi」が一緒になった単語 Kapac huaci を引くと、「Cassa rreal grande (王族の大きな館)」と説明されている (González Holguín 1989[1608]: 135)。やはり建物そのものではなく、人に関連するという特徴がある。

以上を踏まえるとインカ帝国における町は、ある意味で人間的な概念であると言える。アンデス史研究者スーザン・ラミーレスは、インカ帝国を中世ヨーロッパの「イティネラリー・コート (移動する王宮; Itinerary court)」をモデルとして解釈する (Ramírez 2005)。それは、インカ王ワスカが「クスコ」、同じくインカ王ワイナ・カパックが「老クスコ」と呼ばれたことから推定した解釈である。つまりクスコとは役職を示す単語であり、その人物がいる場所がインカ帝国の首都クスコの名称にもなっているという。しかし、別稿で論じたように (渡部 2007)、クスコは「フクロウが留まった岩 cuzco guanca」の略であり (Cerrón-Palomino 2005: 12)、場所に密着した概念である。クスコという場所を統治する王のこともクスコと呼んだと解釈の方が整合的である。「街 (Ciudad)」に対応するケチュア語カパック・リヤクタは、カパックという重要な身分と結びついた概念であるが、場所が先にあり、それが特定の人に結びついたと考えられる。クスコをはじめとするアンデスのリヤクタは、一義的に人間中心的概念ではなく、場所を示す、さ

らに言うならば、後述するようにワカという聖なるものと関連した概念と言えよう。

場所が人と結びついた性格を有するため、ローカル性は場所の違いだけではなく、人の違いを示すと想定できる。しかしアンデスのセンターの位置は、中国の王朝の首都や日本の都のように (藤本 2007)、政治的要因によって、支配者によって一義的に決められるわけではない。考えなければならないのはワカを中心とした信仰についてである。マコフスキも西洋の都市が人間中心であるのに対し、アンデスの都市はコスモロジーを中心としていると論じている (マコフスキ 2012)。

## 2. 中央の拡大

考古学における国家の判定基準の1つとして、4段階にわたる階層性が挙げられる (Isbell & Schreiber 1978; Wright & Jonson 1975)。アンデスの国家の場合、第1レベルと第2レベルの間の差が大きく、さらに中央が拡大を続けるという特徴がある。さらに、インカの場合、中央のクスコの特徴を地方に移植するという方策がとられたようである。それは「別のクスコ」と呼ばれる場所のことである (渡部 2014)。

クスコは本来場所を意味する名称であったが、人を表すのにも使用された。日本でも出身地で人間を表すことはあるが、それと類似している。そしてインカの場合、首都クスコが基準となり、地方に「別のクスコ (もう1つのクスコ)」と呼ばれる場所が造られた。それは理念的にクスコをコピーしたものと想定されるが、その規模は首都に比べて小さい。史料から確認できる別のクスコは、北からキト、トメバンバ、ワヌコ・バンバ、ハトゥンコリヤ、チャルカス、の5つである (Guaman Poma 1987[ca.1615]: 185[187])。さらにペルー南海岸のカニエテ川に「新しいクスコ」が設置されたとされ (シエサ・デ・レオン 2006[1553]: 321, 2007: 401)、それは現在のインカワシ遺跡と同定されている (図1)。

「別のクスコ」「新しいクスコ」はケチュア語でタンブと呼ばれる一連の遺跡の中に含まれる。タンブとは考古学で行政センターと呼ばれる遺跡で、インカ道の途中に配置された。逆に説明をすれば、タンブを繋いでインカ道が走っている。そしてそこは人が恒常的に住むような場所ではなかった。譬えて説明すればイベント会場と倉庫と会社と一緒にあったような機能を備えた場であった。従って、それらは首都クスコの機能の一部を切り取って造られたものであり、理念的には「別のクスコ」「新しいクスコ」は首都の一部を写し取った場と言えるだろう。首都が単独で存在したのではなく、複数に分かれ互いに繋がれるように網目状に存在したと比喩的に説明も

できよう。クスコを1枚の織物に譬えれば、行政センターは編み目の中の糸と糸が交差する点に位置するのである。

行政センターは在地の人々が主体となって建設した場ではなく、帝国(中央)の統治のために設置された場である。この解釈を支持する状況証拠として、これらの遺跡がインカ帝国征服後に全て放棄されたということが挙げられる。行政センターの動きは中央の動きと直結しており、それと連動する。そしてこうした網のような構造が首都の特徴とすれば、網で掬って(網を取り外して)残った部分が在地のものであると言える。

インカ帝国のクスコのように、中央、首都が拡大し続けること、かつ首都とその次のレベルの遺跡間格差が大きいという点はアンデスの国家の特徴である。クスコが人を指すとしても、そして別のクスコが複数あるとしても、首都クスコがどこかであるかは、その規模と荘厳さから明らかである。こうした中央が拡大し続け、首都が際立って大きいという特徴はアンデスの他の国家にも共通する。そしてその始まりはアンデス形成期まで遡る。形成期の神殿社会の例では、神殿が巨大化する一方で、それらを支えた人々の集落、住居があまりはつきりしないという特徴がある(渡部 2019)。

行政センターの建設はむしろ中央の特徴を表すとすれば、地方のローカル性とはどこに現れるのであろうか。まず諸行政センター間で異なる建築の特徴、土器の特徴に認められる。そしてもっと直接的には、地方のローカル性は行政センターの外側、道路から離れたところに位置する遺跡などに認められる。行政センターの外側にはほとんどインカ文化の要素が認められない場合もあり、例えばペルー北部高地カハマルカ地方では、行政センターとインカ道を除けば、インカ文化の遺構や遺物をほとんど見つけることはできない。複数のチームが遺跡分布調査を広範囲に行ったが、インカ様式土器が分布する遺跡は極めて少ない<sup>5</sup>(Julien 1988; Reichlen & Reichlen 1949; Seki *et al.* 2001, 2002, 2003)。後期ホライズンに対応するインカ期の証拠であれば、広範囲に広まったのであるから、同定が容易であるかというところではなく、むしろ状況は逆である。インカ帝国の地方では、まずインカ期の遺跡であるかどうかの判定が難しい。ホライズン期にはインカ文化やワリ文化の証拠は特定の点に

集中するため、そこを外すと見つけることは困難である<sup>6</sup>。そしてインカ期のコンテキストでインカ様式ではないものが現れると、ローカルな特徴と認定される。カハマルカ地方を事例とすれば、インカ期にも製作が続けられたアモシュルカ・コンプレックス(Amoshulca Complex)の土器製作がその例である(渡部 2010)。

以上を踏まえた上で、次節で、アンデスにおける空間と人間の関係を整理する。アンデスにおける場の意味を考えたい。

## IV アンデスにおける人と場、境界

まずリヤクタの意味を掘り下げて考えてみたい。街(カパック・リヤクタ)を構成するリヤクタとは、ワカとそれを奉じる人々、という意味である(Salomon 1991: 23)。ワカとは、アンデスで信仰の対象となる物体の総称である(Bray [ed.] 2015; Meddens *et al.* [eds.] 2014)。一義的には自然の中にある聖なる物体のことをであるが、そこから敷衍して、移動可能な聖なる物体、遺跡、ミイラなどもワカと呼ばれる。ワカは自然の地形であるが、例えば岩、川の合流点などがワカと認識される。インカ帝国の首都クスコもワタナイ川(サブヒ川)とトゥリュマヨ川の合流点に建設された。また各共同体は、祖先が出てきたと信じる特定のワカを有していた。そうした共同体の始原の場であるワカをパカリナと呼んだ(アリアーガ 1984[1602]: 401)。パカリナは共同体の中心、起源の地であり、その場所が移動することは想定されない。このように人間が場所に結びついている。

先スペイン期最後のインカ帝国の時代になっても、我々が現在使用するような面積情報を伴う地図(topographical map)は使用されなかった。つまり空間が面的に認識され、広さを持ち、境界線で区切られるとは考えられなかった。どのように認識されていたかという、トポロジカル・マップ(topological map)、つまり点の連続性として認識された

5 レシュレンらはカハマルカ、バーニョス・デル・インカ、パソ・デ・シャウリュ、ヤモバンバ、タンボ・デ・オトゥスコの5つをインカ文化の遺跡としてあげているが(Reichlen & Reichlen 1949)、タンボ・デ・オトゥスコはワリ期の遺跡であり現在エル・バラシオと呼ばれている。またヤモバンバもワリ期と考えられていた(Watanabe 2002)。インカ期の遺物が確認できたのはジュリアンの調査では115遺跡中3遺跡(Julien 1988: 115, 168)、関らによる調査でも247遺跡中4遺跡のみである(Seki *et al.* 2001, 2002, 2003)。

6 ただし調査の進展に伴いインカ期のより多くの指標、証拠が見つかりつつある(Malpass & Alconini [eds.] 2010)。

(渡部 2007: 106)。ある地点と別の地点の2点間関係が連続的に繋がっていく空間認識である。現代でいえば、鉄道の路線図が例としてあげられる。そしてインカの場合、紐を用いた記録道具キープを用いて、紐の結び目と空間認識を対応させていた可能性もある。

アンデスにおいても面的な空間認識があったと考える研究者もいる。しかし、それは線で区切られる空間ではなく、点の密度が濃くなることで結果的に面に近い状態として認識されると考えた方が適切である。確かにアンデスにはスペイン語でモホンと呼ばれる、境界の石としてしばしば説明される物体があった。しかし、モホンは境界そのものではなく、モニュメントのような物体として考えた方がより適切である(Crickmay 2006: 73; Kumai 2002; 渡部 2007)。対応するケチュア語は、サイワ(sayhua)である。史料を読み解くと、モホン/サイワの一部はワカと同様の特徴を有しており、境界というよりも1つの基準点を示している。つまり境界ではなくむしろ中心性を示している。

こうした点の集合による空間認識を典型的に示しているのが、首都クスコのセケ体系である(Bauer 1998; Cobo 1964[1653]; Zuidema 1964)。クスコの中心である太陽の神殿から延びる想像上の放射線がセケであり、セケは周囲に分布するワカを結んだ線であった。クスコの空間認識の枠組は、ワカとセケを基準としていた。イエズス会士ベルナベ・コボの記録文書(Cobo 1964[1653])の中に写されたセケ・リストには328のワカが登録されているが、そのうち96(29%)が泉で、95(29%)が石であった(Bauer 2018: 490; Christie 2018: 498)。それらに続き、丘や峠が28(9%)、建物が28(9%)、畑や平原が28(9%)、墓が10(3%)、溪谷が7(2%)、などがあった。道も2(1%)ある。

クスコの空間は面的にはではなく、点の集合として認識された。そして中心となるコリカンチャ(黄金の囲い)あるいは太陽の神殿と呼ばれる建物から一番遠いワカがそれぞれのセケ上にあった。しかしながら、一番遠いワカをそれぞれ結んで線を引くという空間認識はなかった。さらにそれぞれのセケ上にあるワカの管轄、所属は明示されているが、セケとセケの間には帰属が明示されない空間があった。

インカ帝国はケチュア語で、タワンティンスユと呼ばれ、それは「4つのスユが一緒になった」、を意味した。インカ帝国はチンチャイスユ、アンティスユ、コリヤスユ、クンティスユの4つから成り、クスコ内部も4つのスユに分かれていた

(Pärssinen 1992; 渡部 2010)。セケは4つのスユのいずれかに属し、セケとセケの間の空間は両側のセケと同じいずれかのスユに属していたと考えることはできる。スユとは「部分」を意味し(González Holguín 1989[1609]: 333; Santo Tomás 1951[1560]: 353)、ワカ、セケ、人間集団がいずれかのスユに属した。空間が線によって4つに分けられるということではない。

次に空間概念をより掘り下げて考えるため、土地の概念を取り上げたい。アンデスにおいては土地の所有権というものはなく、あるのは用益権であった(Ramírez 1996)。土地はワカのある場、あるいはワカそのものであるから、それを人間が所有するということは、あり得なかったのである。人間はあくまでそこを使用し、労働力を投下して栽培した作物や飼育した家畜を所有するのみであった。そして誰も使用していない土地は、他の集団が使用することができた。これはジョン・ムラが垂直列島というモデルを提示した時に示したポイントの1つと関係する(Murra 1972)。

アンデスでは高度差によってめまぐるしく環境が変化するため、同一集団が複数の環境帯を多角的に利用することができた。そのため異なる環境帯に生活する集団間での物々交換は発達しなかった。アンデスでは生活必需品に関しては、交易に頼らなかった。そのため貨幣も生み出されることはなく、市場や商人も存在しなかった。つまりアンデスの人々は基本的に自給自足経済を志向した<sup>7</sup>。その1つの表れが垂直列島という飛び地の形態である。それは例えば中核となる高地から、おなじ集団の一部を遠隔地に送りこみ、高地という環境では栽培、獲得できない物資を入手するという方法である。人々を送り込む先の遠隔地は、中央部とは不連続の飛び地という形態をとり、そこでは複数の集団が共存する。飛び地では複数の集団が隣接することになり、複数の中央のものと同様に推定される特徴が認められることになり、モザイク状の人間集団の分布が想定できる。アンデスのローカル性を論じる際には、この点を留意する必要がある。つまり、ある一定面積の地域ごとに人々がまとまり、そこに固定されて、つまり長期間にわたって生活していたわけではない。飛び地は中央と結びついた、あるいは中央の一部と見なされ、異なる集団の飛び地が1つの地域内に併存する。そのため、ある範囲内には複数の集団が共存するのである。「別のクスコ」もこの垂直列島の飛び地と類似した原理に従っている。

仮に地方に生活する人々が、土着の人々と認定できるぐら

7 ただし黒曜石やスポンディルス貝など遠隔地から運び込まれた物資も存在する。儀礼に関わる物資が広範囲に分布するという一般的な傾向が認められるが、それがどのようなメカニズムによるかは明らかになっていない。

い、ある程度の期間にわたって同じ場所にいたのであれば、中央と地方の区分はしやすいであろう。ところが、インカ帝国の場合、人間集団を頻繁に移動させた。そのため、地方のセンターにおいてもその場で活動していた人々が必ずしも土着の人々であるわけではない。そうした保留条件を踏まえて中央と地方の関係を考える必要がある。それは巨大な織物のような関係で互いに繋がっており、いくつかの部品に分かれる構造ではないため、焦点を絞って一部分のみを取り出すことは不十分である。

各共同体の単位となるリヤクタは、1つのワカとそれを体現する首長、およびそれに属する人々から構成される(Salomon 1991)。首長は基本的に共同体のパカリナに結びつけられる。共同体数が大きくなれば、その全体をワカの集合と見ることができる。大きな社会になれば、複数の場の集合となり、複数のワカが併存することになる。しかし、相対的に大きな中心、ワカがあるとしても、その下位に他のワカが位置づけられるわけではない。大きなワカと併存する複数のワカがあると見なした方がよい。ワカに関しては中央とその周辺という階層性を伴った構造は想定しにくい。インカ帝国の政治構造についても同様であり、首都以外の複数のセンターは明確な層をなしているわけではなく、行政単位が入れ子状の構造を有すると見なした方が適切である。ピラミッドとして表すことは適切な方法ではない。

社会の基本単位である人間を点で表せば、点の集合が社会単位であり、社会間の境界は入り組む(Ramírez 2005)。点の密度は中心の方が濃く、遠くなれば薄くなるという差はあるが、社会間の空間的な線引きは難しい。考古学データを扱う際、この点に気をつけなければならない。大規模社会の遺跡は1つの点として認識されるため、その点が中心との関係で空間的にどこに位置するか、社会文化的にどのような関係にあるのかを把握しないと整合的な解釈はできない。アンデスの空間認識は、中心に着目すべきであり、中央と他の場所との関係性に着目して議論すべきである。また各地方の状況を明らかにするためには、できるだけ大きなセンターを調査することが望ましい。

## V インカ帝国の 民族集団

インカ帝国の成員は、大きくインカ族と非インカ族に分けら

れる。インカ族はさらに「血縁によるインカ」と「特権によるインカ」に分けられる(ガルシラソ 2006[1609]: (一)122-127, 136; Rowe 1946; 渡部 2009)。特権によるインカとは、本来別であった民族集団が、その功績によりインカとして認定された集団であり、主にクスコ盆地周辺部の民族が認定された。先にクスコが人を指すにも使用されたことを述べたが、「別のクスコ」の周辺の元々の住民は「特権によるインカ」と認定されず、「特権によるインカ」はクスコ盆地に近い集団に限定されたようである。

非インカ族は、征服後に、民族集団、行政単位として再編成された(渡部 2010)。各民族集団はそれぞれ名前を有し、個別の頭飾り、服装を有した。さらにここで特筆すべきは、支配下にあった民族集団が、他の場所へ移動させられたということである。インカ王の政策によって移動させられた集団は、ミトマと呼ばれ、全人口の4割にあたるという試算もある。そして各民族集団は、移動先で頭飾りや服装を変更することは禁じられた(アコスタ 1966[1590]: (下)309; Cobo 1653: lib. XIII, cap.23; 1964: tomo 92, 109; ダルトロイ 2012: 143; ハヤシダ & グスマン 2012: 339)。

考えてみよう。首都クスコやそれに準じる地方行政センターでは、多民族性が認められる。少なくとも16世紀のスペイン語の史料の記述からはそのように再構成できる。首都クスコには各地から集まった民族集団がいた。首都の特徴の1つは、民族集団の多様性である。しかしながら、現在扱える考古学的証拠からはそのような想定とは逆の状況が浮かび上がる(ダルトロイ 2012: 143)。建築や土器などを見ても、多民族性を示すような物質的な証拠がないのである。首都クスコには、インカ様式の建物しかない。そして土器もインカ様式のものだけである。例えば地方の集団が製作した土器などがクスコやその周辺の遺跡から出土することは非常にまれである。例外的に、例えばマチュピチュ遺跡でチムー様式のオレンジ色の土器が出土している(Burger & Salazar [eds.] 2004)。史料からは頭飾りや服装に多様性が認められると再構成できるが、建築や土器などが多様であると書かれているわけではない。では考古学データとして残存する硬い物質文化をどのように解釈すれば良いのか。ここでは、あくまでローカル性を論じるための手がかりとしてどのように利用できるかを考えてみたい。

インカ帝国の首都では物質文化の画一性が認められる。同じような特徴のものが地方で認められれば、帝国支配の証拠と解釈されるが、もし首都とは異なる特徴を持った物質文化が出土すれば、それはローカルなものと判定される。

土器については、クスコ周辺で確認されたものを標準とす

るならば、その器種全てが認められる遺跡のある地域はクスコ以外にはない(Bray 2003)。土器の取捨選択がどのような基準で行われたのか、明確には分からない。クスコにしか認められない土器もあるが、一方で、どの遺跡においても出土する土器もある。それはアリバロスと呼ばれる尖底壺形土器であり、酒用の壺である。そのためアリバロスという器形は共通性を示すことになる。しかしアリバロスをはじめとする土器の紋様などには地方独自の特徴が認められ、それらはローカルな特徴とされる。在地の土器との融合が認められる土器は、地方インカ様式と総称される。

土器をインカ様式に代えてしまえばいいのだが、なぜ在地土器の製作が継続したり、融合したりするのか。インカがインカ様式土器の製作を強制しなかったという考え方もできる。フランシス・ハヤシダらは、「生産者が労役義務を果たしたことを確認するため、インカ国家は地方様式の土器を引き続き生産することを奨励、あるいは要求した」(ハヤシダ & グスマン 2012: 339) 可能性を指摘している。この解釈に従うのであれば、例えば、インカの支配下でチムー様式の土器製作が続けられたのは、インカによる奨励の結果ということになる。本来の活動の場で土器製作が続けられた以外に、ミマとして移動させられた先の場所でもチムー様式が出土することは、ハヤシダらの解釈を支持する状況証拠である(Moore & Mackey 2008: 801)。この解釈が可能であるならば、ローカル性を示す特徴が中央の支配の一形態を示す場合もあり、それを在地の人々による選択の結果と識別することは難しい。同様に、支配下の民族集団の頭飾りや服装の変更を禁じるという政策の結果、異なる特徴が元々の場所から離れたところで認められることになる。また、信仰でも同様にインカ族は全ての民に統一して太陽信仰を強制したのではなかった。キリスト教やイスラム教の歴史のように、支配下の人々に信仰を強制するのではなく、各集団のそれまでのワカ崇拝を認めた。そしてインカ王のワカである太陽と併存させることによって、インカと他の民族集団との関係性を示した(ガルシラソ 2006[1609]: (二)296)。また地方のワカを表す偶像をクスコに捕虜として持って行くという習慣もあった(Cobo 1653: lib. XIII, cap.23; 1964: tomo 92, 110)。

これまで、アンデス研究者がローカルという言葉に託していたのは、地方の人々の主体性、エージェンシーという意味なのであるが、少なくともインカの場合は、それには当てはまらない要素もある。つまり、インカ様式の器形の土器に地方独自の紋様を施紋することなどは地方の主体性の表れと見なすことができるが、その一方で民族集団ごとの服装や頭飾り、チムー様式土器の継続的製作など、国家による地方統治の結

果、地方に局地的な、つまり範囲が限定される特徴が継続、創出するということがある。そのため、地方の特徴を全てひっくめてローカルと呼ぶことが妥当かどうかを検討する必要がある。ある特徴が、中央との関係性を示すものであれば、より大きな枠組で説明する必要がある、全体のどの部分に対応するかを見定める必要がある。譬えれば、単独の要素に着目することは、織物の一部を見ていることになり、不十分である。その位置関係、配置を考える必要がある。

## VI ローカル性のレベル

ある特徴が認められる地理的範囲が狭いことがローカルの条件であり、広範囲に分布するものはローカルではない。当然ながら首都と同じものが地方で認められればそれはローカルなものとはされない。つまりローカルという単語は、中央集権的な動きを否定する文脈で使用されてきたと言える。それは地方のエージェンシーという議論と平行関係にある。そして複数のローカル性が集合すると、多様性と同義となる。ワリ研究でも多様性は多用され、ワリ帝国を否定する文脈でも用いられることがある(cf. Topic & Topic 2010)。しかし、ローカルと見える現象には、帝国支配など中央からの動きの結果もあり、ローカルとは関係性を示す概念であるため、地方だけを切り取って単独で認定できるわけではない(Isbell 2010: 234)。

これまでのインカ研究では、土器が優先的に分析されてきた。インカ帝国の支配下には80~100の民族集団があったが、それぞれに対応する土器があるわけではない。在地の土器様式が確認されているのは一部である。地方インカ様式土器は特定の地域、人々の間で共通に認められ、インカ期以前に目立った特徴を有する土器が製作されていたところで認められる。例えば、ペルー北海岸のチムー=インカ様式(ハヤシダ & グスマン 2012)、チリのディアギーター=インカ様式(González Carvajal 2008)、といった融合様式がある。そもそも、アンデス考古学では識別可能な目立つ土器を製作する文化に着目されるが、ペルー北高地のワマチュコなど土器ではなく建築などに力を注ぐ文化もあった。インカ期以前にどのような土器が製作されていたかが判明している地域の方が少ない。そして、インカ期以前に認定されている土器様式の数よりも、インカ帝国の支配下の民族集団の数の方が多

い。

インカ様式と融合する特徴であれば、議論しやすいであろう。しかし、インカ期にそれまでの土器の特徴が変化しなかった場合もある。その場合、在地性を逆に議論しにくくなることは皮肉である。インカ期のローカル性を論じるためには同時代性が前提となるため、時代が異なれば、それは時期差を示す特徴となってしまうからである。中央の、つまりこの場合は、インカ様式の要素が採り入れられていれば、同時代のものであると判断できるのであるが、そうでない場合は、それだけではインカ期のものかどうかは分からない。例えば、筆者が調査しているカハマルカ地方では、インカ期に土器様式は大きく変わらず、そのまま使用され続けた。カハマルカ晩期のアモシユルカ・コンプレックスが後 1200 年頃から 1532 年にスペイン人が侵入するまで製作が続けられた(渡部 2010)。そのため、土器の連続性の証拠を、カハマルカの在地性と捉えることもできるが、それは一体何を意味するのか。地方の人々が意図的に土器製作を続けたのか、あるいはハヤシダらが指摘するように、インカ国家に奨励された結果なのだろうか。一方で、行政センターにおける出土土器のほとんどはインカ様式土器であることが報告されている(Morris & Thompson 1985)。この二項対立的な物質文化の現れ方が、インカ文化の特徴と言える。それは一体、統治の問題なのか、あるいは信仰や儀礼の問題と考えたらいいのか。いずれにせよ、インカの特徴を採り入れない土器製作が続けられた場合、それをインカ期の土器と判定することは難しく、同時代であることを説明しなければインカ期のローカルな特徴と説明できない。

ローカル性を通時的に分析するためには、ローカルな特徴の範囲の広さ、想定される人口数の時期的変化を把握することが必要となる。具体的な数を出すことは難しいため、想定されるローカル性の通時的な相対変化を見ることで、他の要因、中央の力の強度を測ることが建設的である。先に述べたが、インカ期におけるチム様式土器の製作自体が、インカによる支配戦略の結果だとすれば、ローカル性の範囲の広さがローカルな集団の力の強さを示すのではなく、むしろ中央の力に対応している場合もある。例えばペルー南海岸のチンチャ社会もインカ帝国の支配下で繁栄した(渡部 2010)。インカ帝国の支配下においては、ある程度の規模の社会を形成すること、そしてそれらを識別する物質的指標を付与することが統治のために効果的であったと言える。

議論を整理すると、地方におけるローカル性は常に中央との関係で議論すべきであり、中央からの動きに対する働きだけでなく、中央の力と平行して我々がローカルと呼ぶ現象を産み出されることもある。これまで一枚岩的な帝国支配を

否定する文脈でローカルな特徴が強調されてきたが、むしろそれは中央の支配の強さと裏と表の関係なのである。そのため決して否定形のみでローカルという概念を使用すべきではない。ローカルという概念が関係性を示すということは、科学的知識と在来知が対置される、あるいはグローバルとローカルが対置される図式と同様である。ローカルという概念は、関係性を議論する枠組であることを確認しておきたい。

本論では共時的な分析を行っているが、ローカルな現象が目立つ時代と、グローバルな現象(ホライズン現象)が目立つ時代を対比させ通時的に分析することもでき、それも関係性を示すと言える。ただし、前の時代の社会が後の時代により大きな社会に組み込まれることも想定されるため、ローカルな時代とグローバルな時代をきれいに分けて分析できる訳ではない。ローカルな現象がグローバルな時代にも残存することはよくあり、むしろグローバルな時代にこそローカルな現象は、顕在化する。あくまでヒューリスティックな議論であるが、デュアル・プロセス・モデル、振り子モデル(リーチ 1995[1954]; 渡部 2010) など、関連するモデルを整理して、ローカル性の通時的検討を行うことを別論文の課題とした。

## Ⅶ ワリ帝国

インカ帝国を事例としてここまでローカルな現象をどのように分析するかを検討してきた。ローカルな現象と一緒にしてきた諸特徴には様々なレベルがあるが、ここでは地方支配に焦点を合わせて整理し議論する。

ワリ帝国(図2)については、その研究史自体がローカル性の考察と密接に関係している。20 世紀のはじめ、ドイツ人研究者マックス・ウーレは、ペルー中央海岸のパチャカマ遺跡、および北海岸のモチエ遺跡のワカ・デル・ソルからの出土遺物とボリビアにあるティアワナコ遺跡の図像との類似性を指摘した(Uhle 1991[1903], 1998[1913])。1940 年代に、ラファエル・ラルコ=オイレは、ペルー北海岸で発見されたティワナク文化とされていた遺物の特徴が、肝心のティアワナコ遺跡で認められる特徴よりもアヤクーチョ地域の文化と類似していると述べた(Larco Hoyle 1948: 37)。そして 1940 年代にジョン・H・ロウらがアヤクーチョ地方でワリ遺跡を再発見した(Rowe *et al.* 1950)。ワリ遺跡を中心とした国家が存在したと想定され、後のインカ帝国がモデルとなった(Menzel

1964)。ペルー北海岸を事例として、遺物のローカルな特徴に着目し、そのことが新たな中央の発見になった。ただし、ラルコ=オイレが着目していた特徴は結局、ローカル性よりも、むしろティワナク遺跡とは異なるもう1つの中心に近い特徴だったと言える。

中央が拡大し続けるのがアンデス社会の特徴であると述べた。ワリ帝国はインカの祖型とされるが、インカのモデルをそのまま当てはめてワリ帝国を説明できるわけではない。まず首都のコピーを建設するという特徴が、明瞭ではない。インカは道路網を整備し、クスコの機能の一部を備えた「別のクスコ」を複数建設した。ワリ帝国では、インカ帝国と同様に地方支配の拠点として行政センターを設置したと考えられる<sup>8</sup> (Isbell & Schreiber 1978)。行政センターの建設自体は国家による地方支配のためである。従って、考古学者が行政センターと呼ぶ施設の建設自体がローカルなものかどうかという議論はしない。ローカル性を論じるのは、各センターの建築の特徴や出土遺物の特徴についてである。

ワリ帝国では、首都ワリと行政センターの間では違いが目立ち、地方センターと首都との間に相似性を認めにくい。一方、行政センター間には共通点が目立つ。一方で、同じ場所で建築物の更新を行うなど、いくつかの特徴において首都ワリと類似した地方の遺跡もある。例えばペルー南高地クスコ地方に位置するワロ遺跡群 (Zapata 1998, 2019)、ペルー北部高地にあるエル・パラシオ遺跡 (渡部 2014) などである。そのため行政センターとされている諸遺跡を分類することが、ローカル性をより精緻に議論することに繋がると考えられる。

早い時期から注目されてきた2つの行政センター、ピキリヤクタ (Sanders 1973) とピラコチャパンパ (McCown 1945) は、矩形の設計で、内部が複数の部屋状構造に分割されるという特徴を有する (Rowe *et al.* 1950: 23)。イズベルはこの建築特徴が広い範囲に認められる現象を「直交する細胞状建築ホライズン (Orthogonal Cellular Architecture Horizon)」と称した (Isbell 1991)。この特徴を備えた建築を有する遺跡は広範囲に分布するが、肝心の首都ワリでは

明瞭ではない。ワリ遺跡の一部の地区にこの建築の特徴が認められるのみである。そのため、首都の特徴の一部を切り取って拡大したのがピキリヤクタやピラコチャパンパなどの行政センターであると説明できよう。これらのセンターは国家による地方統治のために設置されたものだが、各行政センター間には違いがあり、そこにローカル性を見て取ることができる。ローカル性を論じるためには首都や他のセンターとの相違点に着目する必要がある。トピックは多層構造などピラコチャパンパ遺跡のローカルな特徴を強調するが (Topic 1991)、その建設自体は国家事業であるとし解釈できない。首都の動きに連動して、建築の特徴において顕在化したローカル性という説明も可能であろう。

さらに、ピラコチャパンパやピキリヤクタをはじめとするワリ帝国の行政センターで出土するワリ様式土器は少なく、全体の1割未満であることに留意する必要がある。それは、ワリ様式土器の利用が非常に限定されていたためと考えられる (渡部 2014)。出土土器の大半がインカ様式であるインカ帝国の行政センターとは逆の現象である。ほぼ全てのインカ期の遺跡で出土するインカ様式土器アリバロスは壺であり、人々に酒を振る舞う儀礼的性格を有する土器である。一方、ワリ様式土器は同じく酒用の土器であるもの、おそらく使用者を識別するような土器であり、利用者は限定されており、多くの人々にとってワリ様式土器の使用は禁止されていたと想定できる<sup>9</sup>。ワリ様式以外の在地の土器製作がワリ様式土器の禁止の結果であるとすれば、それは国家による支配を間接的に示していると言える。この場合、ローカルな土器が出てきても、それは、ワリ帝国の支配下における統治方法に則っているものであって、決して地方の人々がワリの支配に抵抗した証拠ではないのである。

地方におけるローカル性は両面性を示し、中央の動きと連動する場合と、逆に中央の特徴から識別される場合とがある。局地的現象であるローカルな特徴は、ワリ帝国の支配域内における関係性を示し、新しい時代の新たな現象と考えることができる。中央との関係でローカル性を議論する際に、ある程度の時間の厚みがある場合、伝統という概念と結びつく<sup>10</sup>。ロー

8 ただし行政センターと解釈することを疑問視する研究者もいる (Jennings 2006b; Topic 1991; Topic & Topic 2010)。例えばジェニングスはワリのセンターとされている20遺跡のうち、6つのみが国家によって建設され、残りは在地の人々がワリの形をまねて建設したという (Jennings 2006b: 270)。本論文では、ワリ期に建設が始まりワリの崩壊と共に放棄された遺跡をワリの地方統治のための拠点と解釈づけている。それをインカ期のタンパと同様に行政センターと記述するのがいいのか、あるいはいくつかのカテゴリーに分類するのがいいのかを今後検討する必要がある。そのためにはまずインカ帝国の行政センターのバリエーションを整理することが有効であろう。また筆者は地方におけるワリ関連遺跡を行政センター、奉納、墓、の3つに分類している (Watanabe 2019)。

9 デイトラーは国家の催す饗宴を、多くの人々を動員する支配者が寛大さを見せつける饗宴 (patron-client feast) と参加者を識別する饗宴 (diacritical feast) の2つに分類している (Dietler 2001: 83-85; Jennings 2006b: 275)。インカの饗宴は前者、ワリの饗宴は後者に近い。

10 南アメリカの考古学においては、伝統は特に土器伝統を指すものとして使用される (Phillips & Willey 1953: 626)。

カル性がある時点以前の歴史的背景にその起源を求めるのであれば、つまりその土地に元々あるものから展開した文化的特徴であれば、歴史性を必然的に考える必要がある。

土器を例にとれば、その土地の土器伝統を踏襲しつつもワリ様式土器を模倣することが、在地の人々の意思をある程度示す証拠かもしれない。中央からの押しつけをアレンジしたのではなく、自分たちの土器製作のレパートリーに採り入れたと考えた方が分かりやすい事例が多くある。例えば、カハマルカ地方のエル・パラシオ遺跡で出土した、カオリンと呼ばれる粘土を用い、ワリ様式の器形・紋様を採り入れた、コップ形土器、山形紋様を伴う土器、十字紋を伴う鉢形土器などである(Watanabe 2019)。ただしワリとカハマルカの融合様式土器の数は少なく、エル・パラシオ以外の遺跡で、表面調査で収集されたこともない。ワリ様式の典型的な濃いオレンジ色の胎土の土器は少なく、カオリンなど在地の粘土を用いた土器は在地の土器製作の特徴である。では融合土器は何を意味するのだろうか。在地のカハマルカの人々がワリの権威<sup>11</sup>を利用したと想定する場合、権威を利用できる中央集権的な社会体制があったことが前提となる<sup>12</sup>。例えばカハマルカの支配者の墓の副葬品として融合土器が見つければ、そのような解釈も可能だが、そのような事例はこれまで確認されていない。そもそもカハマルカ文化の遺跡に階層性や中央集権的な特徴を読み取ることは難しい。カハマルカには中央集権的な社会はなく、非中央集権的な無頭型の分節制社会があったと想定できる<sup>13</sup> (Watanabe 2014: 125)。筆者はカハマルカ社会がペルー北海岸の国家モチェやペルー北高地南部のレクワイ社会とは異なり中央集権的ではないため、ワリの文化と共存できたと解釈している。もし中央集権的な2つの社会が対峙した場合は、性格が似ているため融合しやすく、逆に性格の異なった社会が接触した場合は、混じり合わず共存することができるという解釈である(Watanabe 2014: 124)。

エル・パラシオ遺跡の融合土器は基本的に覆土の中から出土しており、奉納や墓などの特別なコンテキストから出土するわけではない。そのため、ある一部の集団が他の集団と識別するために融合土器を製作・利用した可能性、あるいはそのような意図はなく、土器製作者が遊びに近い感覚でワリの要素を採り入れた可能性などが想定できる。もともと土器製作者にそのような自由度が認められていたかをまず検討する必要はあるが<sup>14</sup>。文化のインターアクションの結果として融合土器を考えるのであれば、もう1つ検討に値する視点は、出自に基づく文化の継続<sup>15</sup>、婚姻による文化変化である(Stein 2002: 906-907)。

ワリ文化のペルー南海岸版土器が、橋型把手付き双注口壺であり、これは中央海岸にも認められる(Menzel 1964)。そしてカハマルカ地方のエル・パラシオ遺跡では橋型把手付き双注口壺がワリ様式土器の中では相対的に多く見つかっている。この器形は元々南海岸のパカス文化にその起源を辿ることができるが(Menzel *et al.* 1964)、ナスカ文化を経てワリ文化に採り入れられ、ワリ期に北高地を經由してペルー北海岸の北部に広まった。そしてペルー北海岸で見つかるのは、基本的にヘケテペケ川から以北であり、北海岸南部のモチェ、チカマなど、鐙形土器が優勢であった地域には認められない。ワリ帝国の崩壊後、ヘケテペケ以北にはシカン文化が繁栄し、その南の鐙形土器の分布するチムー文化の範囲とは対峙することになる。ただしシカン文化の土器の中で、橋型把手付き双注口壺は少数であり、主流は高台付き長頸壺である(Shimada [ed.] 2014)。いずれにせよ、後の後期中間期のローカル性は、それ以前のワリ帝国期における土器製作状況が顕在化した結果と言える。それは、アプロプリエーション、あるいは創られた伝統といった文化人類学の概念を想起させる事例である(綾部編 2002)。ペルー北部における橋型把手付き双注口壺の事例は、ローカル性が、中央との関係で操作され、明確化し、固定化していった状況

11 ジェニングスは、ワリの文化資本(Jennings 2006a: 365)、象徴資本(Jennings 2006b: 277)という概念を用いている。威信財という概念と類似している。

12 例えば、ペルー北海岸のサン・ホセ・デ・モロ遺跡では、墓の副葬品としてワリ様式土器、カハマルカ様式土器などが見つかっている(Castillo 2001a, 2001b)。このような場合、在地の支配者がワリの権威を利用したという解釈が妥当であるように見える(Chapdelaine 2010)。しかし、ワリ様式の副葬品を伴う墓の被葬者がほとんど女性であるという特別なコンテキストであり、その理由を説明する必要がある。

13 当然ながら、分節国家というモデルが示すように(Southall 1988, 1999)、分節社会と階層社会が共存する場合もあるが、カハマルカ社会にはそのような証拠は見当たらない。

14 マコフスキはティワナク遺跡の石彫の図像について、「構造的図像」と説明し、それが掘る者の裁量に任せられていた部分は一切ないと解釈している(Makowski 2002: 346)。土器の製作についても、国家により厳格に管理されていた部分とそうでない部分を峻別することが必要である。

15 土器と出自を結びつける解釈として、島田はランバイエケ文化の Cholnanca 遺跡で検出された女性の墓に海岸カハマルカ様式の土器が副葬品として多くあったことから、この人物がカハマルカ出身であった可能性を示唆している(島田 & 篠田編 2017: 162)。



を確認できるアンデスの事例の1つである。

カハマルカ文化ではカオリン土器で製作された土器の主な器形は碗であり、壺は極めて少なく、ワリ期の遺跡エル・パラシオなどで数点確認されたに過ぎない。碗は土製スプーンとセットで使用されたと考えられる。スプーンはカハマルカ文化では早期から晩期まで連続的に使用されている (Watanabe 2009)。カオリン土器のスプーンは小型であり、カハマルカ褐色磨研土器 (Cajamarca Brown Polished)、カハマルカ黒色磨研土器 (Cajamarca Black Polished) といったタイプのスプーンは大型である。一方、スプーンはワリ遺跡でも出土しており、大型のものがほとんどである (Cook 2009)。大型のスプーンに類似性があるとすれば、装飾のあるカオリン土器のみに着目して、ワリとの関係、ローカル性を論じるのは不十分であり、道具のセット、組み合わせを考える必要がある。

建築の特徴にもローカル性が認められる。例えば、エル・パラシオ遺跡における複雑なカナル (水路)・システムの存在、およびその更新はペルー北高地のローカルな特徴であり、他の行政センターでは確認されていない。ペルー北高地においては形成期から神殿においてカナルは造られ続けており、後期中間期からインカ期に利用されたタンタリカ遺跡でも確認されている (Watanabe 2011)。いずれも農業用、あるいは飲み水用のカナルではなく、入口と出口がある儀礼用のカナルである。他のワリ関連遺跡で、エル・パラシオに見られるような複雑なカナルの存在は報告されていない。こうした特徴を強調すれば、ローカル性が前面に押し出される。トピックによるペルー北部高地ワマチュコ地方のピラコチャパンパ遺跡などを事例に、多層構造などが在地の特徴であり、逆にワリに影響を与えたのだという論理構成と同様である (Topic 1991)。しかしながら、エル・パラシオの建設自体は完全なる国家事業であり、その中にカナルが組み込まれたことはレベルを分けて考えるべきである。

カナルと土器の次に、ローカル性を考える材料として図像表現に着目したい。インカ様式土器は、器形にこだわる土器であり、施紋には比較的 자유が認められていた。アリバロスという尖底壺はほぼ全てのインカの遺跡で見つかるが、そこに描かれる紋様は地域ごとにバリエーションがある。例えばペルー北海岸を中心に製作されたチムー=インカ様式土器の多くは、器形はインカのアリバロスの器形で、黒色で彩紋されたものである (ハヤシダ & グスマン 2012)。稀にオレンジ色の土器もある (Burger & Salazar [eds.] 2004)。一方でチムー=インカ様式土器とは別に、インカ期になっても製作が続

けられたチムー様式の鏡形土器もある。在地の土器様式 (チムー様式) と、外来の土器製作との融合様式 (チムー=インカ様式) の関係性をどのように説明すればいいのか、十分に議論されてきたわけではない。現状では議論の手がかりとして、器形と図像表現は別のレベルであったのではないかと提案したい。

ワリ様式土器の融合の場合、ワリ様式の器形と、地方様式の胎土が組み合わさる例が多い。紋様はワリ様式のものである場合も、ローカルな紋様である場合もある。カハマルカ地方のエル・パラシオ遺跡を例とすれば、融合土器の多くはケロと呼ばれるコップ形土器などワリ様式土器の器形であり、カオリンの胎土を有する。紋様は多くの場合山形紋様など、ワリ様式のものである。カハマルカ文化の土器タイプの1つカハマルカ・フローラル・カーシブ (Cajamarca Floral Cursive) の紋様が、コップ形土器に採用された例もある (Watanabe 2019: Figura 10)。一方で、カハマルカ様式土器の多くは高台付き碗であり、その器形がワリ様式土器の胎土で製作されることはない。またワリ様式の紋様がカハマルカ様式の碗に採り入れられるということはほぼなく、エル・パラシオ遺跡では内面に山形紋様を伴う碗の破片が1点確認されているのみである。

インカの場合、そもそもインカが土器の紋様にこだわっていなかったのであれば、中央の規範的な紋様を地方の人々が模倣するかどうかは、中央への反発ではなく、別の意味でのローカル性と考えられる。一方、ワリ様式土器の場合は、ワリ様式の紋様、器形の利用が限定されていたと仮定するなら、それらをあえて模倣したことは、ワリの権威を利用としたか、あるいは中央への反発という解釈と整合的である。

ワリ文化とカハマルカ文化の関係を考察する際には器形が重要であることを確認したが、一方でワリ様式土器の地域差を分析するには図像が鍵となる。ワリ様式の同じ器種の土器においては、図像表現に中央と地方の違いが現れる。ある図像は首都周辺にのみ現れ、逆に地方にのみ現れる図像もある。ティワナク文化と共通する、両手に槍と投槍器を持った人物が大型土器に表現された大型土器は、コンチョパタ、南海岸のパチェコで確認されている (Isbell & Cook 1987)。この図像を伴う大型土器はペルーの中央部、北部でこれまで確認されていない。図像の一部である顔が描かれた事例があるのみである。一方で、土器や織物に描かれたグリフィンと命名された鳥の図像は、当初ペルー中央海岸のパチャカマ様式 (ワリ様式土器の1つのタイプ) を事例として命名されたが (Menzel 1964)、首都では出土せず、地方、特にペルー中央部、北部に限定される。またそれに平行するか

のように、エル・パラシオ遺跡では、鳥の図像表現が多く現れる(渡部 2012)。一方、首都ではむしろネコ科動物が主役である。

インカ帝国はゲアマニーと呼ばれる地方単位に分けられていたという(Guaman Poma 1987[ca.1615]: 738[752])。ケチュア語ではゲアマンは鳥のことを指す(González Holguín 1989[1609]: 145)。地方と鳥が結びつくという意味で、間接的ではあるがインカとワリの間平行関係が認められる。インカ帝国とワリ帝国は、行政センターとされる遺跡の分布が類似することは、インカ帝国におけるゲアマニーのような地方単位に分けられていたと想定する状況証拠となる。ワリ帝国の崩壊後、ペルー北部においてはシカン文化で鳥の図像が残り主流となるが、これも元々中央との関係性において利用されていた図像が、その後も選択された結果と見ることができる。

パトリシア・ノブロックは、ワリ終末期における図像の変容が認められることから、ワリの支配者が図像によるイデオロギー操作が失敗した可能性を指摘している(ノブロック 1991: 123)。ではそもそもワリの図像の規範はどのようなものであったのか、そして特に地方に認められていた図像とはどのような特徴を有していたのであろうか。ワリでは器形と図像はどのような関係にあったのか。それをローカルという視点からどのように理解することができるのか。ここでは、1つの見通しを述べておきたい。

それは図像そのものにすでにローカル性、地方性が付与されていた可能性である。ネコ科動物、猛禽類、蛇(あるいは魚)という3種類の動物のセットは、形成期中期から頻繁に現れるが(Burger & Salazar 2008: 91)、ワリ帝国において鳥は地方に顕著に認められる。ワリ様式の土器に現れる図像である以上、鳥という地方性は、中央との関係で、中央の意向に従って決まっていると予想できる。アンデスの国家社会は中央が極端に大きく、地方のセンターの規模は首都と比較すれば小さい。しかし、中央の力が弱くなれば、地方の存在感は相対的に増してくる。地方センターから離れた場所であればなおさらである。中央から付与された属性だとしても、それを逆手にとってローカル性が顕在化してくることもあるであろう。そのような、アプロプリエーションと呼べるような現象がワリ帝国末期に生じていたのではないか。それを検証するためには図像の詳細な分析から細かい編年を組み立てる必要がある。

## VIII おわりに

本論文ではローカル性を分析するため、古代アンデスのインカ帝国とワリ帝国を事例として、中央と地方の関係に焦点を当て、論じてきた。ローカル性は、グローバルと対峙されるにせよ、そして在来知と科学知が分けられるにせよ、関係性を示す概念である。このように説明すると、構造分析と類似する。そうすると、構造分析批判にならえば、その関係性の中に埋め込まれている個、エージェントそのものを議論することが次の段階の作業となろう。関係性の中で付与された器形や図像などが、その後の伝統になる場合もあるし、帝国支配以前からの地方のローカルな伝統がさらに強化される場合もある。

これまでローカルという言葉で一括してきた様々な事象を、ある基準でいくつかのレベルに分類して、より精緻な議論をする段階にかかっていると思われる。いくつかのモデル、仮説を提示して、それを検証する、あるいはそれと状況証拠との整合性を確認するという方法で、少しずつ議論を進めていく必要がある。

そして通時的分析に基づく、ローカル性のみが強まる時期とグローバル性が目立つ時期の関係性、2つの流れのメカニズムをモデル化することも、今後の課題としたい。

## 謝辞

松本雄一氏(山形大学)から内容について建設的で貴重なコメントをいただいた。深謝したい。本研究は科学研究費補助金(19H01396、19H05734、23682011、19682004)による研究成果である。また本研究は南山大学 2019 年度パッヘ研究奨励金 I-A-2 の成果である。

## 参考文献

- (日本語文献)  
 アコスタ、ホセ・デ  
 1966[1590] 『新大陸自然文化史』増田義郎(訳)、

- 岩波書店。
- アリアーガ  
1984[1621] 「ピルーにおける偶像崇拜の根絶」 増田義郎(訳)、『ペルー王国史』, pp. 363-606. 岩波書店。
- 綾部恒雄(編)  
2002 『文化人類学最新術語 100』弘文堂。
- ウイリー、ゴードン & ジェレミー・サブロフ  
1979[1974] 『アメリカ考古学史』小谷凱宣(訳)、学生社。
- ウォーラー・ステイン  
1981[1974] 『近代世界システム——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』 1&2、川北稔(訳)、岩波書店。
- ガルシラーソ・デ・ラ・ベータ、インカ  
2006[1609] 『インカ皇統記』(一) ~ (四)、牛島信明(訳)、岩波書店。
- ギアーツ、クリフォード  
1991[1983] 『ローカル・ノレッジ——解釈人類学論集』梶原景昭・小泉潤二・山下晋司・山下淑美(訳)、岩波書店。
- シエサ・デ・レオン、ペドロ・デ  
2006[1553] 『インカ帝国史』増田義郎(訳)、岩波書店。  
2007[1553] 『インカ帝国地誌』増田義郎(訳)、岩波書店。
- 島田泉・篠田謙一(編)  
2017 『古代アンデス文明展』 TBS テレビ。
- ダルトロイ、テレンス・N  
2012 「インカ帝国の経済基盤」竹内繁(訳)、『インカ帝国——研究のフロンティア』 島田泉・篠田謙一(編)、pp. 121-149、東海大学出版会。
- 中空萌  
2019 『知的所有権の人類学——現代インドの生物資源をめぐる科学と在来知』世界思想社。
- ノブロック、パトリシア・J  
1991 「帝国の工芸家たち——ワリ帝国時代の美術」松本亮三(訳)、『古代アンデス美術』増田義郎・島田泉(編)、pp. 107-123、岩波書店。
- ハヤシダ、フランシス & ナタリア・グスマン  
2012 「インカ支配の物質的記録を読む——ペルー北部海岸からの考察」 渡部森哉・市木尚利(訳)、『インカ帝国——研究のフロンティア』 島田泉・篠田謙一(編)、pp. 321-349、東海大学出版会。
- 藤垣裕子  
2008 「ローカルナレッジと専門知」『岩波講座哲学第4巻 知識／情報の哲学』飯田隆他(編)、pp. 101-120、岩波書店。
- 藤本強  
2007 『都市と都城』同成社。
- マコフスキ、クリストフ  
2012 「都市と祭祀センター——アンデスにおける都市化についての概念的挑戦」渡部森哉(訳)、『年報人類学研究』 2: 1-66。
- リーチ、エドモンド・R  
1995[1954] 『高地ビルマの政治体系』 関本照夫(訳)、弘文堂。
- 渡部森哉  
2007 「インカ国家における地方支配——ペルー北部高地カハマルカ地方の事例」『国立民族学博物館研究報告』 32(1): 87-144。  
2009 「インカ帝国における多民族・多文化状況」『地球時代の多文化共生の諸相——人が繋ぐ国際関係』浅香幸枝(編)、pp.197-218、行路社。  
2010 『インカ帝国の成立——先スペイン期アンデスの社会動態と構造』春風社。  
2012 「グリフィンが飛んでいく——動物図像から見る中央アンデス先スペイン期ワリ国家の地方支配」『共生の文化研究』 7: 73-86。  
2014 「ワリ帝国の行政センターと地方統治——ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡の事例」『古代アメリカ』 17: 25-52。  
2019 「文明の誕生——古代アンデスの事例から」『史林』 102(1): 7-39。
- (欧文文献)  
Bauer, Brian S.  
1998 *The Sacred Landscape of the Inca: The Cusco Ceque System*. University of Texas Press.  
2018 *The Ritual Landscape of the Inca: The Huacas and Ceques of Cuzco*. In S. Alconini & R. A. Covey (eds.), *The Oxford Handbook of the Incas*, pp. 481-496. Oxford University Press.

- Blanton, R. E., G. M. Feinman, S. A. Kowalewski & P. N. Peregrine  
 1996 A Dual Processual Theory for the Evolution of Mesoamerican Civilization, *Current Anthropology* 37(1): 1-14.
- Bray, Tamara L.  
 2003 Inka Pottery as Culinary Equipment: Food, Feasting, and Gender in Imperial State Design, *Latin American Antiquity* 14(1): 3-28.
- Bray, Tamara L. (ed.)  
 2015 *The Archaeology of Wak'as: Explorations of the Sacred in the Pre-Columbian Andes*. University Press of Colorado.
- Burger, Richard L. & Lucy C. Salazar  
 2008 The Manchay Culture and the Coastal Inspiration for Highland Chavín Civilization. In W. Conklin & J. Quilter (eds.), *Chavín: Art, Architecture and Culture*, pp. 85-105. Cotsen Institute of Archaeology, University of California.
- Burger, Richard L. & Lucy C. Salazar (eds.)  
 2004 *Machu Picchu: Unveiling the Mystery of the Incas*. Yale University Press.
- Castillo, Luis Jaime  
 2001a The Last of the Mochicas: A View from the Jequetepeque Valley. In J. Pillsbury (ed.), *Moche Art and Archaeology in Ancient Peru*, pp. 306-332. National Gallery of Art.  
 2001b La presencia de Wari en San José de Moro, *Boletín de Arqueología PUCP* 4[2000]: 143-179.
- Cerrón-Palomino, Rodolfo  
 2005 El aimara como lengua oficial de los incas, *Boletín de Arqueología PUCP* 8[2004]: 9-21.
- Chapdelaine, Claude  
 2010 Moche and Wari during the Middle Horizon on the North Coast of Peru. In J. Jennings (ed.), *Beyond Wari Walls: Regional Perspectives on Middle Horizon Peru*, pp. 213-232. University of New Mexico Press.
- Chase-Dunn, Christopher & Thomas D. Hall  
 1997 *Rise and Demise: Comparing World-Systems*. Westview Press.
- Christie, Jessica Joyce  
 2018 Rock Shrines, Ceque Lines, and Pilgrimage in the Inca Provinces. In S. Alconini & R. A. Covey (eds.), *The Oxford Handbook of the Incas*, pp. 497-518. Oxford University Press.
- Cobo, Bernabé  
 1964[1653] *Historia del Nuevo Mundo*. Biblioteca de Autores Españoles, tomos 91-92. Ediciones Atlas.
- Cook, Anita G.  
 2009 Visllani Visllacuni: Patronos de Consumo a Comienzos del Horizonte Medio, *Revista Chilena de Antropología* 20: 205-226.
- Crickmay, Lindsey  
 2006 Stone: Spanish 'mojon' as a Translation of Quechua and Aymara Terms for 'limit'. In P. Dransart (ed.), *Kay Pacha: Cultivating Earth and Water in the Andes* (BAR International Series 1478), pp. 71-76. Archaeopress.
- Dietler, Michael  
 2001 Theorizing the Feast: Rituals of Consumption, Commensal Politics, and Power in African Contexts. In M. Dietler & B. Hayden (eds.), *Feasts: Archaeological and Ethnographic Perspectives on Food, Politics, and Power*, pp. 65-114. Smithsonian Institution Press.
- González Carvajal, Paola  
 2008 Mediating Opposition: On Redefining Diaguita Visual Codes and Their Social Role during the Inca Period. In P. González Carvajal & T. L. Bray (eds.), *Lenguajes visuales de los incas* (BAR International Series 1848), pp. 21-45. Archaeopress.
- González Holguín, Diego  
 1989[1608] *Vocabulario de la Lengua General de Todo el Perú Llamada Lengua Quichua o del Inca*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos.

- Guaman Poma de Ayala, Felipe  
1987[ca.1615] *Nueva Crónica y Buen Gobierno*.  
3 tomos. Edición, introducción y notas de  
John V. Murra, Rolena Adorno y Jorge  
L. Urioste. Crónicas de América. Núm.  
29a-b-c. Historia 16.
- Isbell, William H.  
1991 Huari Administration and the Orthogonal  
Cellular Architecture Horizon. In W.  
H. Isbell & G. F. McEwan (eds.), *Huari  
Administrative Structure: Prehistoric  
Monumental Architecture and State  
Government*, pp. 293-315. Dumbarton  
Oaks Research Library and Collection.  
2010 Agency, Identity, and Control:  
Understanding Wari Space and Power.  
In J. Jennings (ed.), *Beyond Wari Walls:  
Regional Perspectives on Middle Horizon  
Peru*, pp. 233-254. University of New  
Mexico Press.
- Isbell, William H. & Anita G. Cook  
1987 Ideological Origins of an Andean  
Conquest State, *Archaeology* 40(4): 27-33.
- Isbell, William H. & Katharina J. Schreiber  
1978 Was Huari a State?, *American Antiquity*  
43(3): 372-389.
- Jennings, Justin  
2006a Core, Peripheries, and Regional Realities  
in Middle Horizon Peru, *Journal of  
Anthropological Archaeology* 25(3): 346-  
370.  
2006b Understanding Middle Horizon Peru:  
Hermeneutic Spirals, Interpretative  
Traditions, and Wari Administrative  
Centers, *Latin American Antiquity* 17(3):  
265-285.  
2010 Becoming Wari: Globalization and the  
Role of the Wari State in the Cotahuasi  
Valley of Southern Peru. In J. Jennings  
(ed.), *Beyond Wari Walls: Regional  
Perspectives on Middle Horizon Peru*, pp.  
37-56. University of New Mexico Press.  
2011 *Globalizations and the Ancient World*.  
Cambridge University Press.
- Jennings, Justin (ed.)  
2010 *Beyond Wari Walls: Regional Perspectives  
on Middle Horizon Peru*. University of  
New Mexico Press.
- Julien, Catherine  
2000 *Reading Inca History*. University of Iowa  
Press.
- Julien, Daniel George  
1988 *Ancient Cuismancu: Settlement and  
Cultural Dynamics in the Cajamarca  
Region of the North Highlands of Peru,  
200 B.C.-A.D. 1532*, Ph.D. dissertation,  
Department of Anthropology, University  
of Texas at Austin, Austin.
- Kumai, Shigeyuki  
2002 Las fronteras y los límites del  
Tahuantinsuyo: "el Tahuantinsuyo de  
cada rey Inca" que debe confirmarse.  
In J. Flores Espinoza & R. Varón Gabai  
(eds.), *El Hombre y los Andes: Homenaje  
a Franklin Pease G. Y.*, pp. 617-637.  
Tomo II. Fondo Editorial de la Pontificia  
Universidad Católica del Perú.
- Larco Hoyle, Rafael  
1948 *Cronología Arqueológica del Norte del  
Perú*. Sociedad Geográfica Americana.
- Lau, George F.  
2005 Core-Periphery Relations in the Recuay  
Hinterlands: Economic Interaction at  
Chinchawas, Peru, *Antiquity* 79: 78-99.
- Makowski, Krzysztof  
2002 Los personajes frontales de báculos en  
la iconografía tiahuanaco y huari: ¿tema  
o convención?, *Boletín de Arqueología  
PUCP* 5[2001]: 337-373.
- Malpass, Michael A. (ed.)  
1993 *Provincial Inca: Archaeological and  
Ethnohistorical Assessment of the Impact  
of the Inca State*. University of Iowa  
Press.
- Malpass, Michael A. & Sonia Alconini (eds.)  
2010 *Distant Provinces in the Inka Empire:  
Toward a Deeper Understanding of Inka  
Imperialism*. University of Iowa Press.

- McCown, Theodore D.  
 1945 Pre-Incaic Huamachuco: Survey and Excavations in the Region of Huamachuco and Cajabamba, *University of California Publications in American Archaeology and Ethnography* 39(4): 223-399.
- Meddens, Frank, Katie Willis, Colin McEwan & Nicholas Branch (eds.)  
 2014 *Inca Sacred Space: Landscape, Site and Symbol in the Andes*. Archetype Publications.
- Menzel, Dorothy  
 1964 Style and Time in the Middle Horizon, *Ñawpa Pacha* 2: 1-105.
- Menzel, Dorothy, John H. Rowe & Lawrence E. Dawson  
 1964 *The Paracas Pottery of Ica: A Study in Style and Time*. University of California Publications in American Archaeology and Ethnology 50. University of California Press.
- Moore, Jerry D. & Carol J. Mackey  
 2008 The Chimú Empire. In H. Silverman & W. H. Isbell (eds.), *Handbook of South American Archaeology*, pp. 783-807. Springer.
- Morris, Craig & Donald E. Thompson  
 1985 *Huánuco Pampa: An Inca City and Its Hinterland*. Thames and Hudson.
- Murra, John V.  
 1972 El "control vertical" de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas. In J. V. Murra (ed.), *Visita de la Provincia de León de Huánuco en 1562, por Iñigo Ortiz de Zúñiga*, pp. 429-476. Documentos para la Historia y Etnología de Huánuco y la Selva Central, vol.2. Universidad Nacional Hermilio Valdizán.
- Pärssinen, Martti  
 1992 *Tawantinsuyu: The Inca State and Its Political Organization* (Studia Historica 43). Societas Historica Finlandiae.
- Phillips, Philip & Gordon R Willey  
 1953 Method and Theory in American Archaeology: An Operational Basis for Culture-Historical Integration, *American Anthropologist* 55(5-1): 615-631.
- Ramírez, Susan Elizabeth  
 1996 *The World Upside Down: Cross-Cultural Contact and Conflict in Sixteenth-Century Peru*. Stanford University Press.  
 2005 *To Feed and Be Fed: The Cosmological Bases of Authority and Identity in the Andes*. Stanford University Press.
- Reichlen, Henry & Paule Reichlen  
 1949 Recherches archéologiques dans les Andes de Cajamarca: premier rapport de la Mission Ethnologique Française au Pérou Septentrional, *Journal de la Société des Américanistes* 38: 137-174.
- Rowe, John Howland  
 1946 Inca Culture at the Time of the Spanish Conquest. In J. H. Steward (ed.), *Handbook of South American Indians, Vol. 2* (Bureau of American Ethnology, Bulletin 143), pp. 183-330. Smithsonian Institution.  
 1962 Stages and Periods in Archaeological Interpretation, *Southwestern Journal of Anthropology* 18(1): 40-54.
- Rowe, John H., Donald Collier & Gordon R. Willey  
 1950 Reconnaissance Notes on the Site of Huari, near Ayacucho, Peru, *American Antiquity* 16(2): 120-137.
- Rowe, John Howland & Dorothy Menzel (eds.)  
 1967 *Peruvian Archaeology: Selected Readings*. Peek Publications.
- Salomon, Frank  
 1991 Introductory Essay: The Huarochirí Manuscript. In F. Salomon & G. L. Urioste (eds.), *The Huarochirí Manuscript: A Testament of Ancient and Colonial Andean Religion*, pp. 1-38. University of Texas Press.
- Sanders, William T.  
 1973 The Significance of Pikillacta in Andean Culture History. In *Occasional Papers in Anthropology* 8, pp. 380-428. Pennsylvania State University.

- Santo Tomás, Domingo de  
1951[1560] *Lexicon o Vocabulario de la Lengua General del Perú*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
- Seki, Yuji & Clorinda Tejada  
2003 *Informe Preliminar del Proyecto de Investigaciones Arqueológicas en el Valle de Cajamarca, Perú (Temporada 2003)*. Instituto Nacional de Cultura.
- Seki, Yuji & Juan Ugaz  
2002 *Informe Preliminar del Proyecto de Investigaciones Arqueológicas en el Valle de Cajamarca, Perú (Temporada 2002)*. Instituto Nacional de Cultura.
- Seki, Yuji, Juan Ugaz & Shinya Watanabe  
2001 *Informe Preliminar del Proyecto de Investigaciones Arqueológicas en el Valle de Cajamarca, Perú*. Instituto Nacional de Cultura.
- Shimada, Izumi (ed.)  
2014 *Cultura Sicán: esplendor preincaico de la costa norte*. Fondo Editorial del Congreso del Perú.
- Southall, Aidan  
1988 The Segmentary State in Africa and Asia, *Comparative Studies in Society and History* 30(1): 52-82.  
1999 The Segmentary State and the Ritual Phase in Political Economy. In S. K. McIntosh (ed.), *Beyond Chiefdoms: Pathways to Complexity in Africa*, pp. 31-38. Cambridge University Press.
- Stein, Gil J.  
1998 World System Theory and Alternative Modes of Interaction in the Archaeology of Culture Contact. In J. G. Cusick (ed.), *Studies in Culture Contact: Interaction, Culture Change, and Archaeology* (Occasional Paper No. 25), pp. 220-255. Center for Archaeological Investigations, Southern Illinois University.  
2002 From Passive Periphery to Active Agents: Emerging Perspectives in the Archaeology of Interregional Interaction, *American Anthropologist* 104(3): 903-916.
- Topic, John R.  
1991 Huari and Huamachuco. In W. H. Isbell & G. F. McEwan (eds.), *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*, pp. 141-164. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Topic, Theresa Lange & John R. Topic  
2010 Contextualizing the Wari-Huamachuco Relationship. In J. Jennings (ed.), *Beyond Wari Walls: Regional Perspectives on Middle Horizon Peru*, pp. 188-212. University of New Mexico Press.
- Uhle, Max  
1991[1903] *Pachacamac: A Reprint of the 1903 Edition by Max Uhle* (University Museum Monograph 62). University Museum of Archaeology and Anthropology, University of Pennsylvania.  
1998[1913] Las ruinas de Moche. In P. Kaulicke (ed.), *Max Uhle y el Perú Antiguo*, pp. 205-227. Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.
- Watanabe, Shinya  
2002 Wari y Cajamarca, *Boletín de Arqueología PUCP* 5 [2001]: 531-541.  
2009 La cerámica caolín en la cultura Cajamarca (sierra norte del Perú): el caso de la fase Cajamarca Media, *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 38(2): 205-235.  
2011 Arquitectura del sitio arqueológico Tantarica, sierra norte del Perú. In K. J. Lane & M. Luján Dávila (eds.), *Arquitectura Prehispánica Tardía: Construcción y Poder en los Andes Centrales*, pp. 67-91. Fondo Editorial de la Universidad Católica Sedes Sapientiae.  
2014 Sociopolitical Dynamics and Cultural Continuity in the Peruvian Northern Highlands: A Case Study from Middle Horizon Cajamarca, *Boletín de Arqueología PUCP* 16 [2012]: 105-129.  
2019 Dominio provincial wari en el Horizonte Medio: el caso de la sierra norte del Perú, *Research Papers of the Anthropological Institute* 8: 230-256.

- Wiley, Gordon R.  
 1991 Horizontal Integration and Regional Diversity: An Alternating Process in the Rise of Civilization, *American Antiquity* 56(2): 197-215.
- Wright, Henry T. & G. A. Johnson  
 1975 Population, Exchange, and Early State Formation in Southwestern Iran, *American Anthropologist* 77: 267-289.
- Zapata Rodríguez, Julinho  
 1998 Arquitectura y contextos funerarios wari en Batan Urqu, *Boletín de Arqueología PUCP* 1[1997]: 165-206.  
 2019 Unidades territoriales, residencias y tumbas de la elite wari en la región del Cusco, Perú, *Research Papers of the Anthropological Institute* 8: 176-229.
- Zuidema, R. Tom  
 1964 *The Ceque System of Cuzco: The Social Organization of the Capital of the Inca*. E. J. Brill.



# Capital and Provincial Societies: The Locality of Ancient Andean States

Shinya WATANABE\*

In the Central Andes the construction of temples started around 3000 B.C.E. For 3000 years the custom of constructing and renovating temples had continued before the first Andean early state Moche was formed around first century C.E. The Inca Empire developed during the final part of the pre-Hispanic period and founded the provincial administrative centers for provincial rule. Each of these centers had characteristics in common with the capital Cuzco while having its own particularity.

In this article I consider how locality is observed in the provinces of the Inca and Wari Empires. Those who negate centralized one-way dominance from the center and recognize the agency of provincial societies often emphasize original or local characteristics of provinces. However, the local characteristics of the provinces are sometimes left or created intentionally for governance. As locality is a concept used to understand relationality, it is insufficient to set the center against provinces in order to explain it.

## **Keywords:**

Capital, Provincial Rule, Inca, Wari, Ceramics

\* Nanzan University

## 『人類学研究所 研究論集 第9号』

---

執筆者紹介

シルヴィ・ペバストラート(Sylvie Peperstraete) ブリュッセル自由大学教授

千葉裕太 愛知県立大学非常勤講師

杉浦洋子 エル・コレヒオ・メヒケンセ特別研究員

嘉幡 茂 京都外国語大学嘱託研究員

市川 彰 名古屋大学高等研究院特任助教

松本雄一 山形大学准教授

渡部森哉 南山大学教授

## 人類学研究所 研究論集 第9号

ISSN 2434-9577

2020年3月31日発行

編集者 渡部 森哉

### 南山大学人類学研究所

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18 電話 (052) 832-3111 (代表)

E-mail: apai-nu@ic.nanzan-u.ac.jp

印刷 株式会社ウェルオン 電話 (052) 732-2227 デザイン 株式会社サウザンドデザイン